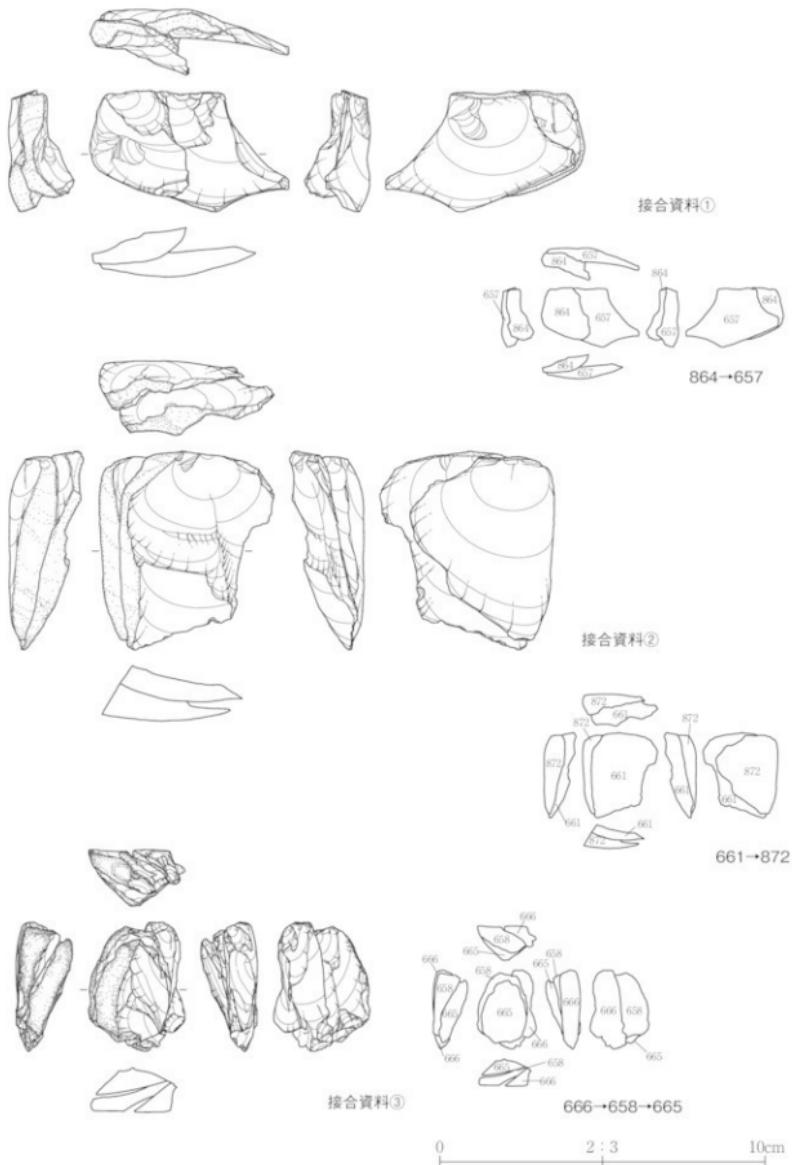
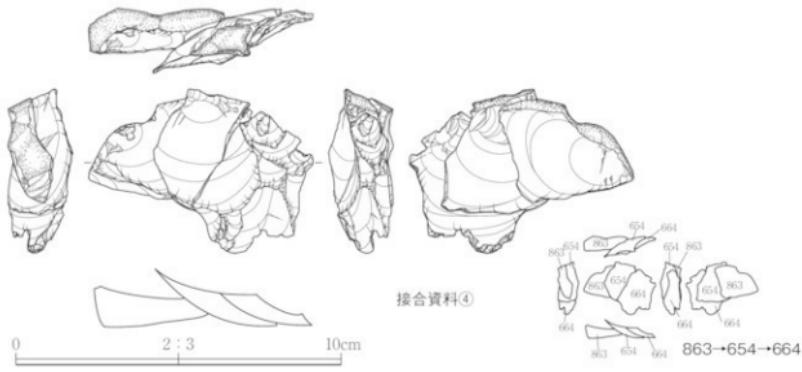


第108図 32号住居跡出土遺物（2）



第109図 32号住居跡出土遺物（3）



第110図 32号住居跡出土遺物（4）

## 33号住居跡（第111～124図、写真図版27・28）

【位置・検出状況】調査区中央、23v、23wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。なお、立地する斜面地の崩落および後世の削平のため、遺構の南側一部が消失している。

【その他の遺構との重複】32号住居跡・34号住居跡と重複し、本遺構が最も新しい。

【平面形】不整な楕円形　【規模】長軸498cm・短軸(470)cm・深さ29cm

【埋土】5層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は消失している南壁を除き、全周する。ほぼ直立気味である。

【炉】2基確認した。東壁際で1基、床面中央にもう1基が設置されている。便宜的に前者を「炉1」、後者は「炉2」とする。

炉1は複式炉である。石圓炉2個（奥側の石圓部は炉石が抜き取られている）と前庭部で構成され、長軸152cm、短軸62cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、石圓部を間仕切る炉石は長大であるが、他は比較的小さくふぞろいな礫を利用している。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。手前側の石圓部内の使用面は床面より約10cm掘り下げている。使用面に焼成の痕跡は認められない。奥側の石圓部は西側の炉石が抜き取られているが、概ね手前側の石圓炉と同規模に炉石が並んでいたと推測する。使用面の焼成は強く、被熱により赤色化した焼土の広がりを確認した。なお使用面上に土器2点（674・675）が横位の状態で出土しているが、埋設土器とは考えがたい。炉石の掘り方埋土を確認した。炉石よりも広く円形に掘り込み、炉石を設置している。

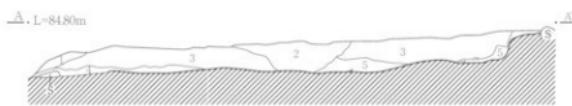
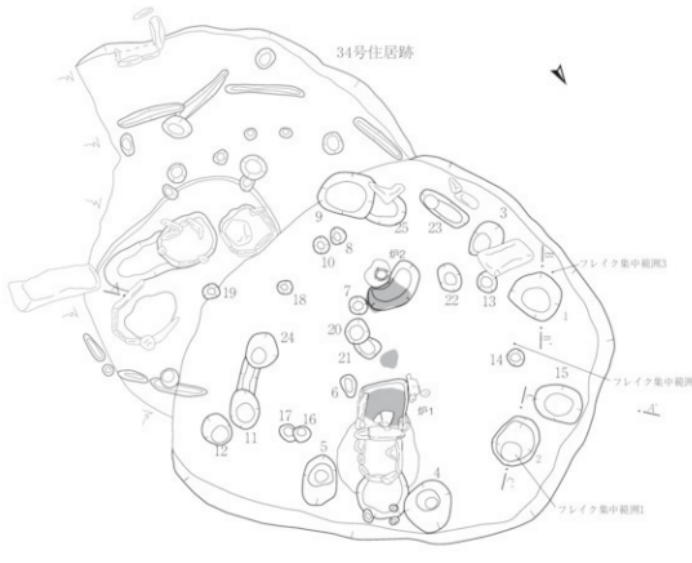
炉2は土器埋設炉である。深鉢胴部片を利用し（681）、ほぼ正位の状態で埋設している。埋設土器の北側をわずかに窪ませ、その範囲で火を焚いた痕跡を確認した。使用面の焼成は強く被熱により赤色化した焼土が広がっている。埋設土器の掘り方は径35cmで深さは土器の大きさに掘り込んでいる。

【附属施設】柱穴25個を確認した。うち7個（Pit 1～5・9・11）は配列から主柱穴と考えられる。他にも柱穴が並ぶので、本遺構は建て替えがおこなわれた可能性が高い。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土おり、また床面上3箇所でフレイク類の集中範囲が確認

され、合わせて124点のフレイク類が出土している。

671は大木10式古段階と考える。無文の口縁部が直立し、僅かに膨らむ胴部には隆帯による渦巻文が施文される。672~675は粗製である。673は炉1の奥側石圓部より外側で横位の状態で出土した。深鉢で、胴部半ばから底部のみである。674・675は炉1の石圓部内から出土した。どちらも深鉢の胴部から底部で、674は沈線による横位の弧状文と充填繩文が見受けられる。大木10式中段階。675は粗製か。680は炉2の埋設土器であり、胴部の大型破片である。沈線による弧状の区画文が巡り、区画内



- 柱穴断面
- 1  
L=84.80m.
1. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや強 しまりやや硬 黒褐色シルトブロック少量、暗褐色シルトブロック少量含む。  
2. 暗褐色シルト(10YR2/2) 粘性強 しまり強 暗褐色シルトブロック少量、炭化物粒少量、花崗岩粒少量含む。  
3. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや弱 しまりやや柔 沖積物粒少量含む。  
4. 黄褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 しまり柔 黑褐色シルトブロック少量含む。



- B, L=84.40m. B
1. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや弱 しまりやや硬 炭化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒少量含む。  
2. 黄褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 しまり柔 黑褐色シルトブロック少量含む。

2

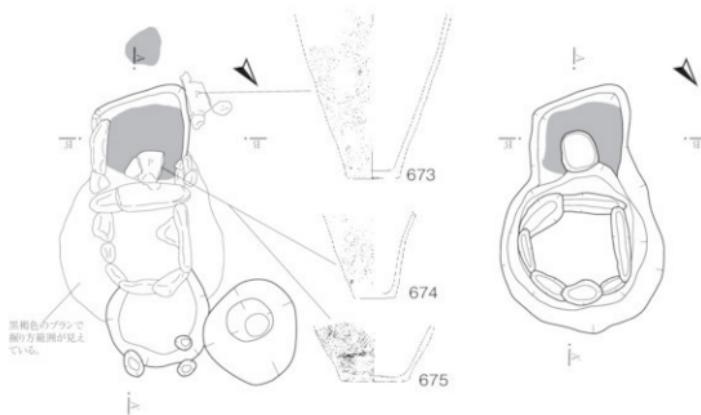


- C, L=84.40m. C  
フレイクが集中して出土した
1. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 しまり柔 炭化物微量、地山ブロックや多く、花崗岩粒少量含む。

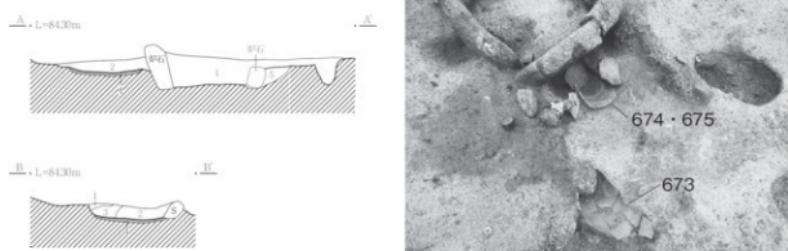
0 (1:60) 2m

第111図 33号住居跡 (1)

炉1

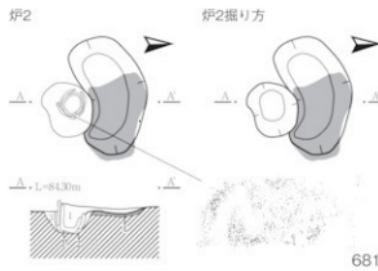


炉1土器出土状況



1. 黒褐色シルト (1092/2) 強性や中強 しまり重 花崗岩粒多量含む。
2. 黒褐色シルト (1092/4) 強性や中強 しまりやや重 花崗岩粒多量含む。
3. 黒褐色シルト (1093/4) 強性強 しまりやや重 花崗岩粒多量含む。
4. 硅色粘土 (2. 1096/6) 強性強 しまり重 燃焼面。焼成により赤色化。被熱強い。
5. 黑褐色シルト (1093/3) 強性や中強 しまりやや重 掘り方埋土。

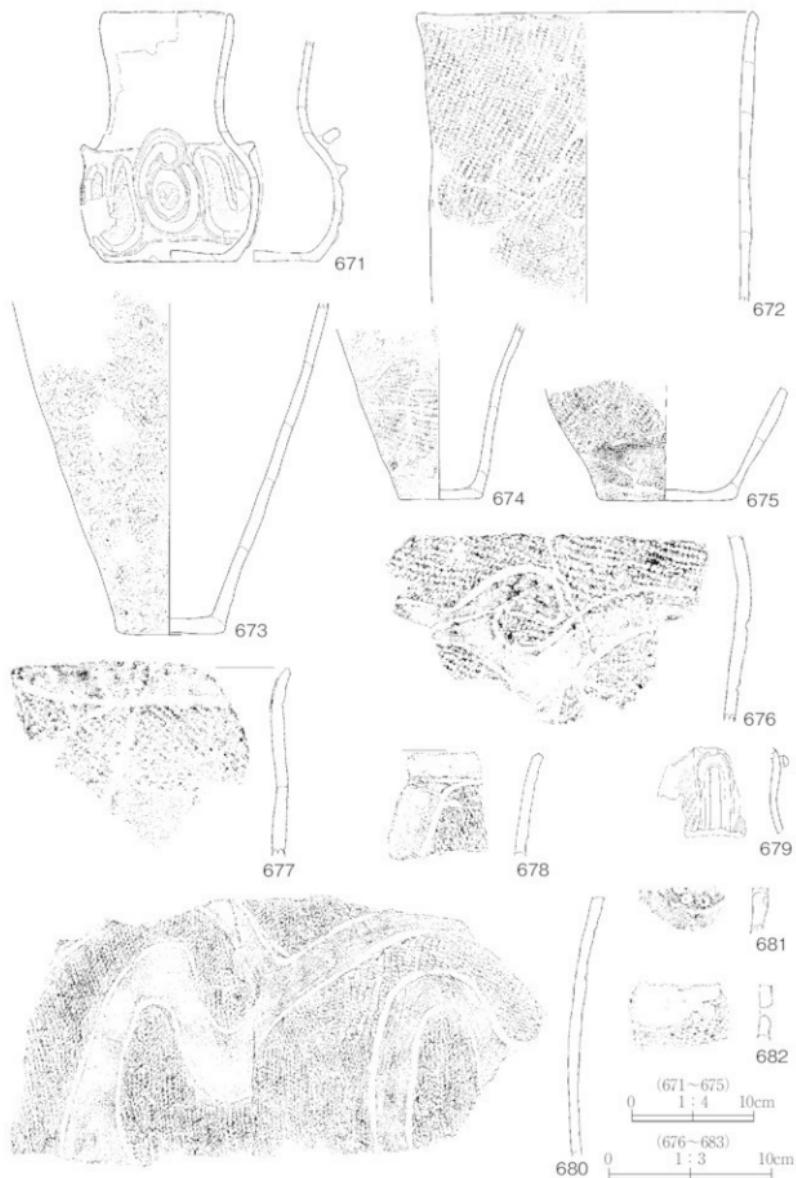
炉2



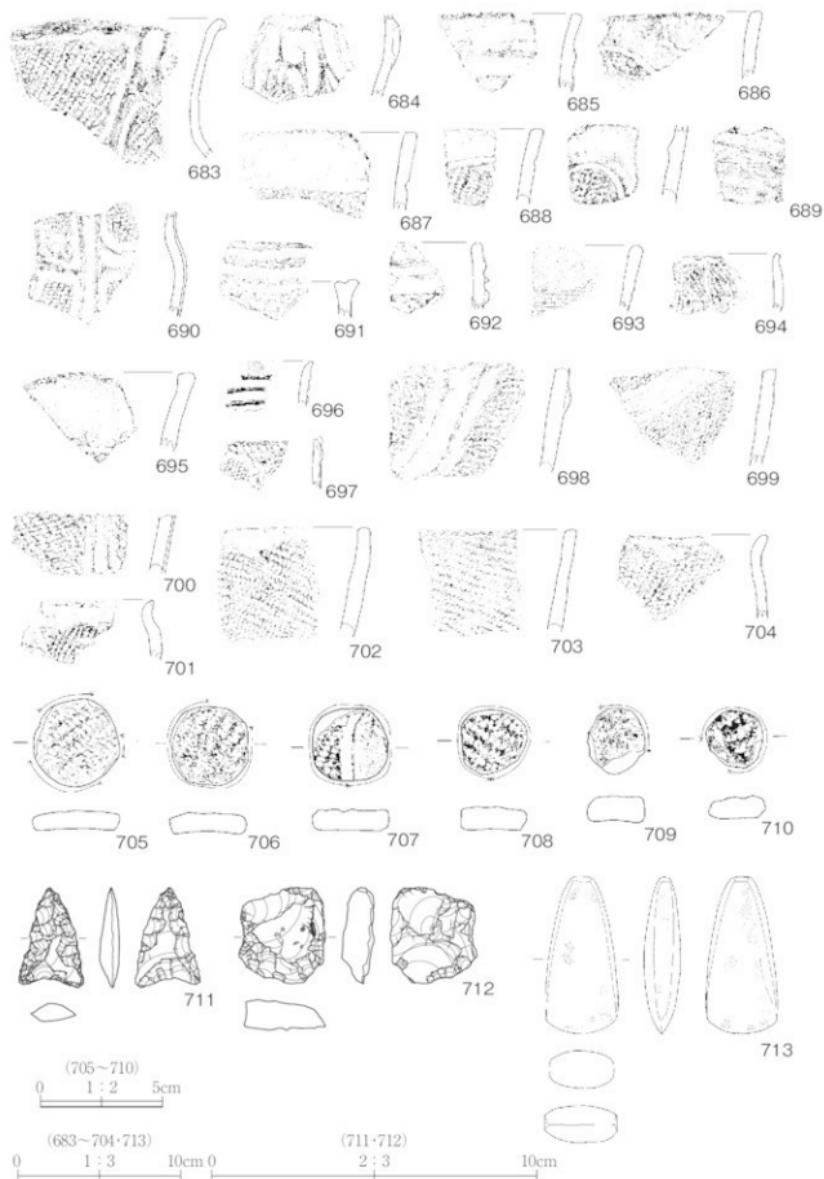
1. 黒褐色粘土 (2. 1092/3) 強性強 しまり重 明赤褐色ブロック多量含む。
2. 黒褐色シルト (2. 1094/6) 強性やや中強 しまりやや重 掘り方埋土。
3. 黒褐色シルト (1092/2) 強性やや中強 しまりやや重 掘り方埋土。
4. 黑褐色粘土 (2. 1093/6) 強性やや強 しまりやや重 燃焼面。黒褐色シルトブロック多量含む。

0 (1:30) 1m

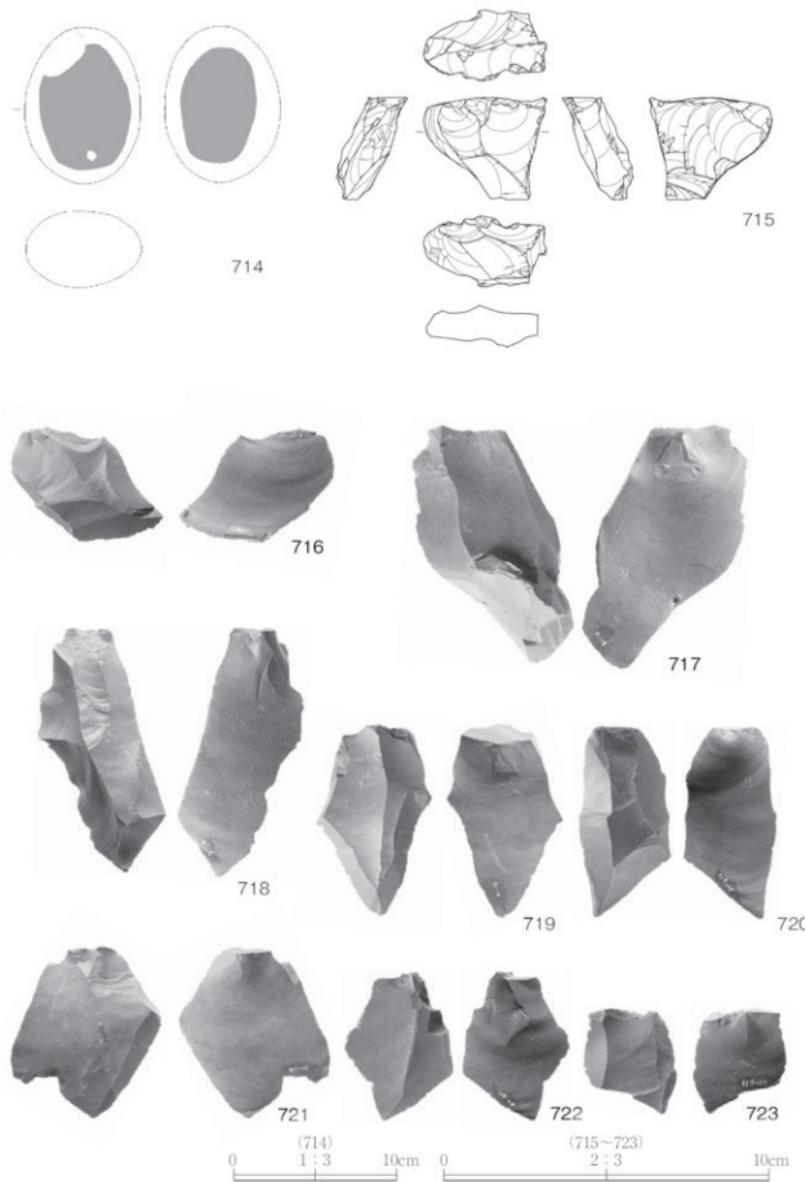
第112図 33号住居跡（2）



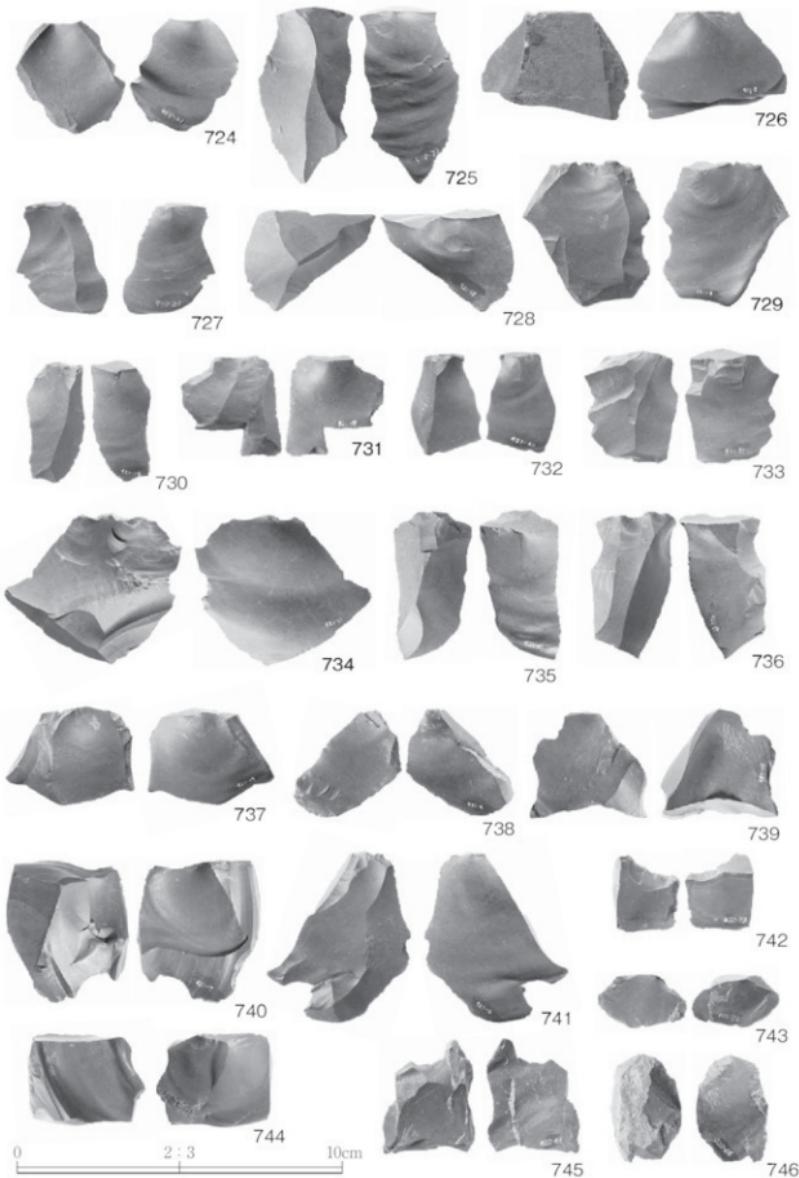
第113図 33号住居跡出土遺物（1）



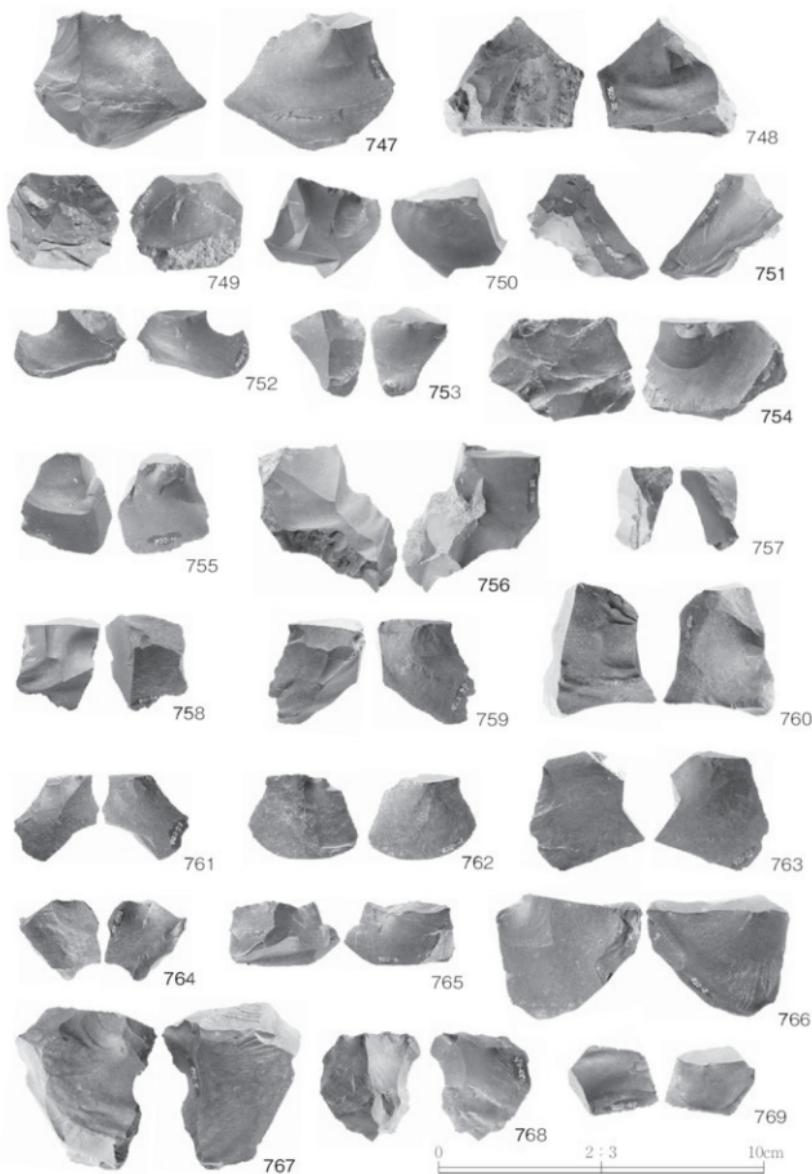
第114図 33号住居跡出土遺物（2）



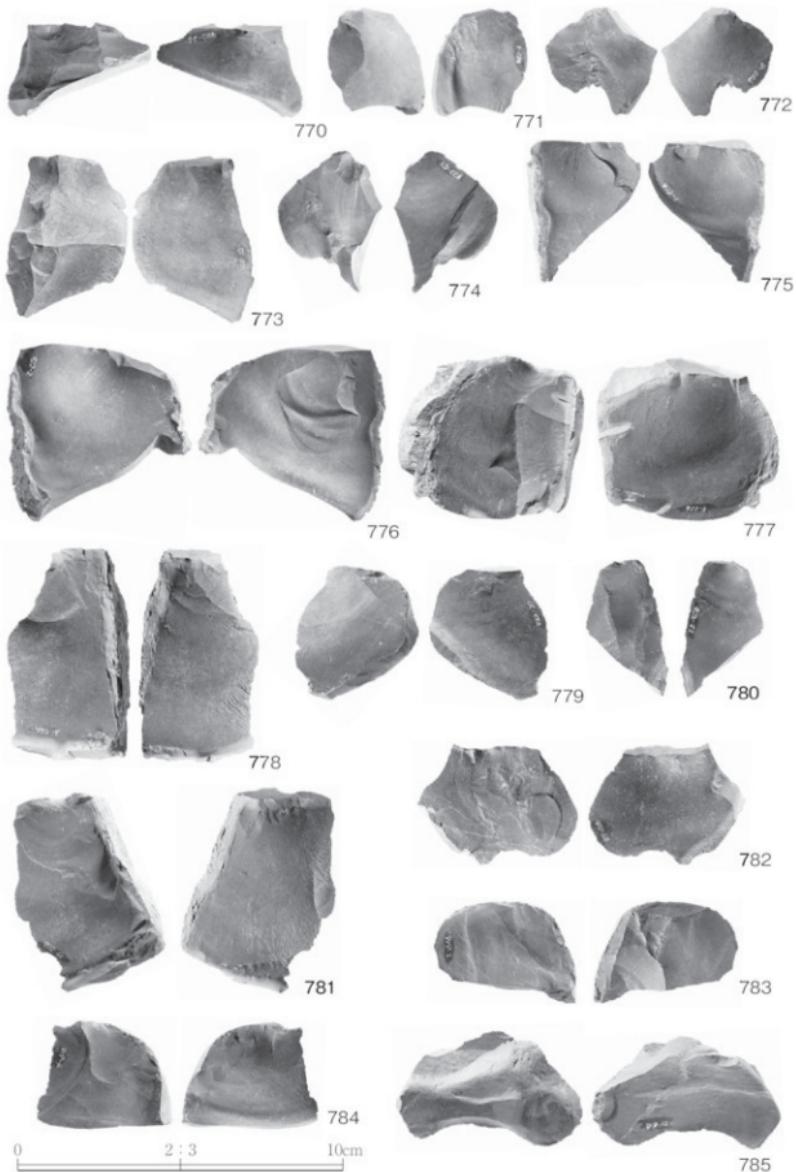
第115図 33号住居跡出土遺物（3）



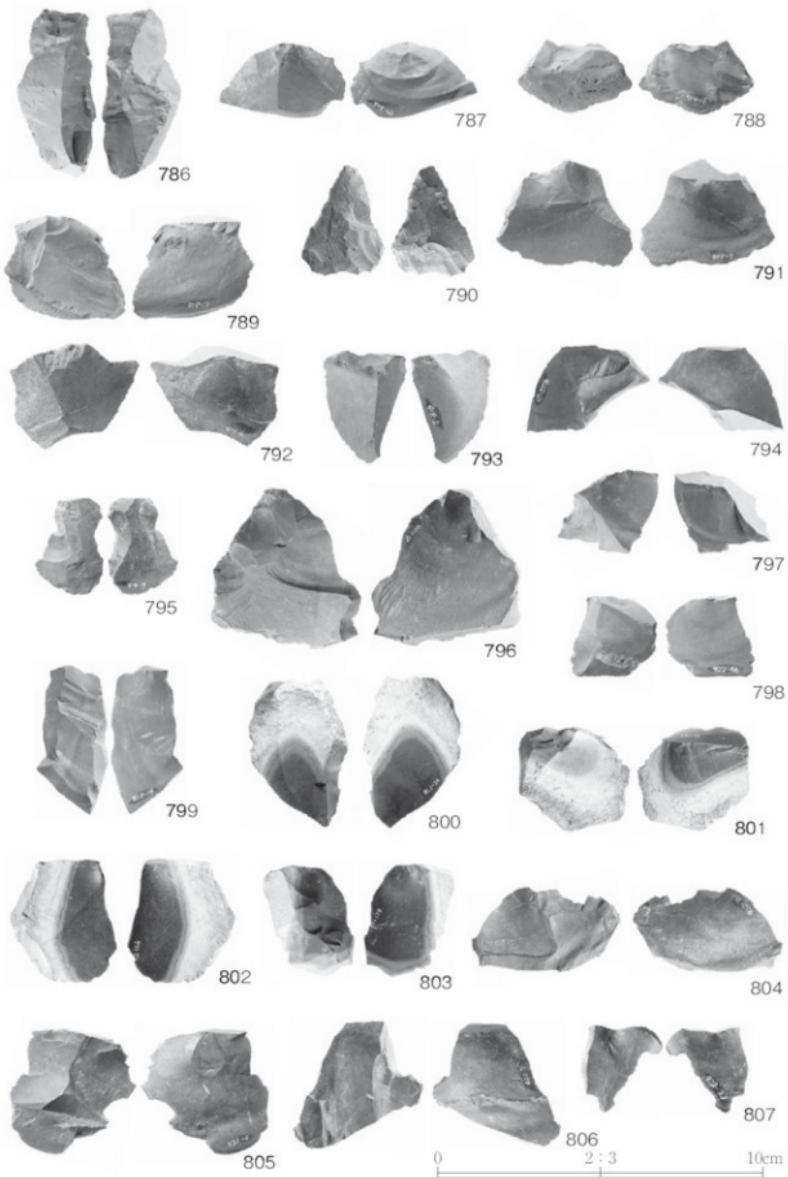
第116図 33号住居跡出土遺物（4）



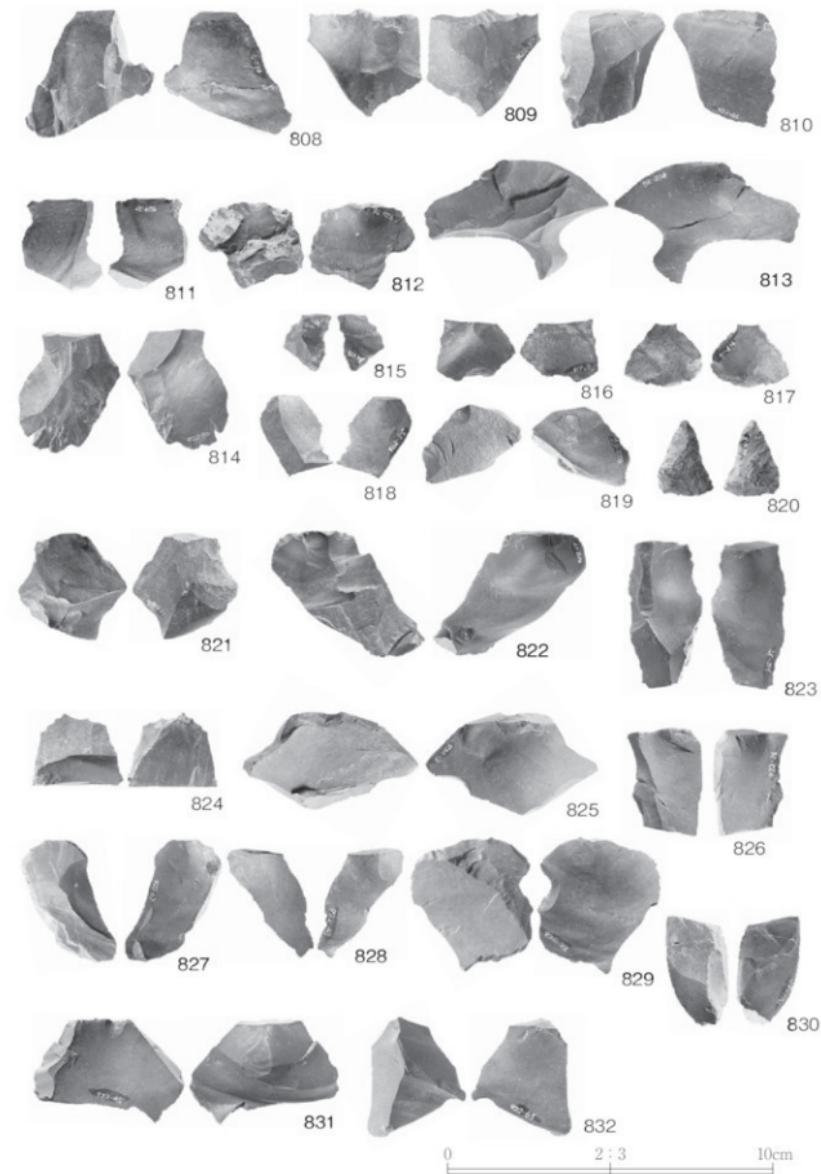
第117図 33号住居跡出土遺物（5）



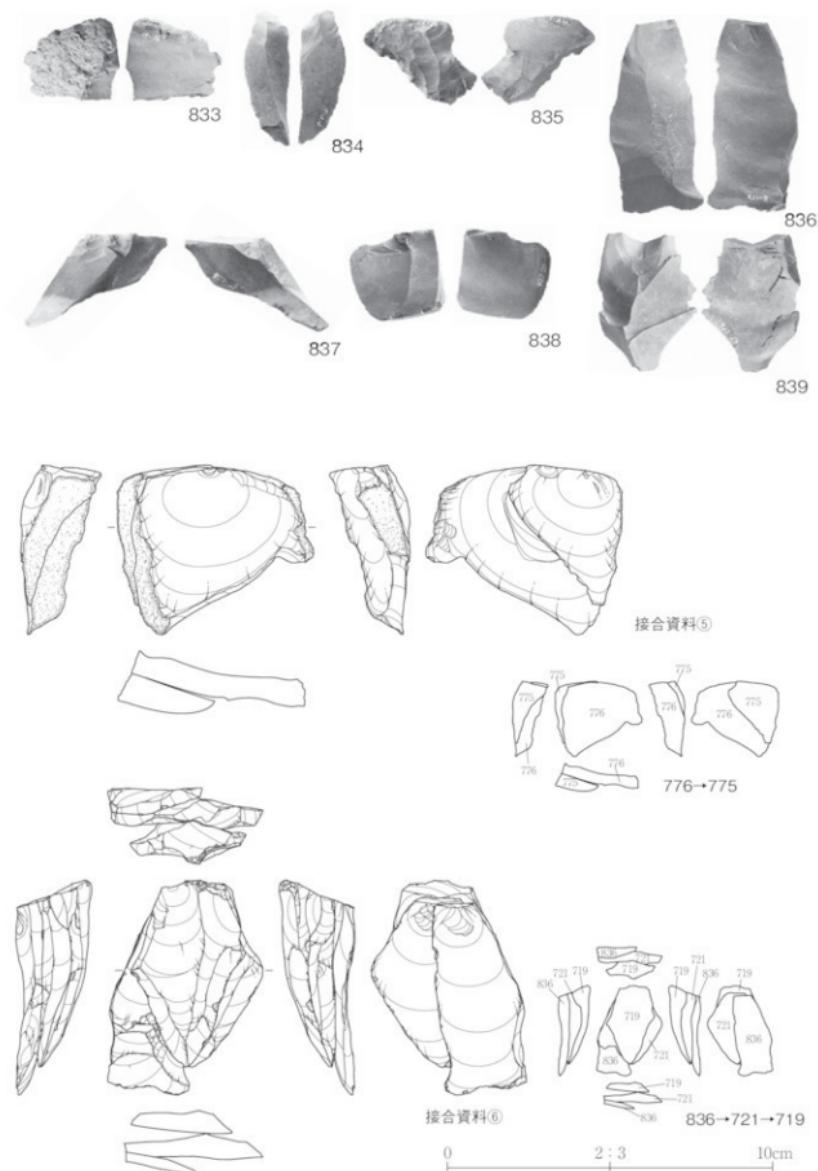
第118図 33号住居跡出土遺物（6）



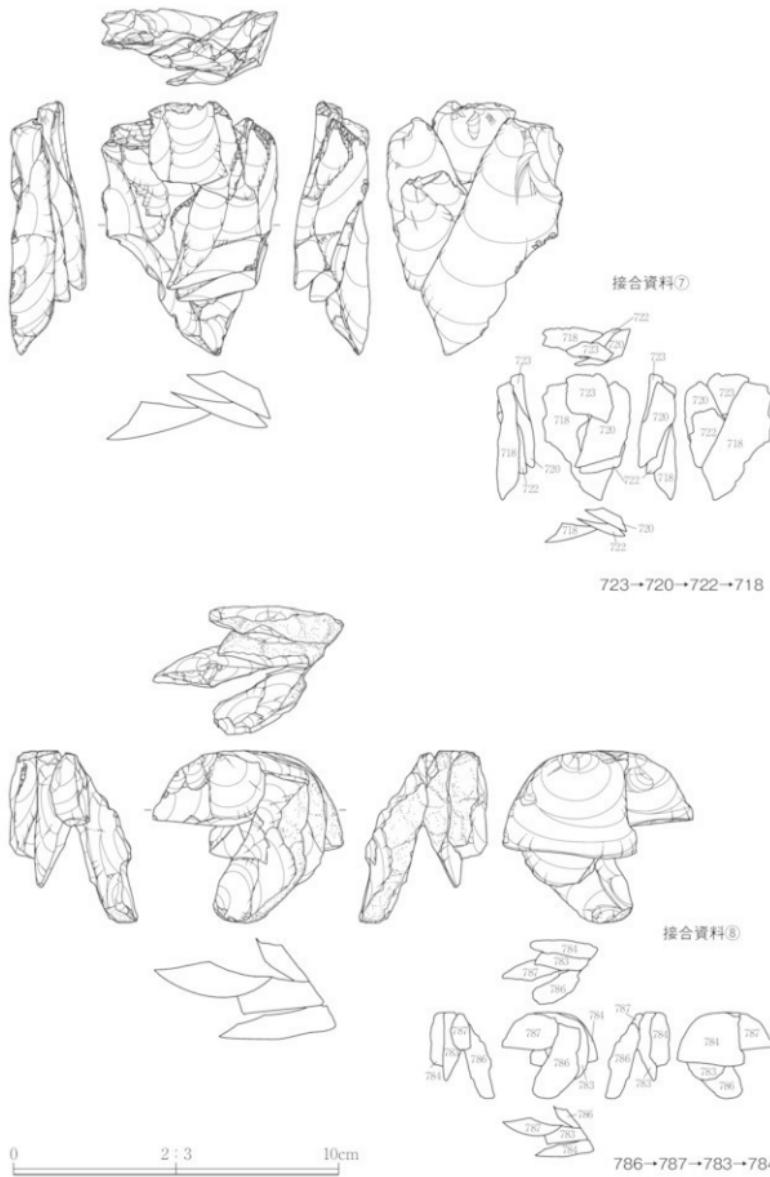
第119図 33号住居跡出土遺物（7）



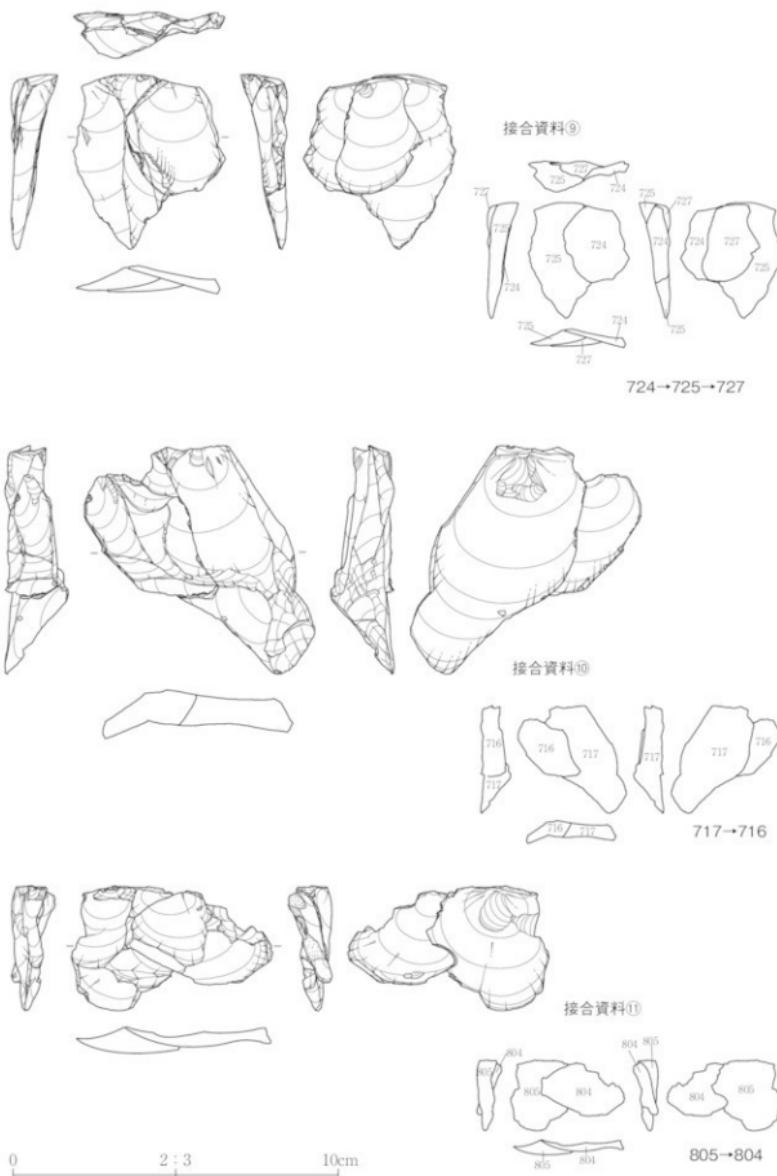
第120図 33号住居跡出土遺物（B）



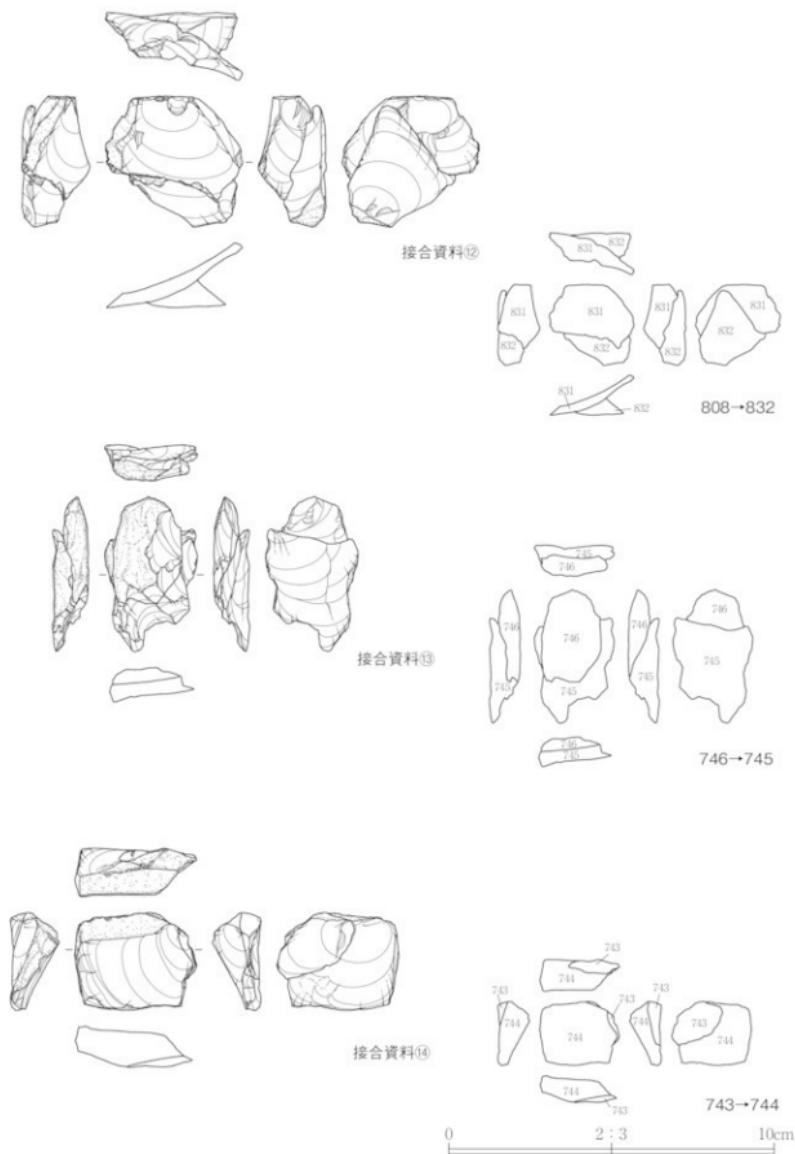
第121図 33号住居跡出土遺物（9）



第122図 33号住居跡出土遺物 (10)



第123図 33号住居跡出土遺物 (11)



第124図 33号住居跡出土遺物 (12)

には充填縄文が施文されるが原体は単節RLと単軸絡条体1類の2種が見受けられる。大木10式中段階である。676は炉の周辺から出土している。大木10式新段階である。683、685、690は大木9式古段階、688・689は大木9式新段階で、埋土中出土の土器には時期幅がある。700~704は粗製である。

705~710は土製円盤である。胴部片の転用で、710以外は側面の広い範囲が磨滅する。

711は石礫の未成品であり、二次加工が全体に及んでおらず、先端部がいびつである。712は不定形石器である。方形基調で一端に二次加工を施し、刃部を作出する。713は完形の磨製石斧である。714は敲磨器類である。やや偏平な楕円形の礫を素材とし、両面に磨痕が見受けられる。715は石核である。広い面を作業面とし、二方向から剥離作業を行っている。

716~839は3か所のフレイク集中範囲から出土したフレイク類である。フレイク集中範囲1からは23点のフレイクが出土しており、5つの母岩で構成される。フレイク集中範囲2からは75点のフレイクが出土しており、16の母岩で構成される。またもう一つのフレイク集中範囲からは26点のフレイクが出土しており、9つの母岩で構成される。

出土したフレイクのうち26点が接合した(接合資料⑤~⑭)。接合資料⑤は4点が接合した。自然面が残る。上下二方向から剥離作業を行っている。接合資料⑥は2点、接合資料⑦は4点接合した。どちらも一度、剥離作業をし打面を調整してから剥離作業を行っている。接合資料⑧は3点接合しているが、接合部に隙間があり、別のフレイクがあったと考えられる。同一方向から剥離作業を行っている。またフレイクの打面縁辺には剥離作業後に二次加工を行っている。接合資料⑨は3点、⑩、⑪は2点接合した。いずれも同一方向から剥離作業を行っている。接合資料⑫~⑯は2点ずつ接合した。いずれも自然面が残る。接合資料⑯は別方向から剥離作業を行っている。

【時期】炉の埋設土器の時期から大木10式中段階と判断した。

### 34号住居跡（第125~127図、写真図版28・29・78・122・123）

【位置・検出状況】調査区北西側、I A23w、24wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は立地する斜面の崩落および後世の削平により南側の一部が消失する。

【その他の遺構との重複】33号住居跡と35号住居跡と重複する。本遺構は35号住居跡より新しく、33号住居跡より古い。

【平面形】不明。不整な楕円形と推測される。

【規模】長軸(455)cm・短軸(258)cm・深さ20cm

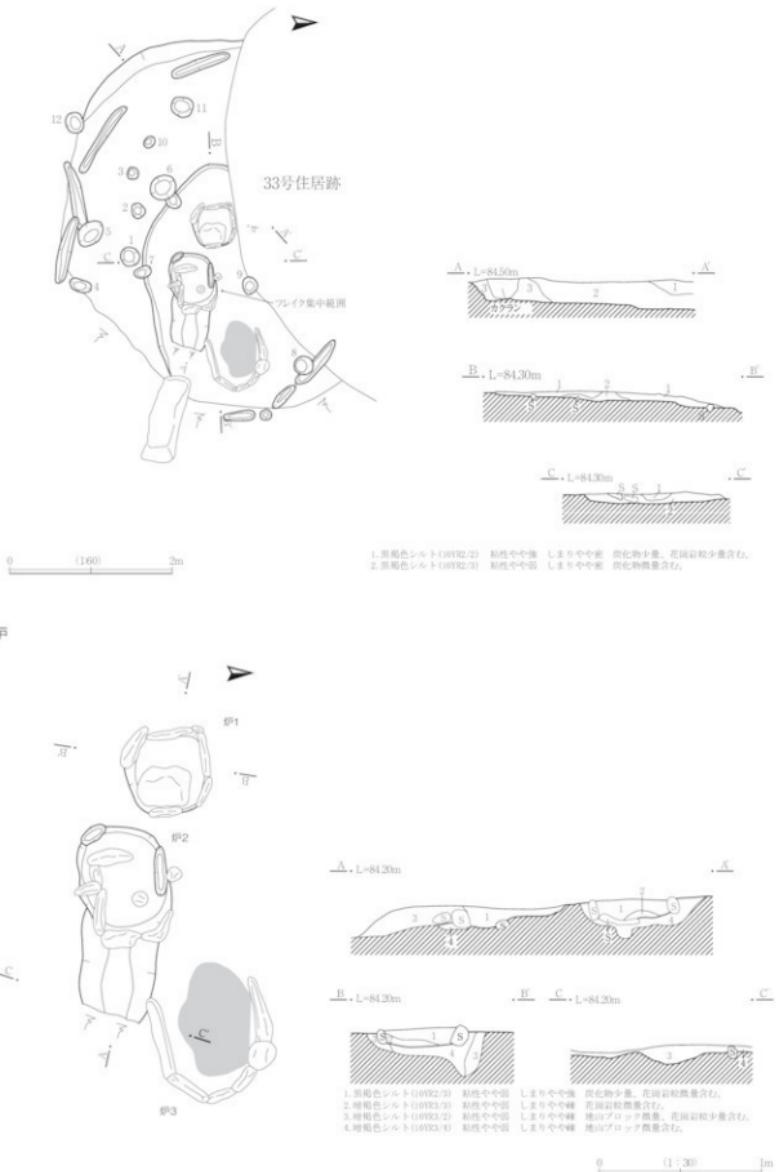
【埋土】3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが、壁際はわずかに一段高くなっている。壁は西壁の一部のみ検出した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】炉は3基みつかっている。残存する床面の東寄りで3基の炉が、それぞれ長軸方向がずれた状態で、並んでいる。便宜的に西側から「炉1」、「炉2」、「炉3」とした。

炉1は石畳炉である。方形で一辺54cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、比較的厚さの薄い扁平な礫を素材とする。なお炉の南東隅には炉石が確認できず、抜き取られたものと推測する。使用面は床面より13cm掘り込んで構築している。炉内埋土は黒褐色シルトで、住居埋土と類似する。使用面に被熱の痕跡はなく、また埋土中にも焼土粒の混入はない。使用面上に扁平な礫がはまり込んでいるが、使用時に故意に設置したものかどうか定かではない。掘り方は炉よりも大きく、いったん埋めてから炉石を設置している。

炉2は石畳炉と推定する。一辺50cmの方形基調であったと推測される。炉石は花崗岩を利用する。



第125図 34号住居跡

北側、北西側の炉石は抜き取られ、掘り方のみ確認した。炉内の埋土は暗褐色シルトを主体とし、住居埋土に類似する。炉内の使用面は床から5cm掘り込んで構築している。使用面に焼成の痕跡は認められず、また炉内埋土にも焼土の混入はなかった。炉石自体は被熱によるものと推測するが非常に脆い。炉の掘り方は小さく、炉石も概ね使用面に設置するのみで構築している。炉外の東側が床面よりわずかに下がっている。前庭部にも見えなくないが、定かではない。

炉3も石圓炉である。一辺60cmを測り、炉石を「コ」字状に配しているが、西側の炉石は抜き取られた可能性もある。断面は確認していないが、炉内の使用面は概ね床面と同じ高さである。炉内には弱い焼成の痕跡が認められ、わずかに被熱により赤色化した焼土が炉内の広い範囲に認められた。

【附属施設】柱穴12個を確認した。うち2個（Pit 1・6）は位置的にみて主柱穴と考えられるが、重複する33号住居跡により北側壊されているので主柱穴配列は不明である。他に壁溝が部分的であるが這っている。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土しており、また炉の周辺にはフレイクが集中的に出土している。

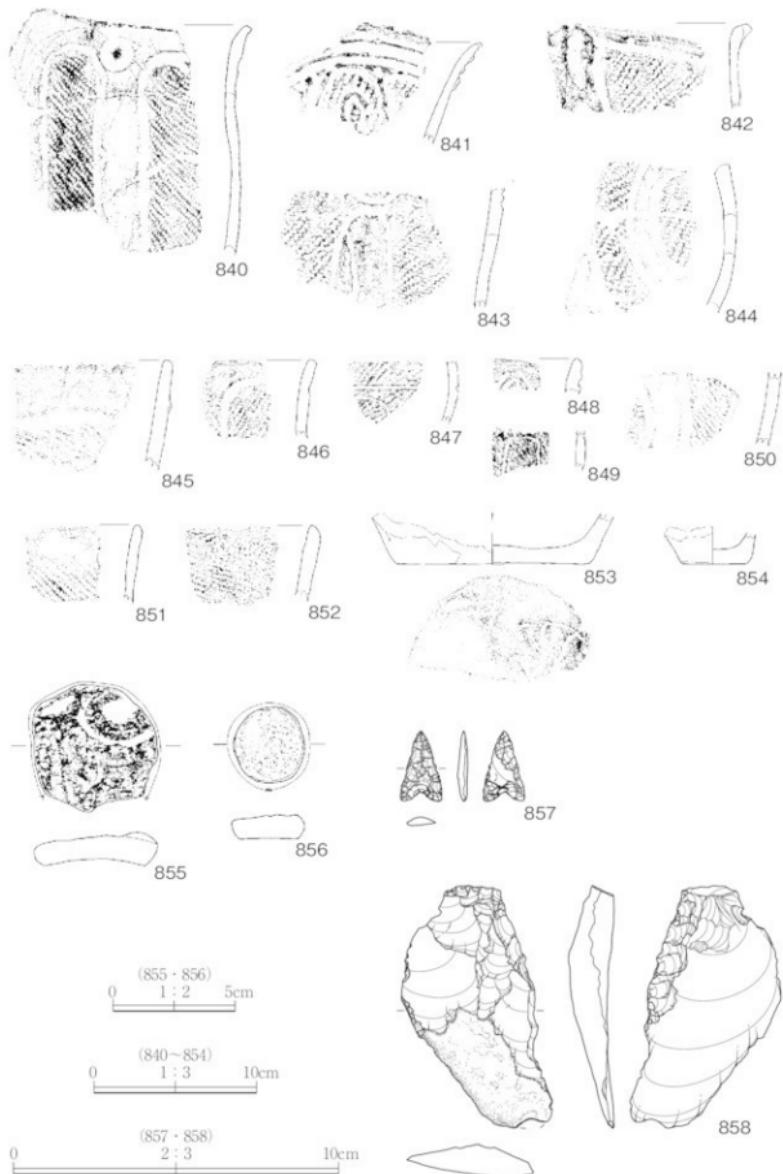
840は大木9式新段階である。口縁部に浅い円文が見受けられる。841は炉の直上から出土した深鉢の口縁部片で、口縁部には細い隆帯が横位に巡り、胴部には隆帯による渦巻文が垂下する。大木8b式である。843～849は大木9式で、850は大木10式古段階であり、埋土中出土の土器には時期幅がある。851～854は粗製である。

855、856は土製円盤である。どちらも胴部片の転用である。855は縁辺の一部を欠損するが、径5cmで比較的大きい。どちらも縁辺は全周磨滅する。

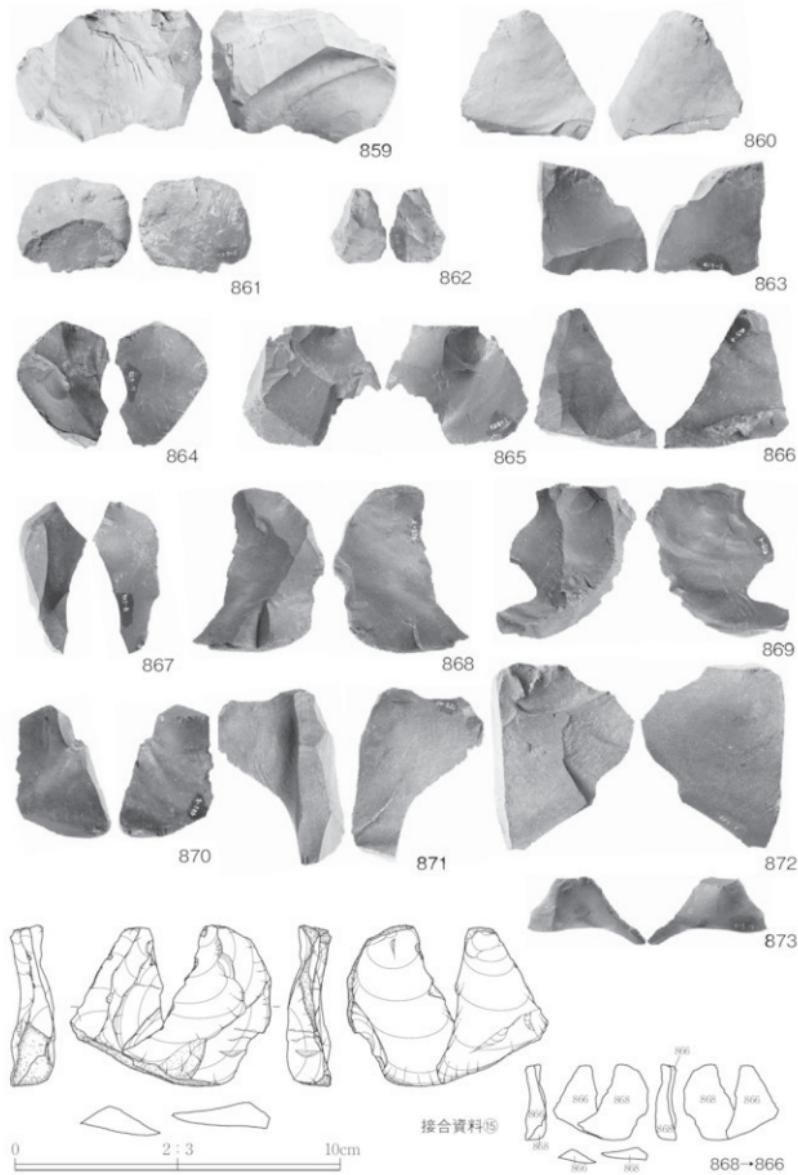
857は石鍬で、1類である。858は不定形石器で、自然面の残る縱長のフレイクを素材とし、縁辺の一部に二次加工による刃部を作出している。

859～873は集中範囲から出土したフレイク類14点と石核1点である。4つの母岩で構成されるがほとんど1つの母岩に集中している。15点のうち2点が接合した（接合資料⑮）。なお33号住居跡出土の接合資料①・②・④には本住居跡出土のフレイクが接合している。接合資料⑮は自然面が残り、その自然面を打面としている。フレイク間に別のフレイクがあったものと推測する。

【時期】埋土中から出土した土器は時期幅が広く、判断が難しいが炉の直上から出土した土器（842）を基準とし、大木8b式期と判断した。



第126図 34号住居跡出土遺物（1）



第127図 34号住居跡出土遺物（2）

## 35号住居跡（第128・129図、写真図版29・78・123）

【位置・検出状況】調査区中央、I A23xグリッドに位置する。IV層上面で検出した。なお本遺構は斜面の崩落および重複する34号住居跡により、そのほとんどを消失している。

【その他の遺構との重複】34号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

【平面形】不明。残存する範囲から不整な楕円形と推定。【規模】長軸（253）cm・短軸（447）cm・深さ28cm

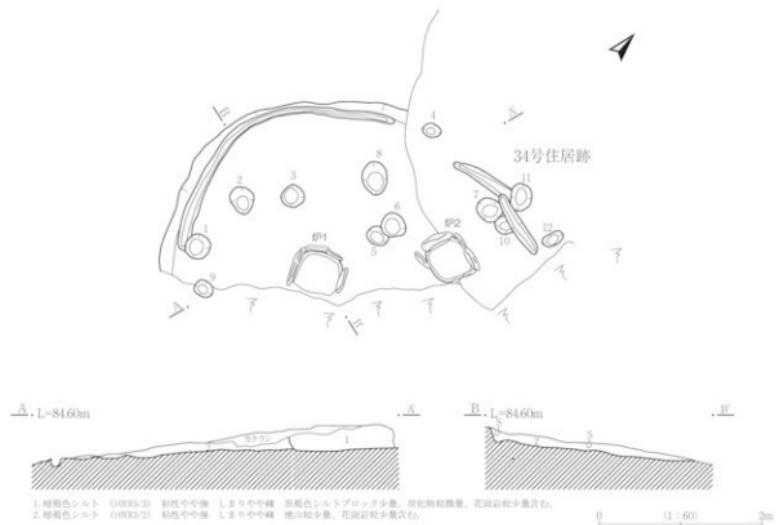
【埋土】1層のみ確認した（第128図2層）。暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は西壁の一部のみ確認できた。やや直立気味に立ち上がる。

【炉】2基確認した。床面中央と北壁寄りに設置される。便宜的に前者は「炉1」、後者は「炉2」とした。

炉1は石開炉である。方形で一辺67cmを測る。炉石は花崗岩で、南側の炉石はなく、抜き取り痕もないで、消失した可能性が高い。炉内の埋土は暗褐色シルトを主体とし、住居埋土に類似する。炉内の使用面は床から7cm掘り込んで構築している。炉内使用面上に焼土の広がりは認められない。炉の掘り方は小さく、炉石も概ね使用面に設置するのみで構築している。

炉2は石開炉である。方形で一辺55cmを測る。炉石は花崗岩で、偏平な礫を素材としている。南側の炉石はなく抜き取られたかもしれないがその痕跡は認められなかった。炉内の埋土は暗褐色シルトを主体とし、住居埋土に類似する。炉内の使用面は床から5cm掘り込んで構築している。炉1同様に炉内使用面上に焼土の広がりは見受けられないが、炉石は脆くなっているものと推測する。炉の掘り方は小さく、炉石も概ね使用面に設置するのみで構築している。



第128図 35号住居跡（1）

【附属施設】柱穴12個を確認した。配列等から34号住居跡内でみつかった柱穴も本遺構に伴われるものと判断した。また壁溝が巡っており、こちらも34号住居跡内にその続ぎが残っている。

【出土遺物】縄文土器、石器で出土している。土器は小片が多く、時期判断としては難しい。

874は外反する口縁部片で、沈線による弧状の区画文が描かれる。大木10式古段階か。875は胴部片で2条の沈線が縦位に垂下する。大木8b～9式の範疇に収まる。877は隆帯が巡り、大木8b～9式か。このように埋土中出土の土器には時期幅が大きい。

878は石鏃で、1類、両面の広い範囲にアスファルトが付着する。879は磨製石斧で刃部が剥離状に欠損する。両面に研磨痕が残る。

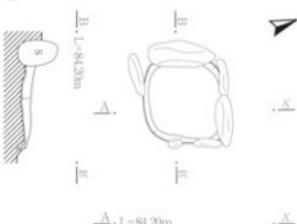
【時期】出土土器には時期幅があるが、重複する34号住居跡の時期も考慮し大木8b式期と判断した。

炉1



L.地褐色シート(1033/2) 粘性や少々  
塊山ブロック少量、花崗岩粒少量含む。

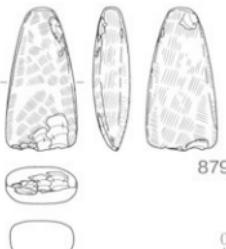
炉2



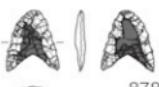
L.地褐色シート(1033/2) 粘性や少々  
塊山ブロック少量、花崗岩粒少量含む。



874



879



878

第129図 35号住居跡(2)・出土遺物

36号住居跡（第133・134図、写真図版30・78）

[位置・検出状況] 調査区中央部西側 I B23a、24a、25a、24b、25bグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。なお、本住居跡は斜面の崩落により壁の大半が消失しているが、壁溝及び、かろうじて判断できる立ち上がりから想定できる壁を図示している。また西側の一部及び炉付近の中央部がカクランの影響を受けており、一部消失している。

[その他の遺構との重複] 重複なし。

[平面形] 円形 [規模] 長軸（456cm）・短軸（456cm）・深さ16cm

[埋土] 3層からなる。黒褐色シルトを主体とした土で花崗岩粒が少量混入する。カクランの影響を受けているため埋土の堆積状況に関しては判断し難いが、斜面上部から下部にかけて流れるような堆積状況であるからに自然堆積であると考えられる。

[床面・壁] 床面は炉を検出した面を床面とした。北西側から南東側にかけて緩やかに傾斜するが、概ね平坦である。壁は北側と南側のみ一部が床面から5cm程度残存するが、大半が消失している。壁溝は北西側にのみ一部残存する。

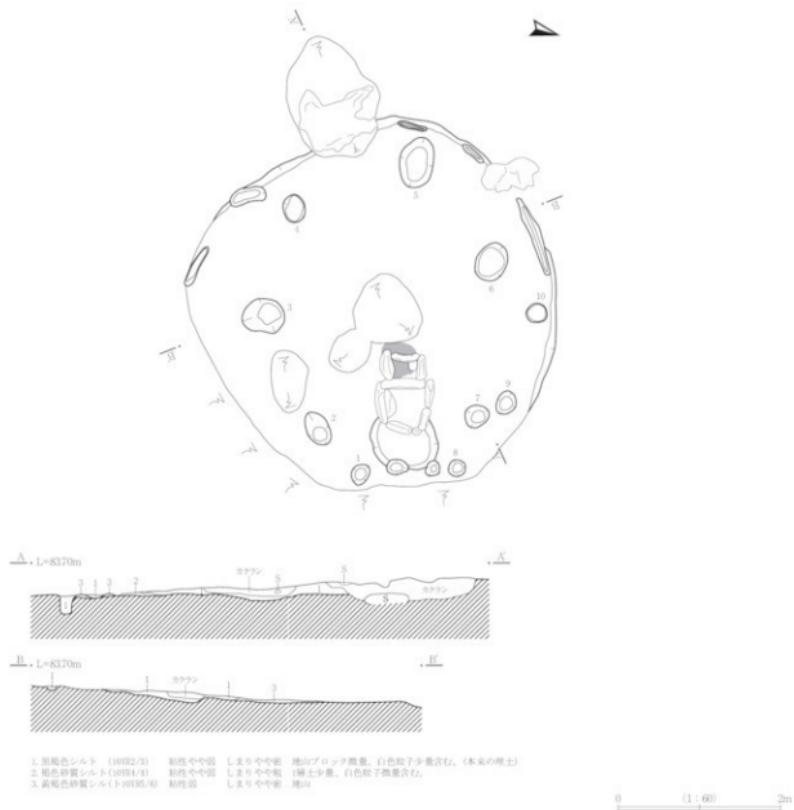
[炉] 複式炉である。石窰部2個と前庭部で構成され、長軸136cm、短軸68cmを測る。石材は花崗岩を用いているが風化が著しい。前庭部側をやや広く作っている。炉内の埋土も住居内の埋土と同じく黒褐色シルトが主体である。尚、下層に上層よりやや色調の暗い土の堆積が見受けられるが、この土は炉の掘り方の埋土であると推測される。炉の使用面は奥側の石窰部が床面から4cmと浅く、前庭部側の石窰部が床面から12cmとこちらの方が深い。奥側の石窓部のみ被燃による焼土化が見受けられる。その範囲は石窓部内に止まらず、炉石の外側にまで及ぶ。炉の掘り方に関しては小規模ながら確認している。前庭部は隣接する石窓部より一回り大きく方形に掘り込まれている。

[付属施設] 柱穴10個を確認した。そのうち5個（Pit 2・3・5～7）は主柱穴と考える。主柱穴5本による構成であったことが推測される。

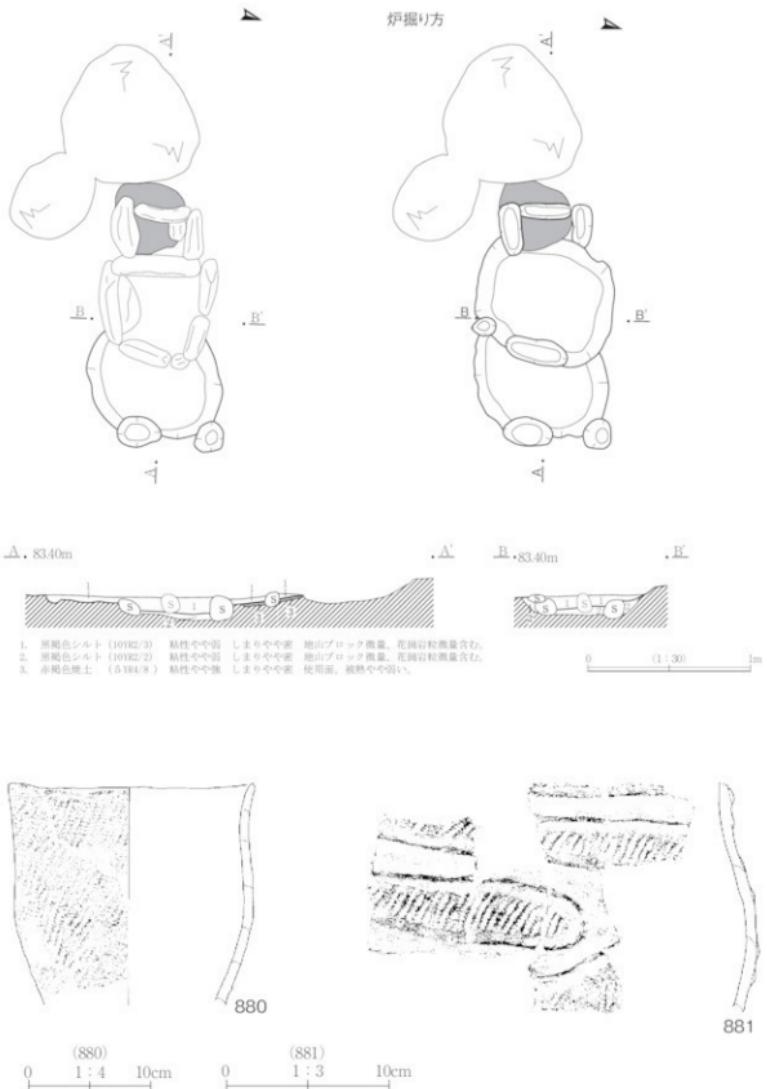
[出土遺物] 繩文土器が出土している。本遺構は埋土の大半が消失しているため出土した遺物が少ない。

881は胴部が膨らみ、口縁部が外へと開く形態の粗製で口縁部～胴部までが残存する。器形の特徴より大木10式中～新段階の範疇に収まるものと推測される。882も同様の器形であると推測される。膨らんだ胴部からくびれる頸部までが残存する。隆線による区画文が施されており、磨消された部分以外には繩文が充填される。大木10式中段階の土器である。

[時期] 遺構埋土から出土した土器の時期から大木10式中段階と判断した。（野中）



第130図 36号住居跡 (1)



第131図 36号住居跡（2）・出土遺物

## 37号住居跡（第132・133図、写真図版30・31・79）

【位置・検出状況】調査区中央、IA25y、IB25aグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は後世の削平および斜面崩落により、南側半分を消失している。

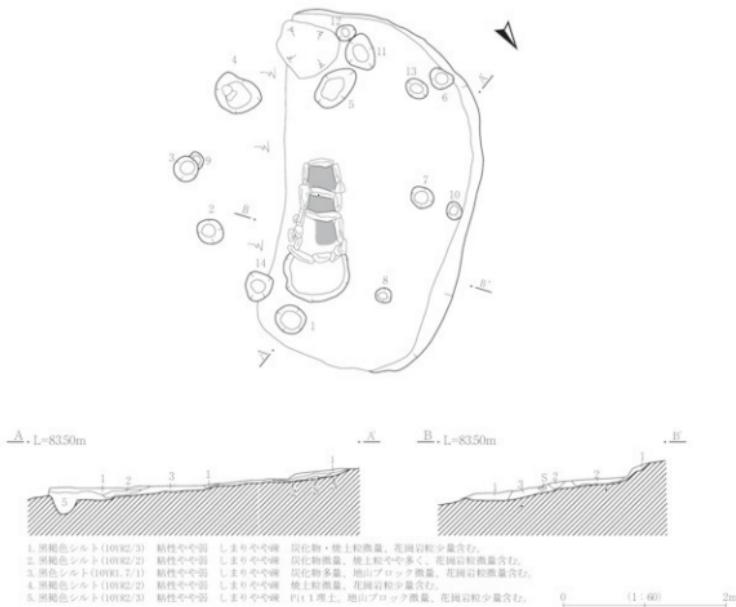
【その他の遺構との重複】36号住居跡と接しているが、どちらも床面・壁を消失しており重複関係は不明である。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸(418)cm・短軸(270)cm・深さ7cm

【埋土】5層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や焼土粒、花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが西から東へとわずかに傾斜する。壁は西壁を確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石開部3個と前庭部で構成され、長軸125cm、短軸52cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、偏平で大型が多いがふぞろいな砾を素材とする。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。石開部内の使用面は石開部によって異なり、奥側の石開部は床から3cmと浅く、他の石開部は13cmで深めに掘り込んで構築している。どの使用面も焼土の広がりが確認できた。特に奥側、真ん中の石開部は炉内全体に焼土が広がっている。炉の掘り方を確認したが炉の規模に掘り



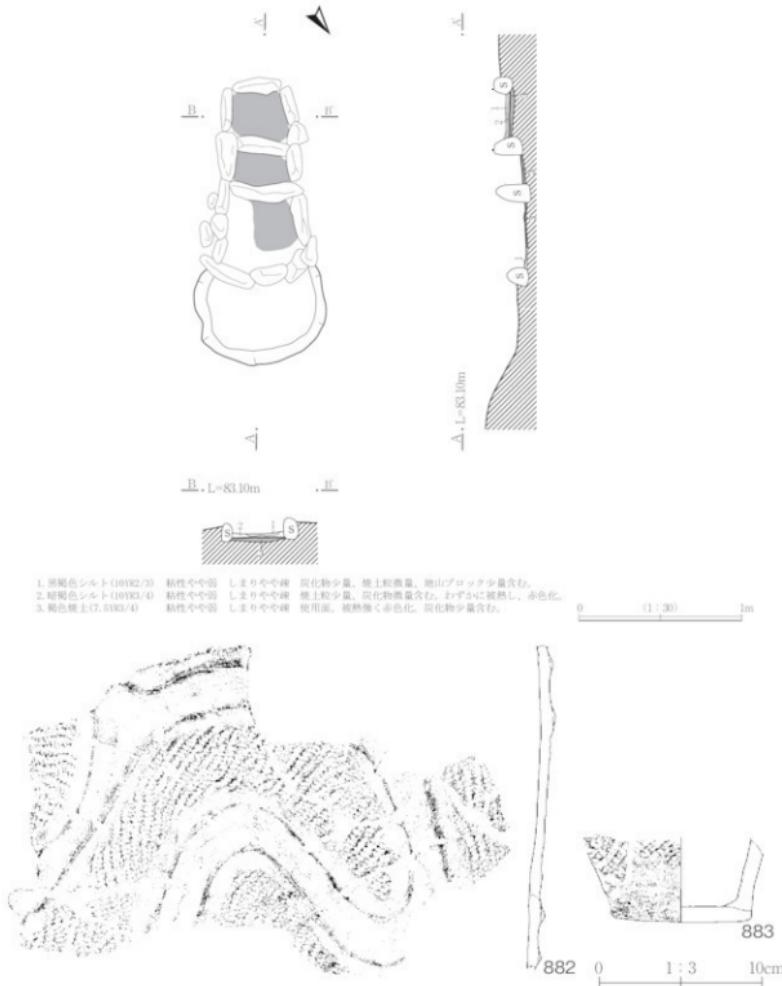
第132図 37号住居跡（1）

込み、炉石を設置する程度である。

【附属施設】柱穴14個を確認した。うち6個(Pit 3・4・7・8・13・14)は配列から主柱穴と考えられる。またこれらの柱穴には近くに同規模の柱穴が並列しているので、住居自体が建て替えられ、柱も一度、据え直されている可能性が高い。

【出土遺物】縄文土器が出土している。遺構埋土がほとんど消失しており、出土遺物が少ない。

882は大木10式新段階の深鉢胴部である。微隆帯による楕円形区画文が横位に展開し、区画文には



第133図 37号住居跡（2）・出土遺物

充填縄文が施文される。883は粗製の底部である。

【時期】出土した土器の時期から大木10式新段階と判断した。

### 38号住居跡（第134～137図、写真図版31・79・123・124）

【位置・検出状況】調査区中央側、II A 1 w・1 xグリッドに位置する。IV層上面で検出した。斜面の崩落のために東壁と東端床面は消失している。

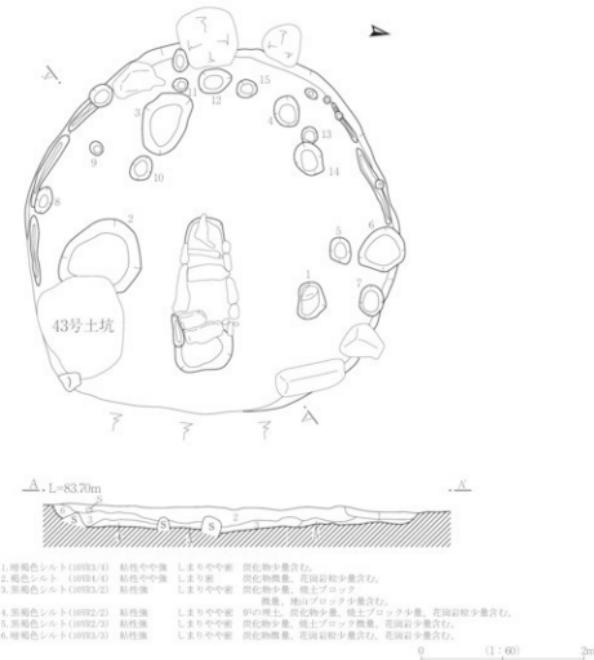
【その他の遺構との重複】43号住居跡と重複する。本遺構の方が古い。

【平面形】円形　【規模】長軸（453）cm・短軸（459）cm・深さ24cm

【埋土】6層からなる。埋土上位は褐色シルトを主体とし、他の遺構埋土とは様相が異なる。ただし埋土下位は黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した層を床面とした。概ね平坦である。壁は消失した東壁を除き、全周する。ただし斜面崩落のため、遺構上部はほとんど消失しており、壁は床から5cm検出したのみである。残存する範囲では緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。3個の石窯部と前庭部で構成し、長軸186cm、短軸81cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、大きさ、形態共にふぞろいな礫を素材とする。非常に脆く、検出段階ですでに、床面から突出している炉石が削れて消失していた。炉の埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土に類似する。石窯部内の使用面は奥側の使用面は8cm、真ん中は10cm、手前は14cm掘り込まれて構築されて



第134図 38号住居跡（1）

いる。石圓部のうち両端の石圓部は使用面の焼成が強く、使用面に焼土が広がっている。真ん中の石圓部は横長の長方形を呈し、使用面に焼成した痕跡は認められない。炉石の掘り方を確認した。床面に炉石のみ掘り込み、炉石を設置している。

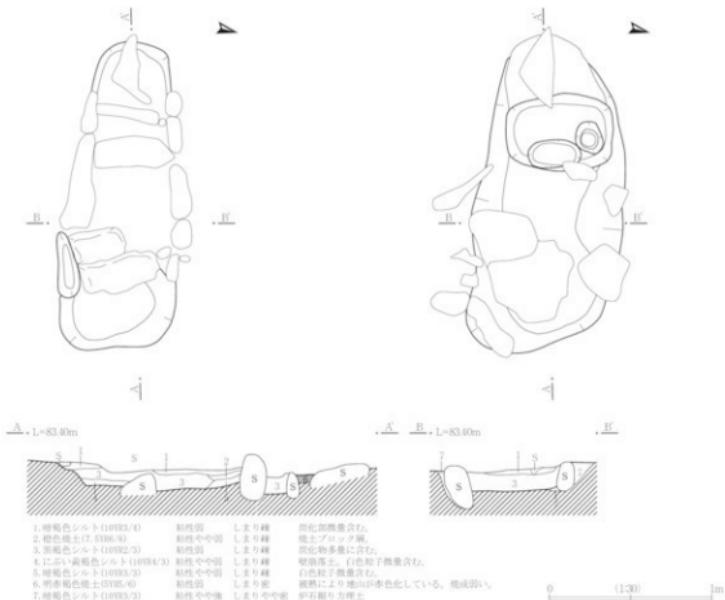
【附属施設】柱穴14個を確認した。そのうち4個（Pit 1～4）は主柱穴と考える。他にも柱穴が配されているので、本遺構が建て替えられた可能性が高い。また壁際には部分的に壁溝が巡り、小柱穴も見受けられる。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。

884は炉から出土した。粗製で、胴部下半から底部のみ残存する。885も粗製で口縁部が大きく開く形態である。886は小型で、形態に特徴のある土器で、底部に最大径があり、口縁部に向かうにつれすぼまる。底部周辺にのみ繩文が認められ、また内面に輪積み痕が残る。文様の残る土器は大木10式中段階のものが多い。888、889、891は微隆帯により区画文が描かれる。887、892、893、895は沈線により弧状の区画文が施される。894は胴部片で竹管状工具による円形刺突文が施される。896～898は粗製である。898は深鉢の底部片で、比較的小型である。底面に木葉痕が見受けられる。

899、900は土製品である。どちらも胴部片の転用で、側面は全周摩滅している。

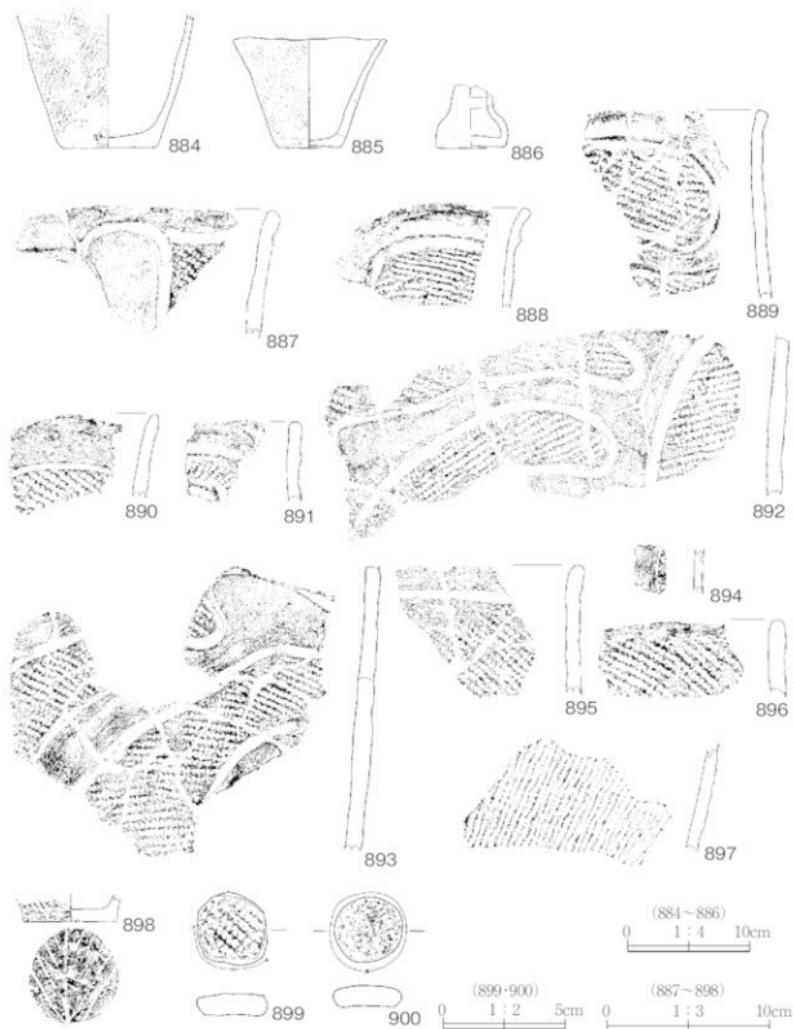
901は石錐で1類、比較的小型である。902は石錐で3類。錐部の作出については、片面には二次加工が及んでいるが、もう片面は中途になっている。903は不定形石器である。自然面の残る縱長のフレイクを素材とし、縁辺の両側から二次加工を施す。904は小型の磨製石斧で刃部がわずかに欠けて



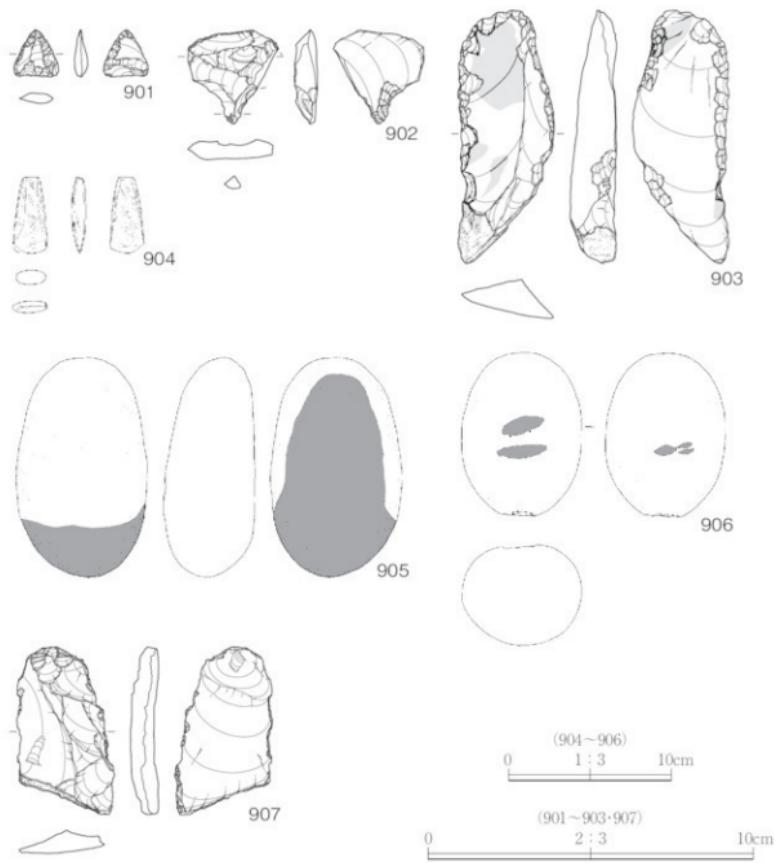
第135図 38号住居跡（2）

いる。905・906は敲磨器類である。907はUフレイクで縁辺の広い範囲に微細剥離が認められる。

【時期】出土土器の時期から大木10式中段階と判断した。



第136図 38号住居跡出土遺物（1）



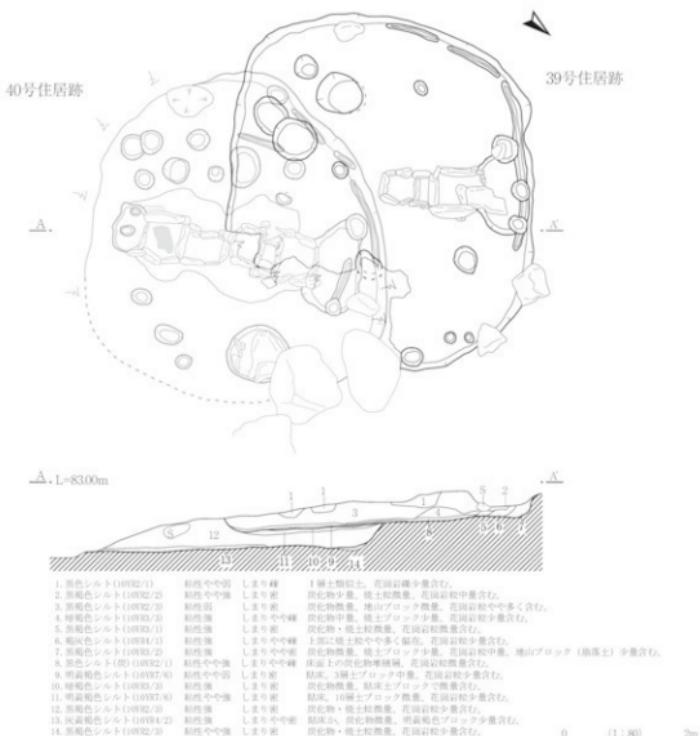
第137図 38号住居跡出土遺物（2）

## 39号・40号住居跡の重複関係について（第138図）

39号・40号住居跡は調査区中央、ⅡA1yグリッドに位置する、2棟の重複する堅穴住居跡である。

両遺構の新旧関係は断面土層で39号住居跡の方が新しく、40号住居跡の方が古いことを確認した（138図）。両遺構とも全体の約半分が重なるように重複するが、39号住居跡は40号住居跡が十分に埋没（あるいは斜面の崩落により、過度の土砂堆積があった可能性もある）した後、構築されており、両遺構の床面の高さには30cm以上の比高差があるので、古い40号住居跡が新しい39号住居跡に削平されるということはなかった。

また特筆すべき点として39号住居跡の床面のうち、40号住居跡の埋土に相当する範囲にはIV層土に類似する黄褐色土を利用し、薄い貼床を施していることも分かった（138図11層）。またこの貼床はさらにその上にも確認でき（9層）、計2回、貼床を施し、床面の整形を行っていることも分かった。



第138図 39・40号住居跡重複関係

## 39号住居跡（第139～142図、写真図版32・80・124）

【位置・検出状況】調査区中央、II A1yグリッドに位置する。IV層上面で検出した。遺構の南東側の一部は重複する40号住居跡の埋土を壊して床面や壁を構築しており、精査開始時には、それに気づかず掘りすぎてしまい、消失している。

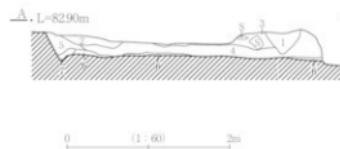
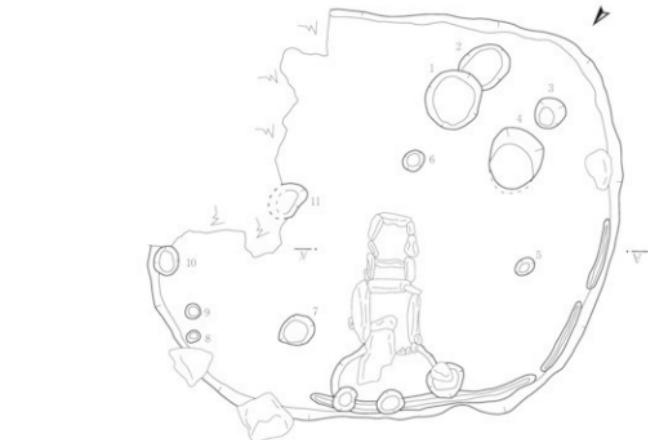
【その他の遺構との重複】40号住居跡と重複する。本遺構の方が新しい。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸498cm・短軸587cm・深さ37cm

【埋土】10層（第138・139図1～10層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や焼土粒、地山ブロックが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

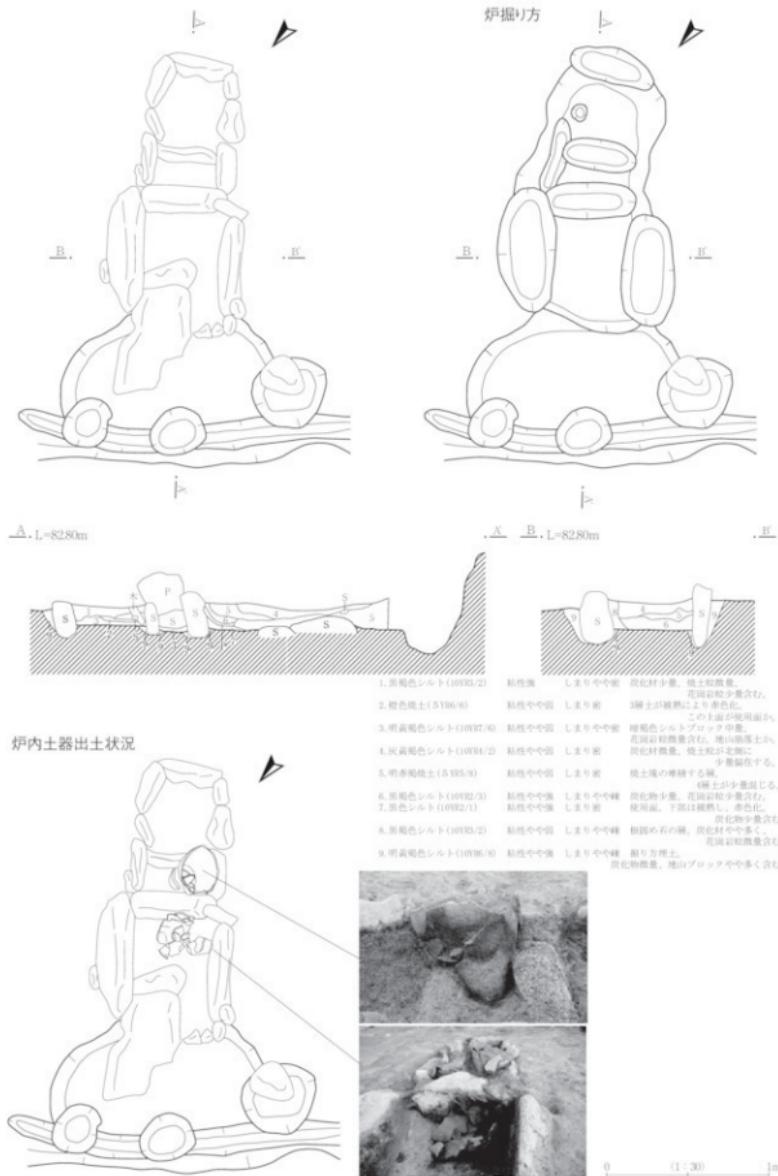
【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。40号住居跡の埋土上に地山類似の黄褐色シルトを利用した貼床を施し、整地しており、概ね平坦である。壁は東壁を除き全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石窰炉3個と前庭部で構成され、長軸230cm、短軸81cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、比較的大型の礫を素材としている。炉内埋土は灰黄褐～黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。各石窰部の使用面は床面から約15cm掘り込んで構築している。使用面に焼成の痕跡は認められず、焼土の広がりも確認できなかった。真ん中の石窰部は横長の長方形を呈し、両側の石窰部と比べて、使用面までの深さがある。また上位には深鉢が炉内に挟まるようにして出土している。炉石の掘り方埋土を確認した。炉石よりもわずかに広く掘り込み、炉石を設置している。

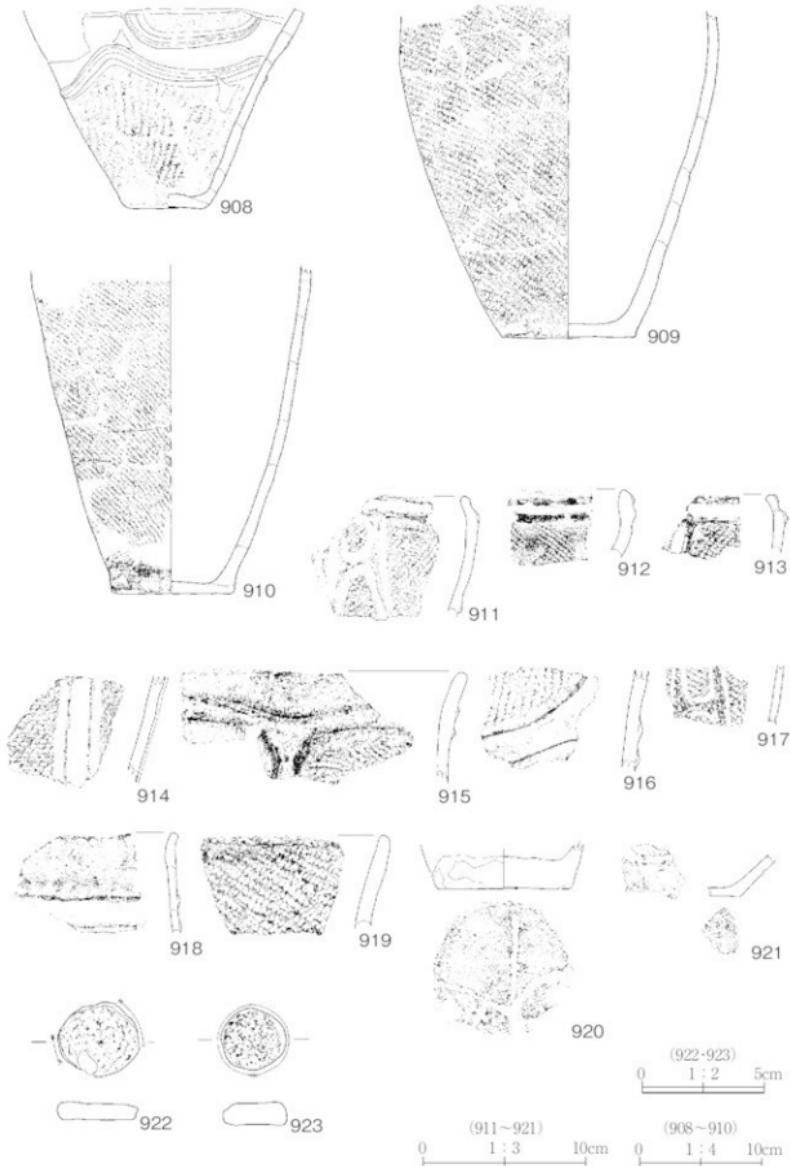


1. 黒色シルト(0BY32/1)	粘性やや硬	しまり極	表土、隙少含む。
2. 黒褐色シルト(0BY32/2)	粘性やや強	しまり強	炭化物少量、燒土粒無量。
3. 黑褐色シルト(0BY32/3)	粘性強	しまり強	炭化物微量、燒土粒多量。
4. 増粘褐色シルト(0BY32/4)	粘性強	しまりやや強	炭化物中量、燒土ブロック含む。
5. 黑褐色シルト(0BY32/5)	粘性強	しまり強	炭化物・燒土粒無量。
6. 増粘褐色シルト(0BY32/6)	粘性強	しまりやや強	炭化物された燒土粒含む。
7. 黑褐色シルト(0BY32/7)	粘性強	しまりやや強	炭化物無量、燒土ブロック含む。

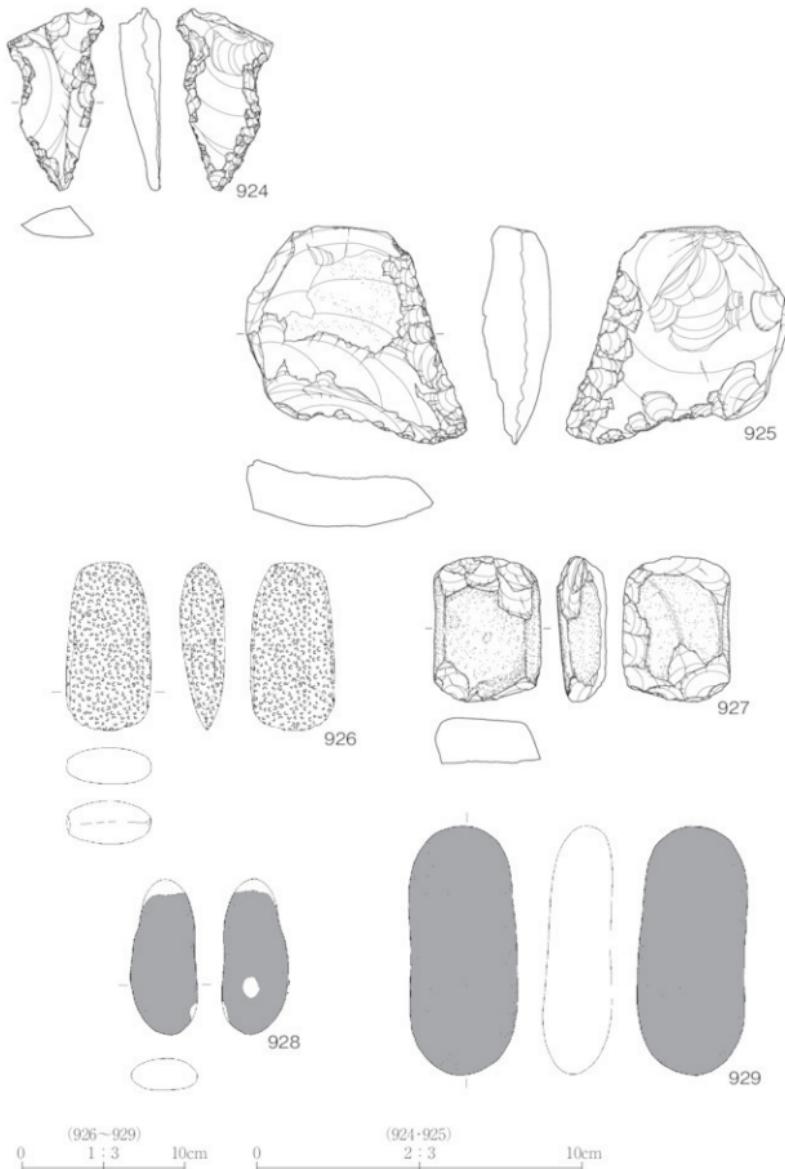
第139図 39号住居跡（1）



第140図 39号住居跡（2）



第141図 39号住居跡出土遺物（1）



第142図 39号住居跡出土遺物（2）

【附属施設】柱穴11個を確認した。うち3個（Pit 1・4・5）は主柱穴と考える。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。

909・910は粗製で、どちらも胴～底部が残存する。909は炉石上に挟まって出土した（第140図 写真上）。住居廃絶後の何らかの行為により廃棄されたものであろうか。910は炉石開部使用面上から出土した（第140図写真下）。908は埋土下位から出土した大木10式中段階の底部である。他に床面上から大木9式古段階（911）が出土しており、また埋土中からは同じく大木9式古段階（914）、新段階（917）、大木10式（916・918）が出土し、他に粗製の深鉢（919）や底面に木葉痕が残る底部片（920・921）がある。

土製品は土製円盤である。922・923はどちらも縄文のみを施す深鉢の胴部片を転用し、922は側面の一部、923は側面全周が摩滅する。

924・925は不定形石器である。924は縦長のフレイクを素材とし、また925は厚みのある横長のフレイクを素材とする。どちらも両面から二次加工を施し、刃部を作出している。926は磨製石斧の未成品で、全体を敲打し、形態を整形する段階、刃部側は欠損している。927は礫器である。偏平で方形を呈する礫を素材とし側面3方向から打撃による剥離が連続する。928、929は敲磨器類で、どちらも偏平な梢円形の礫を素材とし、全体に磨痕が見受けられる。

【時期】出土土器には時期幅があり、どれも時期判断の根拠とするのは難しい。ここでは埋土下位から出土した土器（909）の時期から、大木10式新段階と判断した。

#### 40号住居跡（第143～145図、写真図版32）

【位置・検出状況】調査区南東側、II B 2aグリッドに位置する。39号住居跡を精査中に、その床面のうち南東側の一部が黄褐色シルト（地山類似）を利用した貼床であることが分かり、それらをはがし、黒褐色シルト層を掘り進めたところ、複式炉が出現し、本遺構を確認した。炉は2個見つかっており、それら炉の配置状況から本来は2棟の竪穴住居跡が重複していたか、あるいは大きく建て替えを行ったと推定する。また本遺構の南東～南側は斜面の崩落により、消失している。

【その他の遺構との重複】39号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

【平面形】不整な梢円形　【規模】長軸495cm・短軸541cm・深さ27cm

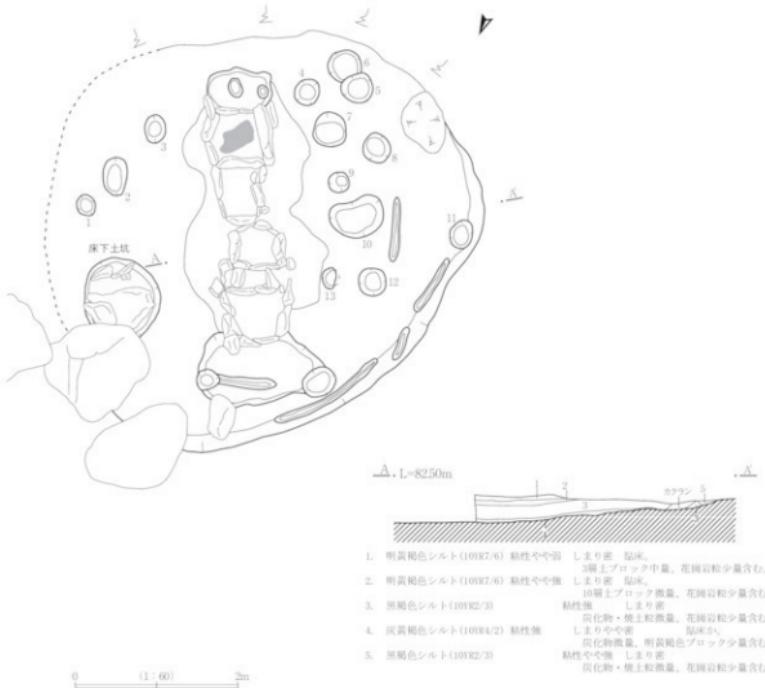
【埋土】4層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や焼土粒が混入する。埋土のほとんどを3層が占めており、土砂等により一気に埋没した人為堆積と考える。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。北～西壁の一部が残存する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

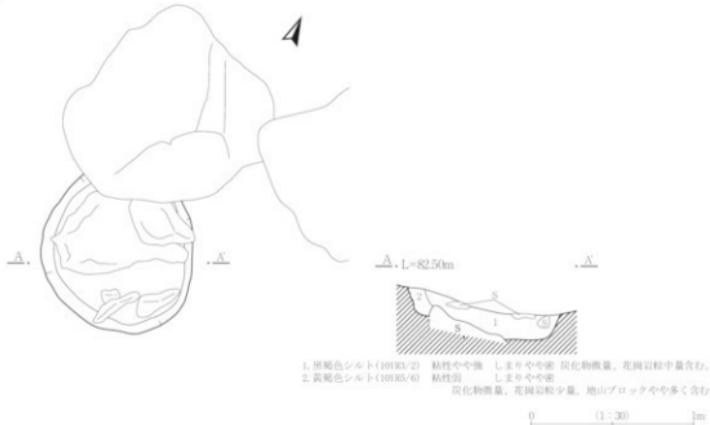
【炉】炉は2基検出した。両者は遺構の北壁際から中央に設置され、それぞれが向かい合うような状態である。便宜的に、北壁際の炉を「炉1」、中央付近の炉を「炉2」とした。

炉1は複式炉である。石開炉3個と前庭部で構成され、長軸222cm、短軸84cmを測る。炉石は花崗岩である。炉内埋土は暗褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。各石開部内の使用面は異なり、奥側の石開部は床から15cm、前庭部側は23cm掘り込んで構築している。使用面に、被熱の痕跡は認められない。また真ん中の石開部は床から9cm下まで掘り込んでおり、横長の長方形を呈し、脇には埋設土器が横位の状態で設置されている。炉石の掘り方埋土を確認した。炉石より大きく広く掘り込み、1度埋めてから炉石を設置している。

炉2も複式炉である。石開炉2個と前庭部で構成され、長軸196cm、短軸88cmを測る。炉石は花崗岩で炉1の炉石同様、大型の礫を素材とする。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似



床下土坑



第143図 40号住居跡 (1)



第144図 40号住居跡（2）

する。石圓部内の使用面は床から14cm掘り込んで構築している。手前側石圓部の使用面の焼成は強く、被熱により赤色化した焼土の広がりが確認できる。

【附属施設】柱穴13個を確認した。配列が不規則で、また東側の消失した床面で柱穴がみつかっていないことから主柱穴配列は定かではない。また東側床面で床下土坑1個検出した。床下土坑は50×30cmを測り、深さは床面から25cmである。埋土中から遺物は出土していないので、用途は不明である。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。

930は炉の埋設土器で口縁部から胴部が残存する。大木10式新段階である。931は炉内から出土した小型の深鉢で、胴部がふくらみ、口縁部が外反、また4単位の波状口縁である。胴部には沈線による弧状の区画文が横位に巡る。大木10式新段階と考える。他に炉の埋土から大木8b式（933）や住居埋土から大木9式古段階（932）、新段階（934・935）、他に粗製深鉢（936）が出土している。

937はRフレイクである。方形のフレイクで最終剥離面にさらに二次加工が施され、また縁辺に不連続な微細剥離が見受けられる。

【時期】炉の埋設土器（931）の時期から大木10式新段階と判断した。



第145図 40号住居跡出土遺物

## 41号住居跡（第147～150図、写真図版33・81・87・124）

【位置・検出状況】調査区中央部Ⅱ A1x, 2x, 1y, 2yグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。本遺構は包含層を掘り下げていた途中で炉跡を発見したことから存在が明らかとなった経緯がある。立地する斜面部の崩落の影響を色濃く受けしており、周囲には崩落した大量の巨礫が転がっている。写真は検出時のものであり、本遺構が大量の巨礫に押しつぶされていることを鮮明に示している。壁はこの崩落により消失しており、全体像が判然としない。

【その他の遺構との重複】なし。【平面形】不明

【規模】長軸（330cm）、短軸（270cm）、深さ不明 【埋土】消失していたため確認できなかった。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが、大半が巨礫によって破壊されている。壁は全て消失している。

【炉】複式炉である。全容は判然としないが、石圓部2個、若しくは3個と前庭部で構成され、長軸（180）cm、短軸64cmを測るものと推測される。炉の南西側は土坑状に深く掘りくぼめられている。石材は花崗岩を用いている。炉内の埋土は黒褐色シルトが主体であり、一部被熱を受けて焼土化している。下層に堆積する黒色シルトは炉石の掘り方の埋土と考えられる。炉の使用面は統じてほぼ同一の高さに掘えられており、床面から8cmである。炉石に被熱痕が残るが、使用面の被熱は弱い。細長い石圓部の脇には埋設土器が横位に設置されており、周囲が焼土化している。炉の掘り方に関しても確認を行っており、炉より一回り大きい程度であることを確認した。前庭部は円形を呈しており、掘り込みも浅い。前庭部から延びる炉石には台石として用いられていた石が転用されている可能性も考えられる。

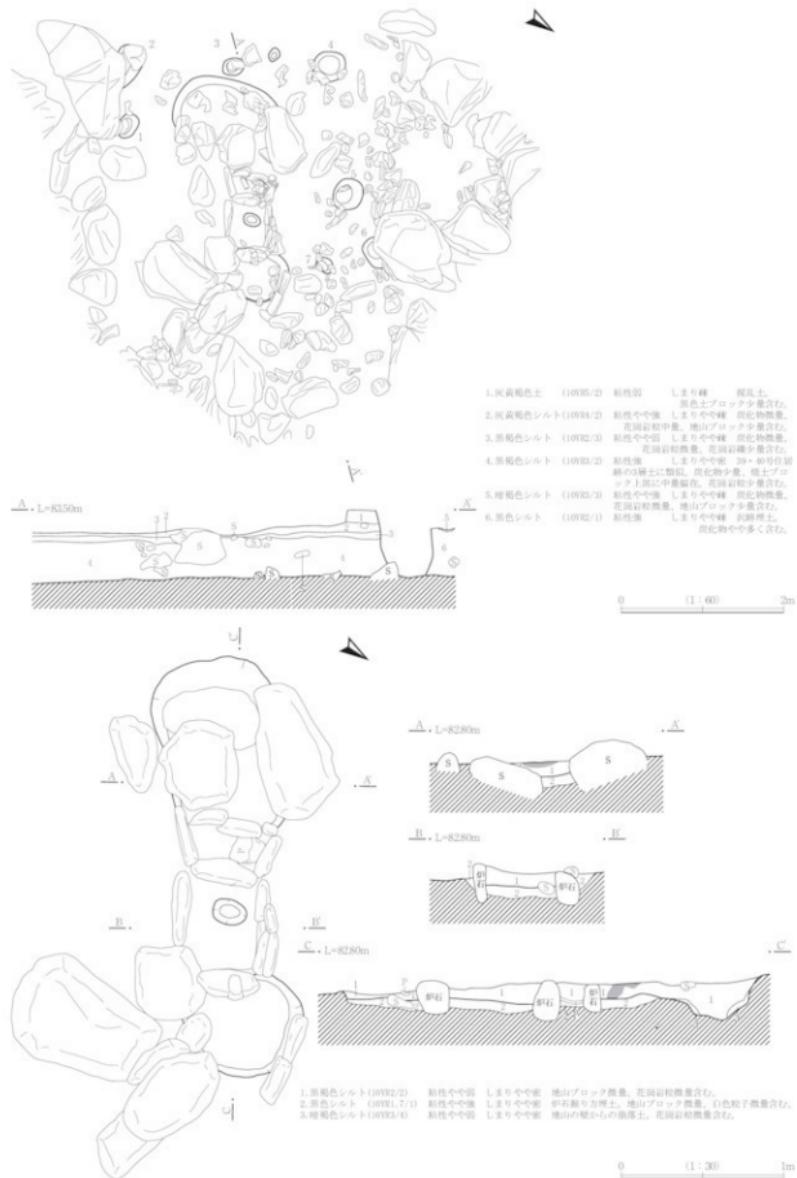
【付属施設】柱穴7個を確認している。配置は不明である。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。ただし、時期幅が広いため崩落によって流れ込んだ遺物であると推測される。

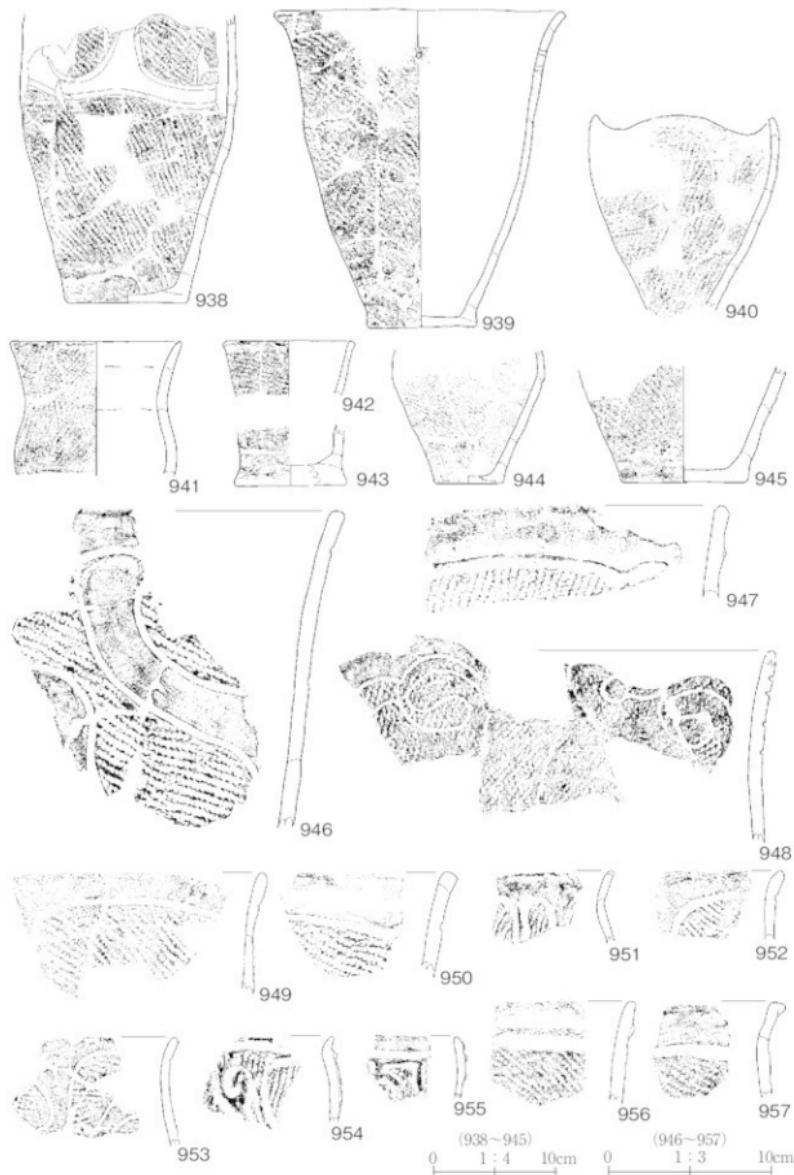
939は区画文が施された土器で大木10式古段階のものと考えられる。940は炉の埋設土器で口縁部が外反する粗製である。口縁部付近には補修孔も見受けられる。941は内湾し、口縁部が波状を呈す。区画文より大木10式古段階と判断した。942～943、945～946はいずれも粗製である。942は頸部が壺状にくびれる。944は無文の底部である。947は沈線による区画文を施した後に縄文が充填される大木10式新段階の土器である。948は隆線による区画文が施される。949は沈線によって曲線的な文様が描かれている。他の土器とは異質であり、後期初頭に該当するものと考えられる。950～951、953～954、957～958は大木10式段階に比定される土器の口縁部片である。952は大木9式新段階であると考えられる。955～951、962、964、970は大木8b～9式古段階に特徴的な文様が施されている。959～961はいずれも口縁部片で、刺突が施されている。959は三角形に張り出す突起部にのみ刺突が施されており、下部に沈線が施される。大木10式新段階に該当するものと考えられる。963は後期に該当する土器と考えられる。965～969はいずれも粗製である。971は無文の底部片である。

972～977は土製円板である。いずれも側面は磨削している。972は施文した際の縄文の末端が観察できる。976は大木10式の破片を転用したものと考えられる。978はミニチュア土器の底部である。

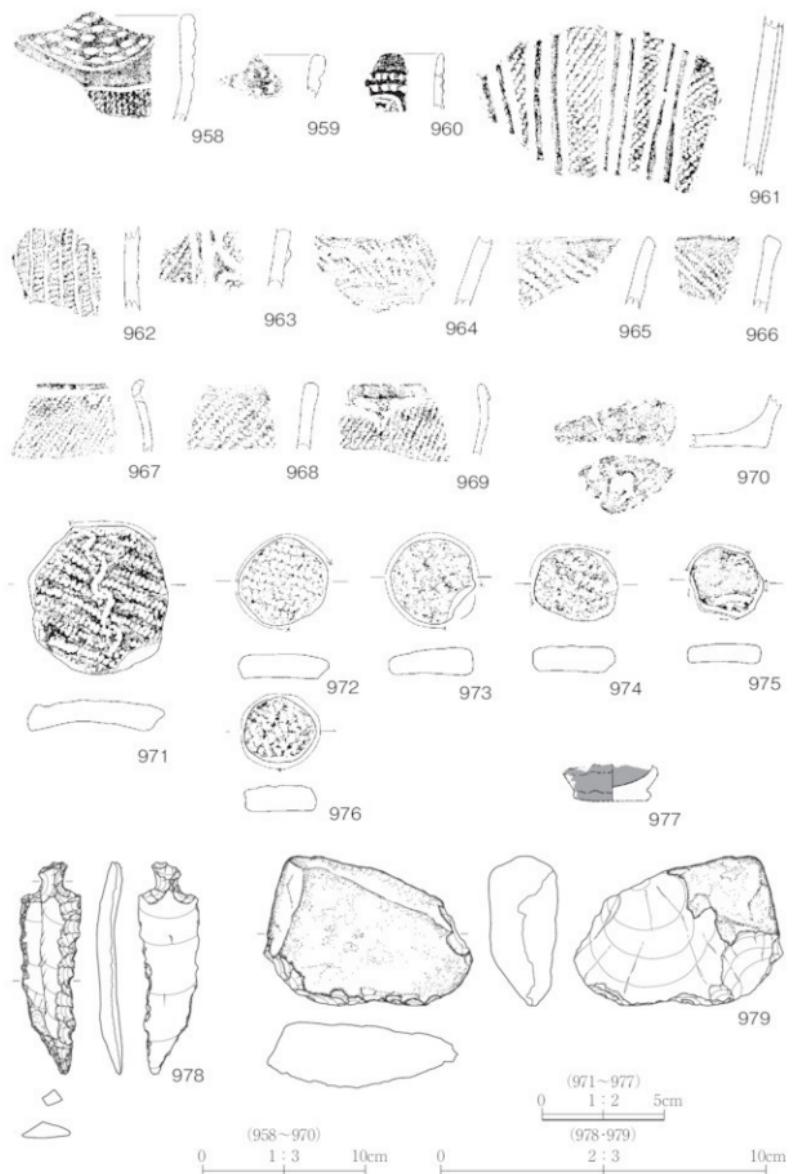
979は縦型の石匙である。刃部は片面に二次加工によって形成されている。980は礫器である。表面は自然面が残るが、下部には細かい剥離が見受けられる。裏面には打点が明確に観察でき、この打撃によって形成された面の下部に二次加工が施されている。981・982は磨製石斧である。どちらも刃部に欠損が見られるが、定角式の石斧である。983・984は敲磨器である。983は炉内埋土より出土している。両面には幅広い磨痕が見られる。984は断面形が三角形に角張った棒状の礫を利用しているが、



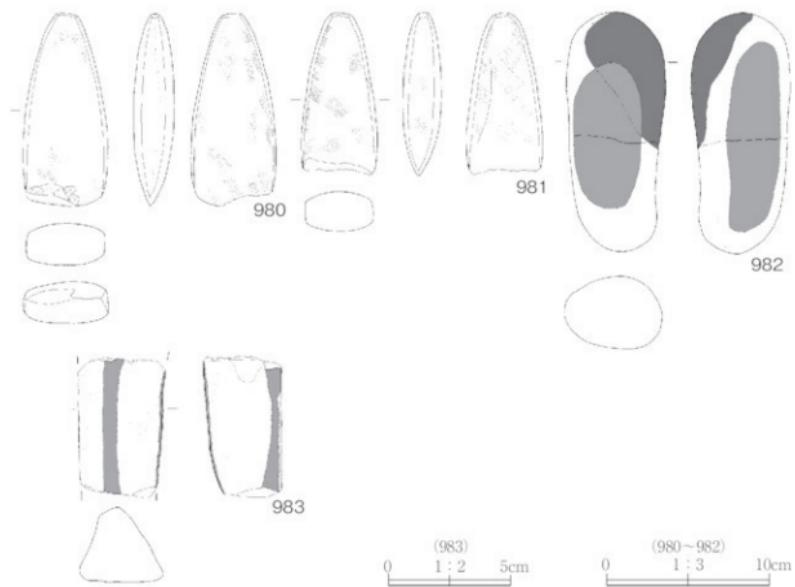
第146図 41号住居跡



第147図 41号住居跡出土遺物（1）



第148図 41号住居跡出土遺物（2）



第149図 41号住居跡出土遺物（3）

両端が欠損している。

【時期】 炉内から出土した土器の時期から大木10式新段階と判断した。(野中)

## 42号住居跡（第150～152図、写真図版33・34・82・125）

【位置・検出状況】 調査区中央、II A 2rグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

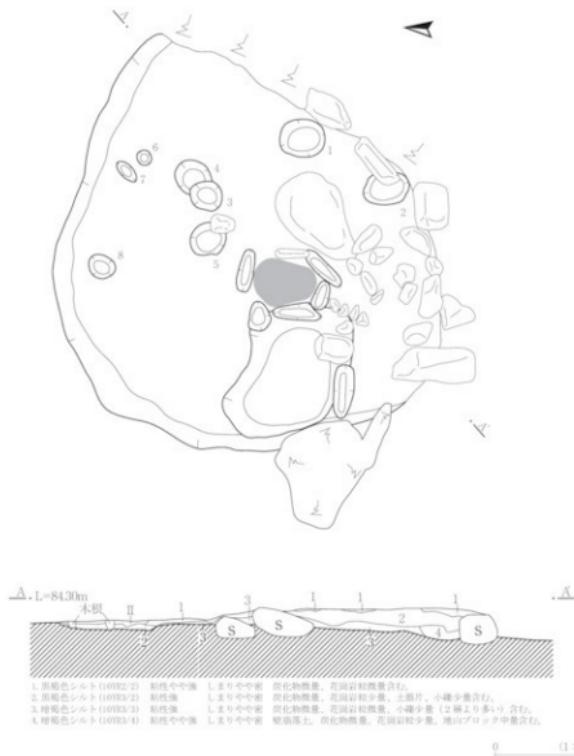
【その他の遺構との重複】 43号住居跡、5号住居状遺構と重複し、本遺構が最も古い。

【平面形】 不整な円形 【規模】 長軸（500）cm・短軸（480）cm・深さ26cm

【埋土】 4層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測するが斜面崩落に伴う土砂流入による堆積の可能性もある。

【床面・壁】 床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁はわずかであるが北～西壁の一部のみ確認した。直立気味である。

【炉】 複式炉である。ただし炉石は東側に1個残存するのみで、他は抜き取られており、全容がつかめない。残存状態から石壠部1個と前庭部で構成され、長軸232cm、短軸115cmを測ると推定される。炉石は花崗岩である。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。石壠部内の使用面は床面とほぼ同じ高さである。炉内に焼土の広がりは認められるが焼成は弱く、被熱も薄い赤色化した焼土にとどまる。炉の掘り方は炉石の抜き取り痕のみであり、おそらく炉石を床面に差し込んで設



第150図 42号住居跡（1）

置したものと思われる。

【附属施設】柱穴8個を確認した。うち主柱穴と考えられるのは2個(1・2)であるが、消失したものが多く主柱穴配列は定かではない。

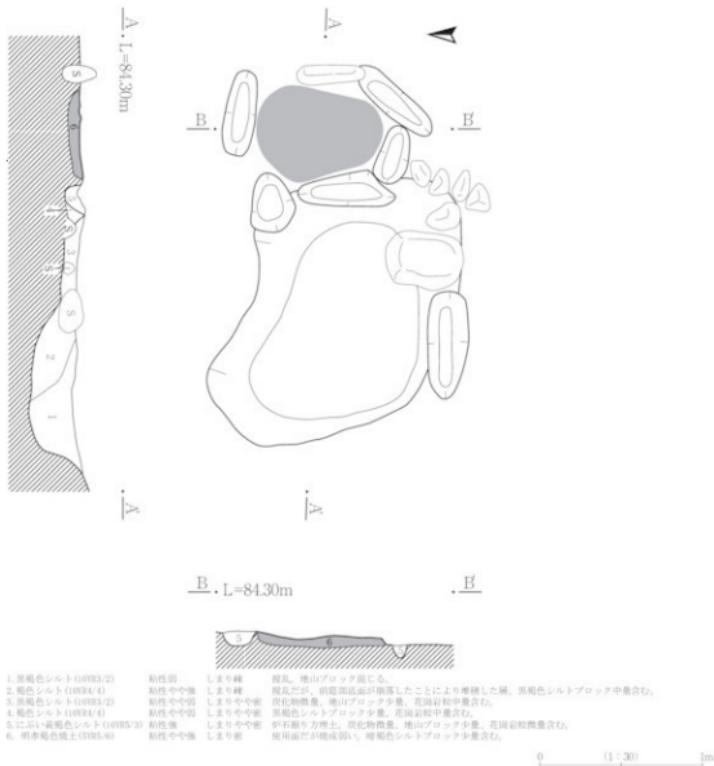
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。遺構上部が削平により消失しているため、出土遺物は比較的少ない。

いずれも埋土中からの出土である。大木8b式(984~987)、大木10式(988)・後期前葉(989)。粗製(990~992)である。

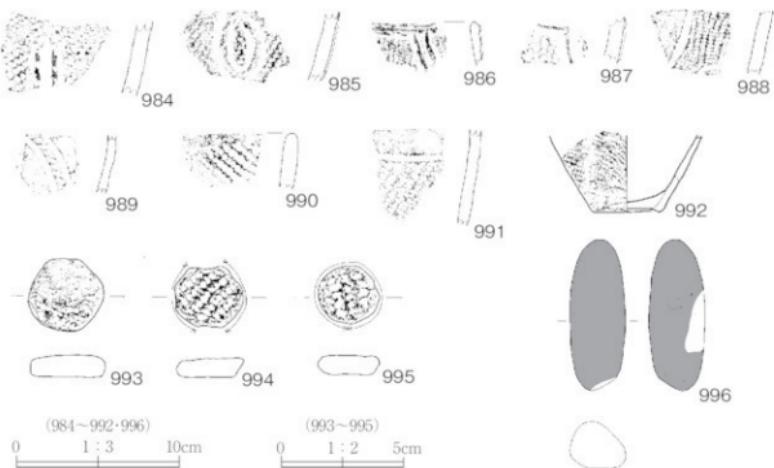
土製品は土製円盤である。993~995は深鉢の胴部片の転用である。側面については993は打ち欠きのみで、994・995は側面の広い範囲が摩滅する。

996は敲磨器類である。棒状の礫を素材とし、全面に磨痕が見受けられる。

【時期】出土土器の時期幅が広く、また埋土中出土であり、遺構外からの流込みの可能性も高いが、出土量の比較的多かった大木8b式期と判断した。



第151図 42号住居跡 (2)



第152図 42号住居跡出土遺物

## 43号住居跡・5・6号住居状遺構の重複関係について（第153図）

43号住居跡・5・6号住居状遺構は調査区中央、II A 1 s ~ 3 r グリッドに位置し、東西方向に並ぶように重複する遺構群である。

新旧関係は3つの遺構を東西方向に横断する土層断面（第153図）で確認しており、6号住居状遺構が最も新しく、43号住居跡、6号住居状遺構がそれに次ぐ。

この3つの遺構は調査区内でも比較的平坦な場所に立地するが、それぞれの遺構上面は北側斜面の崩落によって壊されたものと推測し、また土砂流入によって堆積した土層（1層）が各遺構の上に広く見受けられる。加えて土砂流出によるものと思われる、遺構内への巨礫の流入が目立ち、床面上は多量の礫により足の踏み場も無い状態であり、また平坦地に立地するにもかかわらず、各遺構の南側の一部は消失している。

## 43号住居跡（第154~155図、写真図版34）

【位置・検出状況】調査区中央側、II A 2 t グリッドに位置する。IV層上面で検出した。埋土中から床面上にかけて巨礫が多量に混入している。また南側の一部は斜面崩落により消失している。

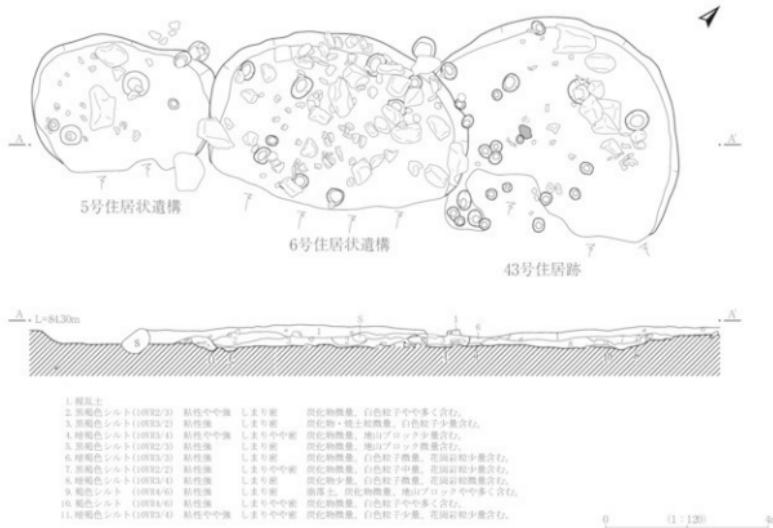
【その他の遺構との重複】42号住居跡と6号住居状遺構と重複する。本遺構は6号住居状遺構より古く、42号住居跡より新しい。

【平面形】不明。不整な楕円形か。

【規模】長軸（600）cm・短軸（500）cm・深さ22cm

【埋土】4層（第153図7~10層）からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒や大小の礫が混入する。遺構内は堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北壁のみ確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。



第153図 43号住居跡・5・6号住居状遺構重複関係

【炉】床面のはば中央に焼土と柱穴状の穴が見受けられ、炉と判断した。残存状態から地床炉と推定するが、柱穴状の穴が炉石の抜き取り痕であれば石圓炉である。不整な楕円形を呈し、40×25cmを測る。炉の使用面（焼土）は床面とはほぼ同じ面である。焼成は弱く、わずかに被熱し、赤色化している。炉の掘り方を確認した。焼土よりも広く、また焼土下10cm掘り下げてから構築している。

【附属施設】柱穴22個を確認した。規模や配列から2個（1・3）は主柱穴の可能性がある。

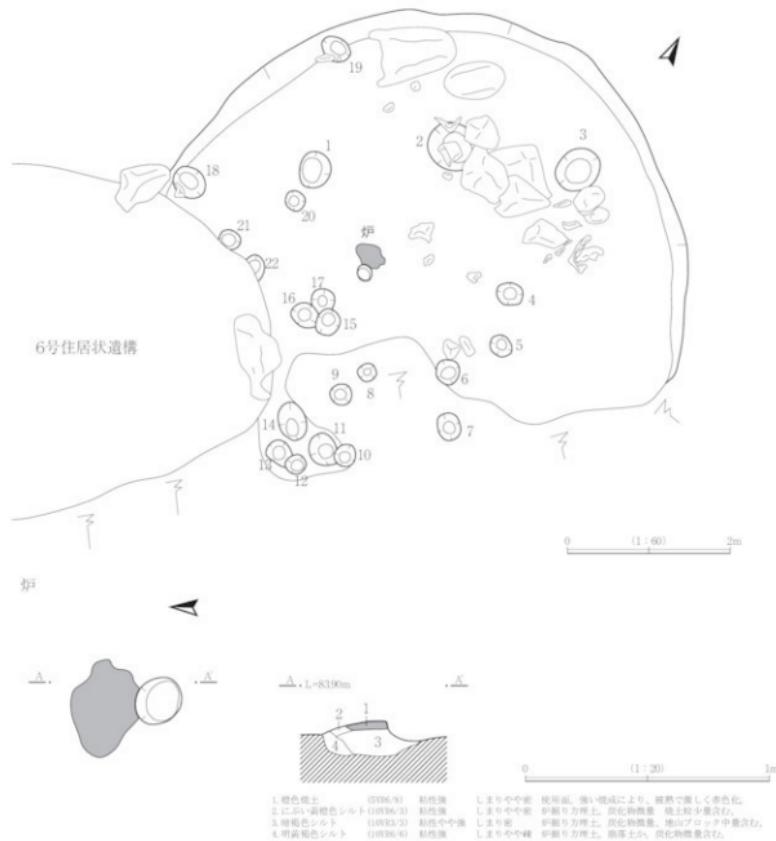
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。遺構の上部は削平により消失しているた出土遺物は比較的少ない。

997は深鉢の口縁部から胴部の大型破片で、口縁部が外反する形態で、弧状の区画が描かれる。大木10式古段階である。998～1000は底部片である。他に埋土中から大木9式古段階（1001～1004）、大木10式中段階（1005）、後期前葉（1006）、粗製（1007～1011）が出土している。

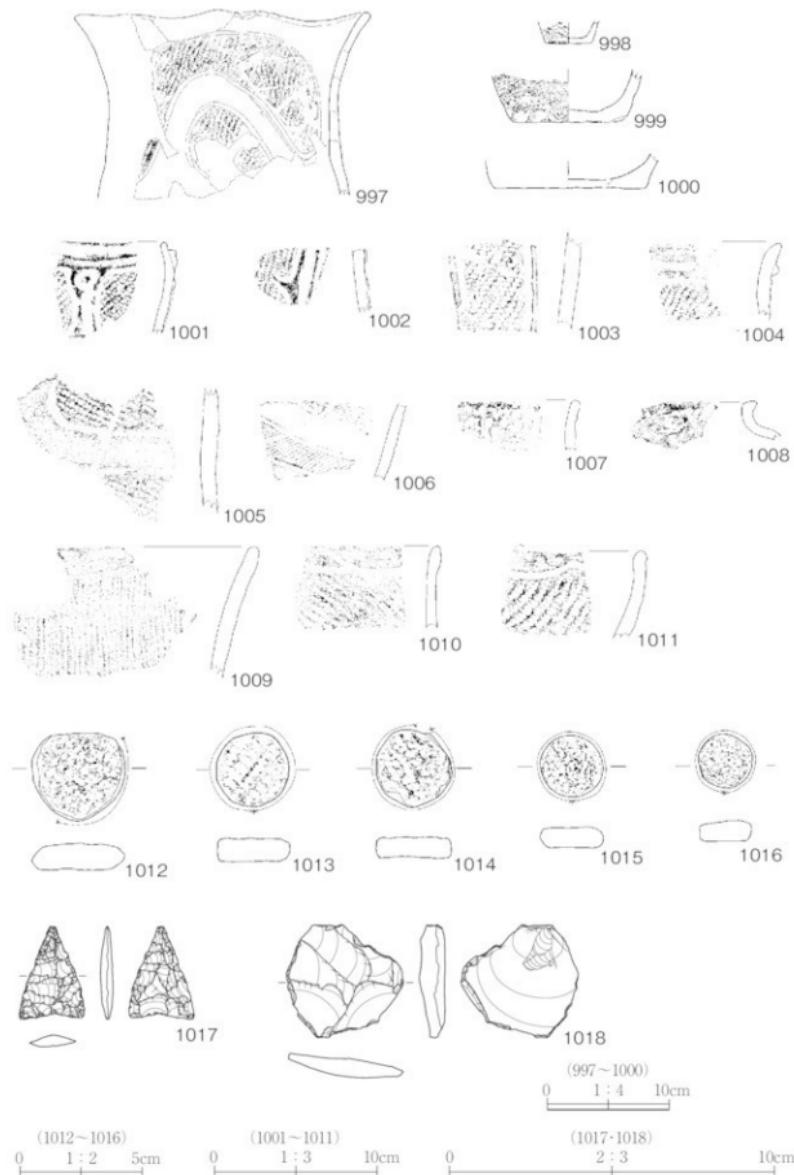
土製品は土製円盤（1012～1016）である。いずれも胴部片の転用であり、側面の広い範囲が摩滅する。

1017は2類の石鎚である。1018はUフレイクである。横長のあるフレイクを素材とし、縁辺の広い範囲に微細剥離が認められる。

【時期】出土した土器の時期幅は広く、また土器自体も小片が多いため、時期判定が難しい。重複する42号住居跡や6号住居状遺構の時期も考慮し、大木8b式期と判断した。



第154図 43号住居跡



第155図 43号住居跡出土遺物

## 44号住居跡（第156・157図、写真図版35・83・125）

【位置・検出状況】 調査区中央、II A 2 wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は立地する斜面の崩落に伴い、遺構のほとんどが消失しており、炉のみを確認したにすぎない。

【その他の遺構との重複】 45号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

【平面形】 不明。 【規模】 不明。

【埋土】 確認できていない。炉の上面に堆積する土層は基本土層II・III層類似土であり、斜面の崩落により堆積したことが窺える。

【床面・壁】 床面は炉を検出した面が床面と推定する。概ね平坦と考えるが定かではない。壁は確認できなかった。

【炉】 残存状態が悪いが、石開炉と推定する。105×62cmの楕円形を呈し、北西側のみ炉石が残されている。炉石は花崗岩で、大きさも形態も不規則な礫が炉の掘り方に沿って並べられている。炉埋土は黒褐色シルトを主体とする。炉の使用面は床面とほぼ同じ高さと推定される。使用面の東側の一部に焼土の広がりが見受けられるが、焼成は弱い。また炉内には炭化物が層状に堆積している。炉の掘り方は確認できていないが、炉石の状態からみて、床面に据え置くのみで設置したものと推定する。

【附属施設】 不明。

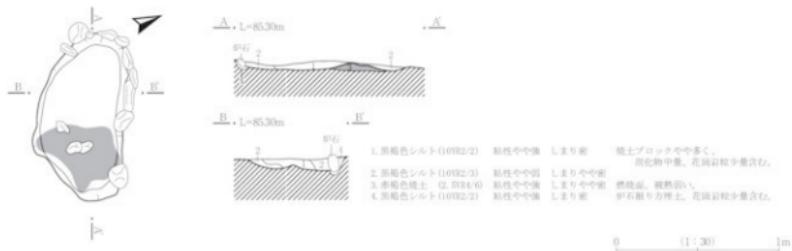
【出土遺物】 炉の周辺から縄文土器、土製品、石器が出土している。

土器は大木10式（1019～1021）中～新段階が多い。1019は口縁部に円形の穿孔があり、その周辺に円形刺突文が巡る。1020・1021は弧状の区画文が描かれる。また1022はS字状の突起が付き、縦の刻みが横位に巡る文様の口縁部片で、大木8b式の範疇に収まる。このように時期の異なる土器もわずかに混入する。

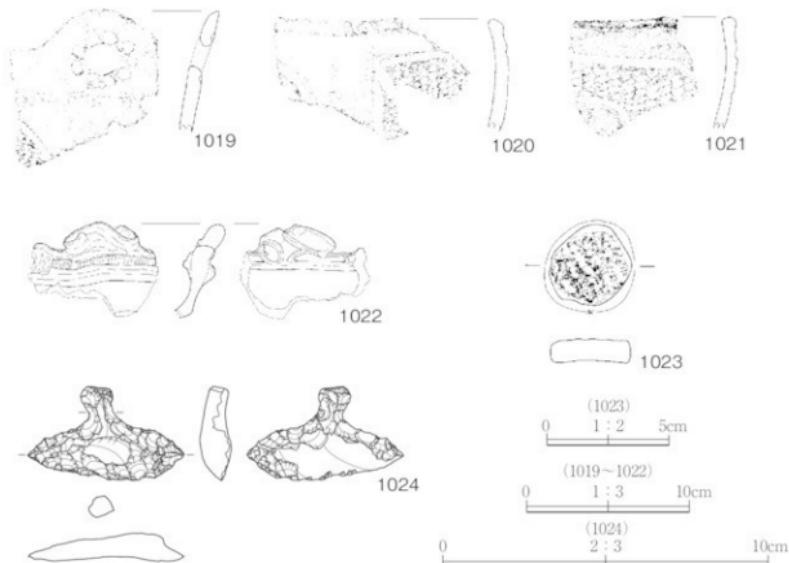
土製品は土製円盤で、1023は胴部の転用で側面全周が摩滅する。

1024は2類の石匙である。刃部は片面、その他の縁辺部は両面に二次加工を施している。

【時期】 本遺構は炉のみであり、周辺からの出土土器は少なく、また小片で時期判断の根拠には難しい。ここではなかでもまとめて出土した大木10式期と判断した。



第156図 44号住居跡



第157図 44号住居跡出土遺物

## 45号住居跡（第158～161図、写真図版35・54・83・84・125）

【位置・検出状況】調査区中央、II A 1 vグリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は立地する斜面地の崩落により、遺構上部が全て消失しており炉と柱穴を含む床面の一部のみを検出した。

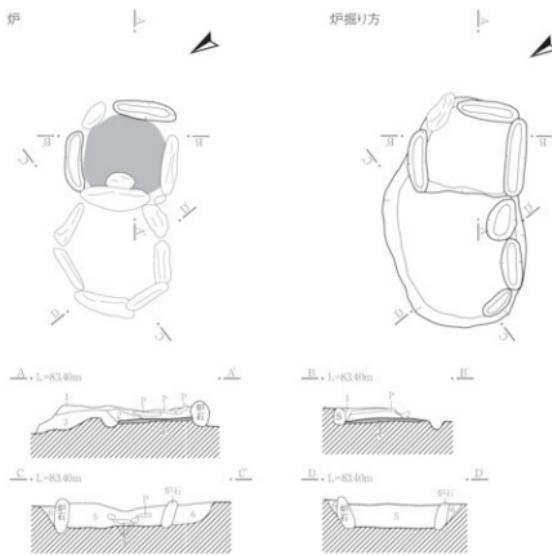
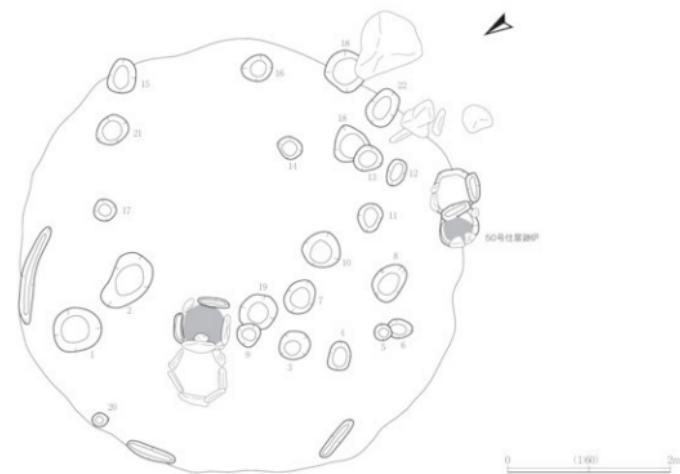
【その他の遺構との重複】44号・50号住居跡と重複する。どちらの遺構も土層の確認できず、新旧関係については不明である。

【平面形】不明。不整な円形か。 【規模】径(535) cm・深さ20cm

【埋土】不明。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とし、また柱穴が見つかった範囲までを本遺構の床面とした。概ね平坦である。壁は消失しており確認できなかった。

【炉】複式炉である。石圓部2個で構成され、前庭部と考えられる掘り込みは認められなかった。長軸192cm、短軸74cmを測る。炉石は花崗岩である。東側の石圓部は炉石が抜き取れられており、西側の一辺のみ炉石が残存する。炉内埋土は黒色シルトを主体とする。石圓部内の使用面は床面から11cm掘り込んで構築している。西側の石圓部は炉石が全周し、五角形状を呈する。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、使用面は床面から15cm下である。炉内の焼成は東側の石圓部で良好であり、使用面全体に焼土の広がりを確認した。炉の掘り方は確認できなかった。おそらく、炉石を床面に差し込んで構築しているものと推定する。

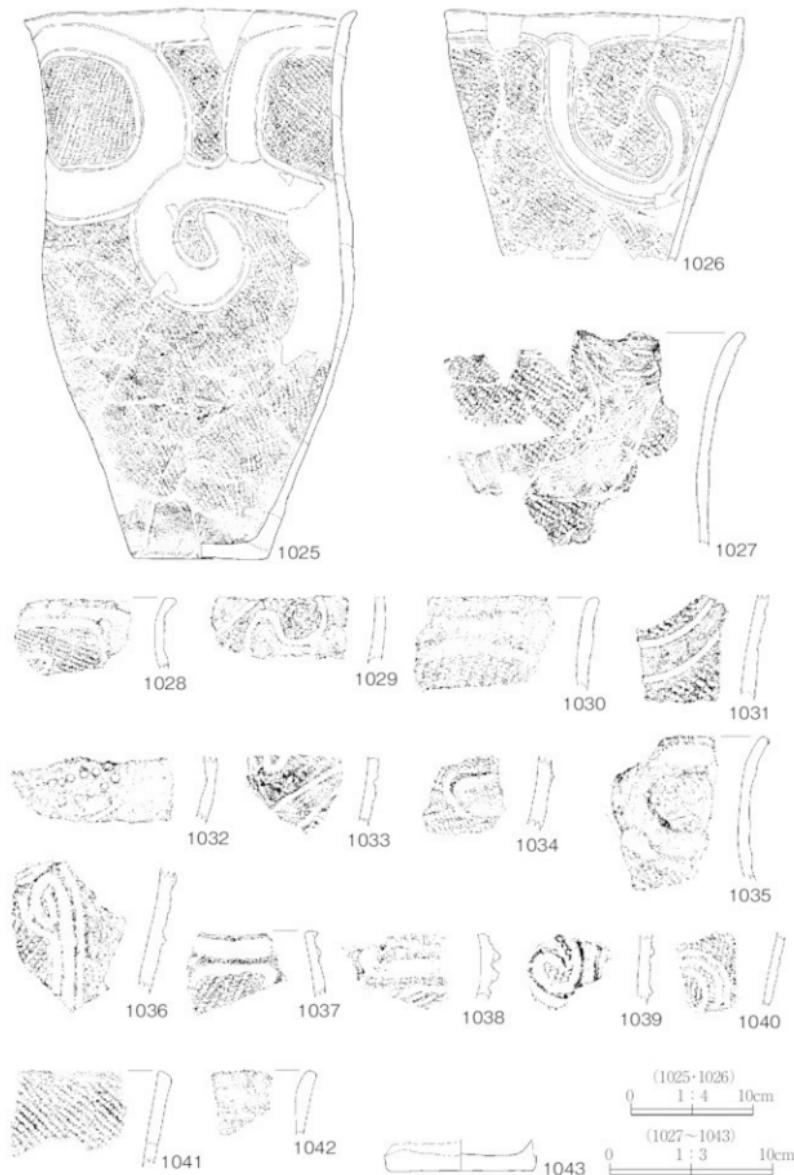


1. 黄褐色シルト (10YR2/2) 硅化面 しまりやく  
 2. 黄褐色シルト (10YR2/1) 硅化やや固 しまりやくやく  
 3. 黄褐色シルト (10YR2/2) 硅化やや固 しまりやくやく  
 4. 硅化赤褐色焼成土 (10YR2/4) 硅化やや強 しまりやくやく  
 5. 黄褐色シルト (10YR2/3) 硅化やや強 しまりやく  
 6. 黄褐色シルト (10YR2/3) 硅化やや強 しまりやく

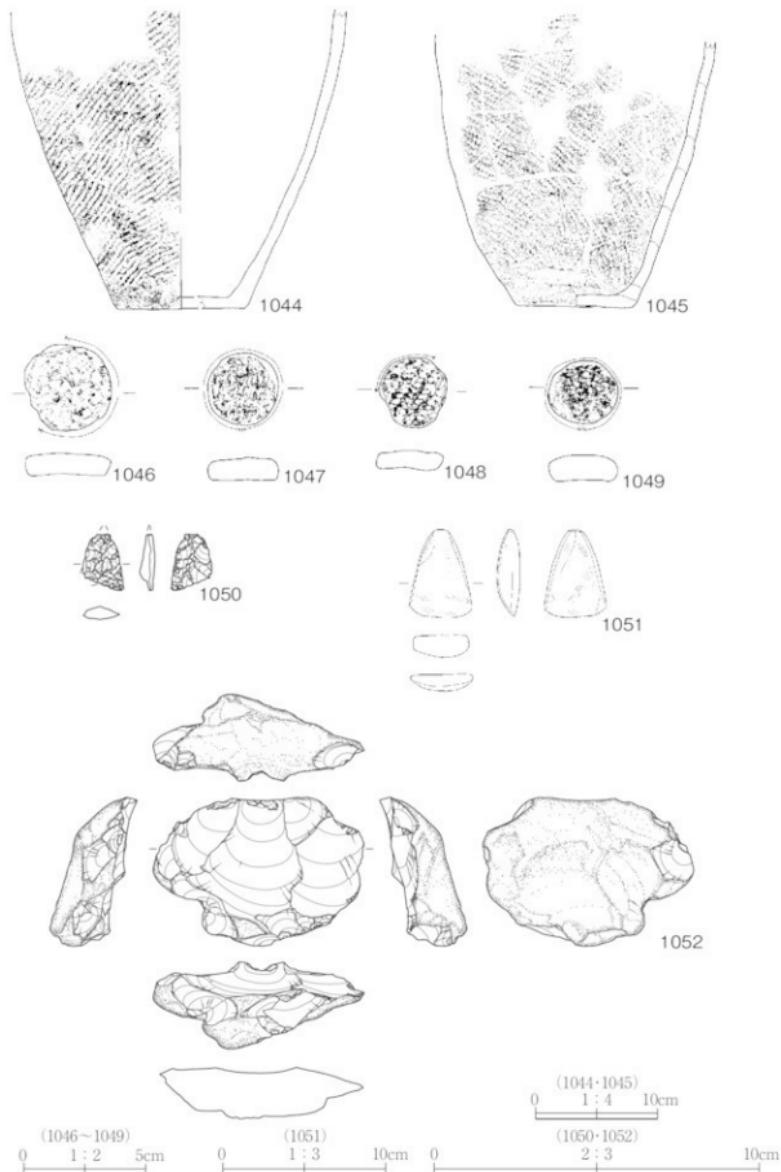
炭化物微量。白色母粒少量化。  
 地山ブロック多量含む。  
 地山ブロック多量含む。  
 硅化物微量。地山の少量含む。  
 烧成面。黒褐色ブロック多量。  
 地山ブロック少量化。  
 炭化物微量。花崗岩和微量含む。  
 地山ブロック多量含む。

0 (130) 1m

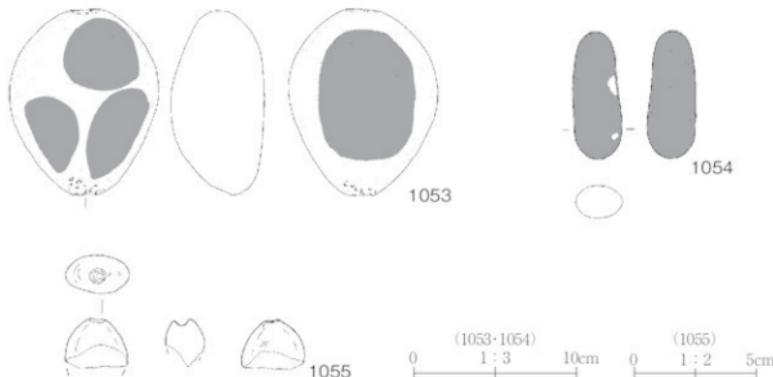
第158図 45号住居跡



第159図 45号住居跡出土遺物（1）



第160図 45号住居跡出土遺物（2）



第161図 45号住居跡出土遺物（3）

【附属施設】柱穴22個を確認した。配列からPit 1・4・13・18・21は主柱穴の可能性がある。また北壁際一部に壁溝巡る。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器、石製品が出土している。出土量は多いが、遺構の状態から流れ込みの可能性もある。

1025・1026は炉周辺の床面上から出土した。どちらも大木10式新段階である。1025は胴部でふくらみ、口縁部がわずかに外反する。口縁部には微隆帯による区画文が描かれる。1026は口縁部が外へと開く形態で微隆帯による「J」字状の区画文が描かれる。他に埋土中からは大木8b式（1036・1039）、大木9式（1037）、大木10式新段階（1027・1029・1031～1035）、粗製（1041～1045）が出土している。

土製品は土製円盤（1046～1049）である。いずれも胴部片を転用し、側面の広い範囲が摩滅する。

1050は石鎌で両端を欠損する。1051は磨製石斧で、長さ5.3cmの小型である。刃部が片面に片寄る。1052は石核である。自然面が残る大型のフレイクであるが、その片面には自然面を打面とし、同一方向から幾度か剥離作業を行っているので石核の範疇とした。1053・1054は敲磨器類である。1053は厚みのある円形の礫を素材とし、広い面に部分的に磨り痕が認められる。1054は棒状の礫の全面に磨痕が認められる。

1055は石製品である。2分の1近くが欠損しているが、梢円形の形態を呈すると推定する。残存する部分の端部は途中まで穿孔されている。用途は不明。

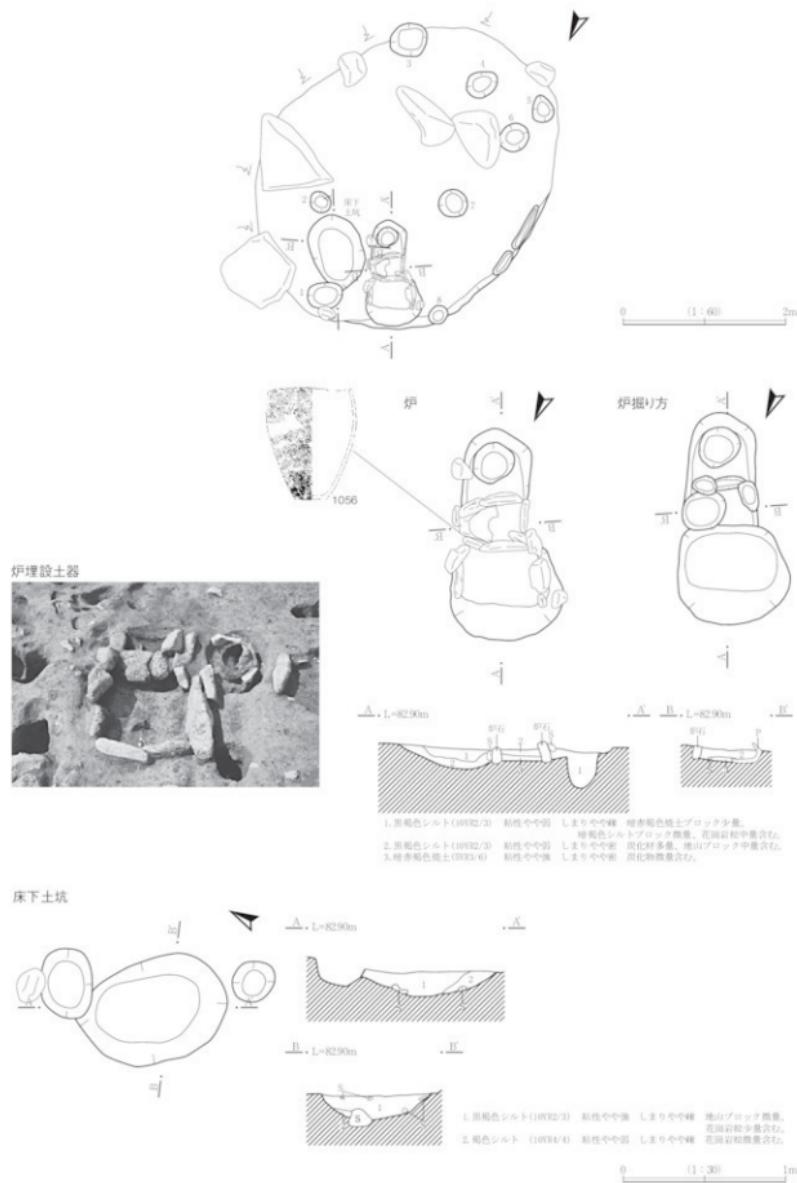
【時期】炉の周辺から出土した土器（1025・1026）の時期から大木10式新段階と判断した。

#### 46号住居跡（第162・163図、写真図版36・83・84）

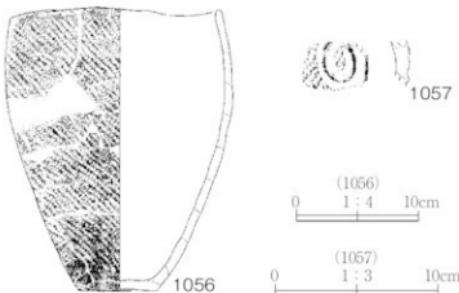
【位置・検出状況】調査区南東側、II A 3v～4wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。47号住居跡の南側で別の複式炉を検出し、その周辺から柱穴、壁溝がみつかったことから別遺構と判断した。また立地する斜面により南側は消失している。

【その他の遺構との重複】47号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

【平面形】不明。残存する床面から不整な梢円形と推測する。



第162図 46号居住跡



第163図 46号住居跡出土遺物

【規模】長軸(339)cm・短軸(400)cm・深さ15cm

【埋土】不明。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とし、柱穴のみつかった範囲までとした。概ね平坦であるが縁が露出しており、ごつごつしている。壁はわずかに北西壁の一部を確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石圓部1個とその奥側には掘り込みがあり、前庭部が付く構成で、長軸110cm、短軸45cmを測る。奥側の掘り込みは本来石圓部であったものが、炉石が抜き取られ、掘り方のみとなつた可能性が高い。炉の埋土は黒褐色シルトを主体とする。炉の使用面は手前側の石圓部で床から8cm下まで掘り込み、構築されている。手前側の石圓部は横長の長方形で、東側の脇にはの埋設土器が横位の状態で設置されている。使用面には焼土の広がりは認められず、被熱の痕跡はない。前庭部には両脇に炉石と同じ長楕円形の花崗岩が並べられている。これらの縁は大きさ、形態がふぞろいである。炉の掘り方を確認したが、炉とはば同規模の掘り込みに炉石を並べて構築したものと推定する。

【附属施設】柱穴8個を確認した。消失した南側にまだ他に柱穴が存在していたものと推測するが、検出したものは配列が不規則である。他に西壁際で壁溝が確認できた。

【出土遺物】縄文土器が出土している。上記の理由から本遺構と判断できる範囲は少なく、したがって出土遺物も少ない。

1056は炉の埋設土器である。粗製の深鉢で、形態は復元できたが、口縁部～胴部半ばまで大きく欠損する。胴部中央が大きくふくらみ、口縁部は内湾する形態である。1057は埋土中から出土した深鉢の胴部片で隆起による渦巻文が描かれており、大木8b式と判断した。

【時期】埋設土器は粗製のため時期判断は難しい。また1057は小片であり、流れ込みの可能性も否めないので、やはり時期判断には難しい。ここでは縄文時代中期後葉～末葉としておく。

47号住居跡（第164～166図、写真図版36・37・84・85・125）

【位置・検出状況】調査区中央、II A 2 v・2 wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。斜面地の崩落と南側にはしる沢跡、また46号住居跡によって本遺構は壊されており、炉とその周辺のみがみつかっている。

【その他の遺構との重複】46号住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

【平面形】不明。【規模】長軸（205）cm・短軸610cm・深さ（20）cm

【埋土】確認できていない。本遺構の直上には、基本土層Ⅱ・Ⅲ層類似土が堆積しており、斜面が崩落し、堆積したものと考えられる。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦であるが、礫が露出した面であり、非常にごつごつしている。壁は東壁で確認している。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石團部2個と前庭部で構成され、長軸232cm、短軸63cmを測る。炉石は花崗岩を利用し大きさ、形態がふぞろいな礫を素材とする。また炉石は崩落によって流れ込んだものと考える礫によって一部覆われた状態で検出した。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。石團部内の使用面は奥側は床とほぼ同じ高さで、手前側は18cm掘り込んで構築している。奥側の使用面のみ焼土の広がりを確認した。焼成が強く、被熱により赤色化している。炉の掘り方は炉と同規模に掘り込み、炉石を設定している。

【附属施設】柱穴9個を確認した。配列は不規則で主柱穴配列は定かでない。また炉の南西側で埋設土器1個を確認した。埋設土器は正位の状態で設置され、その周囲には被熱の痕跡が認められた。また周辺には炭化物が多量に分布している。

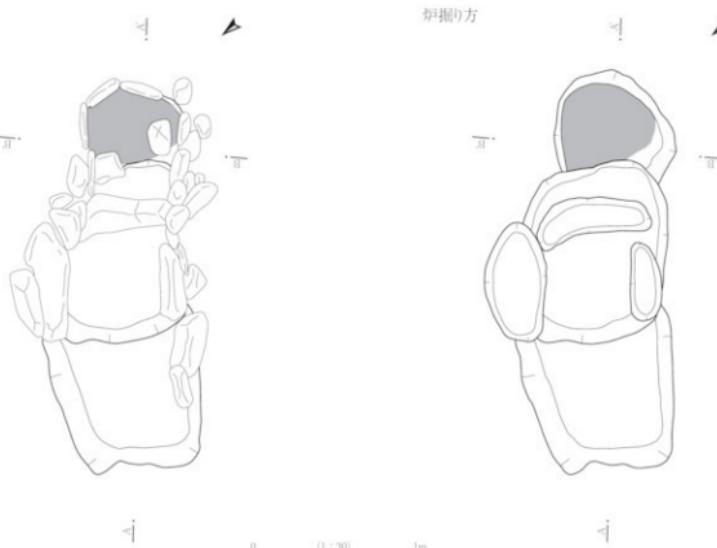
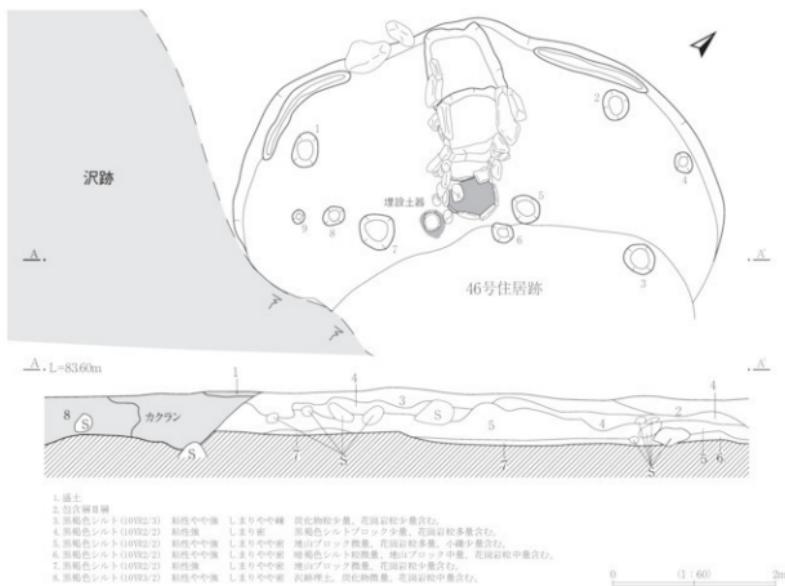
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。

1058は炉の南西側に設置された埋設土器である。大木10式古段階の深鉢で、口縁部と底部周辺を欠損するが故意による打ちか欠きかは不明。沈線による弧状の区画が描かれる。炉からは1060も出土している。小型の深鉢で粗製であるが、口縁部に竹菅状工具による刺突文が巡る。埋土中からは大木8b式（1063～1065）、大木9式新段階（1066・1067・1069）、大木10式古段階（1059・1073・1077・1078）、新段階（1079）、後期前葉（1076）、粗製（1078～1081）が出土している。1062には底面に木葉痕が見受けられる。1078・1079は口縁部片で1箇所ずつ補修孔が見受けられる。

土製品はミニチュア土器と土製品である。1082はミニチュア土器の胴部から底部片で外面には縄文のみ施文される。焼成は良好で硬い。1083～1091は土製円盤でいずれも胴部片を転用している。

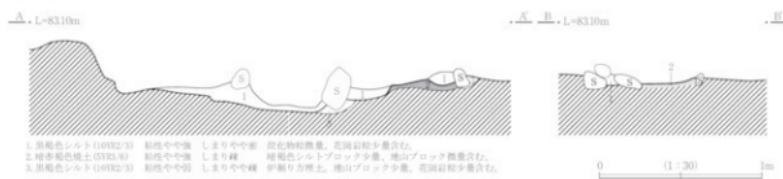
1092は石鍬で、1類である。図示した右面は二次加工が及んでいない箇所が見受けられ、製作途中かもしれない。1093は敲磨器類である。棒状の礫を素材とし、縁辺や側面の一部に敲打痕が見受けられる。

【時期】埋設土器（1058）の時期から大木10式古段階と判断した。

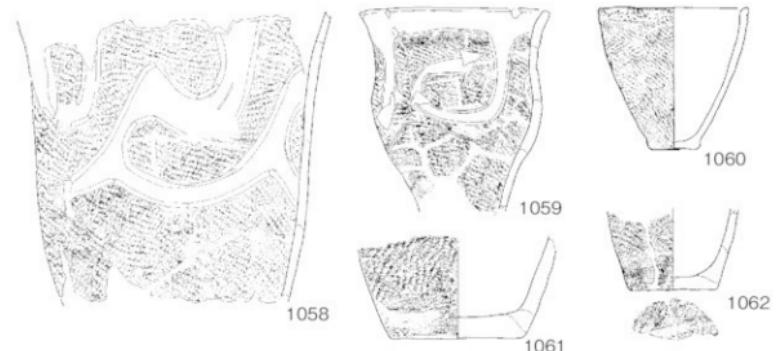


第164図 47号住居跡 (1)

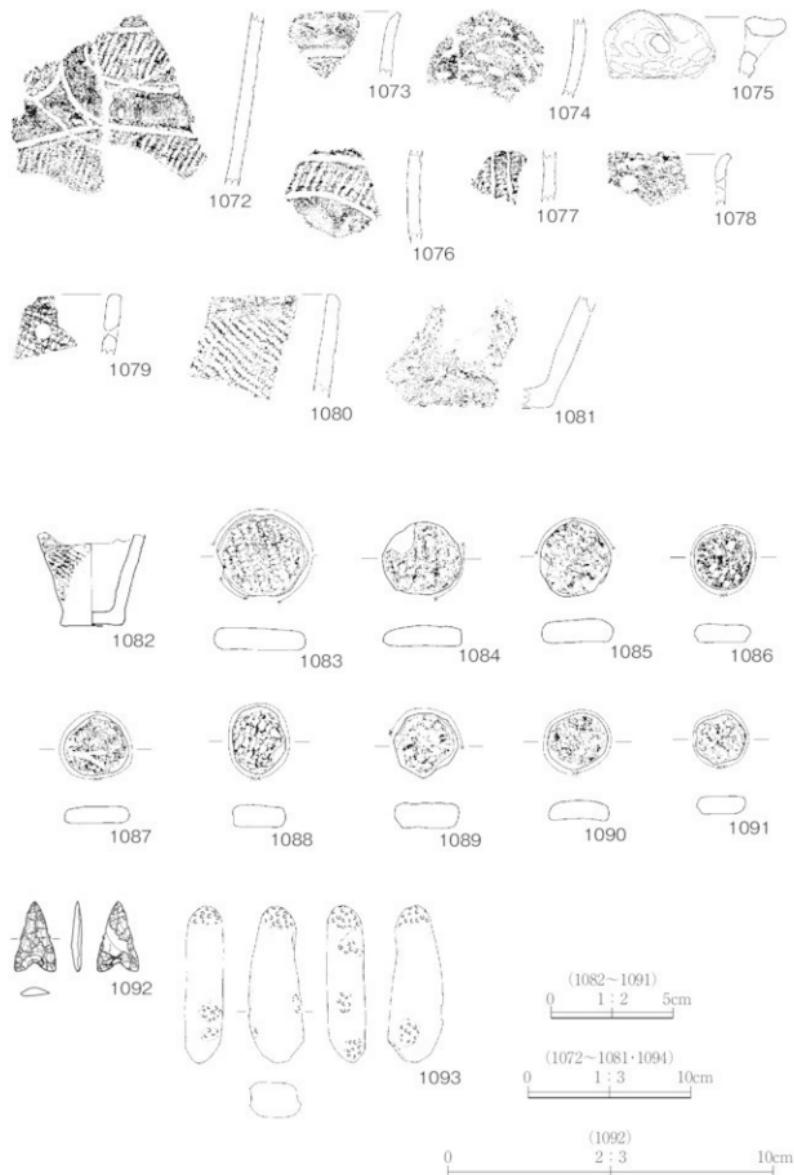
## 炉断面



## 埋設土器棟出状態



第165図 47号住居跡（2）・出土遺物（1）



第166図 47号住居跡出土遺物（2）

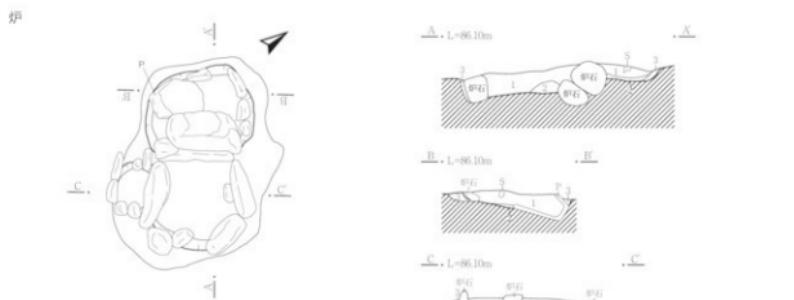
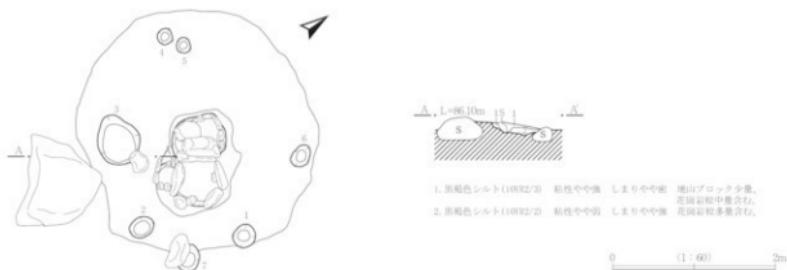
## 48号住居跡（第167・168図、写真図版37・85・125）

【位置・検出状況】調査区中央、II A 2 v グリッドに位置する。IV層上面で検出した。立地する斜面の崩落に伴い、本遺構は炉とその周辺の柱穴を確認した範囲内で床面を検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不明。不整な楕円形と推測する。【規模】長軸（300）cm・短軸（299）cm・深さ10cm

【埋土】遺構のほとんどを埋土確認できていない。炉の南側一部のみであるが2層のみ確認した。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や花崗岩粒が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。



炉埋設土器



1. 黒褐色シルト(108R2/3) 粘性やや強 しまりやや強 黒褐色シルトブロック  
無量、炭化物ブロック少量、花崗岩粒中量含む。  
2. 黑褐色シルト(108R2/4) 粘性やや弱 しまりやや強 黑褐色シルトブロック  
少量、炭化物粒微量、地山粒少量含む。  
3. 増褐色シルト(108R3/1) 粘性やや弱 しまり弱 カーブ曲り方理工。

0 (1:30) 1m

第167図 48号住居跡

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は確認できていない。

【炉】複式炉と考える。石圓部2個で構成され、長軸130cm、短軸90cmを測る。前庭部に相当する掘り込みはみつかっていない。炉石は花崗岩である。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土に類似する。炉の使用面は床面から17cm掘り込んで構築しており、どちらの石圓部も使用面に焼土は確認されなかった。西側の石圓部は一部炉石が設置されていないが抜き取られたかもしれない。その西側の脇には埋設土器が斜位の状態で設置されている。炉の掘り方を確認したが、炉よりも一回り大きく掘り込み、炉石が設置していた。

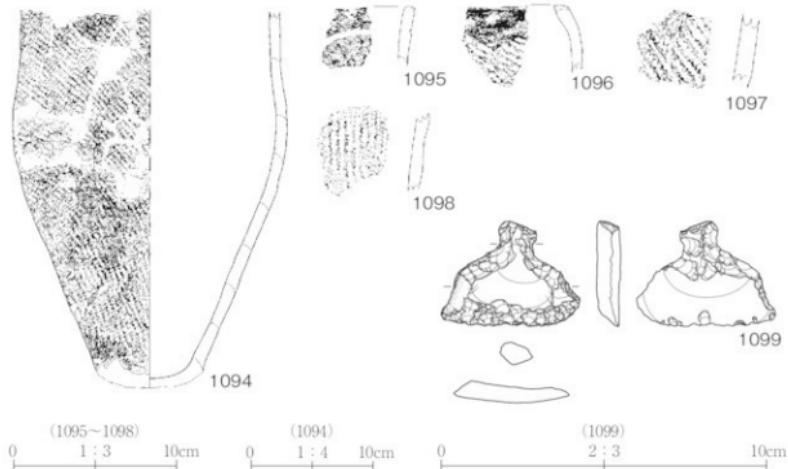
【附属施設】柱穴7個を確認した。配列からみて主柱穴とは考えられない。

【出土遺物】縄文土器、石器が出土している。上記の通り、本遺構と判断できた範囲は狭く、したがって出土遺物は少ない。

1094は炉の埋設土器で、粗製である。埋設土器として検出した状態で、口縁部～胸部上半を打ち欠いており、また底面が剥がれ落ちている。故意による剥離かは不明である。埋設土器の周辺からは1095も出土している。小片であるが大木10式と考えられる。他に埋土から粗製（1096～1098）が出土している。

1099は炉の埋設土器周辺から出土した。2類の石匙である。刃部は片面からのみ二次加工を施し、刃部を作出している。

【時期】埋設土器は粗製で時期判断は難しいが、1095の時期から大木10式期と判断した。



第168図 48号住居跡出土遺物

## 49号住居跡（第169～171図、写真図版38・85・125）

【位置・検出状況】調査区北東側、II A 2v、3 u グリッドに位置する。IV層上面で検出した。45号住居跡の調査中に、その周辺で礫の並びと浅い掘り込みを検出した。礫は被熱しており、石炉であると判断し、45号住居跡とは別の堅穴住居跡と判断した。ただし、本遺構は激しく削平されており、炉の一部を検出したにすぎない。

【その他の遺構との重複】45号住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

【平面形】不明。【規模】不明。

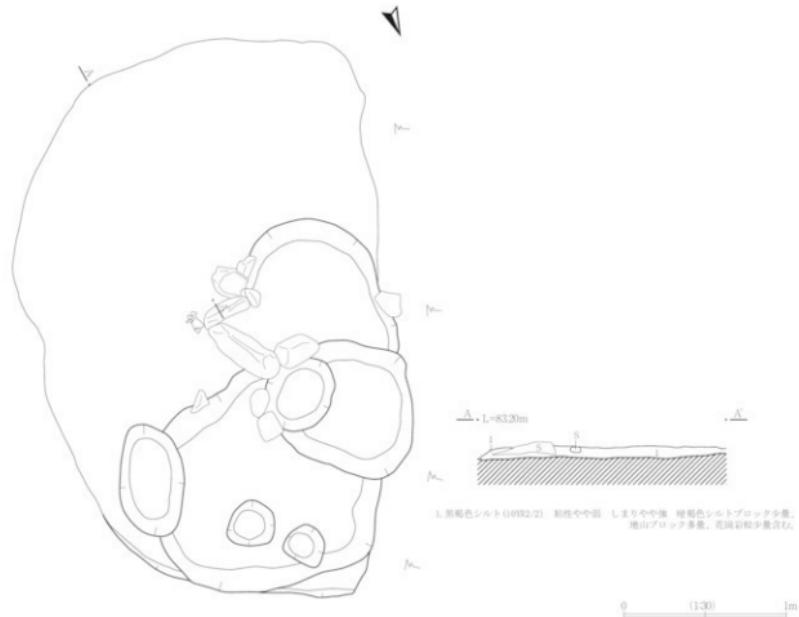
【埋土】部分的ではあるが床面と判定した範囲の直上一部で断面観察を行っており、黒褐色シルトの堆積を確認した。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とし、床面周辺の平坦面も合わせて床面と判断した。なお、周辺は礫が露出しており、非常にごつごつしている。壁は確認できていない。

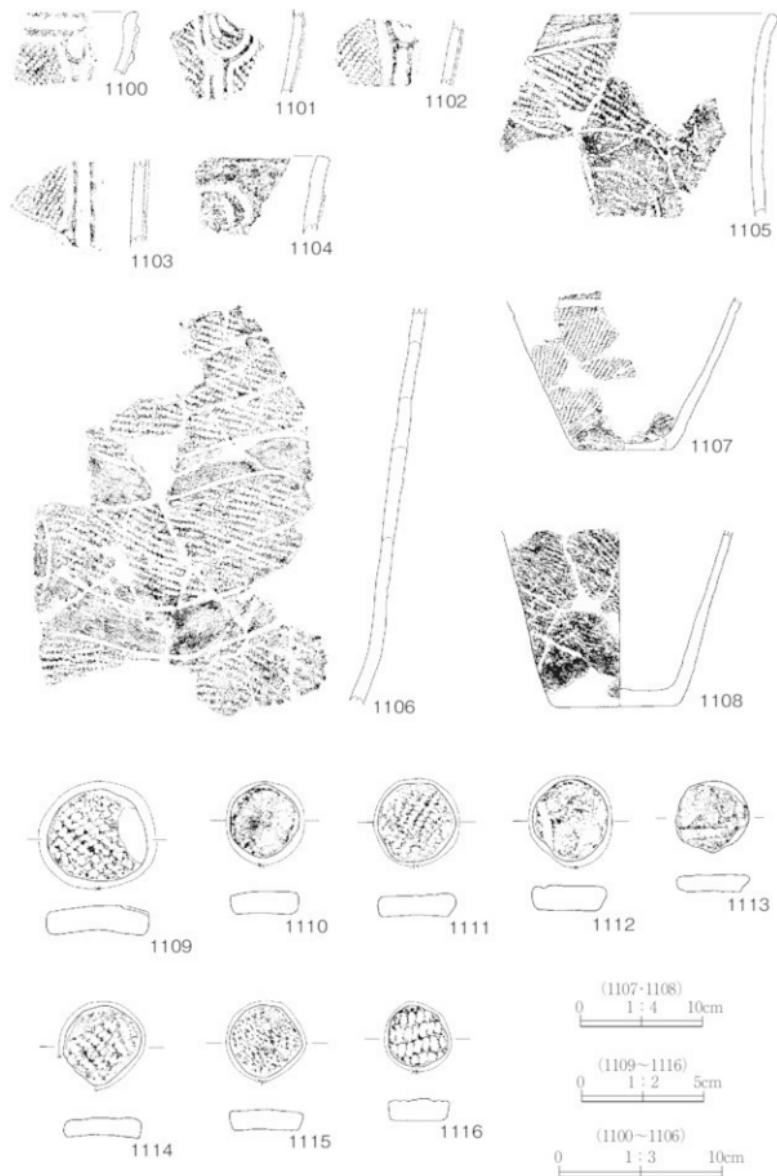
【炉】炉石2個と、炉の掘り方と推定する掘り込みを確認した。状態からは、複式炉であろうと推測する。炉石は花崗岩で、「L」字状に並んでいる。被熱しており、非常に脆くなっている。掘り込みは236×119cmを測り、炉石に対し、南側の掘り込みは深く、北側は浅い。したがって、南側に炉石が並び、石間部が構築され、北側は前庭部があったものと推定する。炉石周辺で焼土の広がりは確認できなかった。

【附属施設】検出できなかった。

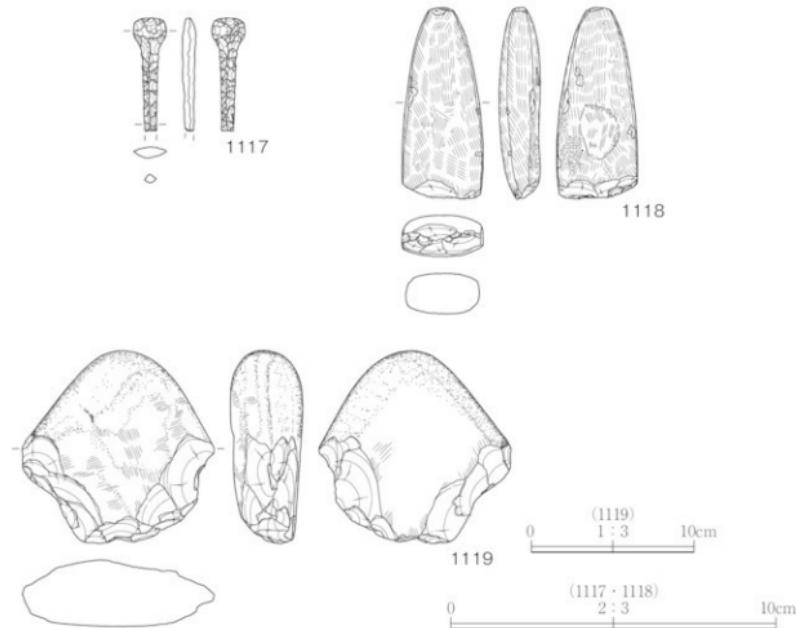
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。上記の通り、本住居と判断できた範囲が限ら



第169図 49号住居跡



第170図 49号住居跡出土遺物（1）



第171図 49号住居跡出土遺物（2）

れており、したがって出土遺物は少ない。

埋土中からは大木8b式（1100～1103）、大木9式古段階（1104）、大木10式中段階（1105～1107）、粗製（1108）が出土している。

土製品は土製円盤である（1109～1116）。いずれも脇部片を転用する。1112は沈線が見受けられ、大木9～10式の土器片と推定する。側面は摩滅している。

1117は2類の石錐で、錐部先端が欠損している。1118は磨製石斧である。表面には研磨の痕跡が明瞭で、体部の一部、窪んだ箇所に敲打痕が残る。刃部は欠けている。1119は礫器で偏平な四角い碟を素材とし、縁辺の2分の1に打撃による剥離が巡る。

〔時期〕 出土土器の時期からは判断は難しいが、大木10式期とした。

## 50号住居跡（第172図、写真図版38）

【位置・検出状況】 調査区中央西側、II A 2 wグリッドに位置する。IV層上面で検出した。45号住居跡を精査中に、その北側から複式炉と考えられる炉石の並びを検出し、45号住居跡とは別遺構としたものである。

【その他の遺構との重複】 45号住居跡と重複するが、重複関係は不明である。

【平面形】 不明。【規模】 不明。

【埋土】 不明。

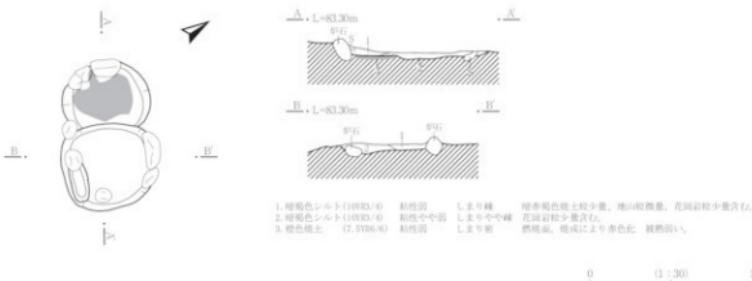
【床面・壁】 床面は炉を検出した面が床面と考えるが、どの範囲までが本遺構の床面であるか、判断できなかった。概ね平坦であるが疊が露出しており、非常にごつごつしている。壁は検出できなかつた。

【炉】 2個の石圓部のみ検出し、形態から複式炉と推定する。なお炉石はほとんど抜き取られており、掘り方に一部炉石が残るだけの状態である。長軸97cm、短軸64cmを測る。炉石は花崗岩を利用するがふぞろいな疊を素材とする。炉内埋土（掘り方埋土？）は黒褐色シルトを主体とする。使用面は定かではないが西側の石圓部底面には焼土の広がりが認められるので、その範囲が使用面である可能性が高い。焼成は弱く、わずかに赤色化した焼土が広がる。

【附属施設】 なし。

【出土遺物】 縄文土器が小片で出土している。図示できる土器片ではないが、縄文時代中期中葉～後葉の範疇に収まる。

【時期】 出土した土器の年代から縄文時代中期後葉～末葉と判断した。



第172図 50号住居跡

## 51号住居跡（第173図、写真図版38・85）

【位置・検出状況】 調査区中央、II A 4 x グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は46号47号住居跡の東側、崩落の消失で形成したと考えるゆるやかな斜面地で石圓炉と考える炉石が並びを確認し、本遺構とした。

【その他の遺構との重複】 なし。

【平面形】 不明。【規模】 不明。

【埋土】 不明。

【床面・壁】 本遺構は炉を検出した面が床面であると判断したが、どの範囲までかは不明。概ね平坦と考えているが、周辺は礫が露出しており、非常にごつごつしている。壁は確認できていない。

【炉】 石圓炉と考える。60×39cmの楕円形に炉石が並んでおり、一部抜き取られ、掘り方が露出している。炉内の埋土が黒褐色シルトである。炉の使用面はIV層が露出する面と考えるが、焼土の広がりもなく、被熱の痕跡は認められない。

炉の掘り方を確認した。炉とほぼ同規模に掘り込み、その壁に接するように炉石を配置している。

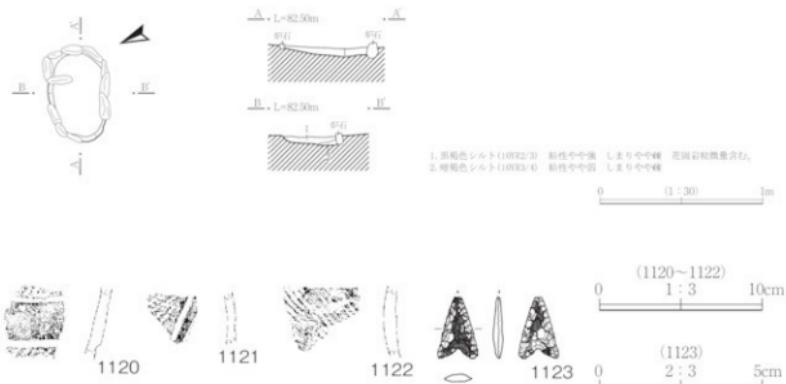
【附属施設】 確認できなかった。

【出土遺物】 炉の周辺から縄文土器、石器が出土している。上記の通り、本住居と判断できた範囲は狭く、遺物は少ない。

縄文土器は小片のみである。大木10式（1120・1121）、粗製（1122）が出土している。

1123は石鏃で1類、両面にアスファルトの付着を確認した。

【時期】 出土した土器の時期から大木10式期と判断した。

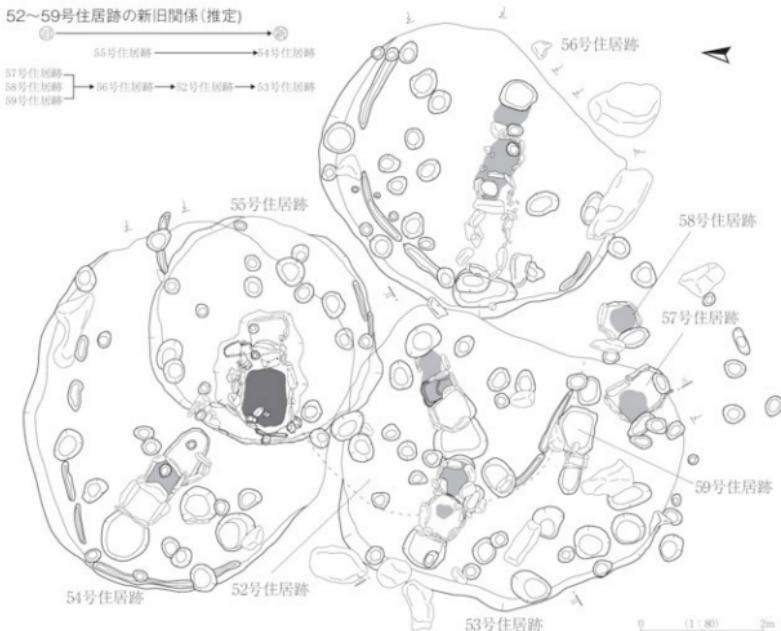


第173図 51号住居跡・出土遺物

## 52~59号住居跡の重複関係について（第174図）

調査区中央の東端、II A 4s~II A 5vグリッド周辺で、52~59号住居跡を検出した。これら8棟の竪穴住居群は狭い範囲に密集しており、隣り合う遺構どうしで重複している。ただし各遺構とも上部を斜面崩落によって消失し、遺構上部の埋土は流入した土砂堆積土しか見受けられない。そのため重複する遺構どうしの新旧関係をはかる、「切り合い」が確認できていない（例えば第174図A-A'は53号・59号住居跡、B-B'は52号・53号住居跡、それぞれの新旧関係を測るために設定したが、断面からは住居の壁の立ち上がりは認められず、したがって遺構の新旧も分からなかった）。ここではこれらの遺構群の新旧関係について、推測ではあるが可能な限り言及する。

57~59号住居跡は炉とその周辺の柱穴のみを検出した竪穴住居跡である。土砂によって、おそらく床面も動いている可能性が高く、これらの住居跡は東側へと傾斜する斜面地で検出した。周辺にはわずかに柱穴が認められる程度で、他の住居跡は炉や柱穴が巡るのに対し、57~59号住居跡は遺構のはとんどが流れているようにみえ、消失の度合いが大きい。また57・59号住居跡は53号住居跡の床面下で検出しており、これらの点から57~59号住居跡は53号住居跡よりは古いことが推測できる。56号住居跡も同様にやや下がった緩やかな斜面地に立地し、52・53号住居跡の精査中（初期段階）では確認できなかったので、56号住居跡の方が古いと判断した。55号住居跡は54・52号住居跡の床面下で検出した遺構であり、52・54号住居跡よりも古いことが分かっていた。52・53号住居跡と54号住居跡とは微妙に重複しておらず、また両者とも東側の一部が斜面で流失する以外、床面の状態は良好に残存す



第174図 52~58号住居跡重複関係

るなど共通している。52・53号住居跡は付属する炉どうしが重複関係にあり、そこから53号住居跡の方が新しいことが分かっている。

以上のことから、52~59号住居跡の新旧関係については第174図左上に示したようであろうと推測する。

#### 52号住居跡（第175・179~182図、写真図版39・85~87・125・126）

【位置・検出状況】調査区南東側、II A 5 t グリッドに位置する。54号住居跡・55号住居跡を精査中に、その南側で別の複式炉を検出し、上記2棟の竪穴住居跡とは別の遺構と判断した。なお本遺構は立地する斜面の崩落により南側の半分以上が消失している。

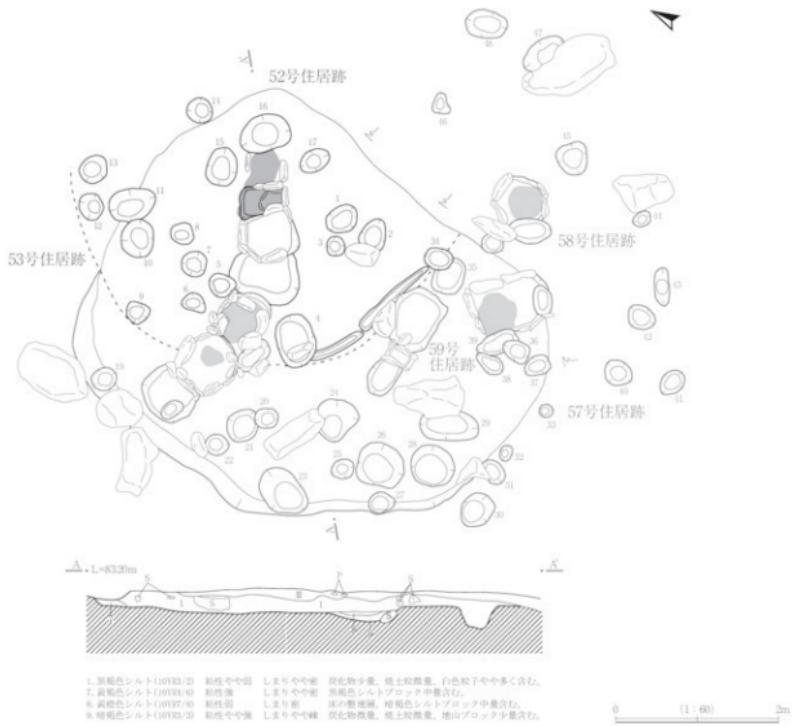
【その他の遺構との重複】53号住居跡・55号住居跡と重複する。本遺構は55号住居跡より新しく、53号住居跡より古い。

【平面形】不明。残存する範囲から不整な楕円形と推測する。

【規模】長軸（340）cm・短軸（480）cm・深さ25cm

【埋土】不明である。斜面崩落により埋土が消失している。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は検出できていない。



第175図 52号住居跡（1）

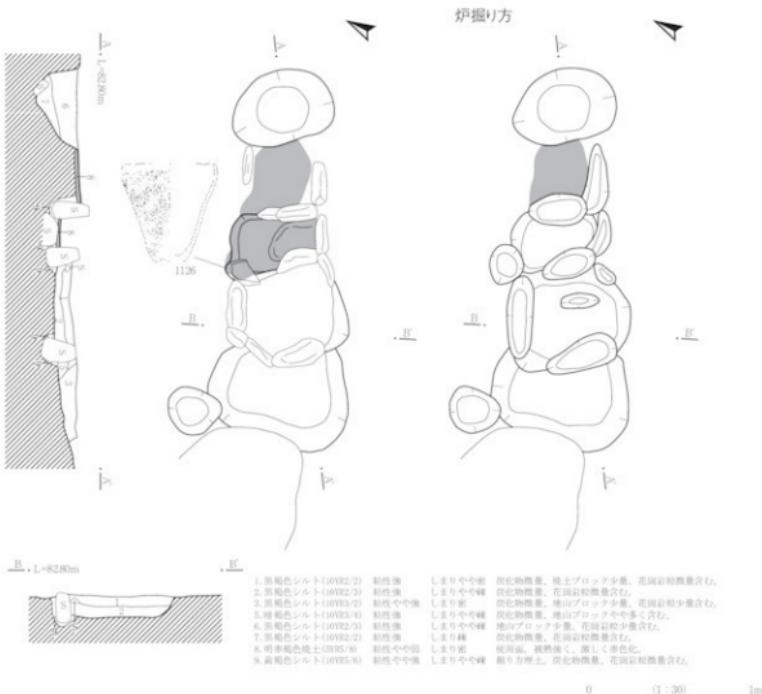
【炉】複式炉である。石圓部3個と前庭部で構成され、長軸181cm、短軸76cmを測る。炉石は花崗岩を利用し、ふぞろいな大きさの礫を素材とする。炉内埋土は黒褐色シルトで住居埋土と類似する。石圓部内の使用面は奥側は床面と同じ高さ、真ん中と手前側の石圓部は20cm掘り下げ構築している。奥側および真ん中の石圓部の使用面は全体に焼土が広がる。焼成が強く、被熱により激しく赤色化している。石圓部北脇で土器（1126）が横位の状態で出土した。状態は悪いが埋設土器の可能性がある。炉の掘り方を確認しており、概ね炉と同規模に掘り込み、炉石を設置している。

【附属施設】柱穴17個を確認した。東側床面が消失しているので、柱穴配置は定かではない。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。52・53号住居跡は調査当初、同一遺構として遺物を取り上げたため、両者は分けられない。以下2棟分の遺物について記す。

1124は53号住居跡炉の埋設土器である。大木10式中段階で4単位の波状口縁を呈する。他に形態の分かれる土器は全て粗製（1125～1127・1128～1131）で、そのうち1126は52号住居跡炉の埋設土器である。埋土中からは大木8b式（1138～1140）、大木9式古段階（1135～1137）、新段階（1141・1142）、大木10式古段階（1143～1146）、新段階（1150・1151）、粗製（1152～1156）が出土している。

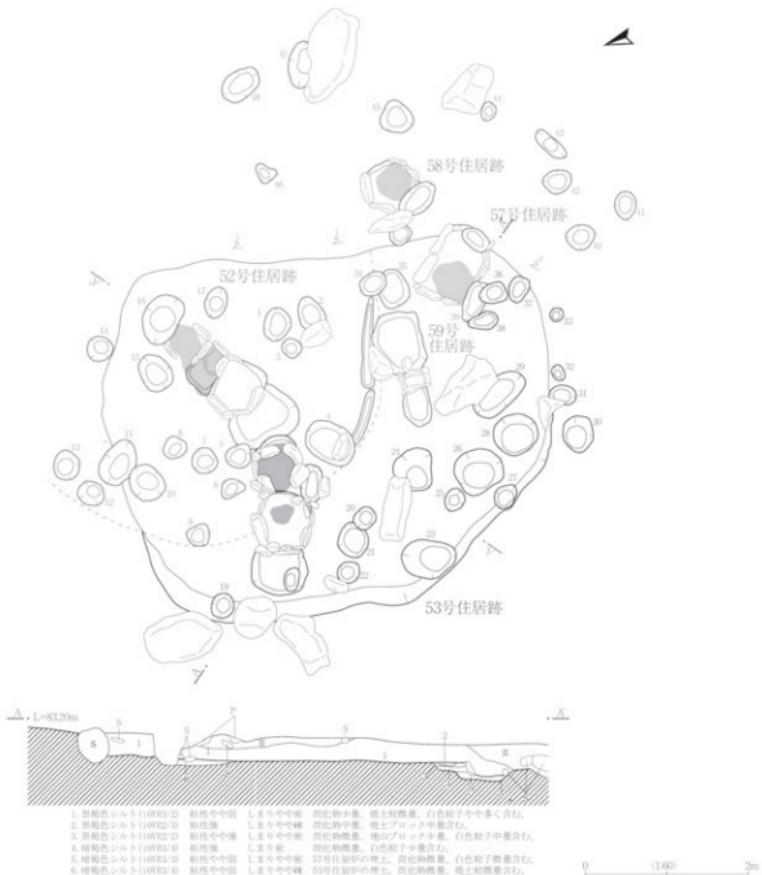
土製品はミニチュア土器、土製円盤である。ミニチュア土器（1157）は胴部半ばから底部片で外面に円文や縄文が施文される。土製円盤（1158～1160）はいずれも胴部片の転用である。



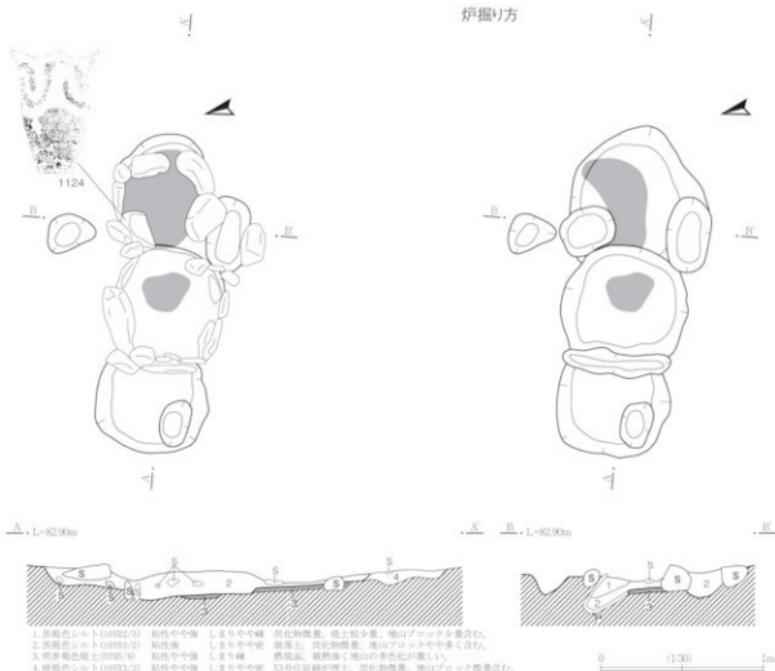
第176図 52号住居跡（2）

1161・1162は石錐である。どちらも二次加工が全体に及ぼず、未成品の可能性が高い。1163は石錐で錐部先端が欠損する。1164は不定形石器で方形のフレイクを素材とし、縁辺の両面から二次加工を施し、刃部を作出している。1165は楔形石器で上下左右四方向に打撃による剥離を確認した。1166はUフレイクで縁辺に微細剥離が連続する。1167は磨製石斧で全体に研磨の痕跡がわずかに残る。刃部が欠けている。1168は敲磨器類でやや厚みのある楕円形碟を素材とし、両面に磨痕が、側面の一部には敲打痕が見受けられる。1169は石皿で、偏平な楕円形碟の片面のみを使用面としている。被熱により両面に及び、一部赤色化している。

〔時期〕 炉の埋設土器（1124）の時期から大木10式中段階と判断した。



第177図 53号住居跡 (1)



第178図 53号住居跡（2）

## 53号住居跡（第177～182図、写真図版39・85～87・125・126）

【位置・検出状況】調査区南東側、Ⅱ A 4t・4uグリッドに位置する。52号住居跡を精査中、その南側で別の複式炉を検出した。その複式炉は52号住居跡の複式炉前庭部を壊しており、その点から52号住居跡とは別遺構と判断した。なお本遺構は立地する斜面の崩落により南側半分以上を消失している。

【その他の遺構との重複】52号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

【平面形】不整な楕円形か 【規模】長軸 (220) cm・短軸 (350) cm・深さ30cm

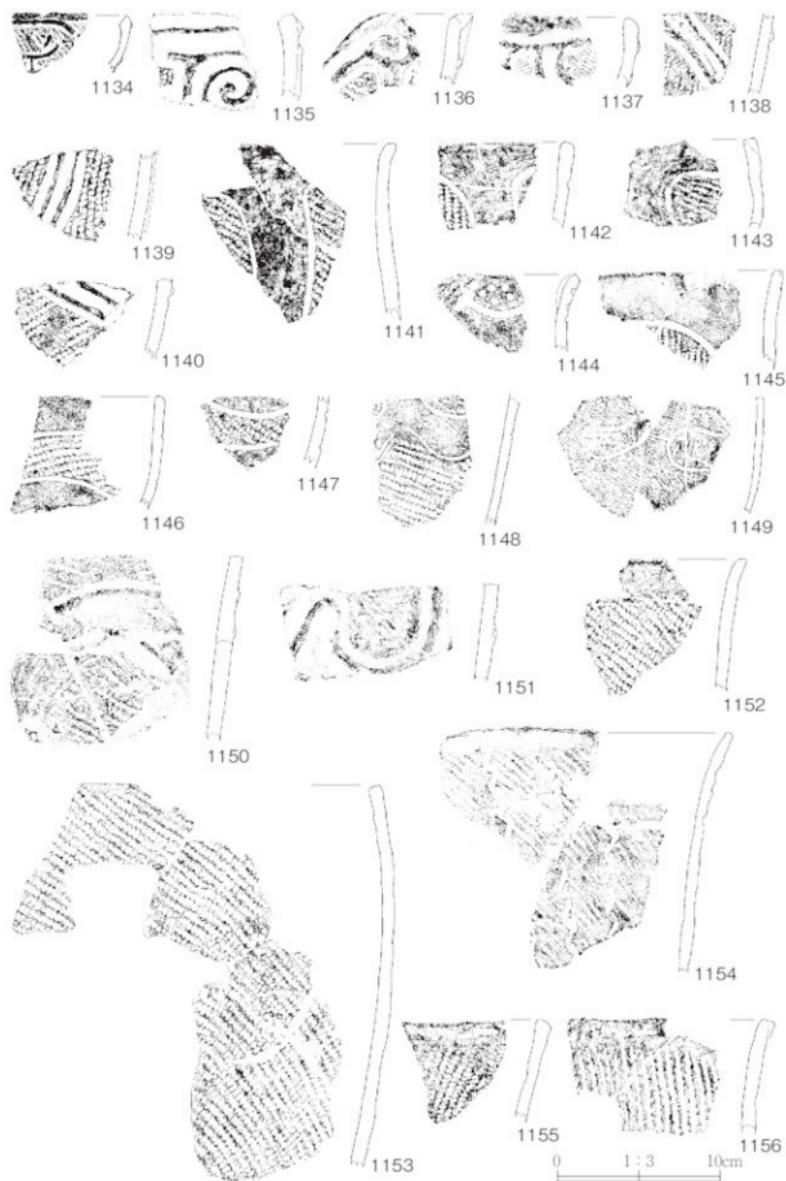
【埋土】1層からなる（第177図1層）。ただし斜面崩落による土砂堆積土である。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦で、52号住居跡とはほぼ同じ高さである。壁は斜面崩落による消失により、全周確認できなかった。ゆるやかに立ち上がると推測する。

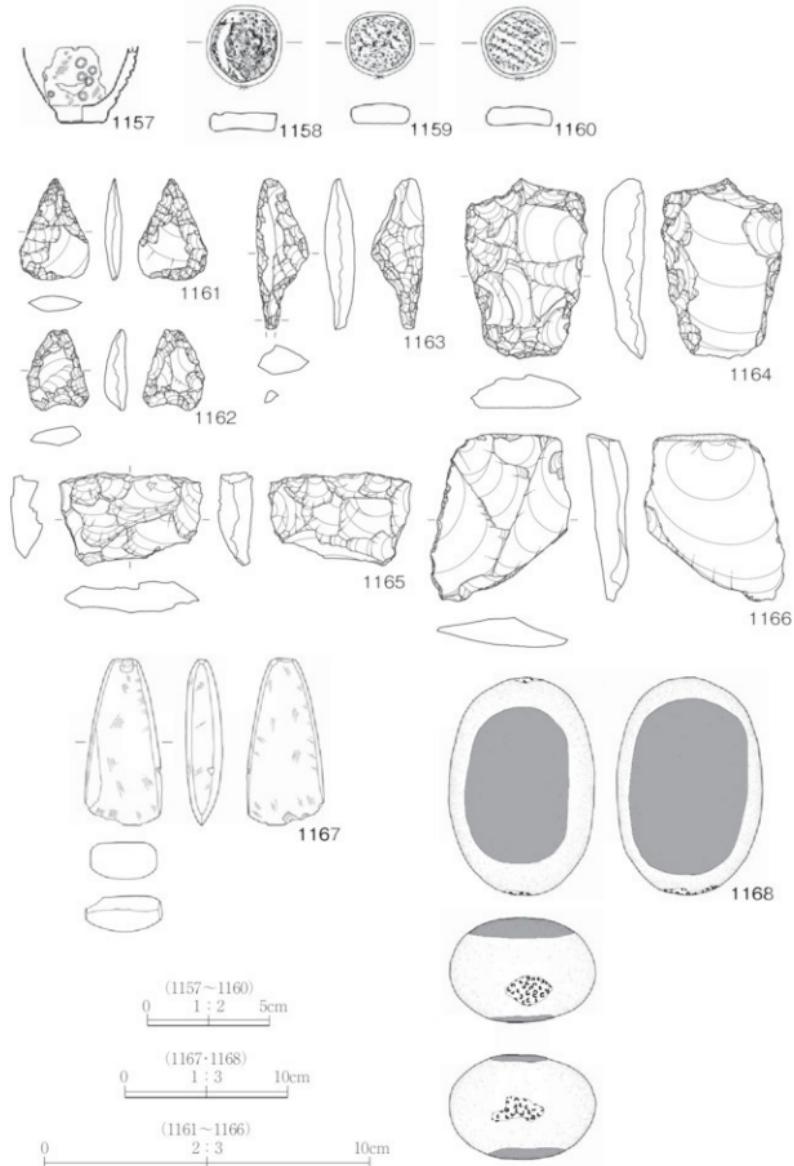
【炉】複式炉である。石開部2個と前庭部で構成され、長軸195cm、短軸78cmを測る。炉石の並びがややいびつなので、若干動いている可能性もある。炉石は花崗岩を利用し、ふぞろいな大きさの礫を素材とする。炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とする。奥側の石開部は床面から11cm掘り込み構築されており、使用面からは焼土の広がりを確認した。焼成が強く、被熱により赤色化している。また



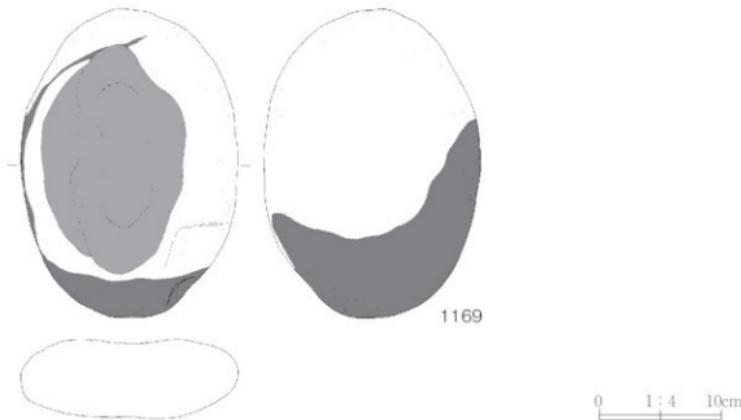
第179図 52・53号住居跡出土遺物（1）



第180図 52・53号住居跡出土遺物（2）



第181図 52・53号住居跡出土遺物（3）



第182図 52・53号住居跡出土遺物（4）

焼土はわずかだが炉石の外にも広がっている。北側脇には斜位の埋設土器（1124）が設置されている。手前側の石面部は床面から15cm掘り下げて構築し、使用面の中央に焼土の広がりを確認した。焼成は強い。炉の掘り方を確認した。炉とほぼ同規模に掘り込み、炉石を設置している。

【附属施設】柱穴18個を確認した。他の遺構と重複しており、主柱穴配列は定かではない。なお壁の外で4個（30～33）見受けられる。本遺構の付属施設と判断した。

【出土遺物】前述の通り、52号住居跡と同時に取り上げている。

【時期】炉の埋設土器（1124）から大木10式中段階と判断した。

#### 54号住居跡（第183～184図、写真図版40・87・126～128）

【位置・検出状況】調査区北東側II A 4s、5s、4t、5tグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。本遺構の壁は斜面上方から大量の土砂が流れ込んだことにより、大半が消失している。

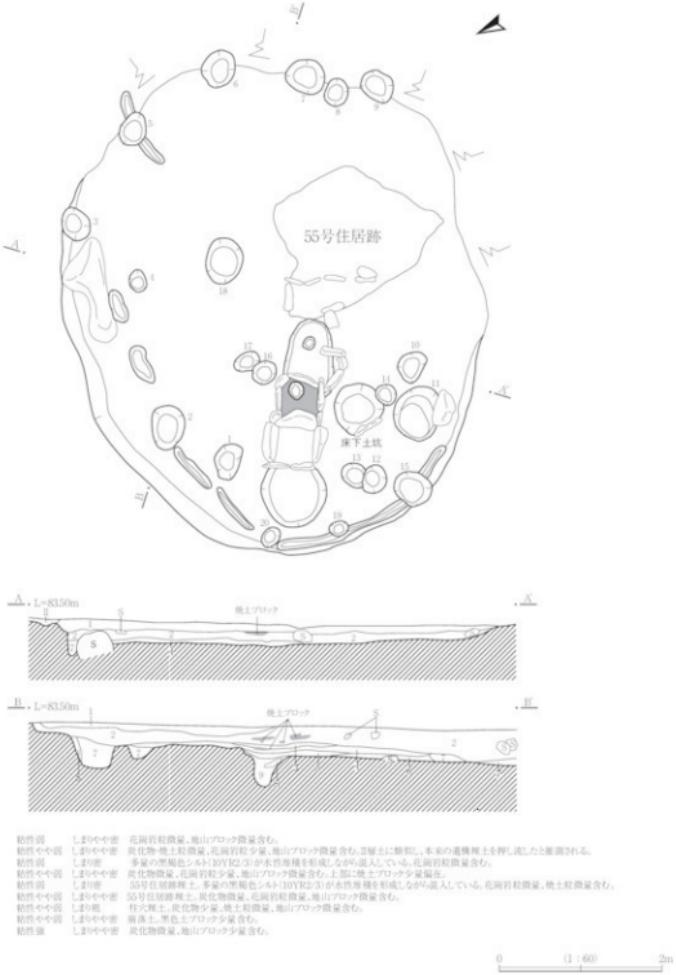
【その他の遺構との重複】55号住居跡と重複しており、上層断面により本遺構がより新しい段階にあると判断した。また、52号住居跡の想定される範囲とも重複しているが、新旧関係を判断できる土層断面を見つけることができなかつたため新旧関係については定かではない。

【平面形】楕円形 【規模】長軸592cm・短軸540cm・深さ（24）cm

【埋土】斜面上方に位置する本遺構から斜面下方へと設定した土層断面ベルトにより、壁が斜面上方からの土砂の流れ込みによって下方へと流れたとの判断をしている。そのため本遺構の埋土は存在しない。一段低くなっている箇所には、55号住居跡の埋土が堆積しており、一部が水成堆積の様相を示す。この層の上に本住居跡の床面及び壁面から流れた崩落マサ土が堆積するため55号住居跡より本住居跡が新しい段階にあると新旧関係を判断している。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北西側のみ残存する。ただし、壁は床面から立ち上がりが12cm程度残存するだけである。緩やかに広がっていくものと推測される。

[炉] 複式炉である。主体となる炉は石圓部2個と前庭部で構成され、南側に埋設土器を横位に設置した石組みを伴う。また、埋設土器の西側にも埋め込まれた花崗岩と窓みを確認しているため主体となる炉に伴う付属施設があったことが推測される。長軸256cm、短軸78cmを測る。石材は花崗岩を用いており、中には埋め込みやすくするためか、下部を楔状に加工したとおぼしき痕跡が認められるものもある。炉内の埋土は炭化物、地山ブロックを含んだ黒褐色シルトが主体である。前庭部から見て奥側の石圓部は強い被熱のため焼成化が見られる。炉の使用面は前庭部側が深さ約12cm、奥側が約



第183図 54号住居跡（1）

7cmと若干の差がみられる。小規模であるが、炉の掘り方も確認している。掘り方の埋土として暗褐色シルトの堆積が見られる。前庭部はほぼ円形で掘り込みが浅く、全体に硬化が見られる。

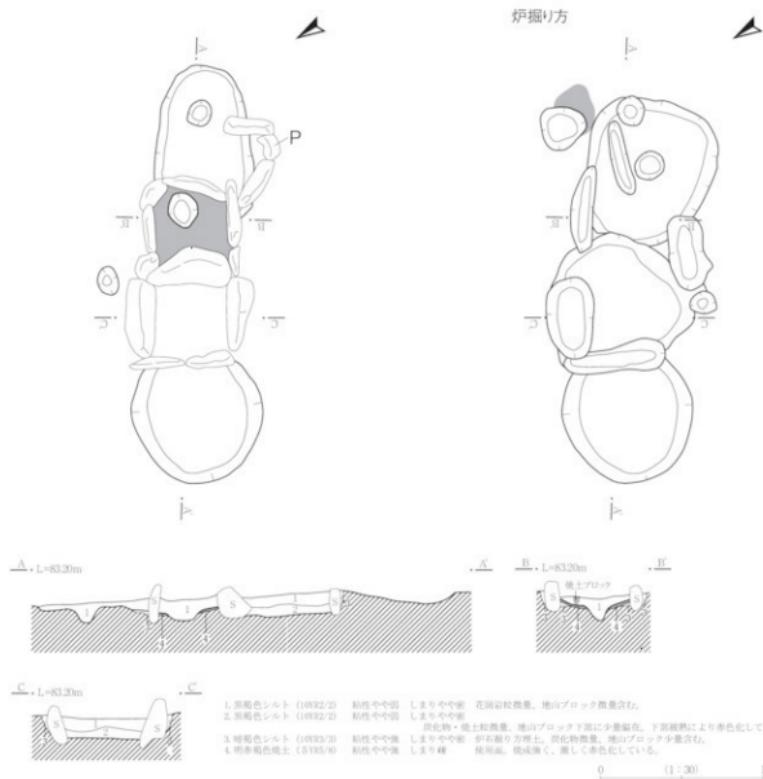
[付属施設] 柱穴22個を確認している。そのうち、4個(2・5・7・11)は主柱穴と考えられる。また、主体となる炉の南東側に炉に伴う付属施設があったと考えられる。

[出土遺物] 繩文土器、土製品、石器が出土している。また、床面上にフレイクが集中的に出土した範囲がある。

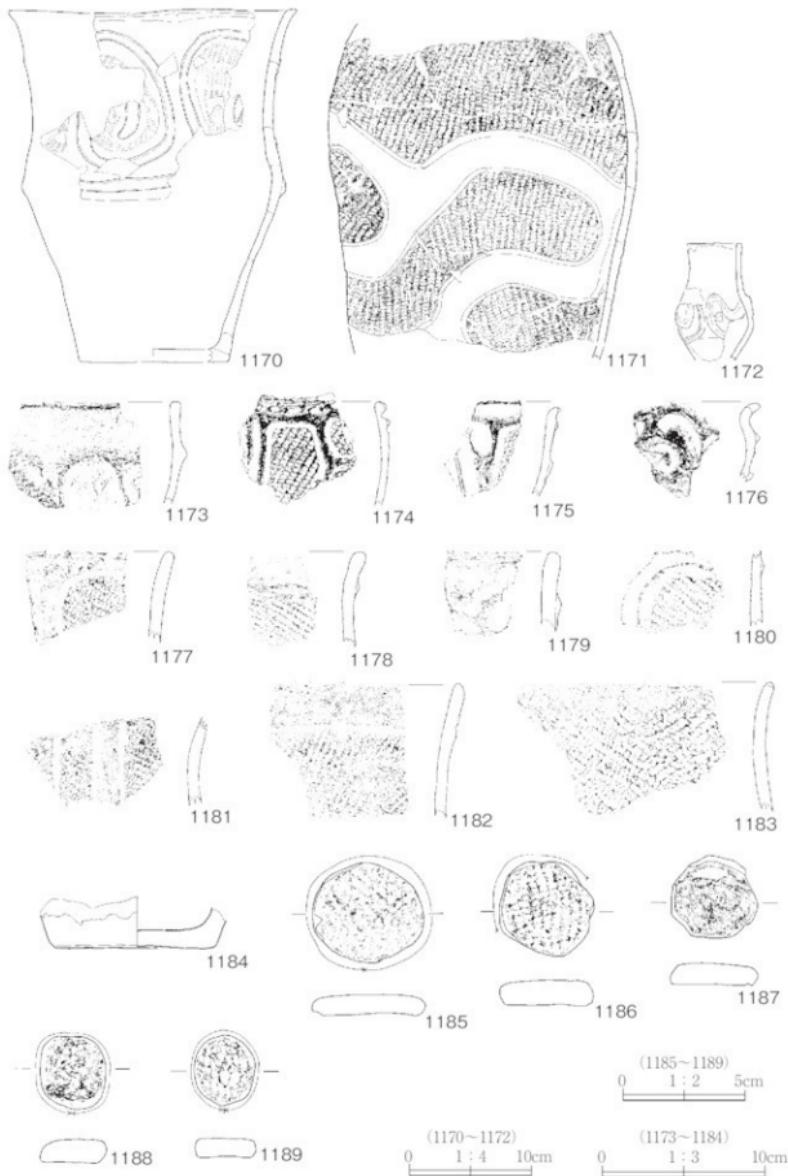
1171は大木10式古段階に該当する土器で、胴部で一度膨らんだ後に外へと開いていく器形である。

1172は主体となる炉の傍に設置されていた埋設土器で、区画文が施されている。被熱により全体が赤色化している。大木10式中段階に該当する。1173は長頸の壺で、隆沈線による区画文が施された大木10式期の土器であると考えられる。

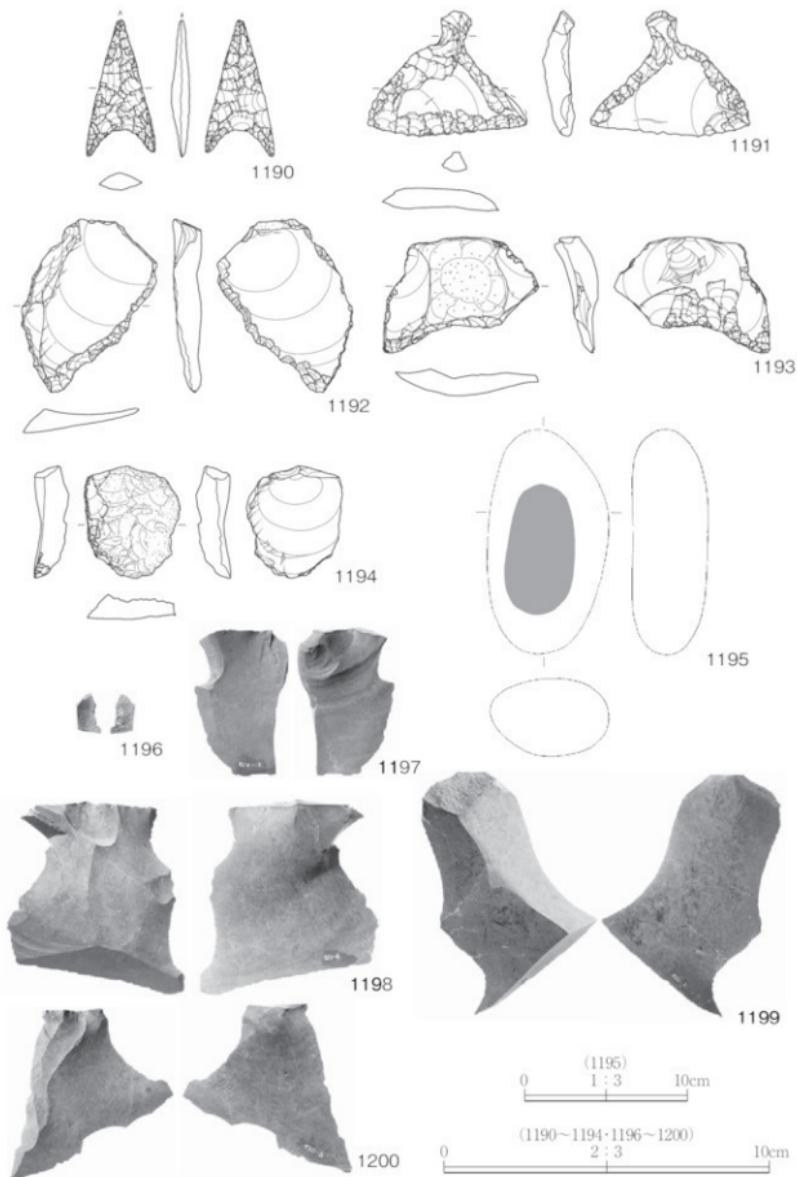
1186～1190は土製円板である。いずれも胴部の破片を転用したと考えられる。側面が磨滅しているものが多い。



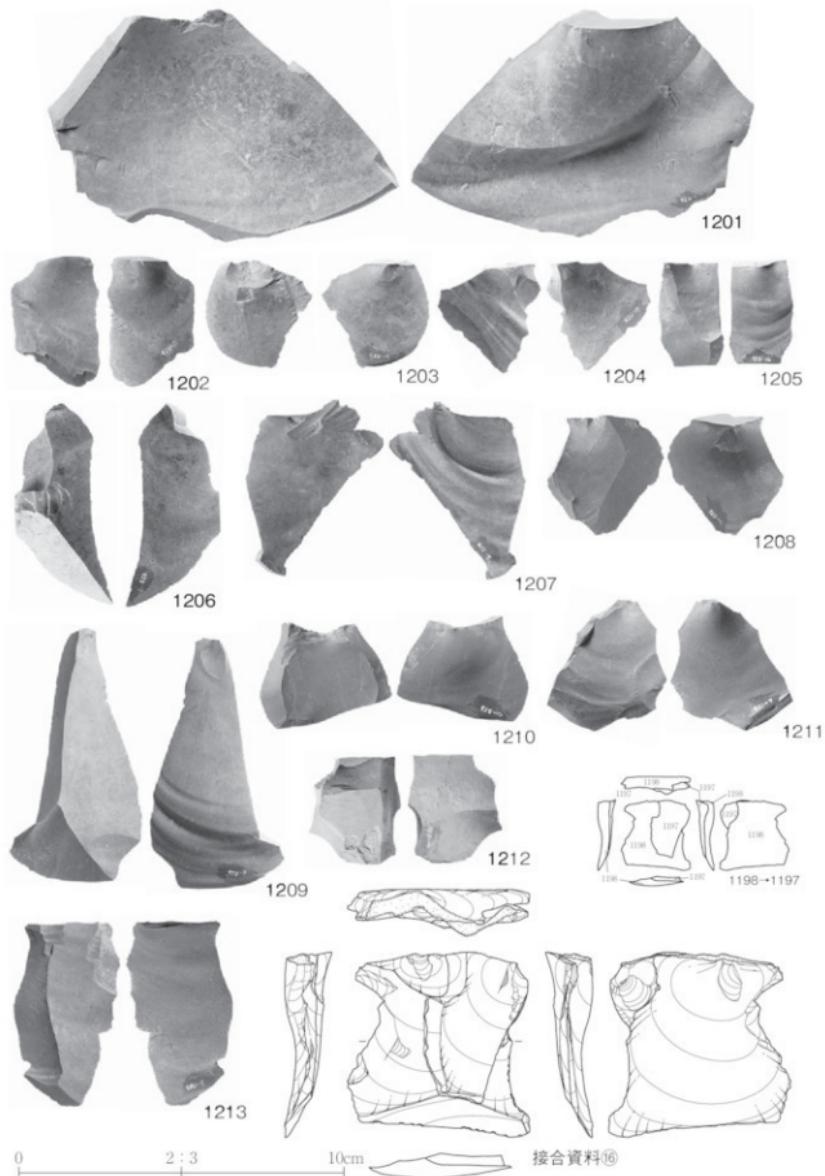
第184図 54号住居跡 (2)



第185図 54号住居跡出土遺物（1）



第186図 54号住居跡出土遺物（2）



第187図 54号住居跡出土遺物（3）

1191は石鍬である。無茎の凹基で、身部が二等辺三角形を呈する。全体に押圧剥離が行き届いている。1192は横型の石匙である。表面は下方に刃部の形成が見られるが、裏面では下方の一部しか加工が施されていない。1193～1195は不定形石器である。1193は縁に沿った剥離が施され、両面に刃部が形成されている。1194は裏面の一部分の加工に重きを置いていたようである。1195は表面の一部に微細な剥離が認められる。1196は敲磨器で、扁平な楕円形の縁の広い箇所にわたって磨り痕が認められる。

1197～1213の18点はフレイク集中範囲より出土したフレイクである。集中して見つかっていることから石器の加工がこの場で行われていたと考えられる。

〔時期〕 炉の埋設土器の時期から大木10式中段階であると判断した。

#### 55号住居跡（第188・189図、写真図版40・41・88・128）

〔位置・検出状況〕 調査区北東側Ⅱ A 4s・5s・4t・5tグリッド内に位置する。IV層上面で検出した。本遺構の壁は54号住居跡と同様に斜面上方から大量の土砂が流れ込んだことにより、大半が消失しているが、西側はかろうじて立ち上がりが判断できる。

〔その他の遺構との重複〕 54号住居跡と重複しており、土層断面により本遺構がより古い段階にあると判断した。また、52号住居跡の想定される範囲とも重複しているが、新旧関係を判断できる土層断面を見つけることができなかつたため新旧関係については定かではない。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 長軸376cm・短軸368cm・深さ（36cm）

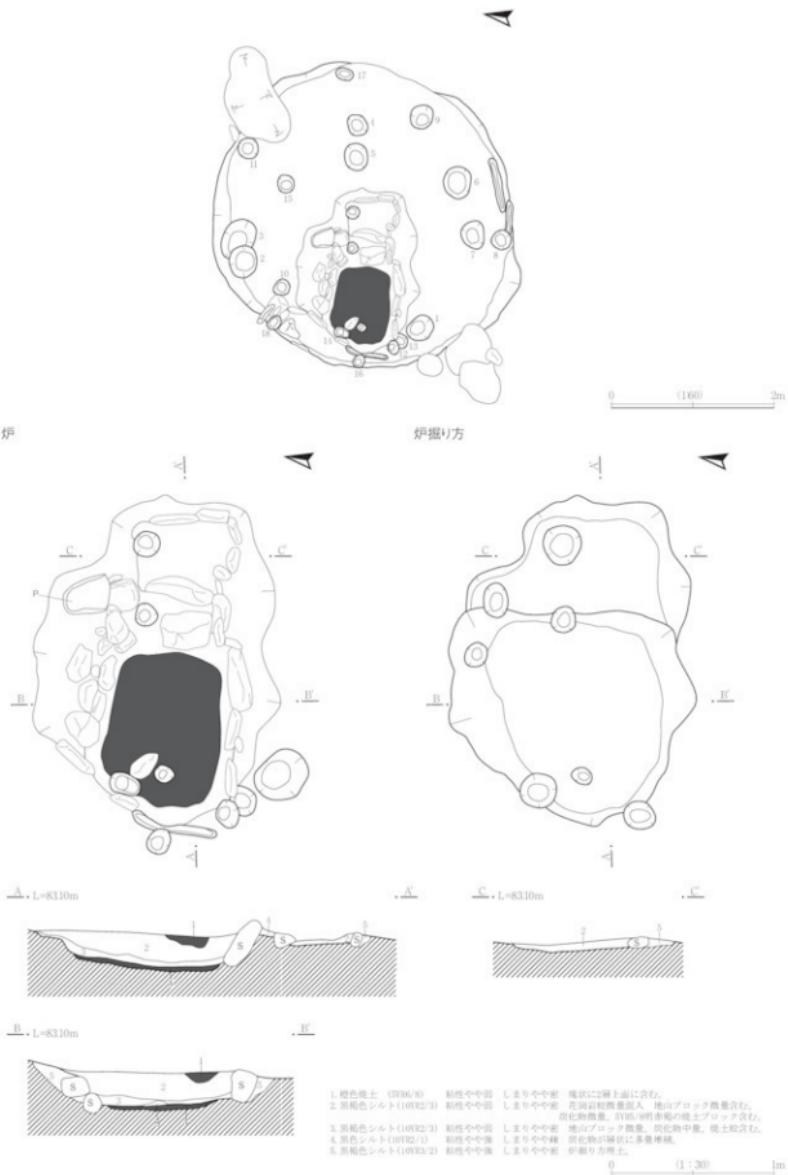
〔埋土〕 斜面上方に位置する54号住居から斜面下方へと延びるベルトの土層断面より新旧関係を判断している。54号住居跡の床面及び壁面から流れたと考えられる崩落マサ土が本遺構の埋土上に堆積するため54号住居より本遺構が古い段階にあると判断している。埋土は黒褐色シルトが主体で炭化物、花崗岩粒、地山ブロックをいずれも微量含む。一部、水成堆積を成しているような様相も見受けられる。〔床面・壁〕 床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。西側は壁が残存している。また、西側と南側は壁溝が一部残存する。

〔炉〕 複式炉である。石圓部3個で構成される。西側が広く、真ん中が狭く作られており、この狭い石圓部の脇に埋設土器が横位で設置される。長軸196cm、短軸108cmを測る。石材には花崗岩が用いられている。炉内の埋土は炭化物、焼土ブロック、地山ブロックを含んだ黒褐色シルトが主体である。使用面は東側と真ん中の石圓部が床面から3cm程度と浅く、西側の石圓部が床面から24cmと深く作られている。東側の石圓部は使用面上に強い被熱を受け、焼土化した黒褐色シルトの層が約5cm堆積している。また、西側の石圓部内には使用面の上に炭化物と焼土ブロックの混じった層が全面に堆積しているのを確認している。前部に関しては他の住居跡のように明確に確認するに至らなかつた。小規模ながら炉石の掘り方も確認している。また、主体となる炉の軸とは別の軸で北西側に石組みが隣接するのを確認しており、炉に伴う付属施設があったと考えられる。

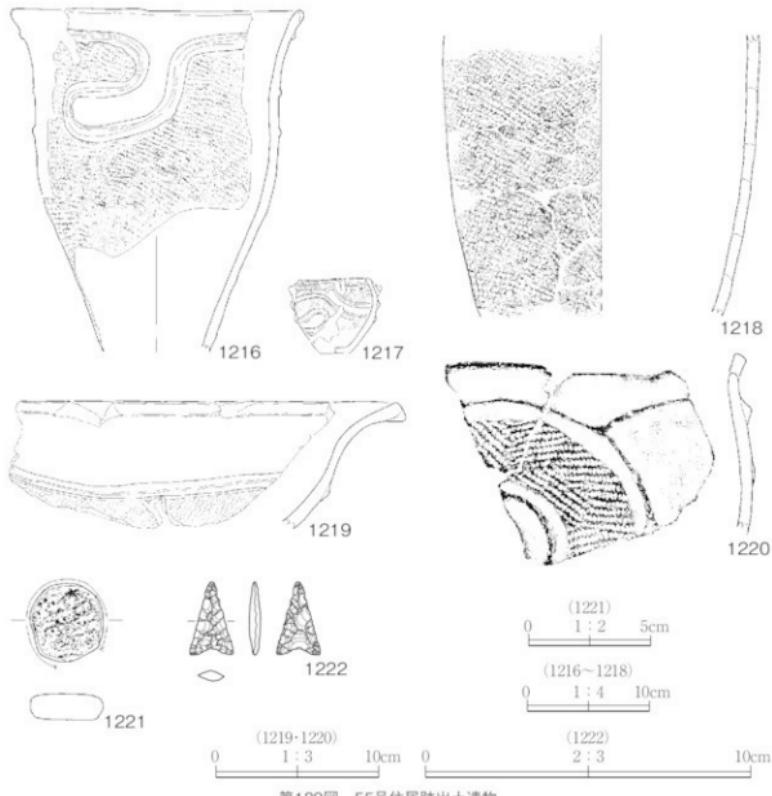
〔付属施設〕 柱穴18個を確認している。そのうち、4個（Pit 1・3・7・9）は主柱穴と考えられる。また、主体となる炉に伴う炉石の並びを確認しており、付属施設と考えている。

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。

1216は炉に設置されていた埋設土器で、隆線による区画文が施された後、縄文が充填される。大木10式中段階に該当する。1217は小型の鉢である。内湾する器形で、隆線による区画文と刺突列が施される。1218は粗製の深鉢で、1216を設置した掘り方との隙間に1218の破片を詰めた状態で出土しているのを確認している。1218は1216を固定するための材料として再利用している可能性が考えられる。



第188図 55号住居跡



第189図 55号住居跡出土遺物

1219、1220は口縁部の破片で、いずれも大木10式新段階に比定される。

1221は土製円板で、粗製の破片を転用している。側面に磨滅がみられる。

1222は石錐である。無茎の凹基で、身部は二等辺三角形を呈する。炉内より出土している。

【時期】 埋設土器（1216）の時期から大木10式中段階であると判断した。（野中）

#### 56号住居跡（第190～196図、写真図版41・88・128）

【位置・検出状況】 調査区南東側、II A 6t、6 u グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は立地する斜面の崩落により、南側の一部が消失している。

【その他の遺構との重複】 52号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

【平面形】 不整な楕円形 【規模】 長軸（410）cm・短軸505cm・深さ59cm

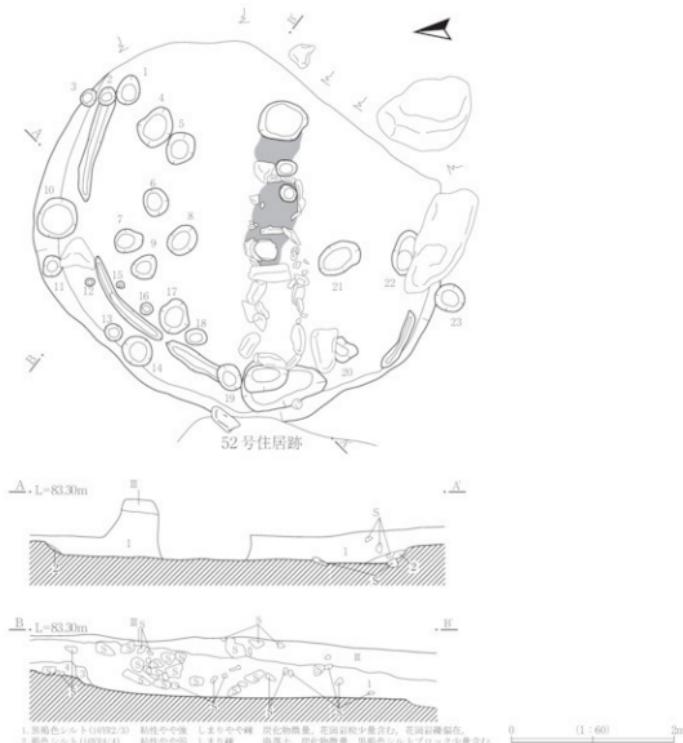
【埋土】 断面で1層確認したが斜面から流れてきた土砂堆積土の可能性が高い。黒褐色シルトを主体

とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北～西壁で確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【炉】複式炉である。石開部3個と前庭部で構成されるが、他の堅穴住居跡の炉と比べ、長大な形態であり、作り変えを行っている可能性もある。奥側および真ん中の石開部は炉石が部分的に抜き取られている。長軸286cm、短軸70cmを測る。炉石は花崗岩でふぞろいな大きさ、形態の礫を素材とする。炉内の埋土は黒褐色シルトを主体とする。炉の使用面は奥側・真ん中の石開部では床面とほぼ同じ高さ、手前側の石開部は20cm掘り込み、構築されている。奥側と真ん中の石開部内には焼土のひろがりを確認した。焼成は強く、被熱により激しく赤色化している。また奥側の石開部の外側には60cm大の浅い掘り込みがあり、その間にも焼土は広がっている。この範囲も元々は石開部があった可能性がある。また真ん中の石開部、北脇には埋設土器がある。埋設土器は3個の土器を重ねた状態にし、斜位で設置されている。炉の掘り方を確認した。炉とほぼ同規模に掘り込み、炉石を設置している。

【附属施設】柱穴23個を確認した。うち4個（Pit 4・9・14・20・21）は配列から主柱穴と考えられる。またこれらと並列する柱穴もあるので、遺構自体が建て替えられ、その際に柱の位置もずらして



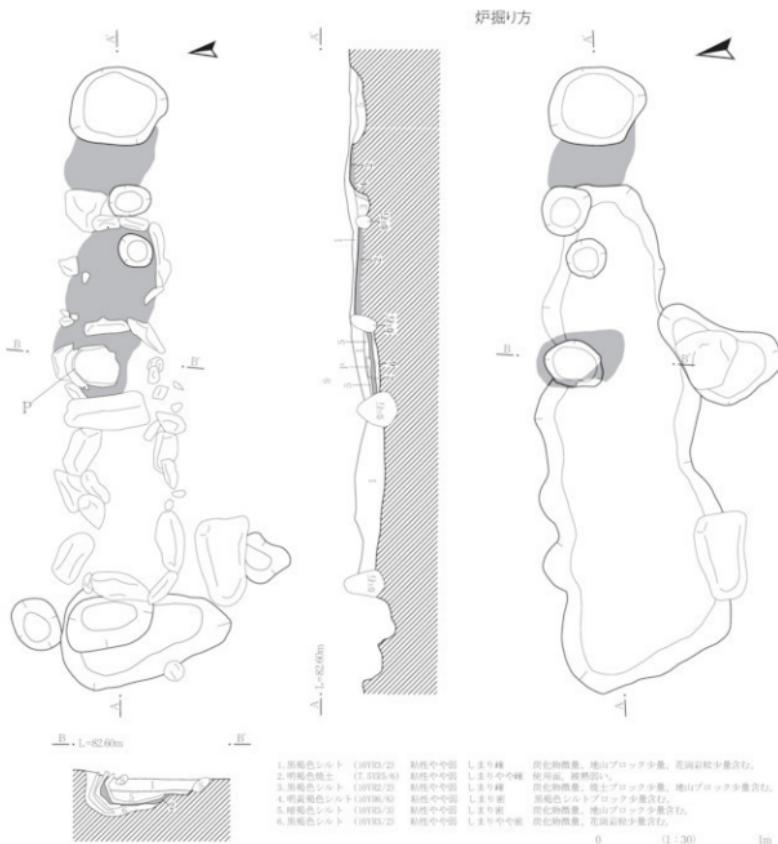
第190図 56号住居跡 (1)

いる可能性が高い。23は壁外であるが本遺構に付属するものと判断した。

〔出土遺物〕 繩文土器、土製品、石器が出土している。

1223・1225は炉の埋設土器で、どちらも大木10式中段階である。1223は口縁部を欠損するのである。底部がすぼまり、口縁部へとゆるやかに広がる形態で胴部上半に曲線の区画文が横位に巡る。また炉の焼成により赤色化している。1225は胴部の大型破片で、やはり炉の焼成により橙色に変色している。本住居埋土中からは、形態の分かれる土器が出土している。1224・1226・1227・1241は大木10式中段階。1228～1235は粗製である。出土した土器には破片が多く、図示したものでは大木8b式(1236～1240)・大木9式古段階(1243)・新段階(1242・1244～1249)・大木10式古～中段階(1251～1259)、粗製(1260～1267)と時期幅が広い。

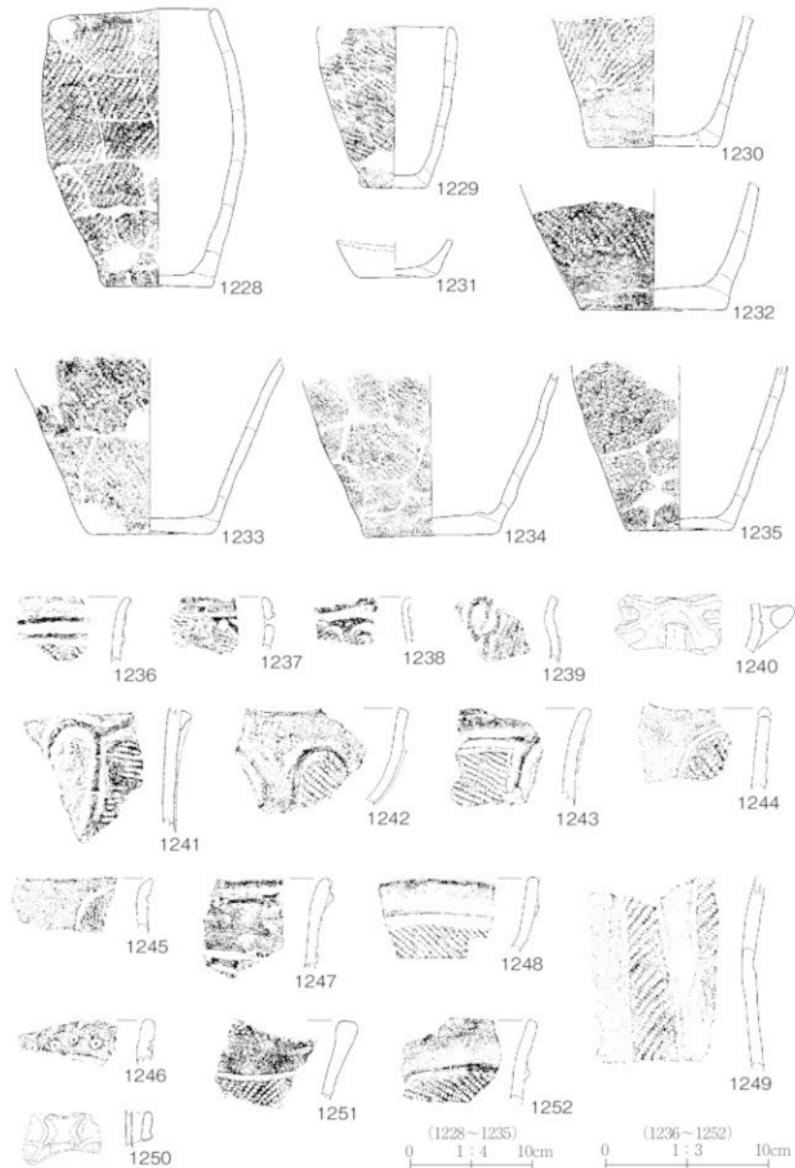
土製品は土製円盤(1268～1279)と土偶(1280)である。土製円盤は深鉢胴部片の転用であり、



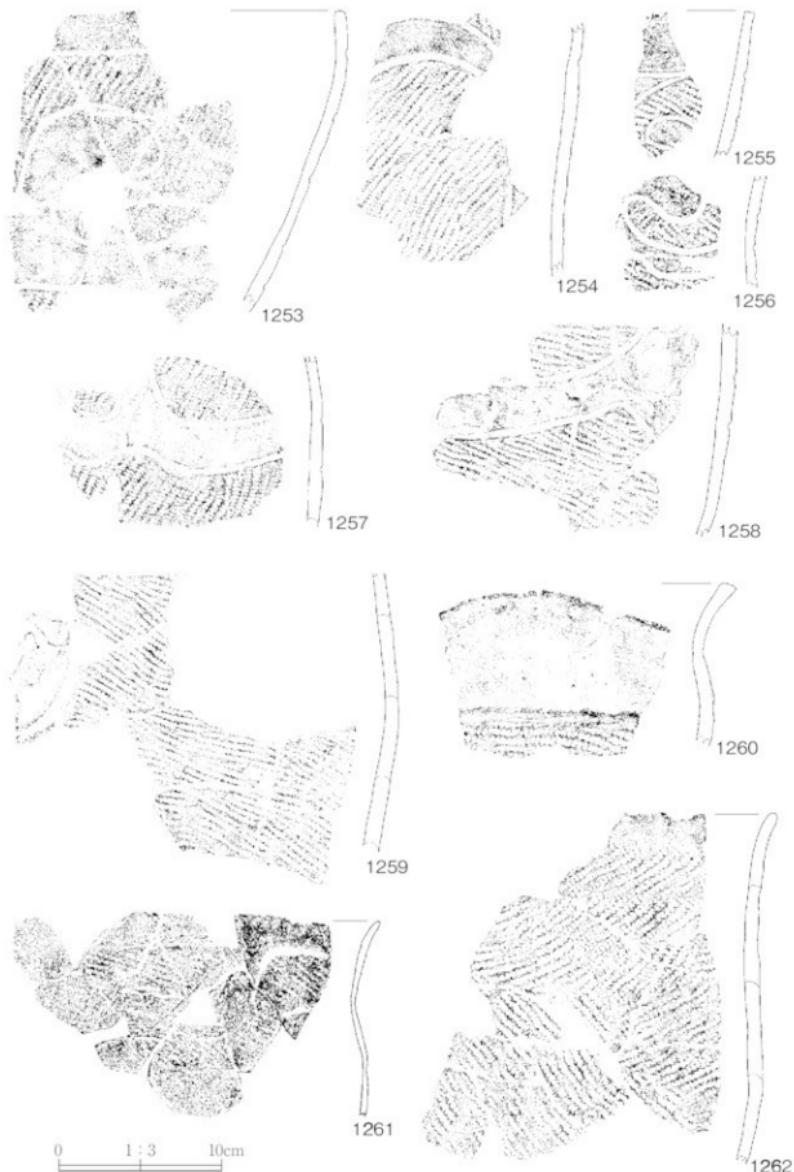
第191図 56号住居跡(2)



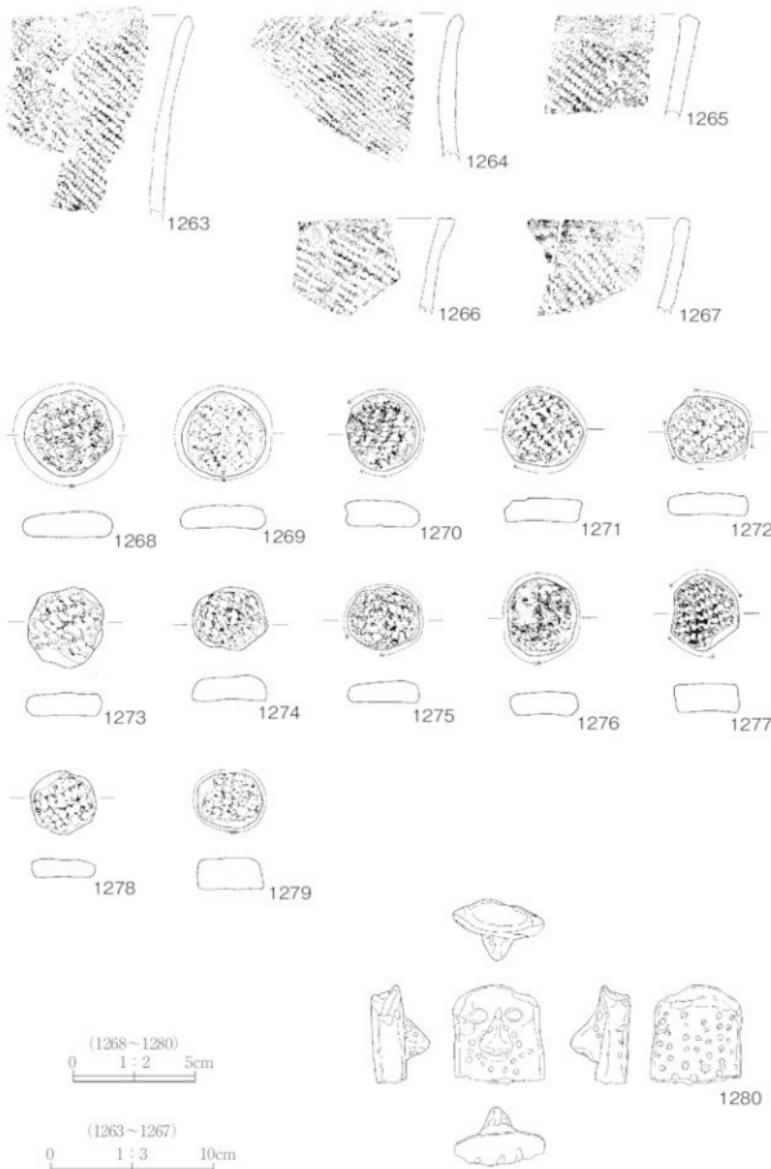
第192図 56号住居跡出土遺物（1）



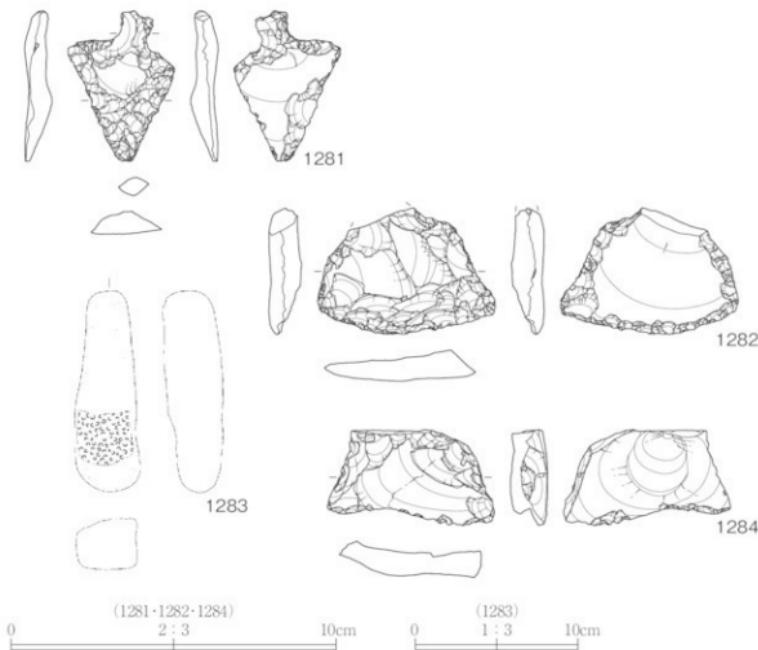
第193図 56号住居跡出土遺物（2）



第194図 56号住居跡出土遺物（3）



第195図 56号住居跡出土遺物（4）



第196図 56号住居跡出土遺物（5）

1273・1274・1278は打ち欠きのみで整形し、他は側面の広い範囲が摩滅する。1280は土偶の頭部で、やや四角い形態を呈し、目・鼻が表現されている。鼻の周囲と後頭部には細かい刺突文が充填される。

1281は石匙である。1類であるが、三角形を呈する形態である。1282は不定形石器で横長のフレイクを素材とし、縁辺の両面から二次加工を施す。1283は敲磨器類で、棒状の礫を素材とし、側面に敲打痕が見受けられる。1284はRフレイクで、横長のフレイクを素材とし、最終剥離面の縁辺に不連続な押圧剥離が施されている。用途は不明である。

【時期】埋設土器（1223・1225）の時期から大木10式中段階と判断した。

## 57号住居跡（第197図、写真図版42）

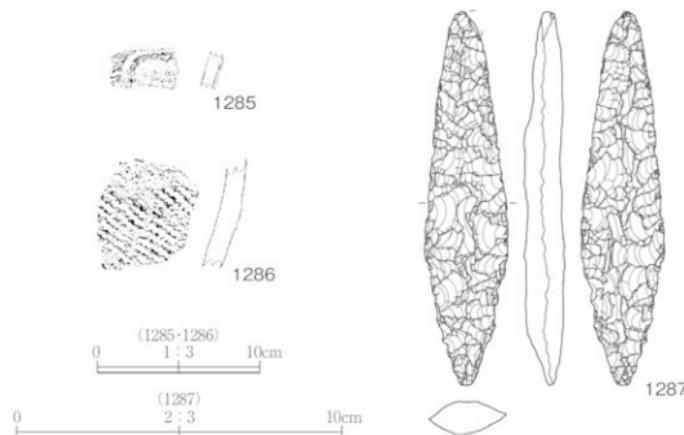
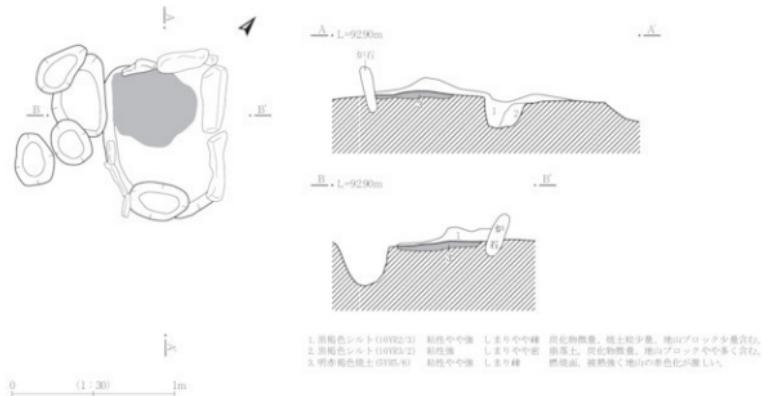
【位置・検出状況】 調査区南東側、II A 6tグリッドに位置する。52号住居跡・53号住居跡を精査中にその南側で別の炉を検出した。本遺構は立地する斜面により大きく消失しており、炉のみ確認した。

【その他の遺構との重複】 53号住居跡と重複する。断面などで新旧関係は確認できなかったが、検出状況から本遺構の方が古いと推定する。

【平面形】 不明。 【規模】 不明。

【埋土】 不明。

【床面・壁】 床面は炉を検出した面を床面としたが、炉以外は床面も含めて明確に検出できていない。



第197図 57号住居跡・出土遺物

壁も同様に不明である。

【炉】石窰炉である。105×70cmを測り、長方形をなす。炉石は花崗岩でふぞろいな大きさの礫を素材とする。使用面は床面とはほぼ同じ高さである。炉内的一部分で焼土の広がりを確認したが、焼成は弱い。薄く赤色化するのみである。

【附属施設】不明であるが周辺に5個柱穴がある。(第175図Pit44~48)

【出土遺物】炉内から縄文土器片が、炉に近接する床面からは石器が出土している。

縄文土器は小片で、時期判断の基準になるか定かではないが、1285は大木8b式か。1286は炉に付属する柱穴内から出土した粗製の破片である。

1287は尖頭器で、先端をわずかに欠損する。

【時期】炉内から出土した土器(1285)の時期から大木8b式期と判断した。

#### 58号住居跡（第198図、写真図版42）

【位置・検出状況】調査区南東側、II A 5tグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】52・53・57号住居跡と重複する。断面などで新旧関係は確認できなかったが、検出状況から52・53号住居跡より古く57号住居跡との新旧関係は不明である。

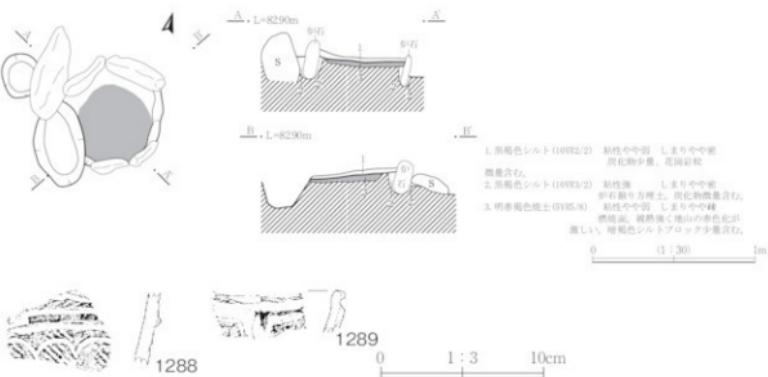
【平面形】不明。 【規模】不明。

【埋土】不明。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面としたが、炉以外は床面も含めて明確に検出できていない。壁も同様に不明である。

【炉】石窰炉である。73×63cmを測る、五角形と推定される。炉石は花崗岩であり、使用面は床面から3cm下で構築される。焼成の痕跡は認められない。

【附属施設】不明であるが周辺に1個柱穴がある。(第175図・Pit45)



第198図 58号住居跡・出土遺物

【出土遺物】 炉内から縄文土器片が出土している。小片のため、時期判断の基準となり得るかは難しいが、1289は焼土（3層）内から出土した大木8b式の小片。1288は炉内から出土した大木7b式（？）の破片である。

【時期】 炉内から出土した土器（1289）の時期から大木8b式期と判断した。

#### 59号住居跡（第199図、写真図版42）

【位置・検出状況】 調査区南東側、II A 4 u グリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】 53・57号住居跡と重複する。断面などで新旧関係は確認できなかったが、検出状況から53号住居跡よりは古く57号住居跡との新旧関係は不明である。

【平面形】 不明。 【規模】 不明。

【埋土】 不明。

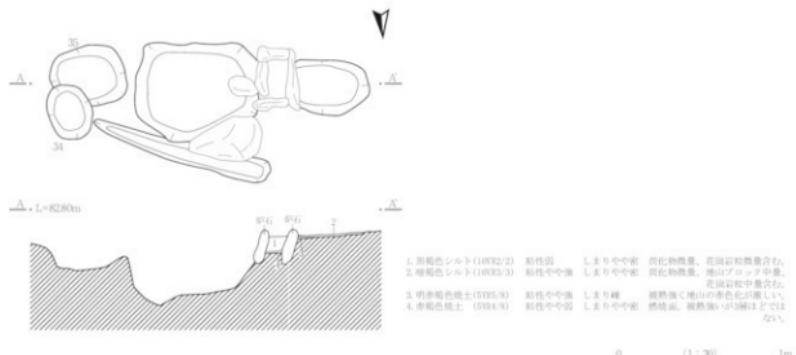
【床面・壁】 床面は炉を検出した面を床面としたが、炉以外は床面も含めて明確に検出できていない。壁も同様に不明である。

【炉】 複式炉である。掘り込み1箇所、石開部1個と前庭部で構成され、長軸143cm、短軸40cmを測る。奥側の掘り込みは浅く本来石開部だったものが炉石が抜き取られたものであると推定する。石開部内の埋土は黒褐色シルトを主体とする。炉石は花崗岩である。使用面は床面から8cm下で構築される。石開部内に焼土の広がりは認められない。炉の掘り方は炉と同規模に掘り込み、炉石を設置している。

【附属施設】 炉の東側に隣接する柱穴（第175図・Pit35）が本遺構に付属すると判断した。それ以外は不明。

【出土遺物】 縄文土器が小片で出土している。図示できるものはないが、いずれも中期中葉～末葉に比定される土器である。

【時期】 出土した土器の年代から縄文時代中期中葉～末葉と判断した。



第199図 59号住居跡

## 60・61号住居跡（第200～203図、写真図版43・91・92・128）

【位置・検出状況】調査区南西側、II B 1 h～2 g グリッドに位置する。IV層上面で検出した。精査当初、1棟の竪穴住居跡と考えていたが、複数の炉や壁溝が重複していることから2棟の竪穴住居跡の重複と判断した。

【その他の遺構との重複】61号住居跡の方が古く、60号住居跡の方が新しい。

【平面形】60号住居跡：不整な楕円形 61号住居跡：不明。不整な円形と推定。

【規模】60号住居跡：長軸518cm・短軸500cm・深さ17cm 61号住居跡：不明。残存する壁溝から径500cmと推定。

【埋土】60号住居跡のみ検出した。2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は南壁を除き全周する。直立気味に立ち上がる。

【炉】60号住居跡：石開炉である。正方形を呈し、一辺45cmを測る。炉石は花崗岩である。60号住居跡の複式炉と重複しており、複式炉の上に構築されている。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。炉内の使用面は床面から15cm掘り下げ、構築されている。焼成の痕跡は認められない。

61号住居跡：複式炉である。2個の石開部と前庭部で構成され、長軸242cm・短軸90cmを測る。炉石は花崗岩である。炉内の埋土は黒褐色シルトで住居埋土と類似する。石開部の使用面は床を15cm掘り込み構築されており、焼成が強く、激しく赤色化している。また脇には斜位の埋設土器が設置されている。なお、炉の長軸上から外れた炉石の並びが認められる。おそらく石開部を一度作り直しておらず、古い炉石が残存していたものと推測する。

【附属施設】柱穴35個を確認した。柱どうしの新旧関係と配置から60・61号住居跡それぞれに付属する柱跡を推測したものが第200図下である。60号住居跡の主柱穴は7本（1・10・13・18・24・32・33）で61号住居跡は6本（3・8・14・19・29・34）と推測する。また壁溝が2重、3重に巡っている。第200図下では各住居に相当する壁溝を推定した。

【出土遺物】60号住居跡：炉の周辺埋土から土器片が出土している。時期は大木8 b式（1307）、大木9式古段階（1306）、新段階（1303～1305）、粗製（1308）である。

61号住居跡：縄文土器、土製品、石器が出土している。

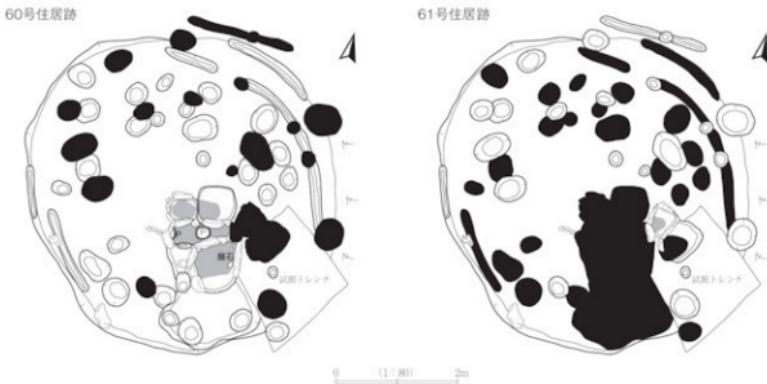
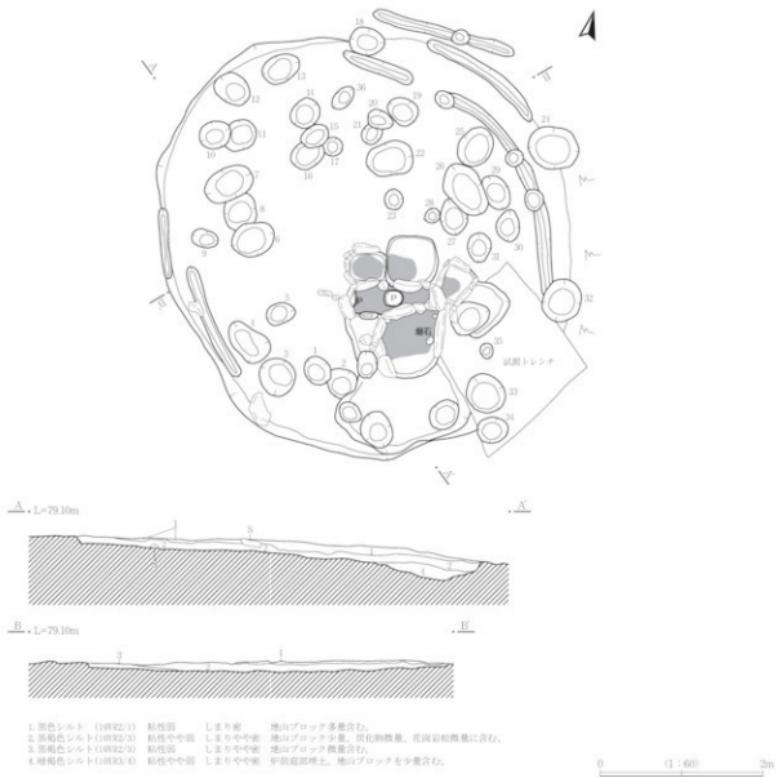
1290・1292・1293は61号住居跡の複式炉の埋設土器で、いずれも粗製である。1290は口縁部～胴部、他の2点は胴部から底部が残存する。他に炉の埋土中から大木9式新段階（1299）の破片が出土している。遺構の埋土中からは大木9式古段階（1294・1295）、新段階（1296～1298）、粗製（1291）が出士している。

土製品は土製円盤である。1301は胴部片の転用で、打ち欠きのみで整形されている。

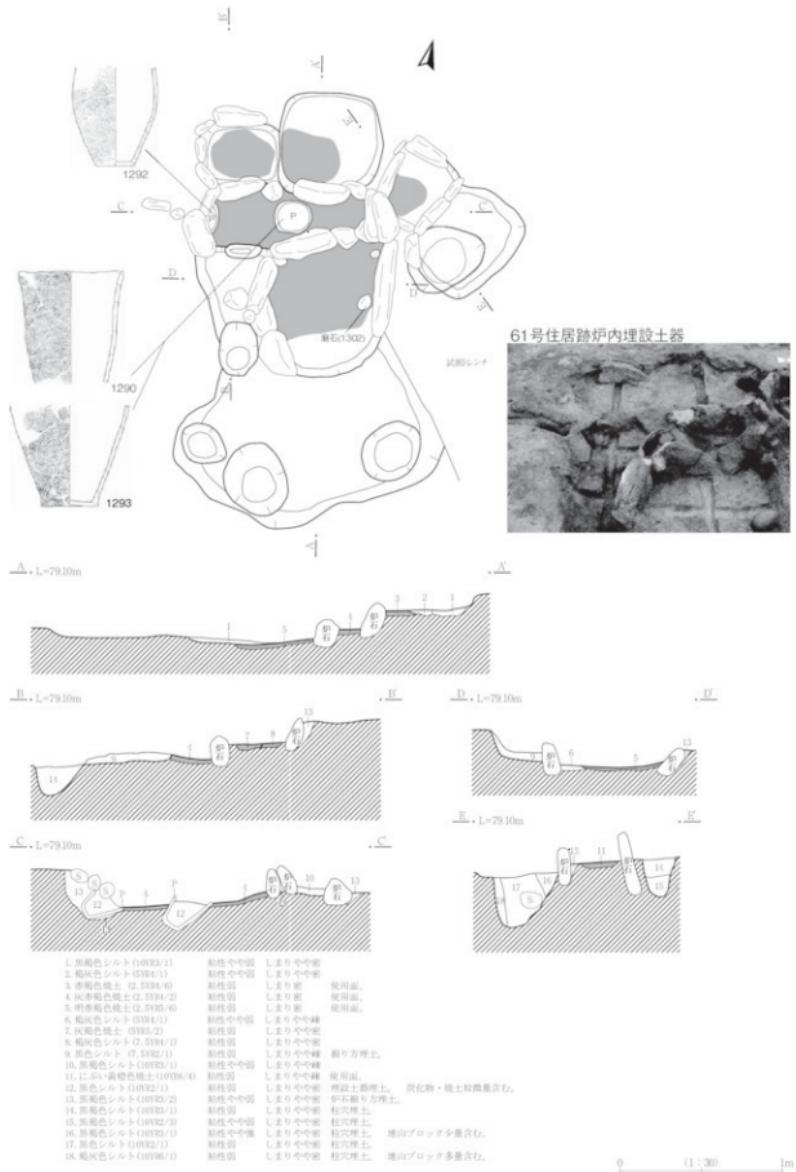
1302は敲磨器類である。偏平な円形の礫を素材とし、両面に磨痕が見受けられる。

【時期】60号住居跡：埋土中から出土した土器と重複する60号住居跡の時期とから大木9式新段階と判断した。

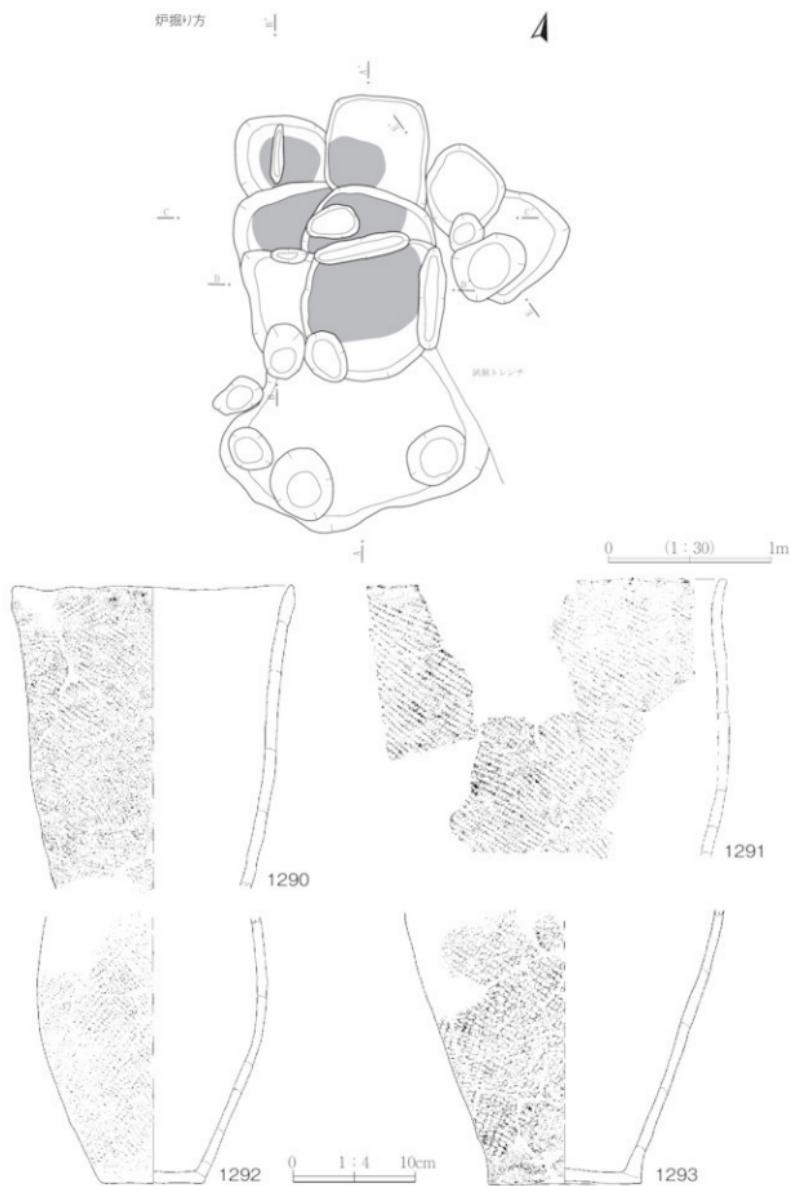
61号住居跡：炉内から出土した土器（1299）の時期から大木9式新段階と判断した。



第200図 60・61号住居跡（1）

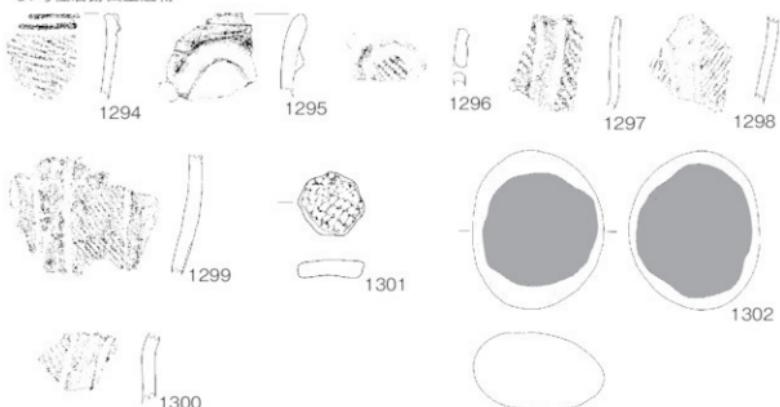


第201図 60・61号住居跡（2）

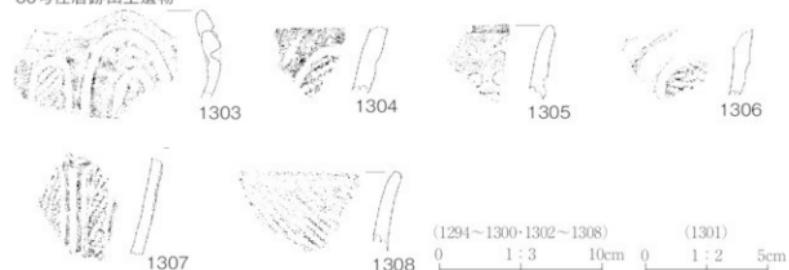


第202図 60・61号住居跡（3）・出土遺物（1）

## 61号住居跡出土遺物



## 60号住居跡出土遺物



第203図 60・61号住居跡出土遺物（2）

## 62号住居跡（第204図、写真図版44・92・128）

【位置・検出状況】 調査区南西側、II B 1 g グリッドに位置する。IV層上面で検出した。本遺構は後世の削平により遺構上面が消失し、また重複する60・61号住居跡によりほとんどが壊されており、柱穴と壁溝の一部を検出したに過ぎない。

【その他の遺構との重複】 60号・61号住居跡と重複する。本遺構が最も古い。

【平面形】 不明。円形か。

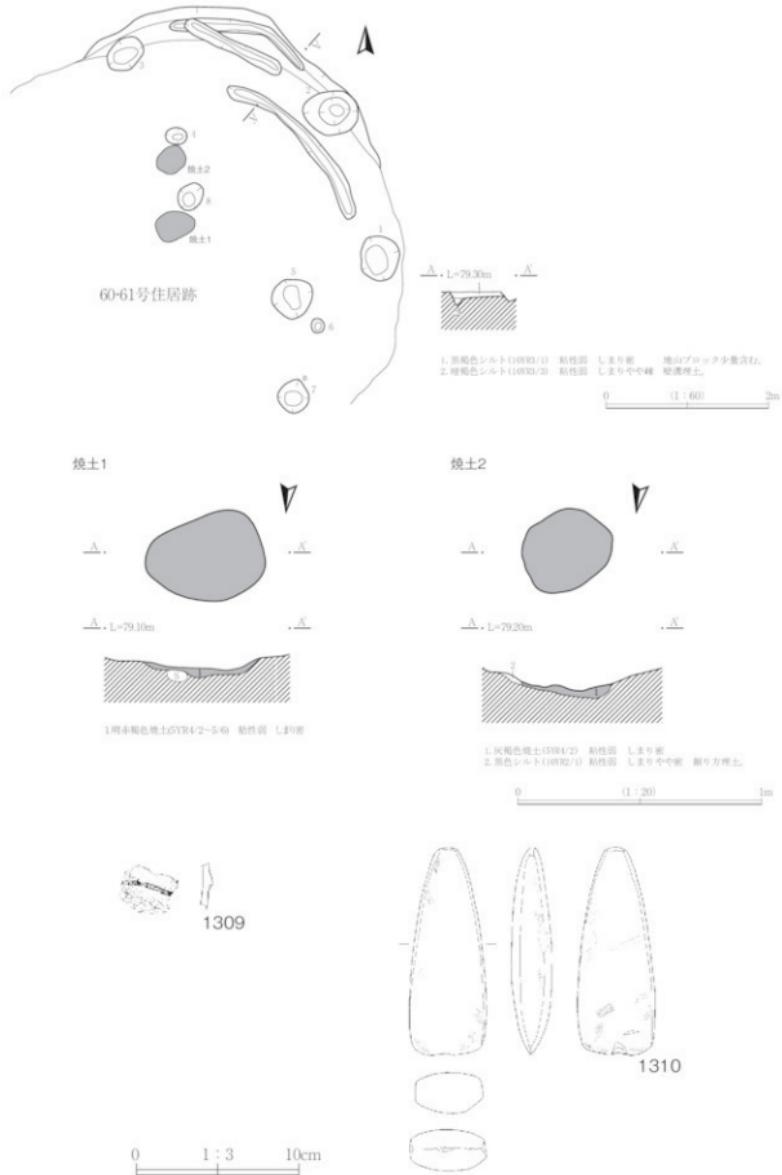
【規模】 長軸（545）cm・短軸（300）cm・深さ不明。

【埋土】 1層のみ確認できた。黒褐色シルトを主体とする。

【床面・壁】 床面は柱穴・壁溝を検出した範囲を床面とした。概ね平坦である。壁は確認できなかつた。

【炉】 検出していない。重複する60号住居跡・61号住居跡により削平されたものと推定する。ただし、北東端で2箇所焼土の広がりを認めた。どちらも被熱は弱い。

【附属施設】 柱穴8個を確認した。柱穴の規模から見て1～3・5は主柱穴の可能性が高い。また壁



第204図 62号住居跡・出土遺物

溝が3重に巡っているので、本遺構は一度ないし二度建て替えが行われた可能性が高い。

【出土遺物】埋土中から縄文土器の小片（1309）が出土している。深鉢胴部の小片だが隆帯が付く大木9～10式の範疇と考えるが、細かい時期は不明である。

1316は磨製石斧で刃部がわずかに欠けるが、ほぼ完形である。研磨痕が全体に残る。

【時期】出土した土器の時期と重複する60号住居跡・61号住居跡から大木9式新段階と判断した。

#### 63号住居跡（第205図、写真図版44・92）

【位置・検出状況】調査区南側、ⅡB2f、3fグリッドに位置する。IV層上面で検出した。斜面の崩落および後世の削平によるため、炉と柱穴の一部しか検出できなかった。

【その他の遺構との重複】4号焼土遺構と重複する。新旧関係は不明。

【平面形】不明。円形か。

【規模】柱穴の広がる範囲で、長軸（300）cm・短軸（660）cm・深さ不明。

【埋土】確認できていない。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面としたが、削平が激しいので明確な床面の範囲は不明。概ね平坦と考える。壁は確認できなかった。

【炉】複式炉である。木根による削平が激しいが、石圓部3個で構成されており、前庭部は見受けられない。長軸135cm、短軸56cmを測る。北側の石圓部は削平によるものか分からぬが、炉石は西側1個しか残存しない。炉石は花崗岩を利用し、偏平だが、大きさのふぞろいな碟を素材とする。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とする。石圓部内の使用面は、北側は検出面（床面）から2cm、南側は8cm掘り下げ構築されており、どちらも焼土の広がりを確認した。焼成が激しく赤色化している。うち真ん中の石圓部は横長の長方形を呈しており、東側の脇には埋設土器が斜位に設置されている。炉の掘り方は認められない。おそらく、床面に直接炉石を差し込み、構築したものと推定する。

【附属施設】柱穴10個を確認した。ただし配列からみて主柱穴とは考えられない。

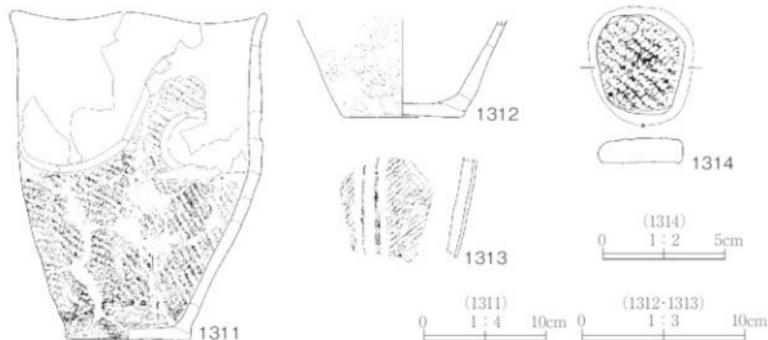
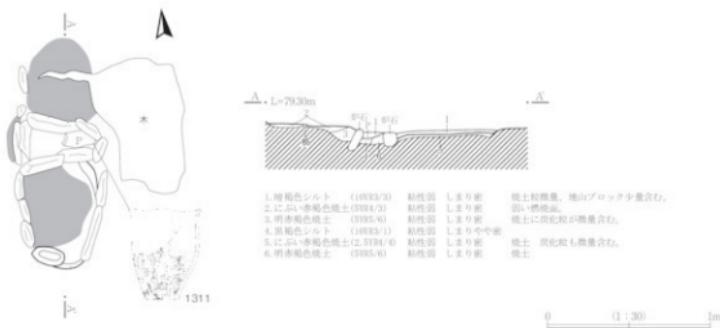
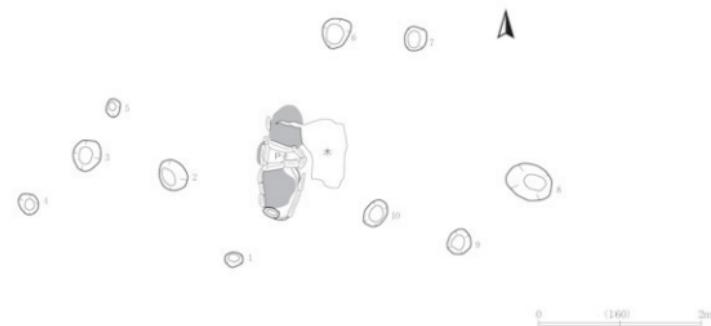
【出土遺物】縄文土器、土製品が出土している。

1311は炉の埋設土器である。口縁部を大きく欠損する。胴部下半でふくらみ、口縁部は直立気味である。胴部下半から続く曲線の区画文が横位に巡る。大木10式中段階と判断した。

他に埋土中から大木8b式（1313）、粗製（1312）が出土している。

土製品は土製円盤（1314）で、胴部片を転用し、側面全周が摩滅する。

【時期】炉の埋設土器（1311）の時期から大木10式中段階と判断した。



第205図 63号住居跡・出土遺物

64号住居跡（第206図、写真図版64・92・128）

【位置・検出状況】調査区北西側、II B 1 eグリッドに位置する。IV層上面で検出した。後世の削平および斜面上方から崩落してきた巨礫により東側半分を消失しており、炉、西壁、床面の一部のみが残存する。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不明。不整な楕円形と推定する。【規模】長軸（302）cm・短軸（302）cm・深さ18cm

【埋土】4層からなる。（第206図3・6・7・8）黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面は炉を検出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北壁の一部のみ確認した。直立気味である。

【炉】石圓炉と推定する。削平によりほとんどを消失しているが、炉石とその掘り方、また使用面の一部が確認でき、規模は50×40cmを測る。炉内埋土は黒褐色シルトを主体とし、住居埋土と類似する。使用面は床から6cm下で構築し、焼成は弱い。掘り方は大きくななく、床面に炉石を差し込んで、構築している。

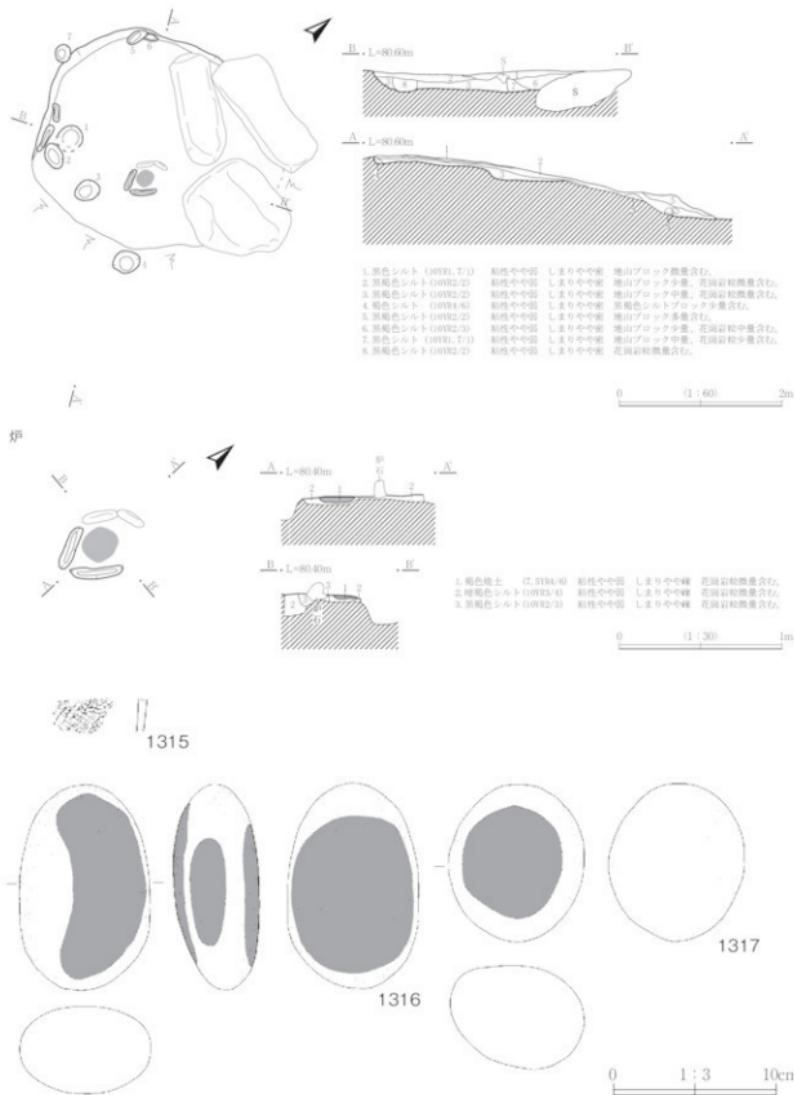
【附属施設】柱穴7個を確認した。配列からみて主柱穴とは考えられない。なおPit 7は壁よりも外側に位置するが、本遺構に付属するものと判断した。

【出土遺物】縄文土器の小片と石器が出土している。

1315は検出面から出土した土器片で、粗製である。

1316・1317は敲磨器類でどちらも円形の礫を素材とし、1316は両面と側面に、1317は片面のみに磨痕が見受けられる。

【時期】出土した土器から時期判断するのは難しい。縄文時代中期後葉～末葉と判断した。



第206図 64号住居跡・出土遺物

## (2) 住居状遺構

堅穴住居跡と平面形や規模が類似するが、炉などの付属施設が見受けられない、あるいは床面がややいびつであるものを便宜的に堅穴住居跡と分離し、「住居状遺構」と呼称する。7棟検出した。

### 1号住居状遺構（第207図、写真図版46・92）

【位置・検出状況】調査区北西側、IA10t、10uグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整な楕円形　【規模】長軸345cm・短軸350cm・深さ11cm

【埋土】2層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は調査区外の東壁を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

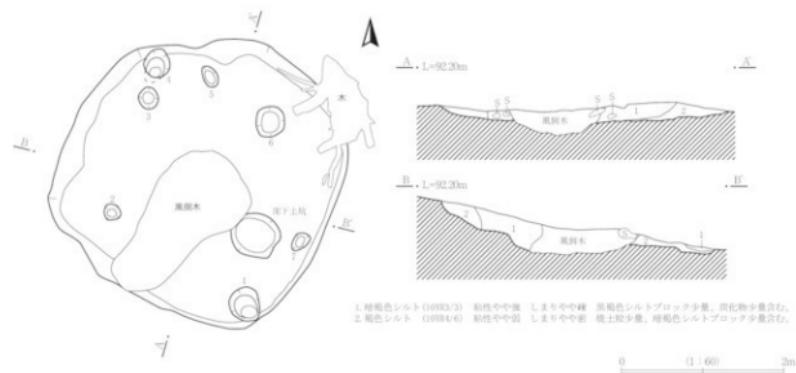
【附属施設】柱穴7個を確認した。そのうち4本（1・2・3・6）は配列から主柱穴と考える。また床面南東側に床下土坑が1個見受けられる。若干風倒木に壊されているが径50×60cmの楕円形を呈し、深さ8cmである。炉を想定して精査を進めたが、焼成の痕跡は埋土中に含まれる焼土ブロックのみで、土坑底面は確認できなかった。

【出土遺物】縄文土器、土製品が出土している。いずれも埋土中出土である。

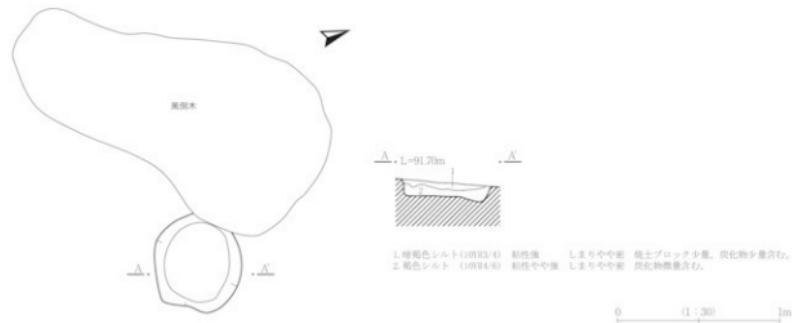
縄文土器は小片が多い。1318～1320は大木9式新段階に比定される。1321・1322は縄文のみが施された粗製である。1323は深鉢の底部片で、底面の中央がやや上げ底氣味で、縁辺には網代痕が認められる。

1324・1325は土製円盤である。1324は大木9式に比定される深鉢の胴片の転用、1325は粗製の転用か。どちらも側面は磨滅する。

【時期】出土土器から大木9式新段階と判断した。



床下土坑



第207図 1号住居状遺構・出土遺物

## 2号住居状遺構（第208図、写真図版46・92・93）

【位置・検出状況】調査区北東側、IA211、22kグリッドに位置する。IV層上面で検出した。当初、堅穴住居跡と想定して精査していたが、炉や柱穴が検出しなかったので、住居状遺構とした。

【その他の遺構との重複】なし。

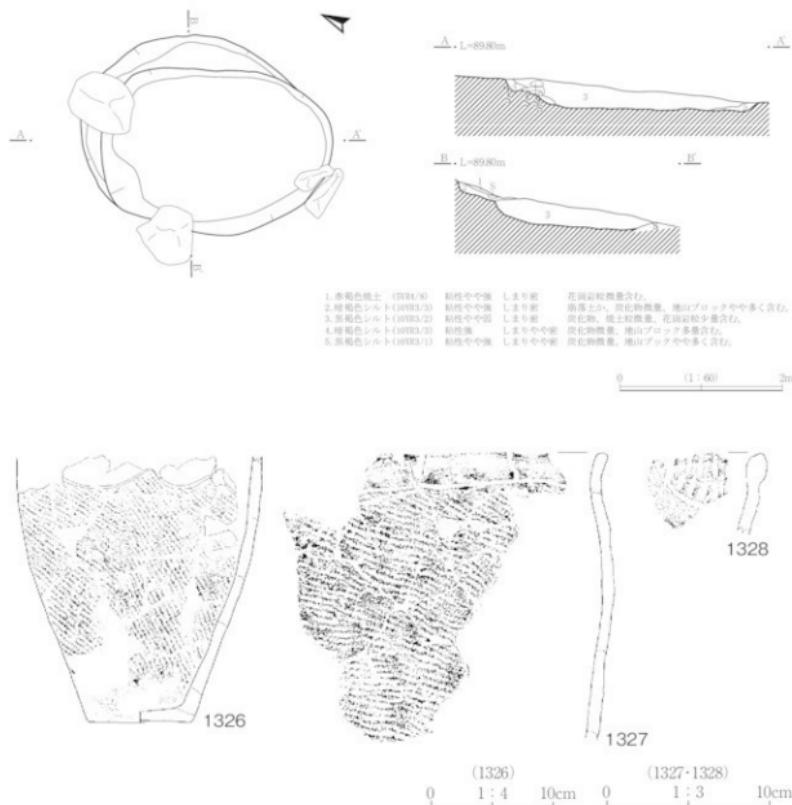
【平面形】楕円形 【規模】長軸318cm・短軸243cm・深さ31cm

【埋土】5層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【附属施設】北壁寄りの狭い範囲が壇状に一段高くなっている。柵状施設か。

【出土遺物】埋土上位から縄文土器が出土している。1326は胴部から底部が残存する。胴部半ばにわずかに弧状に巡る横位の沈線が認められる。大木10式古～中段階である。1327は粗製の大型破片で、



第208図 2号住居状遺構・出土遺物

口縁部が無文で、胴部との境には沈線が巡る。1327は口縁部片で列点状の刺突文が充填され、弧状の沈線が施文される。大木10式古段階である。

【時期】出土した土器の時期から大木10式古～中段階と判断した。

### 3号住居状遺構（第209図、写真図版46）

【位置・検出状況】調査区北東側、IA221グリッドに位置する。IV層上面で検出した。当初、堅穴住居と想定して精査していたが、炉や柱穴が検出しなかったので、住居状遺構とした。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】楕円形 【規模】長軸270cm・短軸218cm・深さ20cm

【埋土】2層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

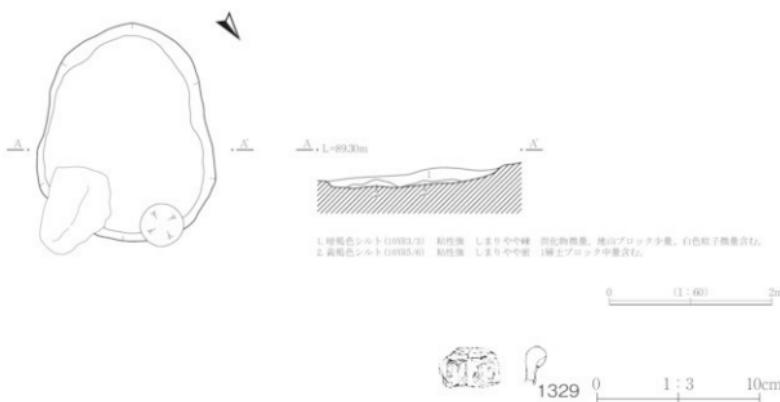
【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。やや歪である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【附属施設】なし。

【出土遺物】埋土上位から土器片が出土している。

1329は深鉢の口縁部片で、縦位に刻みが施される。細かい時期は不明だが、中期後葉～末葉の範疇に収まる。

【時期】出土土器は小片で時期判断が難しいが、縄文時代中期後葉～末葉と判断した。（須原）



第209図 3号住居状遺構・出土遺物

## 4号住居状遺構（第212図、写真図版46）

【位置・検出状況】調査区北西側、II A 2k、21、3k、31グリッド内に位置する。IV層上面で検出した。本遺構は15号住居跡との重複により、遺構の南側の一部が消失している。

【その他の遺構との重複】15号住居跡と重複しており、土層断面より本遺構がより古い段階にあると判断した。また、14号住居跡とも重複しているが、本遺構の精査を進めた後に14号住居跡の焯跡を発見し、想定される範囲が重複することが判明したため新旧関係については把握できなかった。

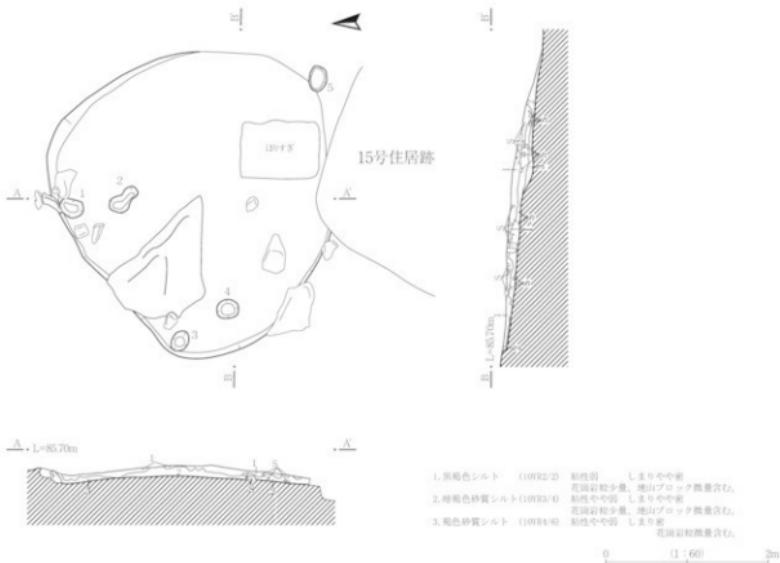
【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸348cm・短軸340cm・深さ16cm

【埋土】2層からなる。下層では暗褐色砂質シルト、上層では黒褐色シルトが主体である。どちらも花崗岩粒、地山ブロックを微量含む。どちらの層も斜面上方（西）から斜面下方（東）へと流れるような状況で堆積している。また、花崗岩の小礫を多量に包含していることからも斜面上からの土砂の流入があったことが推測される。以上のことから埋土の堆積は自然堆積であると判断している。そのため、東側の壁が流れ、立ち上がりが曖昧になっている。

【床面・壁】硬化の見られる面を床面とした。目立った凹凸は認められない。西側から東側にかけてやや緩やかに傾斜する。壁は南側を除き、ほぼ全周するが、東側のみ前述の理由から立ち上がりが判然としない。それ以外の部分に関してはほぼ直角に近い形で壁が立ち上がる。

【付属施設】柱穴5個を確認した。北西側の壁際での配置が見受けられるが、南側には見当たらないため全体の配置に関しては不明である。

【出土遺物】縄文土器が小片で出土しているが、小片で図示できない。いずれも中期後葉～末葉に比定される土器である。



第210図 4号住居状遺構

【時期】重複関係から15号住居跡よりも古い時期であると考えられる。出土した土器の年代から縄文中期後葉～末葉と判断した。  
(野中)

### 5号住居状遺構（第211・212図、写真図版47・93・128）

【位置・検出状況】調査区中央、II A 1tグリッドに位置する。IV層上面で検出した。埋土中から床面上まで斜面上方から崩落した花崗岩巨礫が堆積する。また遺構の南側は削平により消失している。

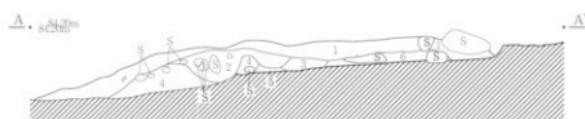
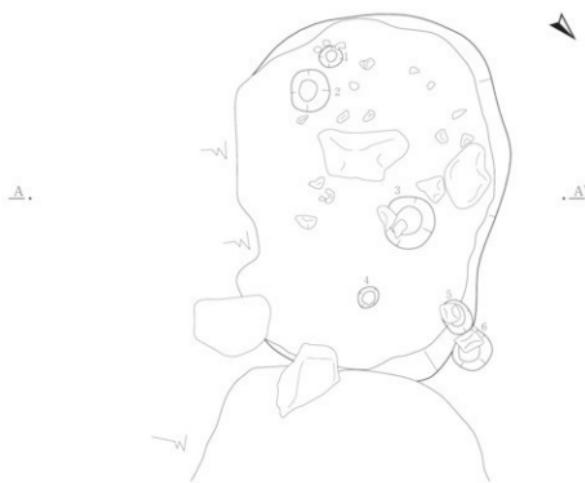
【その他の遺構との重複】6号住居状遺構と重複し、本遺構の方が古い。

【平面形】不整な楕円形　【規模】長軸(630)cm・短軸(436)cm・深さ30cm

【埋土】4層（第211図3～6層）からなる。黒～暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦である。壁は北壁のみ確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【附属施設】柱穴6個を確認した。主柱穴とは考えられない。なお6は、壁の外で検出した柱穴であ



- 1. 黒褐色土 (0992/1) 斜面崩落土か複合土。現代の木、葉多量含む。
- 2. 黒褐色シルト (0992/2) 細粒やや粘 しまりやや密 斜面崩落土。炭化物微量、礫や多く含む。
- 3. 暗褐色シルト (0992/3) 細粒、緻密 しまりやや密 炭化物微量。地山ブロック少含む。
- 4. 暗褐色シルト (0992/4) 細粒やや緻密 しまりやや密 炭化物微量。地山ブロック中量含む。
- 5. 暗褐色シルト (0992/5) 細粒やや緻密 しまりやや密 炭化物微量。
- 6. 暗褐色シルト (0992/6) 細粒やや緻密 しまりやや密 炭化物微量。礫中量含む。

第211図 5号住居状遺構

るが、本遺構に付属すると判断した。

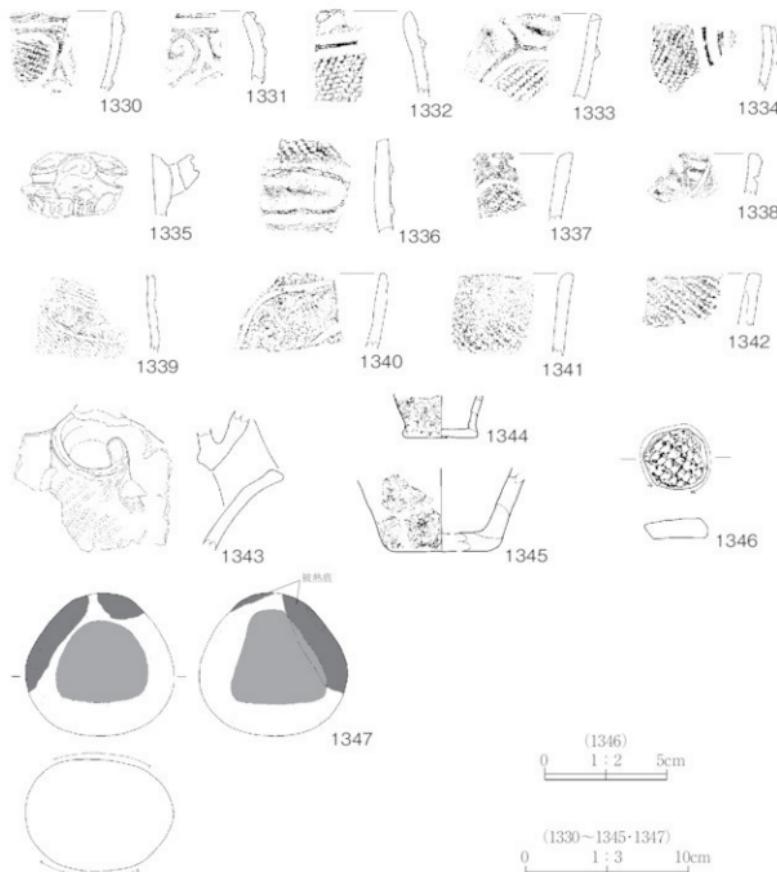
【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。

縄文土器はいずれも小片で、大木8b式（1330～1335）、大木9式新段階（1336～1338）、大木10式古段階（1339・1340）、粗製（1341～1345）である。1343は粗製であるが、注口部が付く。

土製品は土製円盤である。1346は胸部を転用しており、側面の広い範囲が摩滅する。

1347は敲磨器類で、厚みのある楕円形の砾を素材とし、両面に磨痕が見受けられ、また側面には披熱痕がある。

【時期】出土土器には時期幅があるが、最も多く出土している大木8b式期と判断した。



第212図 5号住居状遺構出土遺物

## 6号住居状遺構（第153・213・214図、写真図版47・93・128）

【位置・検出状況】調査区中央、II A 2s・3sグリッドに位置する。IV層上面で検出した。埋土中から床面上まで斜面上方から崩落した花崗岩巨礫が堆積する。また遺構の南側は削平により消失している。

【その他の遺構との重複】42・43号住居跡、5号住居状遺構と重複する。本遺構は最も新しい。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸(640)cm・短軸(435)cm・深さ40cm

【埋土】4層（第153図7～10層）からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測するが、土砂流出による堆積土の可能性がある。

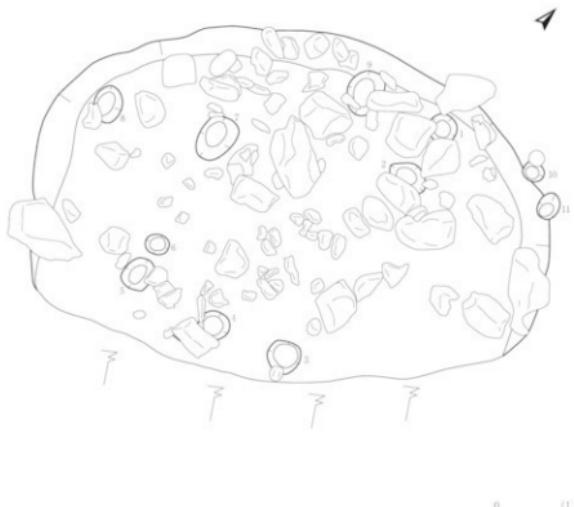
【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦であるが大小様々な礫が床面上に露出しており、ややいびつである。壁は消失した南壁を除き、全周する。大きく広がりながら立ち上がる。

【附属施設】柱穴11個を確認した。主柱穴とは考えられない。なお10・11は壁の外で検出したが、本遺構に伴うものと判断した。

【出土遺物】縄文土器、土製品、石器が出土している。

縄文土器は破片である。大木8b式（1354～1356）、大木9式新段階（1348～1353）、大木10式古段階（1357～1361）、粗製（1363～1365）である。

土製品は土製円盤である。1366～1369いずれも胴部片の転用である。1368は沈線が見受けられる。

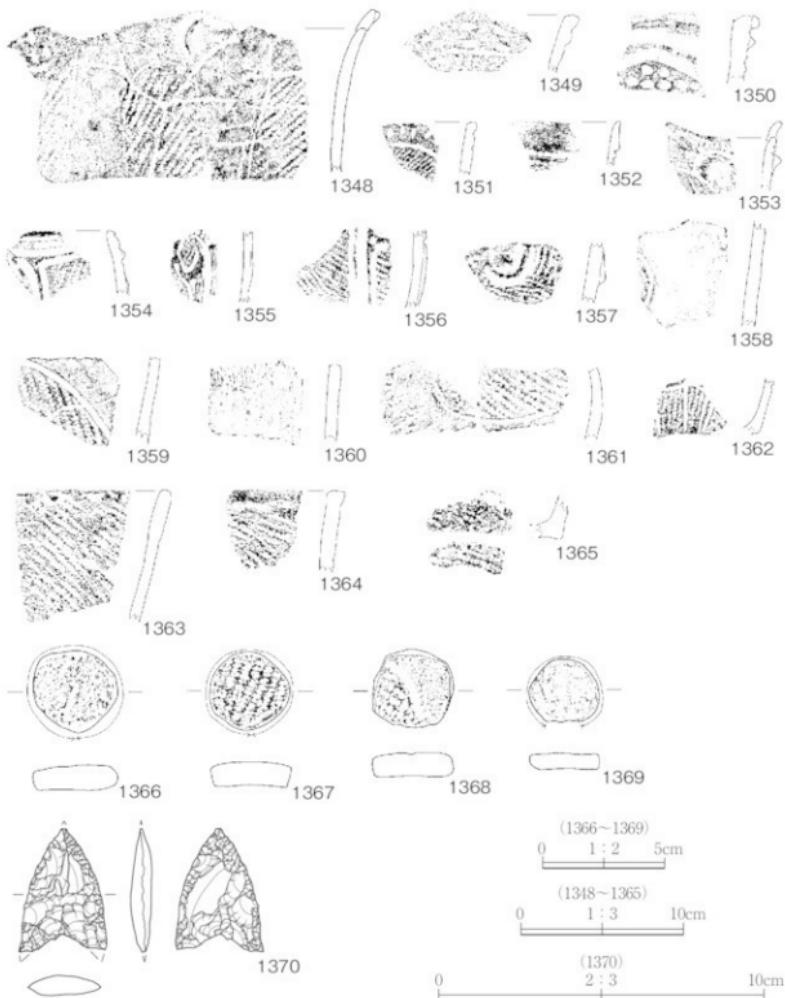


第213図 6号住居状遺構

側面打ち欠きのみで整形で、他は側面の広い範囲が摩滅する。

1370は1類の石器である。やや先端と基部をわずかに欠損する。比較的大型で、縁辺が湾曲する形態である。

[時期] 出土土器には時期幅があるが、出土量の多い大木9式新段階と判断した。



第214図 6号住居状遺構出土遺物

## 7号住居状遺構（第215図、写真図版47・93）

【位置・検出状況】調査区南側、II B 2g・3gグリッドに位置する。IV層上面で検出した。当初、堅穴住居跡を想定し、精査したが炉が認められなかった。後世の削平により消失した可能性もあるが、検出状態から住居状遺構とした。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整な楕円形 【規模】長軸478cm・短軸(350)cm・深さ8cm

【埋土】1層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

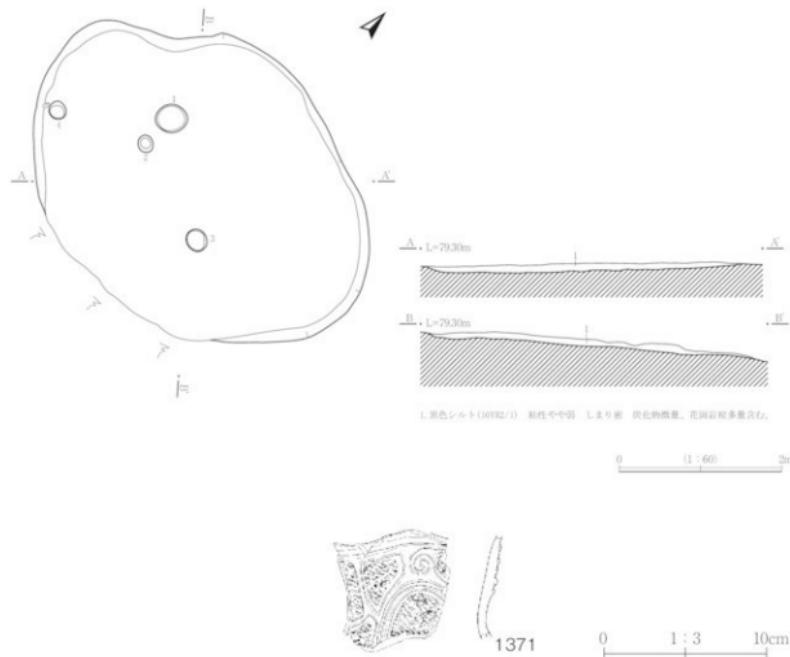
【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦であるが、西から東へと傾斜している。壁は南壁を除き全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

【附属施設】柱穴4個を確認した。配列からみて主柱穴とは考えられない。

【出土遺物】縄文土器が出土している。

1371は深鉢の口縁部片である。隆帯による渦巻文と区画文が施文される。大木9式古段階である。

【時期】出土した土器の時期から大木9式古段階と判断した。



第215図 7号住居状遺構・出土遺物

## (3) 土坑（第216～221図、第8表、写真図版47～53・93・94・128）

平成25年度の調査で35基の土坑を検出した。各土坑の属性については第8表に詳細を記しているが、後述する通り、各土坑の用途や性格については明らかにできていない。

ここでは検出した土坑全体から見た傾向を概観する。

【位置・検出状況】土坑の位置は調査区全体から見て、3か所に分布が集中する。その範囲は第1に調査区北西側（IA15u・15wグリッド周辺）で、25～28・30号土坑が相当し、やや北西に離れて46号土坑が位置する。第2は調査区中央（IA23uグリッド周辺）で37・38・43・47号土坑が相当する。第3は調査区北東側（IA23k～IIA2oグリッド周辺）で31～34号土坑が相当する。他に調査区中央よりやや南東側には41・42・45号土坑が各々離れた位置関係で分布している。いずれもIV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】各土坑の重複関係は第8表参照。全体の傾向としては、複数の土坑が重複するものは確認されなかった。また他の遺構との重複もほとんど認められない。

【平面形】全体的に楕円形を呈するものが多い。45号土坑のみ円形を呈する。他に29号土坑のように不整な方形を呈するものも認められる。

【規模】IA15u・15wグリッド周辺の土坑はやや小さい傾向にあり、長軸2m前後に収まる。他の土坑は長軸4～5mである。

【埋土】暗～黒褐色シルトを主体とし、堅穴住居跡の埋土と概ね類似する。混入物では炭化物や地山ブロックが微～少量含まれるものが多く、堆積状況から自然堆積により埋没したものがほとんどであった。また調査区中央に位置する土坑群は花崗岩礫の混入が目立っている。

【底面・壁】全体として底面形態は歪で、あまり平坦に整形されたものがない。その点が土坑群の用途・性格付けを難しくしている。壁は大きく広がりながら立ち上がるものが多い。45号土坑のみは底面は平坦で、壁は末広がりの所謂「フ拉斯コ」形を呈する。

【出土遺物】30・31・32・33・42・43・45号土坑からは縄文土器の破片が出土する。いずれも中期後葉～末葉に比定される土器である。

31号土坑からは土器片と共にUフレイク1点（1380）が出土している。また42号土坑からは石製の垂飾品（1389）が埋土中から出土している。

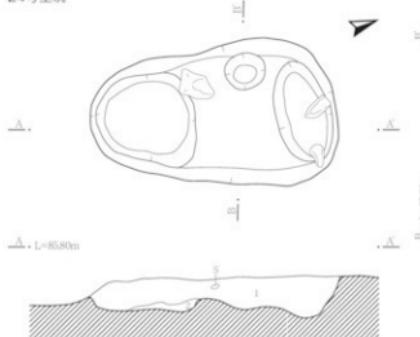
【用途】形態の特徴や出土遺物からでは、ほとんどの土坑は不明である。ただし45号土坑は所謂「フ拉斯コ状土坑」であり、貯蔵穴と考えている。

【時期】出土した土器の年代から縄文時代中期後葉～末葉と判断した。また45号土坑は埋土下位から出土した炭化物の年代測定を行っており（Ⅷ章・2）、中期末葉（ $4060 \pm 30$ yrBp）という結果を得ている。

第8表 平成25年度土坑一覧

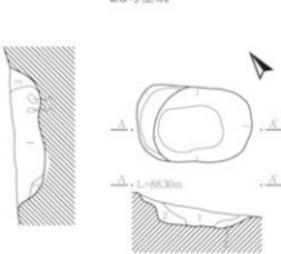
土坑名	位置	平面形	断面形	埋土の様相	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	重複関係	時期	遺物
24号土坑	I A24a	椭円形	底面がやや歪	3層に分層。 暗褐色シルト(2層)が主体。	152×89	26	無し	中期	
25号土坑	I A15a	不整な椭円形	畠状を呈し、底面は平坦	2層に分層。 暗褐色シルト(1層)が主体。	69×46	13	無し	中期	
26号土坑	I A16a	椭円形	畠状を呈し。底面は平坦	暗褐色シルト(1層)が主体。	72×54	13	無し	中期	
27号土坑	I A15w	不整な椭円形	やや円錐状を呈し、底面は傾いてが平坦。	暗褐色シルト(1層)と黄褐色シルトが芋キ。	94×50	24	無し	中期	
28号土坑	I A15v	不整な椭円形	畠状を呈し、底面は平坦	暗褐色シルト(1層)が主体。	90×45	15	無し	中期	
29号土坑	II A3o	不整な椭円形	畠状を呈し、底面は平坦	2層に分層。 暗褐色シルト(1層)と褐色細綿(2層)が半サ。	122×90	22	無し	中期	
30号土坑	I A15w	椭円形	畠状を呈し、底面は平坦	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)とにぶい黄褐色シルト(2層)が芋キ。	79×53	13	無し	中期	
31号土坑	II A3n	椭円形	底面は中央が窪む。壁は直立気味	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)が主体。	103×82	28	無し	中期	
32号土坑	I A25m	やや方形気味	やや歪で片側に傾斜する。	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)と褐色シルト(2層)が半サ。	152×110	31	無し	中期	
33号土坑	I A22i	歪な梢円形	偏平だが、東側に大きくなっている。	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)とにぶい黄褐色シルト(2層)が芋キ。	200×170	13	無し	中期	
34号土坑	II A1n	不整な長梢円形	畠状を呈し、底面は丸く窪む	3層に分層。 黒褐色シルト(1・2層)が主体。	240×113	31	無し	中期	
35号土坑	II A2n	不整な梢円形	畠状を呈し、底面は平坦で、やや傾斜する。	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)と暗褐色シルト(2層)が半サ。	106×75	12	無し	中期	
36号土坑	I A21r	不整な梢円形	畠状を呈し、底面はやや歪。	2層に分層。 暗褐色シルト(1層)と黄褐色シルト(2層)が半サ。	86×67	16	無し	中期	
37号土坑	I A23a	不整な梢円形	畠状を呈し、底面は平坦	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)が主体。	50×44	14	無し	中期	
38号土坑	II A1v	歪な梢円形	畠状を呈し、底面はやや歪。	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)が主体。	97×50	14	無し	中期	
39号土坑	II A5p	不整な長梢円形	適合形起伏を呈し、底面は平坦である。	2層に分層。 黒褐色シルトを主体とする。	163×60	36	無し	中期	
40号土坑	I B22b	歪な梢円形	畠状を呈し、底面は平坦。	2層に分層。 黒色シルト(1層)が主体。	126×76	20	無し	中期	
41号土坑	I B22m	不整な方角(隅丸)	畠状を呈し、底面はやや歪。	2層に分層。 暗褐色シルト(1層)が主体。	148×121	30	無し	中期	
42号土坑	I B21a	歪な梢円形	内縫状を呈し、底面中央で掌まる	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)と暗褐色シルト(2層)が半サ。	108×93	26	無し	中期	
43号土坑	II A1x	不整な梢円形	内縫状を呈し、底面中央で掌まる	2層に分層。 黒褐色シルト(2層)が主体。	120×91	38	38号住居	中期	
44号土坑	II A1w	不整な梢円形	畠状を呈し、底面はやや歪。	2層に分層。 黒褐色シルト(1層)が主体。	106×82	26	無し	中期	
45号土坑	I B22b	不整な梢円形	フラスク状を呈し、底面は平坦である。	2層に分層。 暗褐色シルト(1層)が主体。	195×91 F116×98	45	無し	中期	年代測定
46号土坑	I A9a	歪な長梢円形	畠状を呈し、底面はやや歪。	3層に分層。 暗褐色シルト(2層)が主体。	172×44	17	無し	中期	
47号土坑	I A23a	歪な梢円形	畠状を呈し、底面はやや歪。	1層である。 黒褐色シルトを主体とする。	88×39	16	無し	中期	

24号土坑



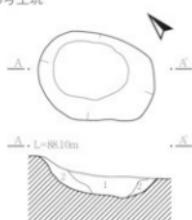
1. 増殖色シルト (10YR3/3) 黏性やや強 しまりやや密 花崗岩粉少混合。
2. 増殖色シルト (10YR3/4) 黏性弱 しまり疎 増殖色シルトブロック少混合。
3. にぶい黄増殖色シルト (10YR5/4) 黏性やや強 しまりやや疎 花崗岩粉多量混合。

25号土坑



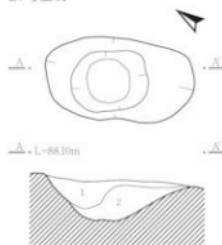
1. 増殖色シルト (10YR3/3) 黏性やや強 しまりやや密 黑褐色シルトブロック少量含む。
2. 黑褐色シルト (10YR8/0) 黏性強 しまりやや密 黑褐色シルトブロック少量含む。

26号土坑



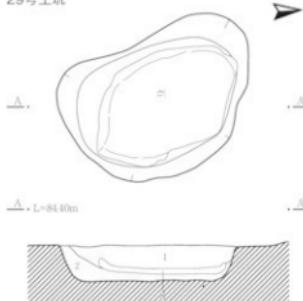
1. 増殖色シルト (10YR3/3) 黏性やや強 しまりやや密 黑褐色シルトブロック少混合。
2. 黄褐色シルト (10YR5/4) 黏性やや強 しまり疎 增殖色シルトブロック少混合。

27号土坑



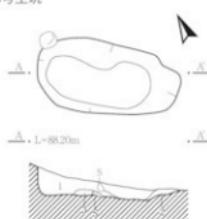
1. 黑褐色シルト (10YR2/2) 黏性やや強 しまりやや密 黑褐色シルトブロック少量含む。
2. 黄褐色シルト (10YR5/6) 黏性やや強 しまり疎 黑褐色シルトブロック少量含む。

29号土坑



1. 増殖色シルト (10YR3/3) 黏性やや弱 しまり密 地山ブロック微量含む。
2. 黑褐色細砂 (10YR4/4) 黏性弱 しまりやや密 地山砂灰土。表面により堆積した層か。

28号土坑

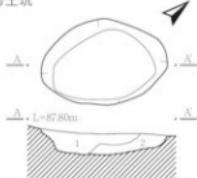


1. 増殖色シルト (10YR3/3) 黏性やや強 しまりやや密 増殖色シルトブロック少混合。
2. 黑褐色シルト (10YR4/4) 黏性弱 しまり疎 增殖色シルトブロック少混合。
3. にぶい黄増殖色シルト (10YR5/4) 黏性やや強 しまりやや疎 增殖色シルトブロック少混合。

0 (1:30) 1m

第216図 24~29号土坑

30号土坑



1. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強  
2. にかい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性やや弱 花崗岩  
黒褐色シルトブロック 少量含む。

31号土坑



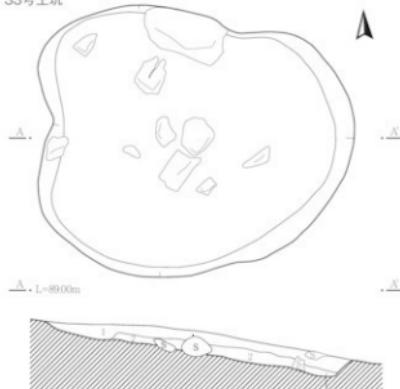
1. 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強 しまりやや弱  
炭化物微量、花崗岩少量、  
花崗岩ブロック少量含む。  
2. 増穀色シルト (10YR3/4) 粘性やや強 炭化物微量、  
地山ブロック少量、地山  
ブロック少量含む。

32号土坑



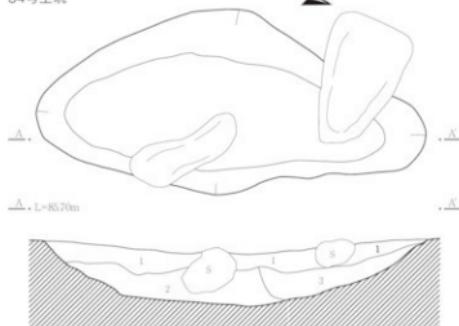
1. 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや弱 しまりやや弱 炭化物微量、  
地山ブロック中量、花崗岩少量含む。  
2. 棕褐色シルト (10YR4/6) 粘性やや強 しまりや弱 炭化物微量、  
地山ブロックや多く含む。

33号土坑



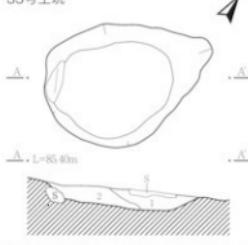
1. 増穀色シルト (10YR3/3) 粘性やや強 しまり強 炭化物微量、  
地山ブロック中量、花崗岩少量含む。  
2. にかい黄褐色シルト (10YR3/4) 粘性やや強 しまりやや弱 地山ブロック  
中量、花崗岩少量含む。

34号土坑



1. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性やや強 しまり強 炭化物微量、地山ブロック中量、  
花崗岩少量含む。  
2. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強 しまりやや弱 炭化物少量、地山ブロック少量含む。  
3. にかい黄褐色砂質シルト (10YR5/4) 粘性弱 しまり弱 炭化物微量、黒褐色シルトブロック中量、  
花崗岩少量含む。

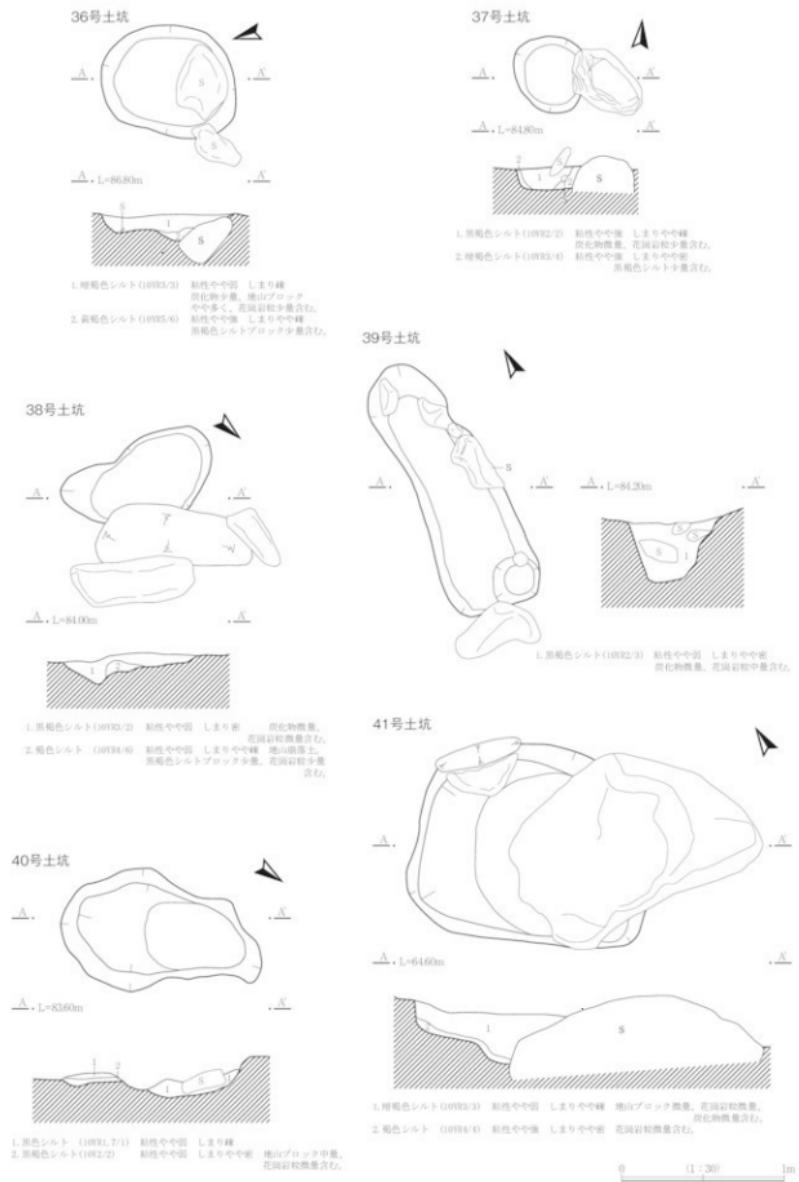
35号土坑



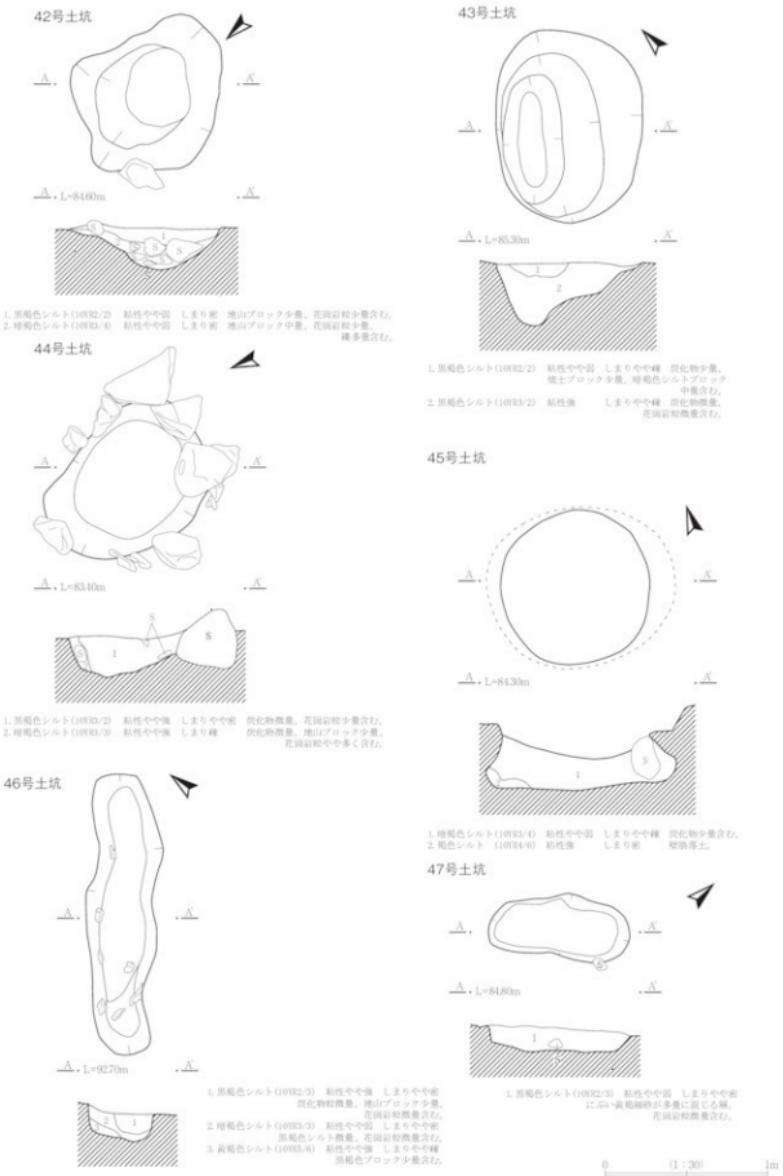
1. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物微量、  
地山ブロック少量、  
地山ブロック中量含む。  
2. 増穀色シルト (10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物  
・地山強度、しまりやや弱 炭化物  
・地山強度、花崗岩少量含む。

0 (1:200) 1m

第217図 30~35号土坑



第218図 36~41号土坑



第219图 42~47号土坑

## (4) 性格不明遺構

規模は竪穴住居跡や住居状遺構と同等でありながら、形態が不整形で、床面（底面）も正な用途不明の遺構を、便宜的に「性格不明遺構」とした。1号検出している。

## 1号性格不明遺構（第220・221図、写真図版53・94）

【位置・検出状況】調査区北東側、I A22 q グリッドに位置する。IV層上面で検出した。11号住居跡と重複し、当初、別の竪穴住居跡を想定して精査していたが、壁は一部確認できたものの平面形は歪で炉も検出しなかった。形態は住居状遺構とも異なり、また土坑にするには大型のため性格不明遺構とした。なお本遺構は南側の一部が沢跡によるものか、または斜面の崩落により消失している。

【その他の遺構との重複】11号住居跡と重複し、本遺構の方が新しいと考える。

【平面形】不整形。瓢箪状。【規模】長軸（253）cm・短軸（200）cm・深さ10cm

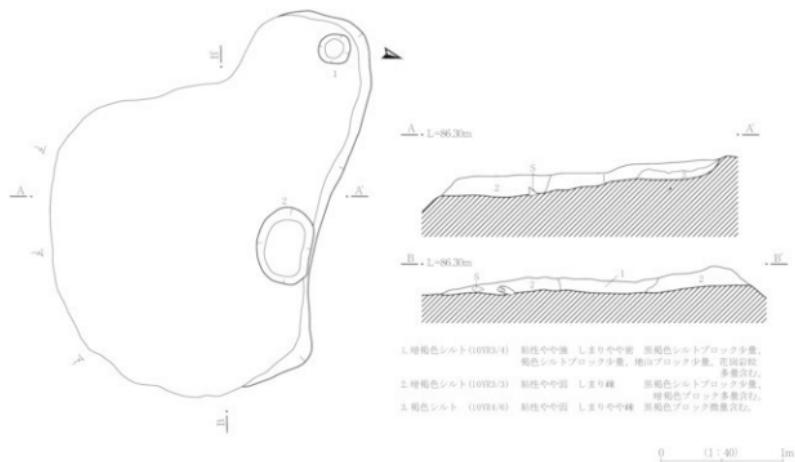
【埋土】3層からなる。暗褐色シルトを主体とし、黒褐色シルトブロックや炭化物が混入する。堆積状況からみて自然堆積と推測する。

【床面・壁】床面はIV層土が露出した面を床面とした。概ね平坦であるが、南側に向かい傾斜している。壁は北壁を検出した。直立気味である。

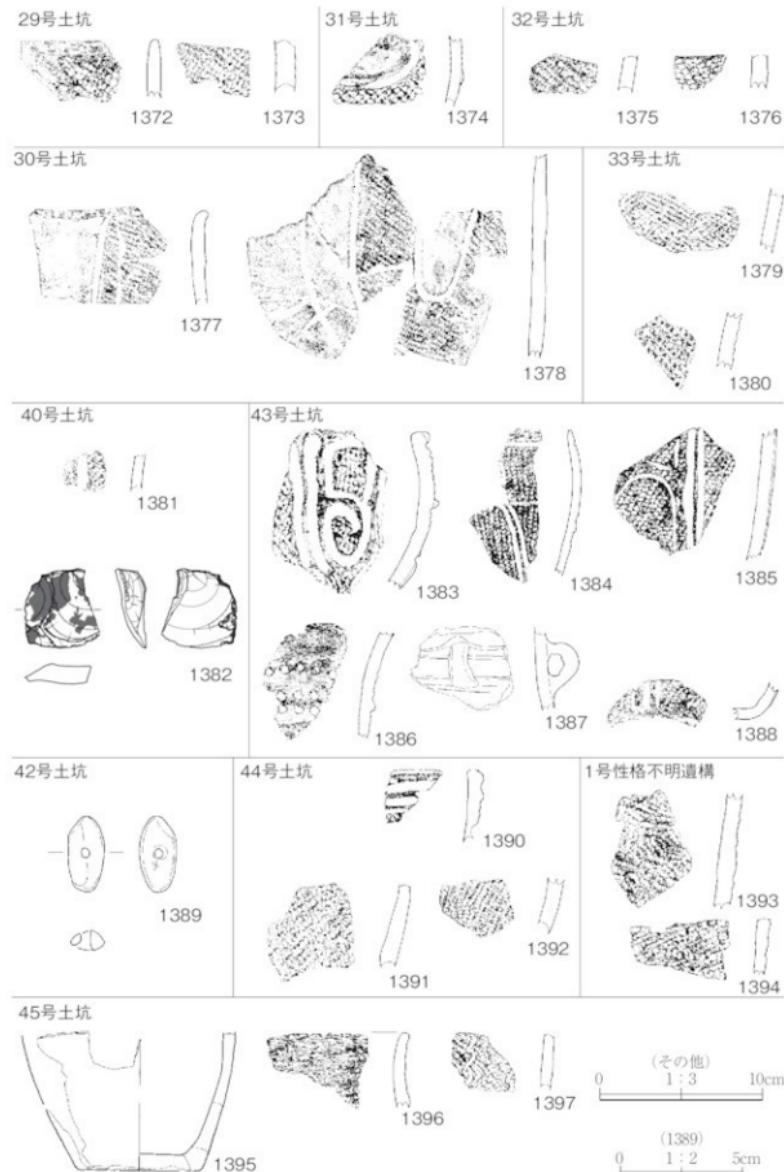
【附属施設】柱穴状の掘り込みを2個確認した。どちらも壁際であるが、柱穴かは定かではない。

【出土遺物】縄文土器が出土している。流れ込みの可能性が高い。2点図示した。1393・1394は前期に比定される土器片で、どちらも結束羽状縄文が横位に施文される。大木2a式と考える。

【時期】出土遺物は前期に比定されるものであるが、重複する11号住居跡の年代を重視し大木8b式以降と判断した。



第220図 1号性格不明遺構



第221図 土坑・1号性格不明遺構出土遺物

#### (4) 焼土遺構

堅穴住居跡の炉以外で、現地性と判断の範囲について、「焼土遺構」とし、平面と断面の観察を行った。3基検出した。

##### 2号焼土遺構（第222図、写真図版53・98）

【位置・検出状況】調査区中央、IA25xグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整形　【規模】53×24cm

【焼土状況】焼成は強く、地山（IV層）が被熱によって検出面から5cm下まで赤色化している。

【出土遺物】検出面から土器片1点（1398）が出土している。口縁部片で前期前葉（大木1～2a式）である。

【用途】屋外炉か。位置関係からみて、38号住居跡か39号住居跡と関連がある施設の可能性が高い。

【時期】土器片が出土しているが、検出面出土であり、また周囲の遺構と時期が大きく異なるので、出土遺物ではなく、位置関係から縄文時代中期後葉～末葉と推定する。

##### 3号焼土遺構（第222図、写真図版53）

【位置・検出状況】調査区中央、IA24yグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整形　【規模】65×51cm

【焼土状況】焼成は強く、地山（IV層）が被熱によって検出面から8cm下まで赤色化している。

【出土遺物】なし。

【用途】屋外炉か。位置関係からみて、36号住居跡か37号住居跡と関連がある施設の可能性が高い。

【時期】時期を示す遺物が共伴しないので定かではないが、検出面と周囲の遺構との位置関係から縄文時代中期後葉～末葉と推定する。

##### 4号焼土遺構（第222図、写真図版53）

【位置・検出状況】調査区南側、IB2gグリッドに位置する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

【平面形】不整形　【規模】32×31cm

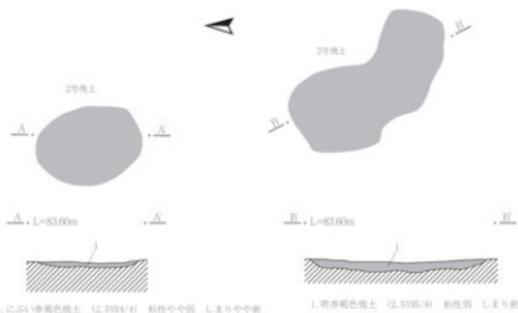
【焼土状況】焼成は強く、地山（IV層）が被熱によって検出面から10cm下まで赤色化している。

【出土遺物】なし。

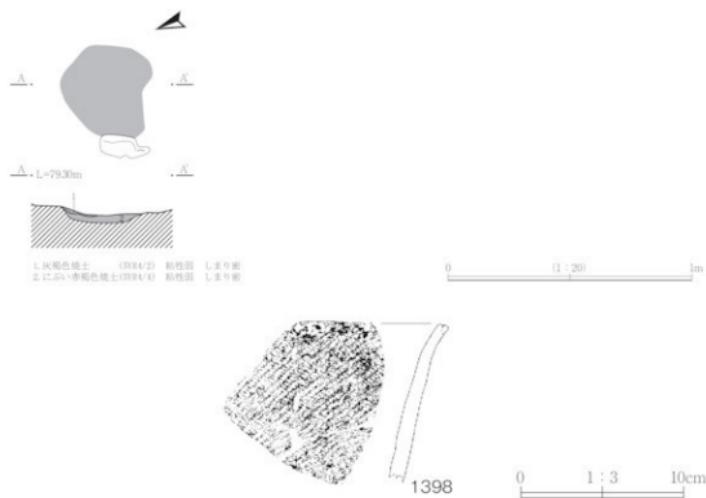
【用途】屋外炉か。位置関係からみて、60・61号住居跡か7号住居跡と関連がある施設の可能性が高い。

【時期】時期を示す遺物が共伴しないので定かではないが、検出面と周囲の遺構との位置関係から縄文時代中期後葉～末葉と推定する。

## 2・3号焼土



## 4号焼土



第222図 2～4号焼土遺構・出土遺物

### (6) 柱穴群

調査区全体から105個の柱穴を検出した。各柱穴の位置と属性については第9表に記した。ここでは調査区北西側（以下、柱穴第1集中地点と仮称する）と調査区東端（以下、柱穴第2集中地点）について記す。

#### 柱穴第1集中地点（第37図、写真図版94）

【位置・検出状況】調査区北西側、IA12w～IA17xグリッド周辺に位置するPit1～30が相当する（第37図）。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

【規模】径30～50cmの範囲に収まる。柱穴としては比較的大きい。深さは15～30cmである。

【埋土】黒褐色シルトを主体とするものが多く、埋土は竪穴住居跡の埋土に類似する。また堆積状況をみても、自然堆積のものがほとんどである。なお柱痕跡が認められるものはない。

【性格】柱穴群は斜面地に立地しており、また各柱穴の配列からみても建物を構成する柱穴とは考えられない周囲には7号・8号住居跡・25号土坑・26号土坑が位置しており、それらの遺構に関連するものではないかと推測する。

【遺物】Pit12・30・39の埋土中から土器片が出土している。1399・1401は粗製であるが、1399は深鉢の胴部片で隆筋が垂下する。大木8b式である。

【時期】Pit30出土の1399を標準とすれば大木8b式期ごろか。しかし全ての柱穴から遺物が出土しているわけではなく、また柱穴群の分布にも規則性があるわけではないので、すべてがこの時期に帰属するかは定かではない。ここでは周囲の遺構の時期から縄文時代中期後葉～末葉とする。

#### 柱穴第2集中地点（第223図、写真図版94）

【位置・検出状況】調査区東端、IIA4nグリッド周辺に位置するPit80～100が相当する。IV層上面で検出した。

【その他の遺構との重複】なし。

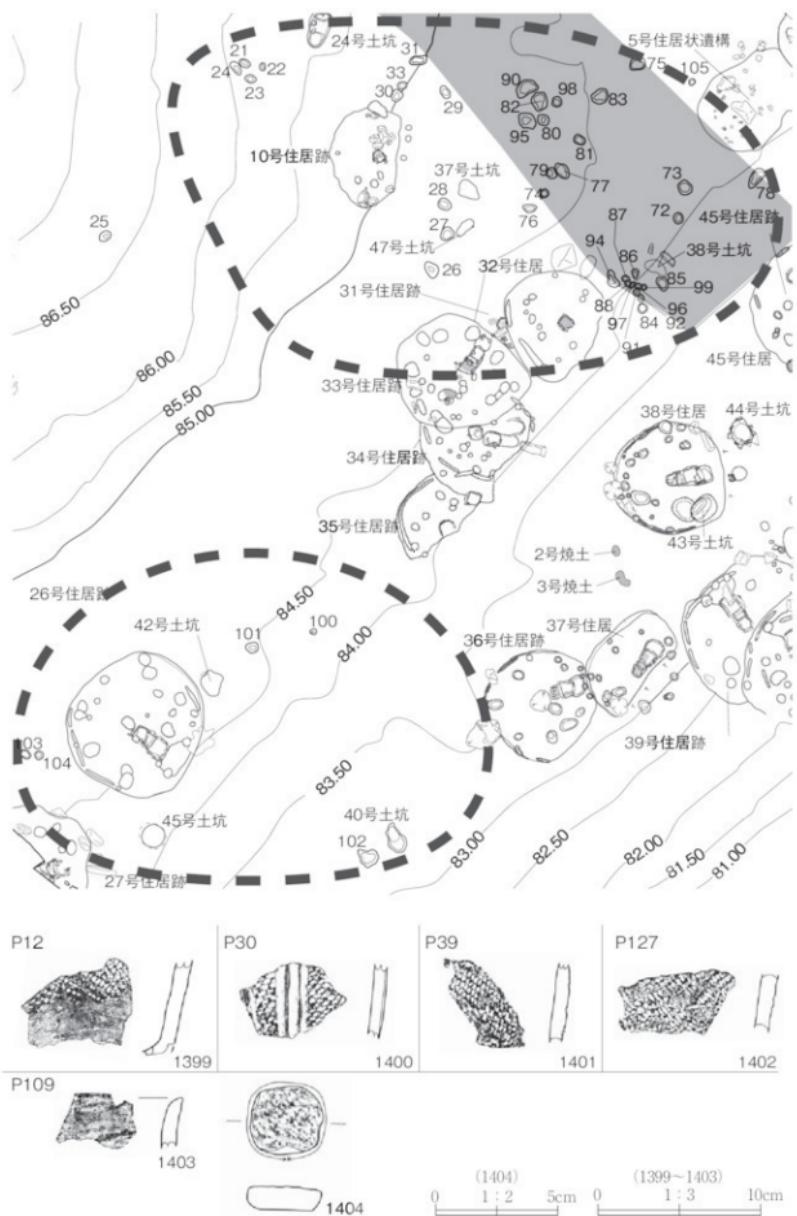
【規模】径20～30cmの範囲に収まる。深さは15～40cmである。

【埋土】黒褐色シルトを主体とするものが多く、埋土は竪穴住居跡の埋土に類似する。また堆積状況をみても、自然堆積のものがほとんどである。なお柱痕跡が認められるものはない。

【性格】立地する場所は後世の削平により地山ごと消失している。同じ場所に埋設土器が位置し、また周囲には竪穴住居群が分布する。これらのことから柱穴群は本来、竪穴住居跡の柱穴であったものが、遺構の床面周辺まで含めて削平を受け、柱穴のみが残ったものではないかと推定する。

【遺物】Pit127・109の埋土中から土器片が出土している。1402・1403はどちらも粗製である。またPit109の埋土中からは土製円盤（1404）も出土している。

【時期】出土遺物からは時期判断は難しいが、検出面と周囲の遺構の時期から縄文時代中期後葉～末葉と推定する。



第223図 柱穴第2集中地点・出土遺物

第9表 平成25年度柱穴一覧表

番号	位置 (グリッド)	色調・土質	粒性	しまり	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	混入物
1	I A15e	黒褐色シルト(DYRK2-2)	×	×	88.703	88.531	17.2	
2	I A12e	暗褐色シルト(DYRK2-3)	△	△	89.746	89.567	17.9	暗褐色シルトブロック少量、花崗岩粒少量
3	I A13w	黒褐色シルト(DYRK2-2)	×	△	89.325	89.196	12.9	地山粒少量
4	I A13w	褐色シルト(DYRK4-6)	○	○	89.236	89.006	22.0	黒褐色シルトブロック少量
5	I A15v	褐色シルト(DYRK3-3)	○	○	88.613	88.332	26.1	花崗岩粒少量
6	I A15v	褐色シルト(DYRK4-6)	△	△	87.942	87.804	13.8	
7	I A16v	褐色シルト(DYRK4-6)	○	○	87.629	87.380	24.9	花崗岩粒中量
8	I A15w	褐色シルト(DYRK2-2)	×	×	88.027	87.842	18.5	
9	I A12w	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	89.895	89.488	40.7	炭化物微量
10	I A14x	褐色シルト(DYRK3-3)	○	○	88.401	88.149	25.2	
11	I A14x	にぶい黄褐色シルト(DYRK4-3)	○	○	88.205	87.932	27.3	地山ブロック少量、暗褐色シルト粒少量
12	I A17y	暗褐色シルト(DYRK2-2)	△	△	86.425	86.034	39.1	暗褐色シルトブロック少量
13	I A16y	褐色シルト(DYRK3-3)	○	△	86.546	86.000	54.6	暗褐色シルトブロック少量、地山ブロック多量
14	I A17w	褐色シルト(DYRK3-3)	△	×	86.528	86.336	17.2	
15	I A17x	褐色シルト(DYRK3-3)	△	×	86.518	86.281	23.7	暗褐色シルト粒少量
16	I A18w	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	86.488	86.324	15.8	
17	I A17x	褐色シルト(DYRK3-3)	○	△	86.406	86.227	17.9	
18	I A17x	褐色シルト(DYRK3-3)	△	△	86.261	86.102	15.9	
19	I A17x	褐色シルト(DYRK3-3)	○	△	86.342	86.201	14.1	
20	I A21t	褐色シルト(DYRK3-3)	○	△	86.489	86.325	16.4	炭化物微量、地山ブロック少量
21	I A21t	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	△	85.896	85.707	18.9	
22	I A21s	褐色シルト(DYRK3-3)	○	○	85.832	85.682	15.0	
23	I A21t	褐色シルト(DYRK3-2)	○	△	85.874	85.705	16.9	炭化物微量、花崗岩粒多量
24	I A21s	褐色シルト(DYRK4-6)	△	×	85.915	85.717	19.8	
25	I A20u	にぶい黄褐色シルト(DYRK4-3)	×	×	86.664	86.466	19.8	
26	I A23v	黒褐色シルト(DYRK2-2)	×	×	84.644	84.358	28.8	
27	I A22u	にぶい黄褐色シルト(DYRK4-3)	△	△	84.653	84.372	28.1	
28	I A22u	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	△	84.660	84.425	23.5	
29	I A22s	褐色シルト(DYRK3-3)	○	×	84.883	84.685	19.8	
30	I A22s	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	85.126	84.758	36.2	暗褐色シルト粒少量、花崗岩粒少量
31	I A21r	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	84.950	84.720	23.0	
32	I A22r	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	85.685	85.506	18.9	
33	I A22s	褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	85.013	84.809	20.4	
34	I A23q	褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	85.94	85.803	14.0	暗褐色シルトブロック少量、地山ブロック少量
35	I A9t	褐色シルト(DYRK3-3)	△	○	92.751	92.491	26.0	褐色シルトブロック少量、炭化物微量、地山ブロック少量
36	I A8t	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	93.074	92.216	85.8	地山ブロック少量
37	I A9u	褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	92.152	91.900	25.2	花崗岩粒微量、地山ブロック少量
38	I A9t	黒褐色シルト(DYRK2-3)	○	△	92.395	92.238	15.7	暗褐色ブロック少量、地山ブロック少量
39	I A9t	黒褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	92.551	92.151	40.0	暗褐色ブロック中量、花崗岩粒微量、地山ブロック少量
40	II A4e	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	84.189	83.919	27.0	炭化物微量、花崗岩粒微量
41	II A4o	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	84.146	84.011	13.5	炭化物微量、地山ブロック中量、花崗岩粒少量
42	II A4n	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	84.050	83.806	24.4	炭化物微量、地山ブロック中量、花崗岩粒少量
43	II A4o	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	84.174	84.002	17.2	炭化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒少量
44	II A2n	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	85.087	84.852	23.2	炭化物微量、地山ブロック中量、花崗岩粒微量
45	II A4o	暗褐色シルト(DYRK3-3)	○	○	84.169	83.869	30.0	炭化物微量、地山ブロックや多く、花崗岩粒微量
46	II A4n	褐色シルト(DYRK3-3)	○	○	84.018	83.787	23.1	炭化物微量、地山ブロック中量、花崗岩粒少量
47	II A6p	暗褐色シルト(DYRK3-2)	○	△	83.808	83.432	37.6	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
48	II A4o	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	84.150	83.818	33.2	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒少量
49	II A4o	褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	84.190	84.072	11.8	炭化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒少量
50	II A1n	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	85.889	85.653	23.6	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
51	II A1n	褐色シルト(DYRK3-2)	○	△	85.674	85.304	37.4	炭化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒微量
52	II A5m	黒褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	83.756	83.591	16.5	炭化物微量、花崗岩粒少量
53	II A4n	褐色シルト(DYRK3-2)	△	○	83.950	83.774	17.6	炭化物微量、地山ブロック中量
54	II A2n	黒褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	85.087	84.836	25.1	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒中量
55	II A2n	褐色シルト(DYRK3-2)	○	△	85.339	84.982	35.7	炭化物微量、地山粒微量、花崗岩粒微量
56	I A23i	褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	87.822	87.491	33.1	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒少量
57	I A23k	褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	87.951	87.343	60.8	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
58	II A4r	褐色シルト(DYRK3-2)	○	△	83.694	83.403	29.1	炭化物微量、地山ブロック少量
59	II A4r	褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	83.915	83.664	36.1	炭化物微量、花崗岩粒少量
60	II A3q	褐色シルト(DYRK2-2)	△	○	83.884	83.695	19.3	炭化物微量、花崗岩粒少量
61	II A4q	褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	84.008	83.877	13.1	炭化物微量、花崗岩粒少量
62	II A4o	褐色シルト(DYRK2-2)	○	△	84.136	83.740	39.6	炭化物微量、花崗岩粒少量
63	II A4o	褐色シルト(DYRK2-2)	○	○	84.153	84.036	11.7	炭化物微量、花崗岩粒少量
64	II A4o	褐色シルト(DYRK2-0)	○	○	84.130	83.791	33.9	炭化物微量、花崗岩粒少量
65	II A4o	褐色シルト(DYRK2-1)	○	○	84.144	83.573	57.1	炭化物微量、花崗岩粒少量
66	II A4o	褐色シルト(DYRK2-2)	○	△	84.124	83.697	42.7	炭化物微量、花崗岩粒少量
67	II A5o	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	83.968	83.778	19.0	炭化物微量、地山ブロック少量
68	II A5o	黒褐色シルト(DYRK2-3)	○	○	83.940	83.830	11.0	炭化物微量、地山ブロック少量
69	II A5o	褐色シルト(DYRK3-2)	○	○	84.095	83.906	15.9	炭化物微量、地山ブロック微量、花崗岩粒微量
70	II A4o	黒褐色シルト(DYRK3-2)	△	○	84.095	83.833	26.2	炭化物微量、地山粒微量、花崗岩粒少量

番号	位置 (グリッド)	色調・土質	粘性	しまり	上層標高 (m)	下層標高 (m)	深さ (cm)	混入物
71	II A 4 o	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	△	84.102	83.873	22.9	炭化物微量、地山ブロック中量、花崗岩粒少量
72	II A 1 u	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.742	83.581	16.1	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
73	II A 1 u	黒褐色シルト(0YRK2-2)	○	○	83.794	83.584	21.0	炭化物微量、花崗岩粒少量
74	I A24u	黒褐色シルト(0YRK2-2)	○	△	84.329	84.075	25.4	炭化物微量、花崗岩粒微量
75	I A25t	黒褐色シルト(0YRK3-2)	△	○	84.069	83.760	30.9	炭化物微量、花崗岩粒少量
76	I A24u	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	84.373	84.133	24.0	炭化物微量、花崗岩粒少量
77	I A24u	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	△	84.247	83.928	31.9	炭化物微量、花崗岩粒少量
78	II A 1 u	黒褐色シルト(0YRK2-3)	△	○	83.716	83.485	23.1	炭化物微量、花崗岩粒少量
79	I A24u	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	84.235	84.070	16.5	炭化物微量、花崗岩粒微量
80	I A24 t	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	84.550	84.155	39.5	炭化物微量、地山ブロック少量
81	I A25 t	黒褐色シルト(0YRK3-2)	○	△	84.308	84.056	25.2	炭化物微量、花崗岩粒中量
82	I A24 t	黒褐色シルト(0YRK3-2)	△	△	84.548	84.257	29.1	炭化物微量、花崗岩粒中量
83	I A25 t	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	△	84.197	83.853	34.4	炭化物微量、花崗岩粒少量
84	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.731	83.561	17.0	炭化物微量、花崗岩粒少量
85	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.773	83.536	23.7	炭化物微量、花崗岩粒中量
86	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.854	83.672	18.2	炭化物微量、花崗岩粒中量
87	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-2)	○	○	83.894	83.742	15.2	炭化物微量、花崗岩粒微量
88	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.874	83.674	20.0	炭化物微量、花崗岩粒少量
89	II A 5 o	黒褐色シルト(0YRK2-2)	○	○	83.973	83.702	27.1	炭化物微量、地上粒微量、地山ブロック少量、花崗岩粒少量
90	I A24t	黒褐色シルト(0YRK3-2)	○	○	84.659	84.289	27.0	炭化物微量、花崗岩粒微量
91	I A25v	黒褐色シルト(0YRK3-2)	△	×	83.724	83.459	26.5	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒中量
92	II A5e	黒褐色シルト(0YRK3-2)	○	○	83.778	83.594	18.4	炭化物微量、花崗岩粒少量
93	II A5e	黒褐色シルト(0YRK3-2)	△	△	83.970	83.501	46.9	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
94	I A25v	黒褐色シルト(0YRK3-2)	○	○	83.986	83.775	21.2	炭化物微量、地上粒微量、花崗岩粒微量
95	I A24 t	黒褐色シルト(0YRK2-2)	△	○	84.640	84.203	43.7	炭化物微量、花崗岩粒微量
96	I A25v	黒褐色シルト(0YRK3-2)	○	△	83.815	83.637	17.8	炭化物微量、地中量
97	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-2)	○	○	83.764	83.627	13.7	炭化物微量、花崗岩粒微量
98	I A24 t	黒褐色シルト(0YRK2-2)	○	○	84.504	84.230	27.4	炭化物微量、花崗岩粒微量
99	I A25v	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.764	83.619	14.5	炭化物微量、花崗岩粒微量
100	I A22y	黒褐色シルト(0YRK2-2)	△	○	84.338	84.188	17.0	炭化物微量、地山ブロック少量
101	I A21y	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	84.430	84.222	20.8	炭化物微量、地山ブロック少量、花崗岩粒微量
102	I B22y	黒褐色シルト(0YRK3-3)	○	○	83.311	83.010	30.1	炭化物微量、花崗岩粒や多い
103	I B19b	黒褐色シルト(0YRK2-3)	△	○	84.625	84.385	24.0	炭化物微量、地山ブロック少量
104	I B19b	黒褐色シルト(0YRK2-3)	×	○	84.590	84.291	29.9	炭化物微量、花崗岩粒微量
105	I A25 t	黒褐色シルト(0YRK2-3)	○	○	83.978	83.757	22.1	炭化物微量、花崗岩粒微量

## (7) 遺構外出土遺物（第226～228図、写真図版54・55・61～131）

平成25年度調査区では、遺構内からの出土遺物が多い一方で、遺構外からの出土遺物も決して少なくなない。それらは主に縄文土器であるが、時期は主な遺構の時期である中期にとどまらず、前期初頭から後期まで幅広くみつかっている。

前述の通り、本遺跡周辺では縄文集落の廃絶後、数回にわたり小規模な土砂崩れが起きていたと推定できる現象がみられ（遺構検出面上に散乱する巨礫など）、その土砂崩れを起因として、多くの堅穴住居跡の壁や遺構上部が斜面下方へと崩落、流失している。そのため遺構内には別地点から流れてきたと考える遺物群が混入し、なかには中期の遺構内からも前期の遺物が出土している。前期の遺物に関しては平成25年度調査で該期の遺構は確認されていないので、本遺跡の北側斜面上方にその時期に相当する遺構群が存在するのではないかと考え、そこから流れてきたものと推測する。

以下、時期毎に概観する。

## 〔縄文土器（前期）〕

縄文時代前期に比定する土器を240点図示した。上述の通り、前期の遺物は、中期の遺構内からも出土しているが、それらは流れ込みによる遺構内への混入と判断し、遺構外出土の範疇に納めている。以下に記す前期の遺物には遺構内から出土したものがあるのはそのためである。

1405～1414は前期初頭の範疇に納めた土器群である。底部尖底であり、1407、1414のように丸底気味のものも見受けられる。1415は内外面ともに斜行単節縄文が施文される。この1点のみ出土した。1416は貝殻腹縁文ではないかと考える文様が施文される土器で、このような文様の土器もこの1点のみである。摩滅が激しく文様が明瞭ではない。1405～1416はいずれも繊維が混入する。形態や文様の特徴から早期末葉に遡る可能性もあるが、小片で定かではない。

1451～1549、1554～1563は斜行縄文が施文される一群で、今回出土した前期土器の中で最も多く出土している。どれも繊維を比較的多く混入する。施文される縄文は主に単節斜行縄文であるが、0段多条縄文を施文する土器（1483・1518・1556など）も見受けられる。また斜行縄文を施文し、口唇部や口縁部には刻みや押圧が巡る土器（1452～1484）が特に多い傾向がある。

点数はわずかであるが、縱位の「縄の束」回転文を施文する土器（1614・1615）も見受けられる。前期初頭に比定すると判断した。

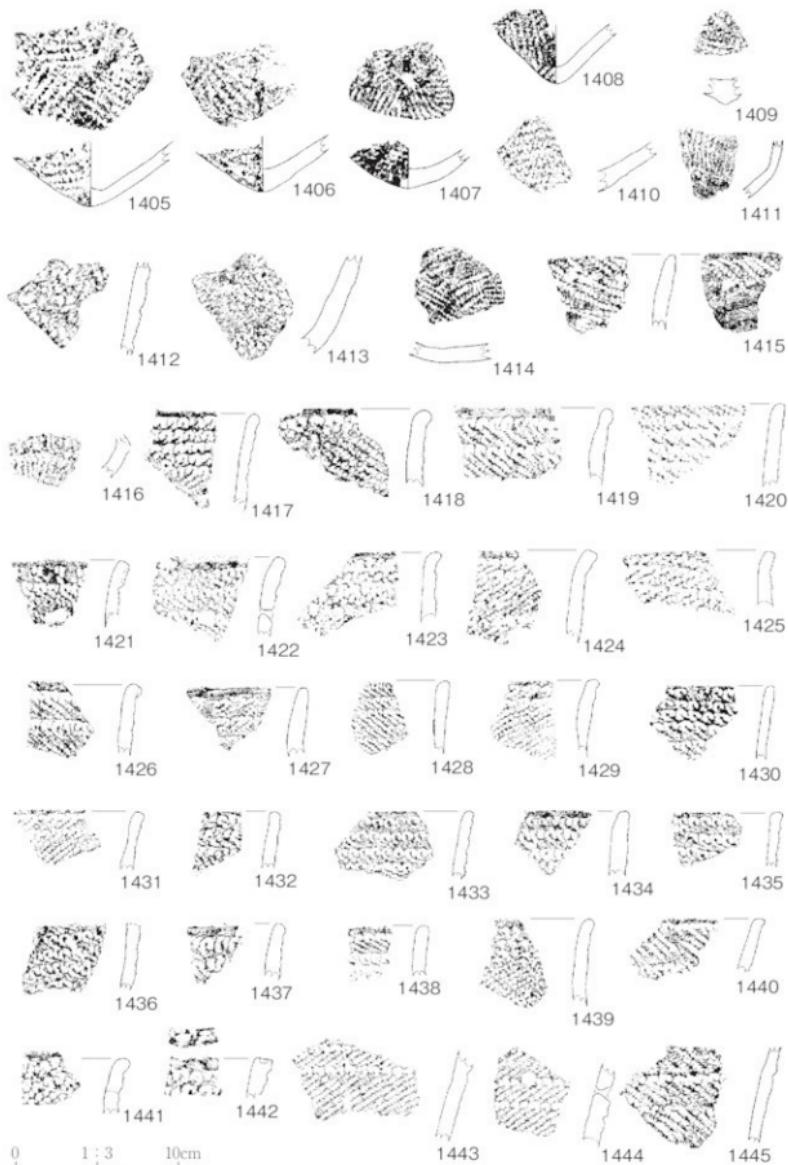
1417～1450は、大木1式の範疇に含めた、口縁部に環付末端回転文、所謂「ループ文」が横位に施文される一群で、こちらも比較的まとまって出土している。繊維が多く混入する。環付末端縄文が多段化する土器（1417など）や口唇直下のみ（1418など）、やや間を空け、複数列施文される土器（1419など）というように、細かくみていくと、施文方法にもバラエティーが見受けられる。

1564・1565・1573・1585・1587なども大木1式の範疇に含んだ土器群で、繊維が混入し、非結束羽状縄文が施文される。上述の環付末端回転文が施文される一群に比べると、出土量は少ない。

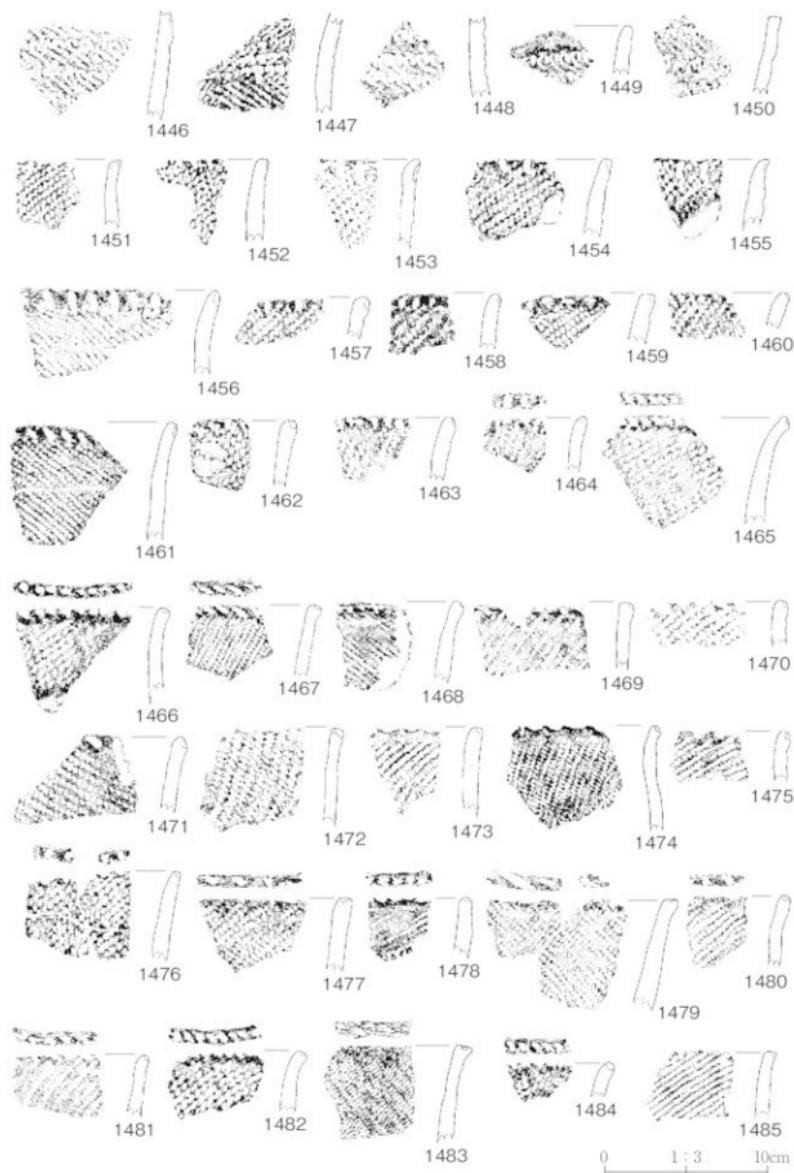
1601～1605は口縁部に結節回転文が施文される一群で、大木2a式に比定される。出土量はわずかで小片が多い。この時期の範疇に含まれると考える単軸絡条体第5類（網目状撲糸文）が施文される土器は少なく、図示した1617・1618ほどしか出土していない。

1566～1572・1574・1576～1586などは結束羽状縄文を施文する一群で、大木2a式の範疇に含むと判断したが、上述の該期土器群と比べると出土量は多いが、全体的には少ない。また1611～1613が組紐を回転施文した土器で、該期に含めた。

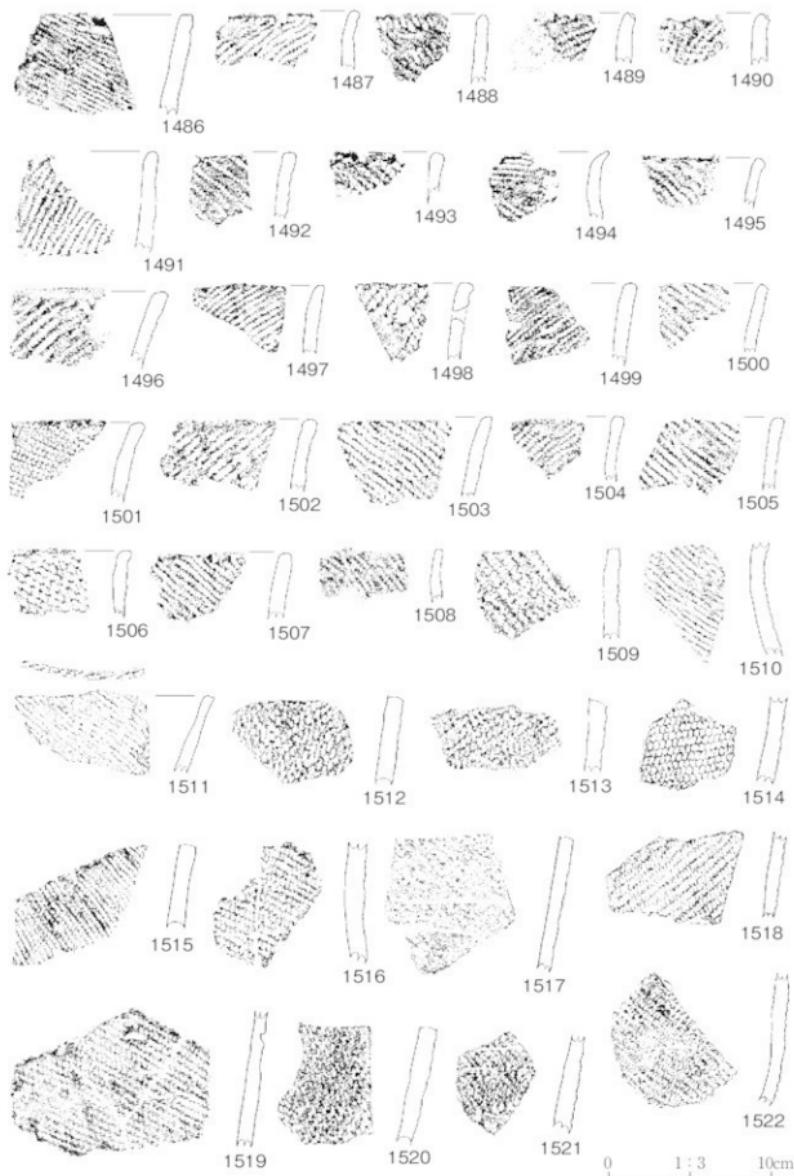
1621～1628は前期中葉の範疇に収まる土器である。1624～1627は斜行縄文や条線を地文とし、沈線



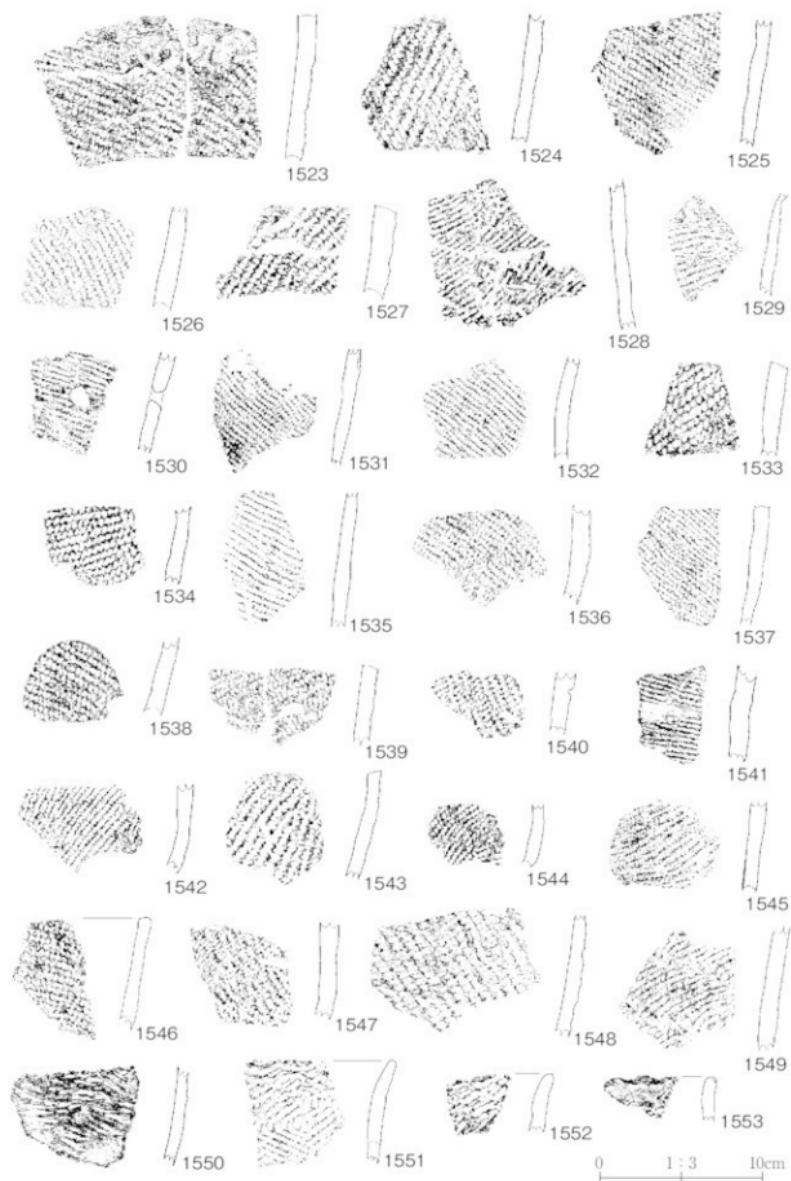
第224図 遺構外出土遺物（1）



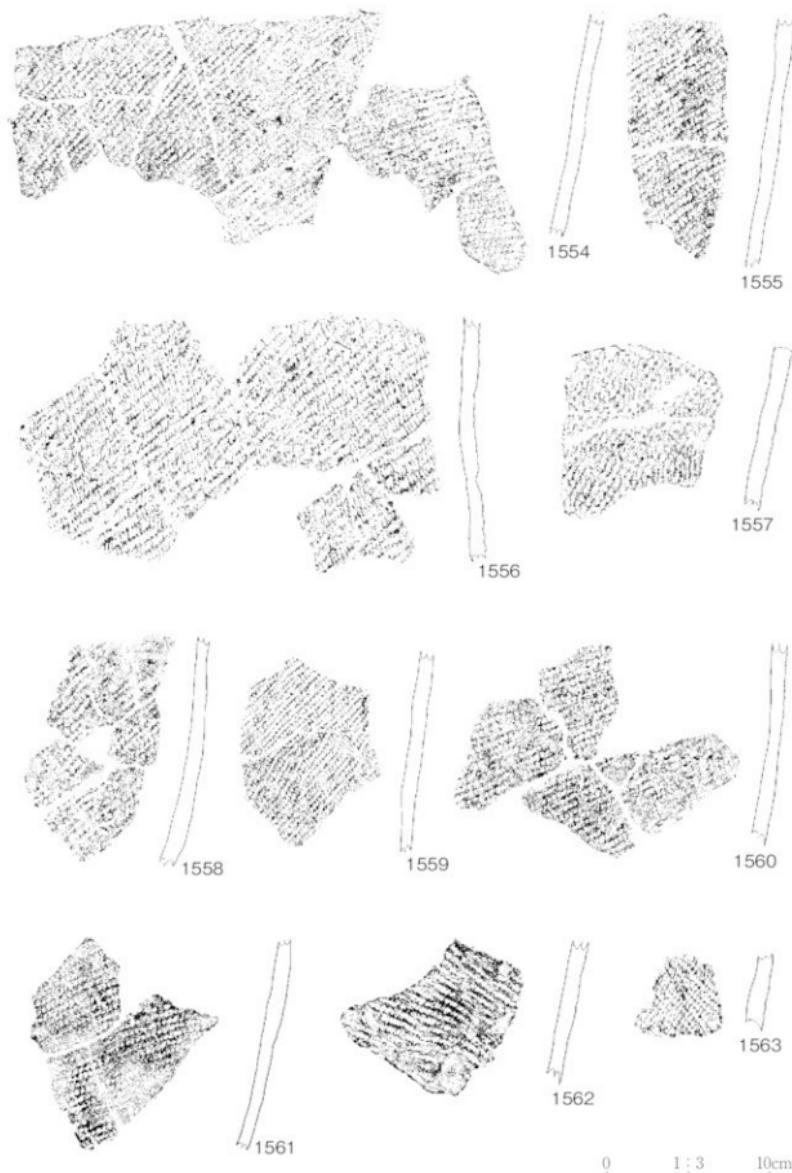
第225図 遺構外出土遺物（2）



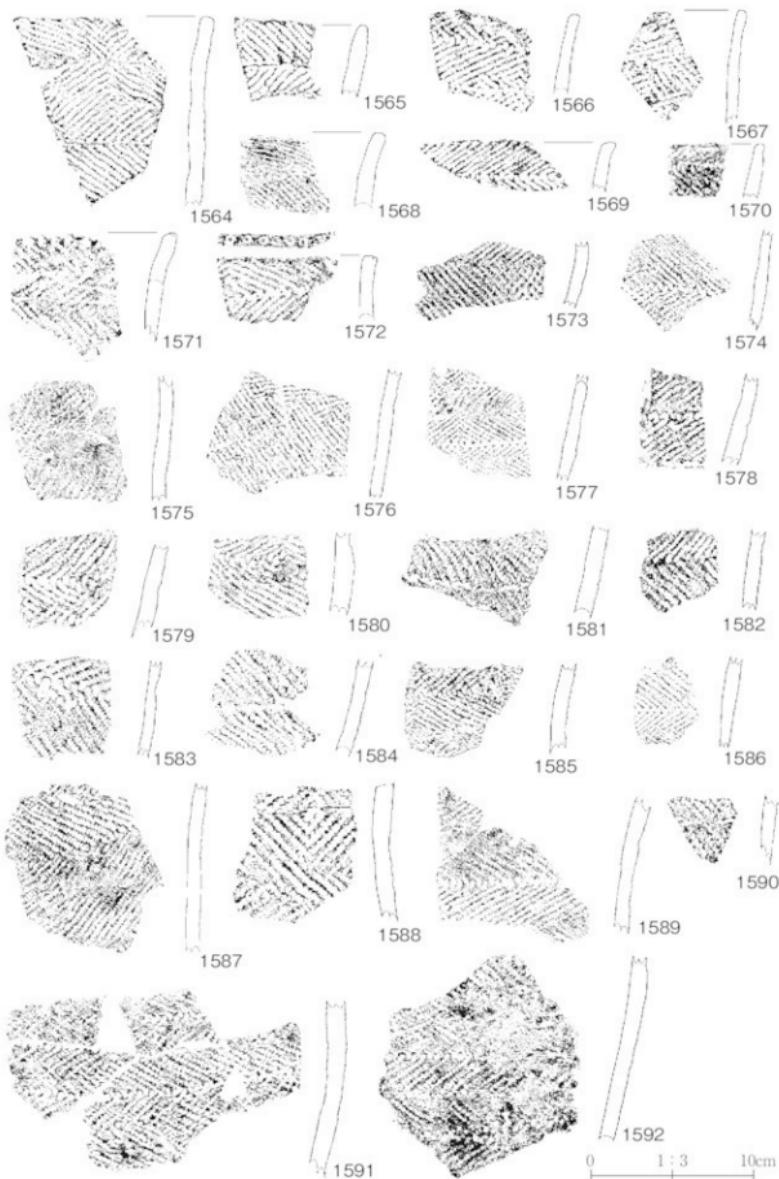
第226図 遺構外出土遺物（3）



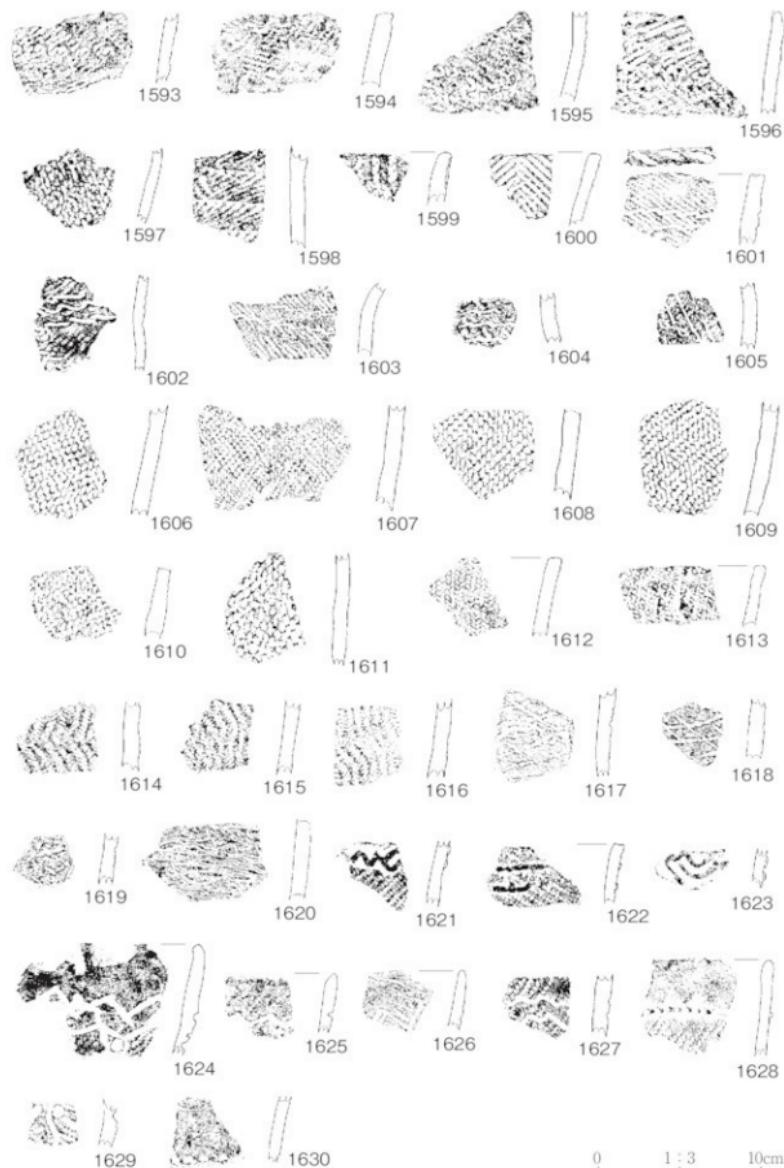
第227図 遺構外出土遺物（4）



第228図 遺構外出土遺物（5）

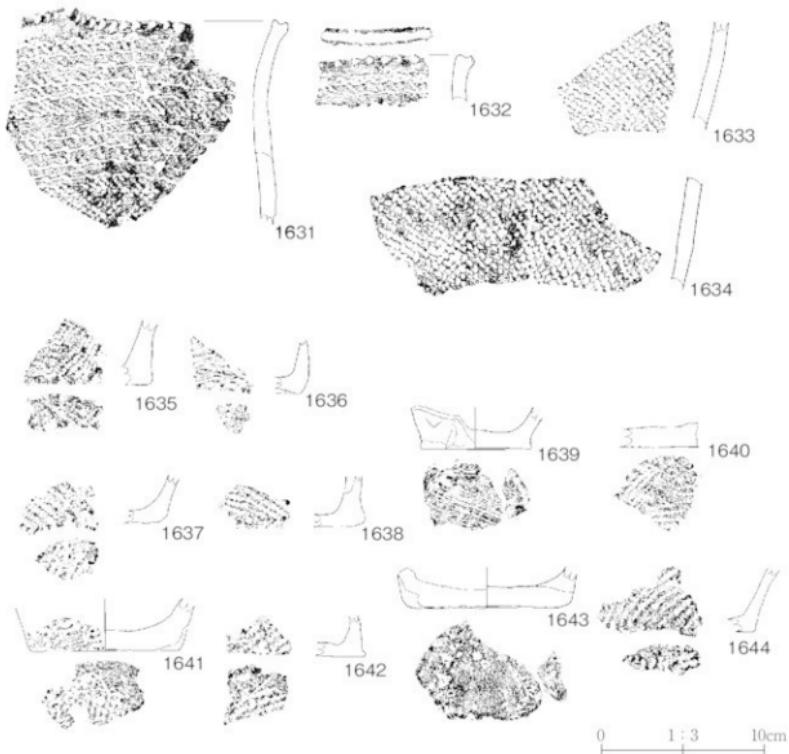


第229図 遺構外出土遺物（6）



0 1 : 3 10cm

第230図 遺構外出土遺物（7）



第231図 遺構外出土遺物（8）

による鋸歯状文が横位に巡る。また1628は刻みを施した貼付隆帯が横位に巡る。大木3式と判断した。1621～1623は波状あるいは曲線状の貼付隆帯が施される一群で大木4式と判断した。

1631～1634は白座式とした一群である。繊維を含まず、焼成が良好である。口端部の刻み、胴部上半の結節回転文、過半の組紐を特徴とする。

1635～1644は深鉢の底部片の中で繊維の混入が見受けられ、前期初頭から大木2a式の範疇に収まる。底面には繩文圧痕が残るもの（1637・1640・1641～1644）や条痕が見受けられるもの（1639）がある。

#### 〔縄文土器（中期）〕

遺構外ほぼ全域から出土している。特に調査区中央から東側にかけて、遺構上面にⅢ層土と考える「包含層」が堆積しており、この層中から多く土器が出土している。出土遺物は土器片が多いが、比較的大きく、また摩滅があまり進んでいない。本来であれば竪穴住居跡などにあったものが、前述の土砂崩れにより遺構が壊され、遺構埋土が流失したため、遺構群の外へと散在したことが想定される。

なかには1727～1735のように全体の形態が分かるものも出土している。

209点図示した。

1645～1648は大木8a式と判断した。1645は深鉢口縁部で、内湾する形態。口縁部は横位の楕円形に区画し、区画内に縄文原体を押す。この文様特徴を有する土器はこの1点である。1646～1648も口縁部片で、横位に区画し、斜行縄文を地文とし、隆帯が付く。

1649～1668は大木8b式と判断した。出土量は少ない。口縁部～胴部に隆帯による渦巻き文が付き、また渦巻き文から1～2条を単位とした隆帯が派生する文様である。いずれも破片であるが、口縁部が内湾する形態（1649など）、直立気味に広がり口縁部がわずかに広がる形態（1650など）が見受けられる。

1669～1680・1735は大木9式古段階と判断した土器群で、口縁部～胴部にかけて隆帯による縱位の区画文が施文される。典型的なものは1669・1670で、ほかはいずれも小片で、大木8b式に含まれる土器もあるかもしれない。1735は形態復元できた破片で、胴部がすぼまり、口縁部で大きく外反する形態である。口縁部は無文、胴部には隆帯による方形に近い区画文が施文される。

1681～1716・1718・1727・1728は大木9式新段階と判断した。大木9式新段階は出土量が多く、また1681や1727・1728のように大型破片や形態が復元できる土器もある。口縁部～胴部に沈線による楕円形あるいは逆「U」字状の区画文が縱位に巡る。区画内は磨消技法による縄文が施文される土器が多いが、縄文の代わりに刺突文が充填される土器（1697・1698）もある。また区画文の上に横位に複数条の沈線（1696）や波状沈線文が巡る土器（1681）が見受けられ、ほかに複数の区画文の間に沈線による緩い渦巻き文が施文される土器（1687・1713）もある。1723は該期で形態が復元できた土器である。口縁部がわずかに内湾し、胴部がくびれる。全体的に歪みのある土器で、片側へ傾斜している。1728は口縁部～胴部上半が残存する。口縁部がすぼまり、無文である。胴部は膨らみ、楕円形の区画文が施文される。

1729・1730・1732・1734は大木10式古段階と判断した。胴部上半の区画文が曲線化（1729・1732）、あるいは渦巻き状（1730・1734）になり、胴部下半には区画のための沈線文が横位に巡る。1729・1730は波状口縁を呈する。1732は注口土器である。胴部下半の沈線が胴部上半の区画文に連結しており、まだ大木9式新段階の名残が見受けられるものと考える。1734はほぼ完形の小型深鉢で胴部が膨らむ形態である。口唇部が鈎状に広がり、縦位に9箇所穿孔されている。

1733・1737～1742・1746・1753は大木10式中段階と判断した。比較的大きな破片である。この時期は今回最も多くの遺構を検出し、遺構内からも該期に比定される土器が多く出土している。出土量全体からみれば最も多い時期であるが、遺構外出土に限ると決して多くはない。口縁部が外反する土器（1737～1740）と内湾する土器（1741）が見受けられる。区画文は主にクランク状を呈し、複数のクランク状区画文が横位で連鎖状に描かれている。1733は形態の復元できた土器であるが、口縁部～胴部上半は欠損する。胴部下半を区画する波状沈線が巡り、短い鰐状の突起が付く。

1743・1747・1750・1763・1764は大木10式新段階と判断したが、見受けられる文様のみで判断しているので、大木10式中段階に含まれる可能性もある。1747・1763・1764は微隆帯により区画文が描かれている。1750は胴部下半に小さな円形の区画文が見受けられる。

1799～1853は粗製および時期不明の土器で、縄文のみ、あるいは無文の土器である。施文される縄文は主に斜行縄文であるが、1802・1803・1832は単軸絡条体第1類を縦位に回転し施文している。底面では条痕が認められるもの（1803・1847）、縄文原体の圧痕（1804・1805・1846・1848）、木葉痕（1806・1807・1845）が見受けられる。1819・1820はミニチュア土器の範疇か。底がやや高くなっている

おり、胴部は丸く膨らむ形態と推定する。

#### 〔土製品〕

遺構外から122点の土製円盤が出土している。出土位置に偏りはなく、遺構の分布する周辺で散在的に出土している。122点のうち4点は纖維が混入しており、前期初頭～前葉の範疇に収まるものと推定するが、他は見受けられる文様から中期大木9～10式の範疇と考えている。

51点図示した。いずれも深鉢の胴部片を転用しており、打ち欠きのみのもの（1855・1858・1862・1864・1869・1877・1881・1890・1902）も見受けられるが、概ね側面には一部あるいは全周にわたり磨滅している。形態は円形、梢円形のものがほとんどであるが、1865・1870は方形を呈する。

1854～1857は纖維の混入が認められた前期の土製円盤である。中期に比定される土製円盤と比較しても形態・大きさ共に大差ない。

1858～1904は大木9～10式に比定される土製円盤で、1860・1865・1871・1874は該期土器の特徴的な文様である区画文を描いていると推測する沈線と縄文が施文される。ほかは縄文のみか無文である。1859は遺構外出土の中で最も大きく4.8cm、1904は最も小さく2.0cmを測る。最も多いのは3～4cmの範間に収まるものである。

#### 〔石器・石製品〕

第7表に示した通り、遺構外から尖頭器・石核を除く全ての石器器種が出土している。トゥール類で特に多いのは敲磨器類、それに不定形石器が次いでいる。また石鏃や石錐などの剥片石器も決して少なくない。フレイクは600点以上出土している。これらの石器は縄文土器同様、本来は遺構内出土の可能性が高く、土砂崩れによる遺構埋土流失に伴い、遺構外に散在したことが想像される。

57点図示した。1905～1910は石錐である。1905・1906は1類、1907は3類、1908・1909は4類である。1909は先端を欠損する。1910は未完成で二次加工が全体に及んでおらず、また厚みがある。1911～1914は石匙で、1911～1913は1類。1914は2類である。1911・1914は片面のみ、1912・1913は両面から二次加工を施し、刃部を作出している。1915～1917は不定形石器で全て1類である。1915・1916は片面、1917は両面に二次加工を施し、刃部を作出している。1918は形態が歪だが、楔形石器と判断した。明確には上下と片側の3方向から打撃が加えられた痕跡がある。

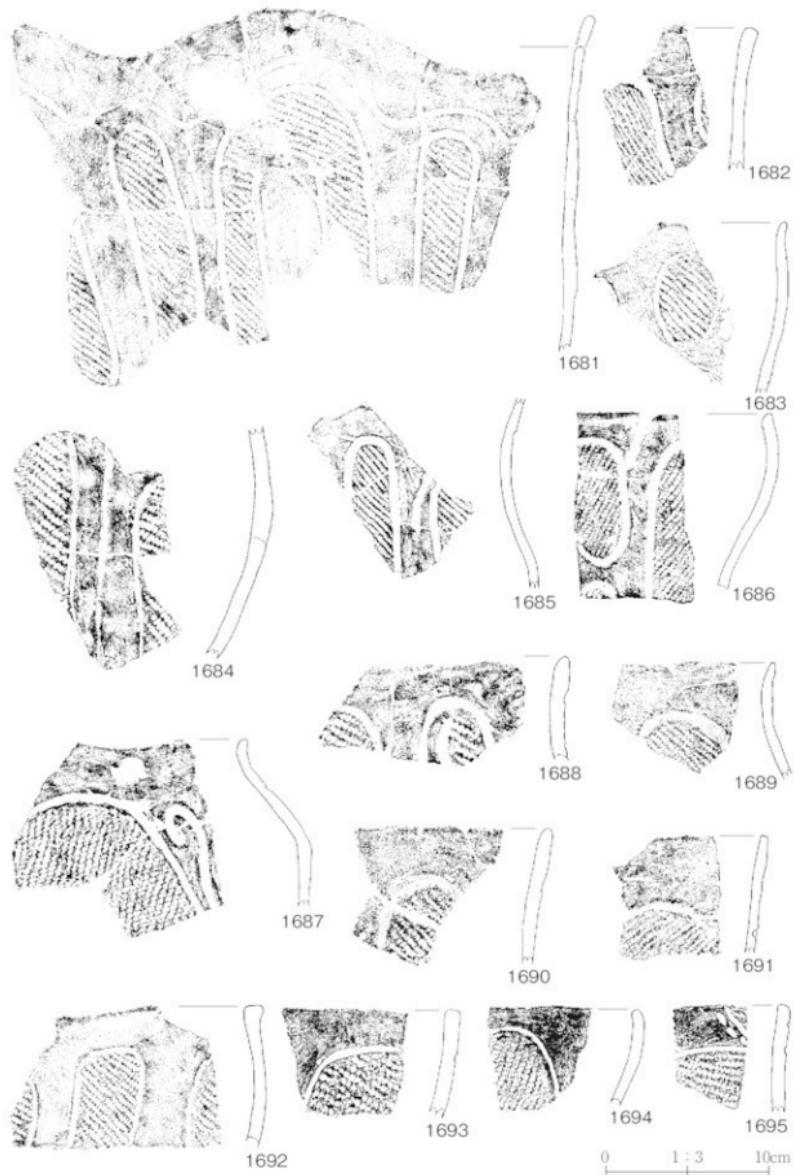
1919～1924は磨製石斧である。1919～1921は刃部が欠損し、剥離している。1922は基部の一部が欠損する。1923・1924は完形である。1925・1926は礫器である。どちらも剥離した大型のフレイクを加工している。不定形石器とするには大きいので、礫器の範疇とした。1925は縁辺3方向に加工の痕がある。1926は厚みのある大型のフレイクを素材とし、やはり3方向から加工している。1927～1938は敲磨器類である。片手で握れる大きさの梢円形、円形の礫を素材としている。1類に比定される敲磨器類が圧倒的に多い。1933は全体の約半分のみ残存している。縁辺が平坦になるほど磨滅している。特殊な用途を有する可能性がある。1935～1936は2類で、1類に比べると形態がやや細長くなる傾向が見受けられる。点数は少ない。1937・1938は3類であるが点数はさらに少なくなる。

1939～1943は石皿である。1939～1941は縁辺を整形しており、特に1941は下に脚が付く。全体の1/4しか残存しないが、おそらく四脚であったと考える。1942～1943は素材となる礫そのものを加工せず使用している。広い面の片面のみ磨面が形成する。

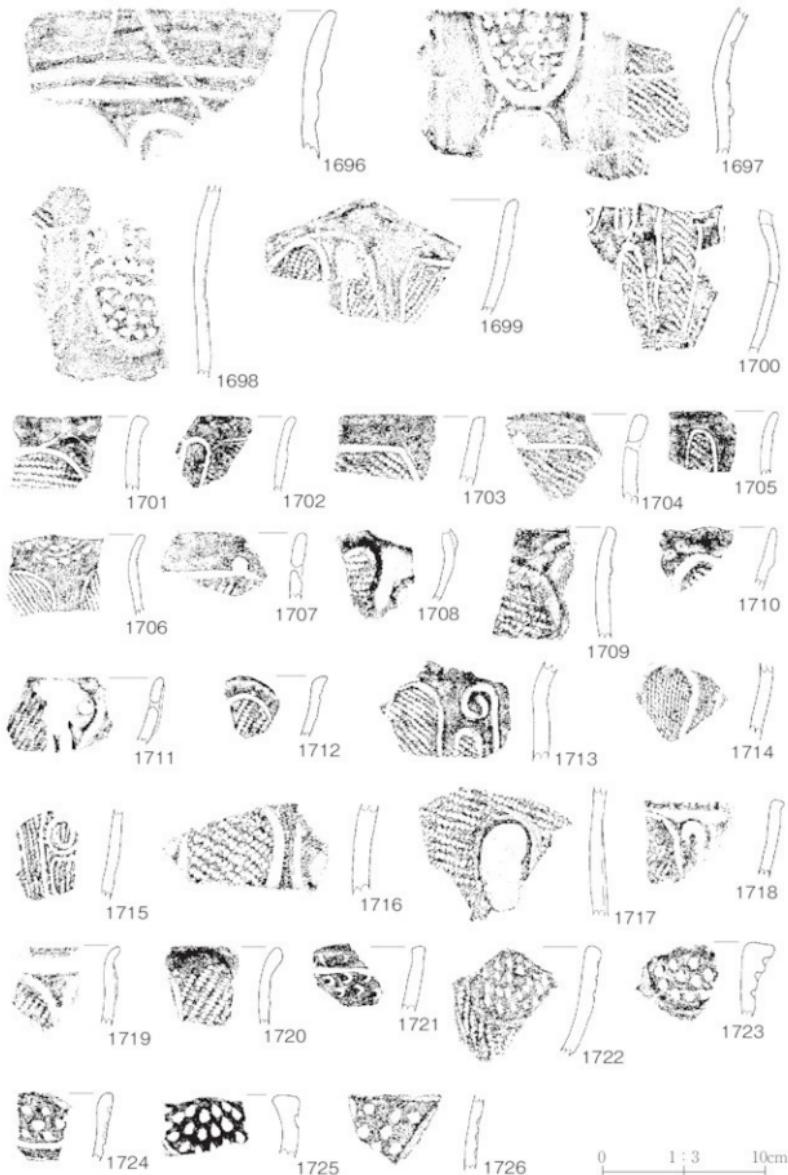
1944～1946はUフレイクとした。どれも縁辺に不連続な微細剥離が見受けられる。1947～1949はRフレイクである。1947は縁辺の3方向に剥離を受けられ、楔形石器に類似する。同様の用途か。1948は最終剥離面の端部に押圧剥離が認められる。1949は最終剥離面の縁辺両側に小さな二次加工の痕跡が不連続に並んでいる。



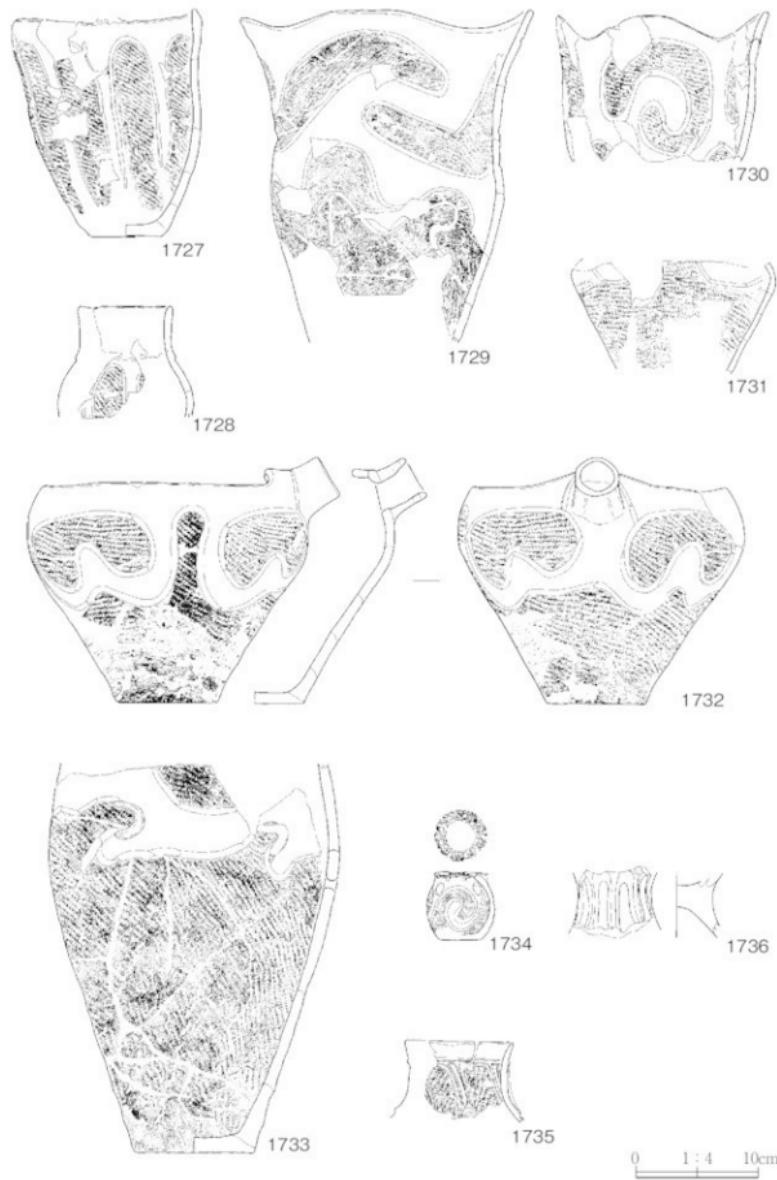
第232図 遺構外出土遺物（9）



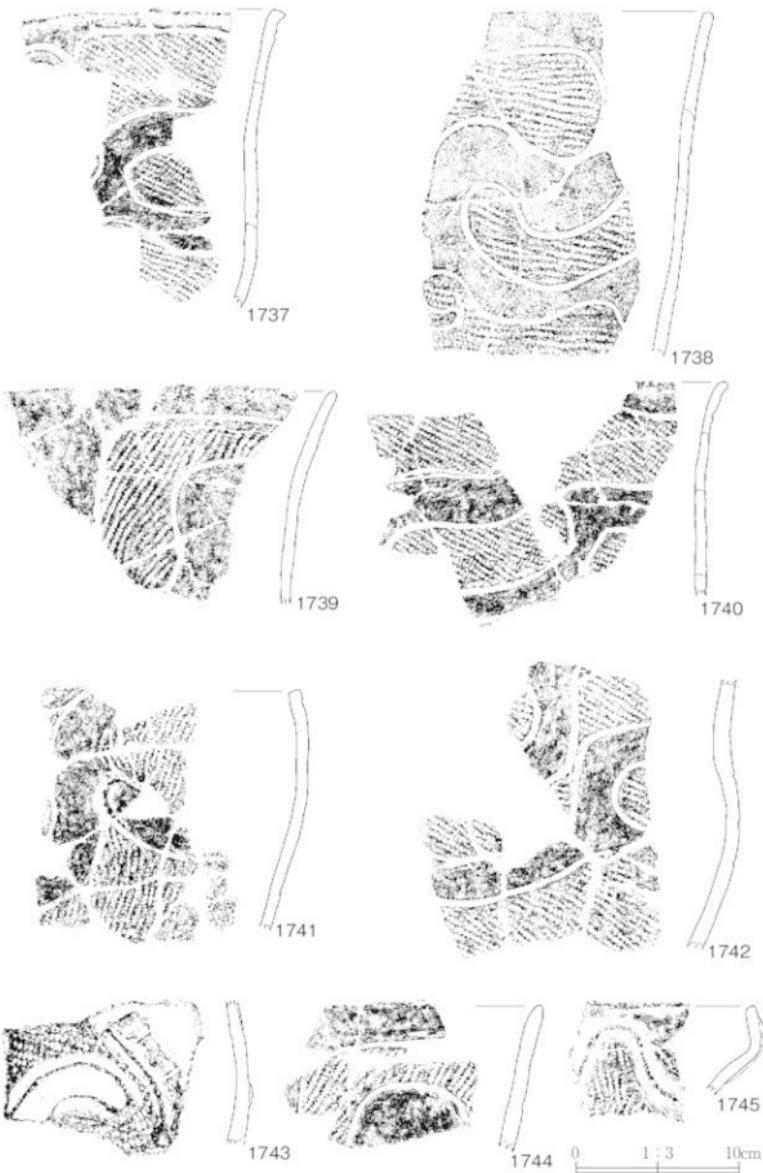
第233図 遺構外出土遺物 (10)



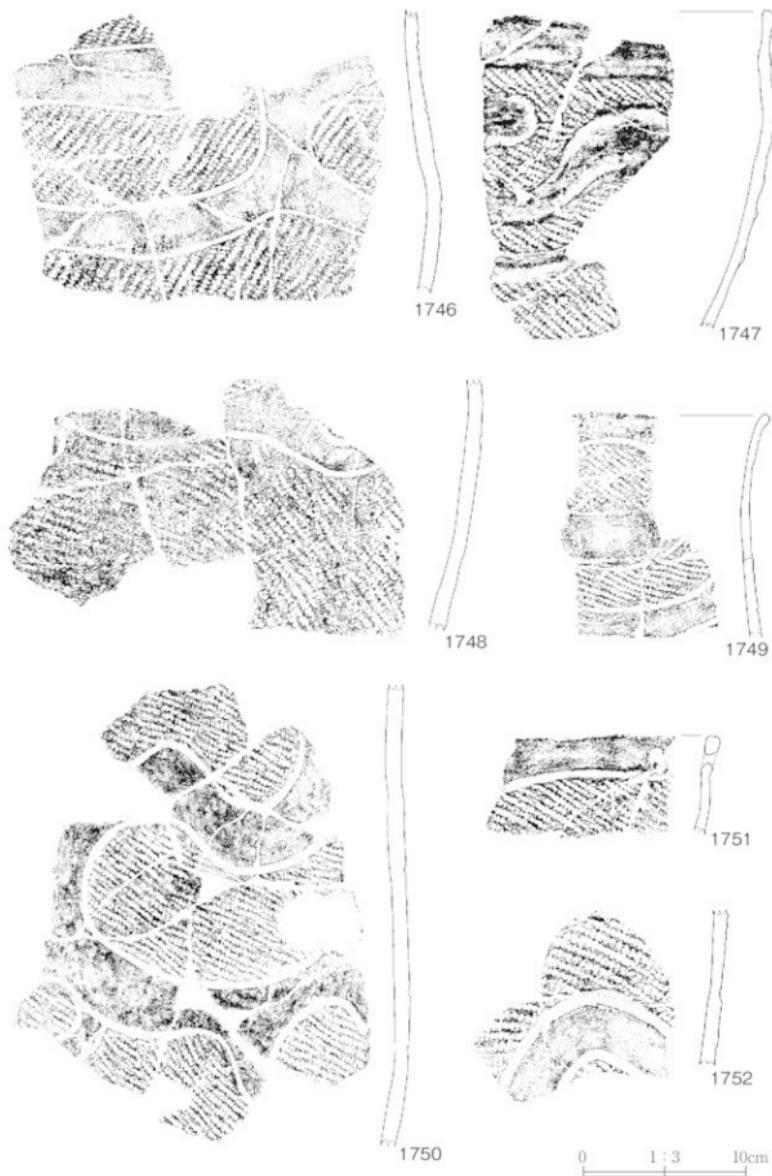
第234図 遺構外出土遺物（11）



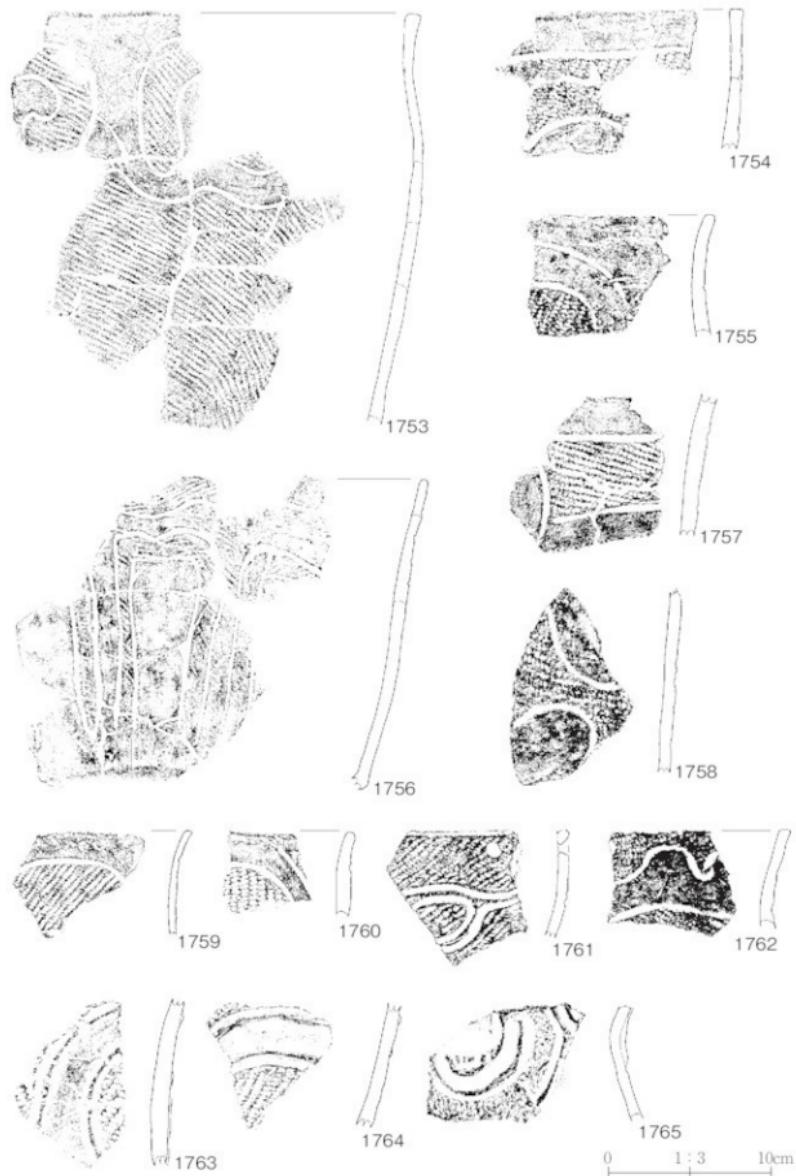
第235図 遺構外出土遺物 (12)



第236図 道構外出土遺物 (13)



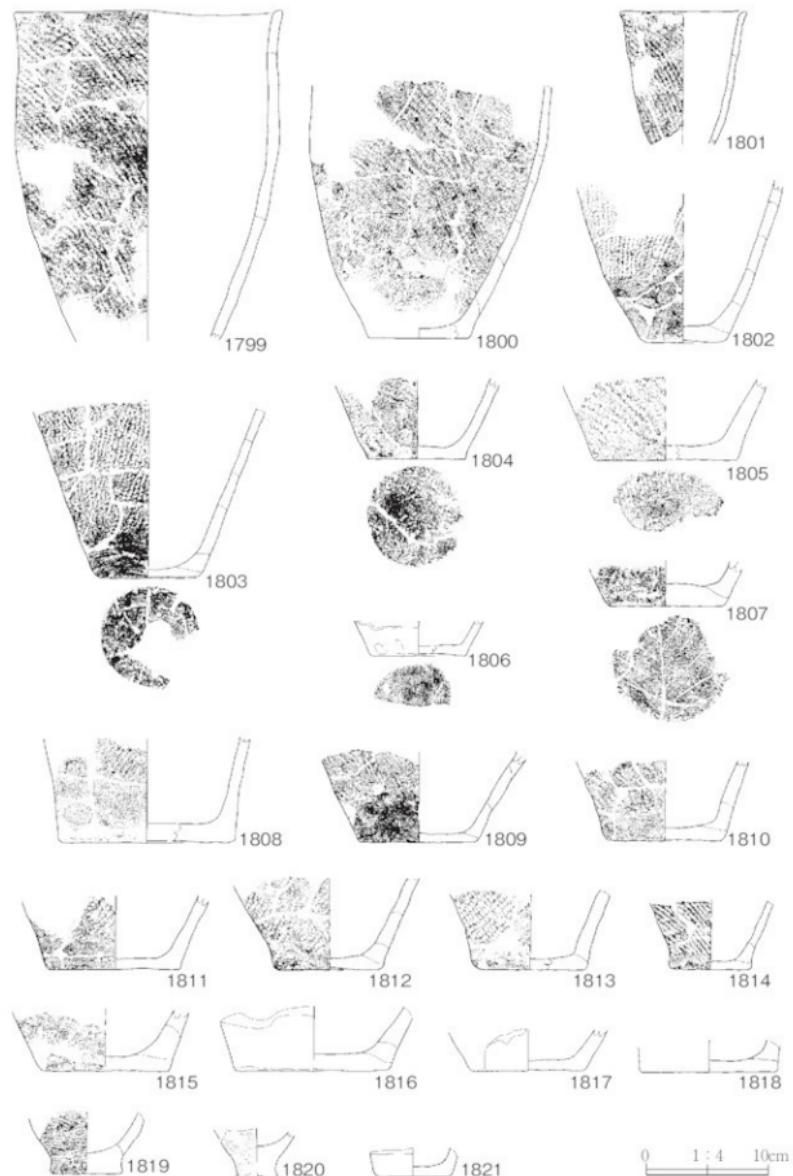
第237図 遺構外出土遺物（14）



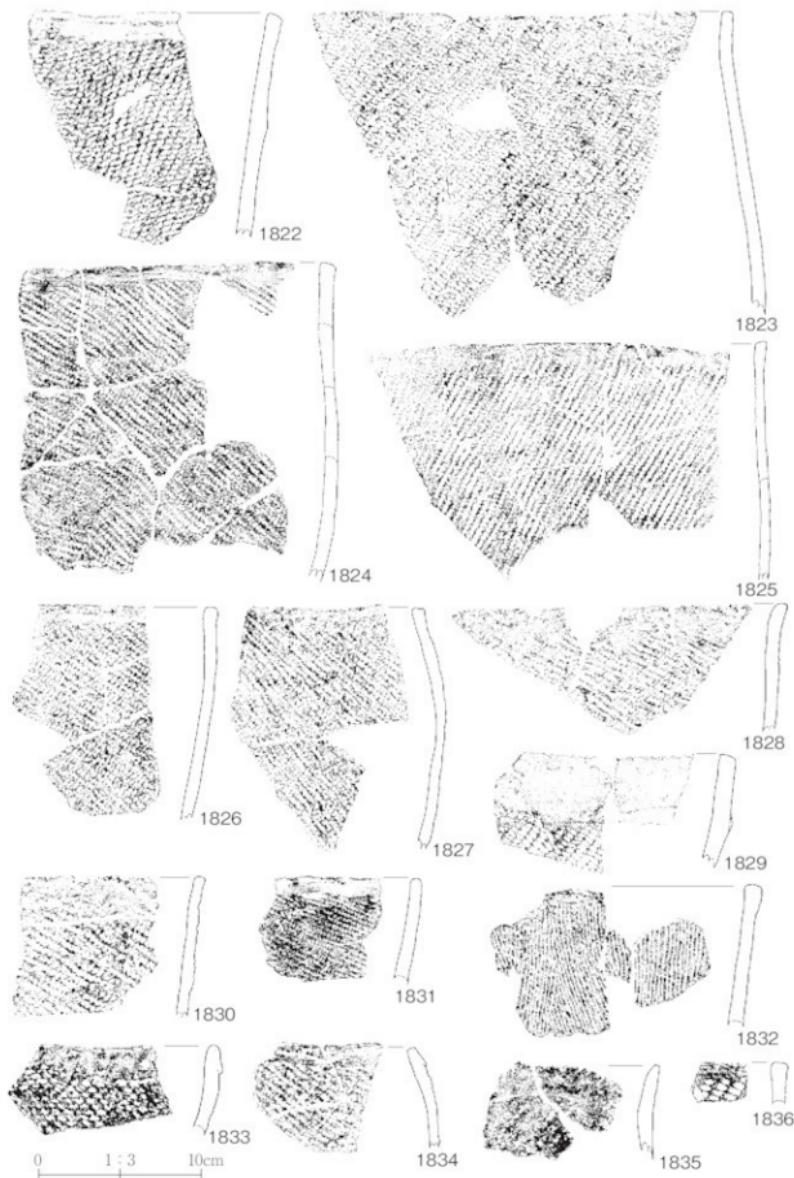
第238図 道構外出土遺物（15）



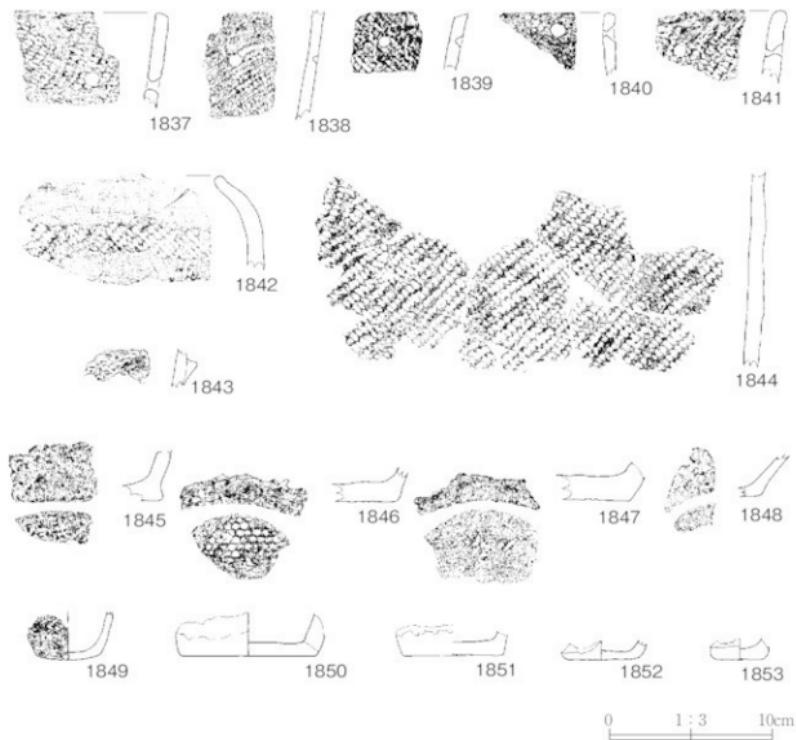
第239図 遺構外出土遺物 (16)



第240図 道構外出土遺物 (17)



第241図 遺構外出土遺物（18）



第242図 遺構外出土遺物（19）

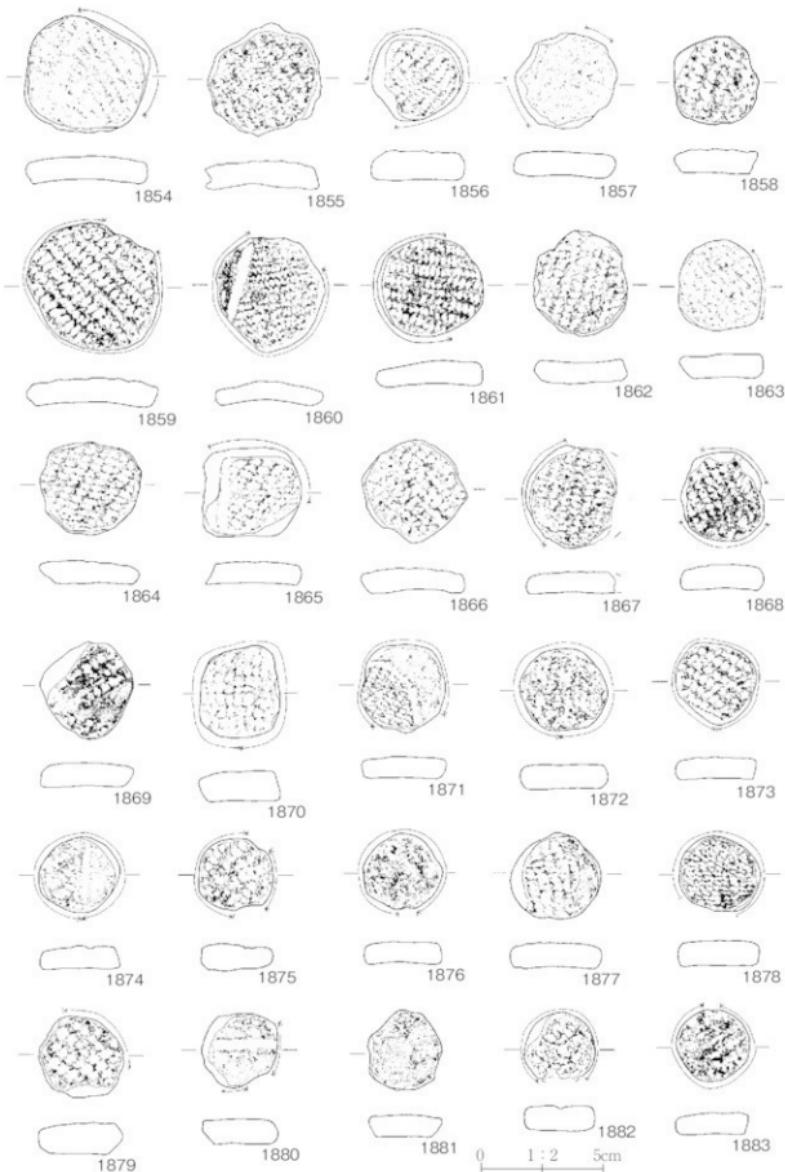
1950～1953は石製品である。1950・1951は軽石製石製品とした。どちらも形態は整形によって作出されている。1952は滑石製の垂飾品で1箇所穿孔されている。1953は滑石製の石製品とした。用途は不明で、三角形状に整形のみされている。大きさは1952とはほぼ同じであることから、垂飾品の未完成の可能性も考えられる。

1954～1961はIA25uグリッドIV層上面で確認した、フレイク集中範囲のフレイク8点である。フレイクは4つの母岩で構成される。接合はしなかった。自然面の残るフレイクが多い傾向が見受けられた。

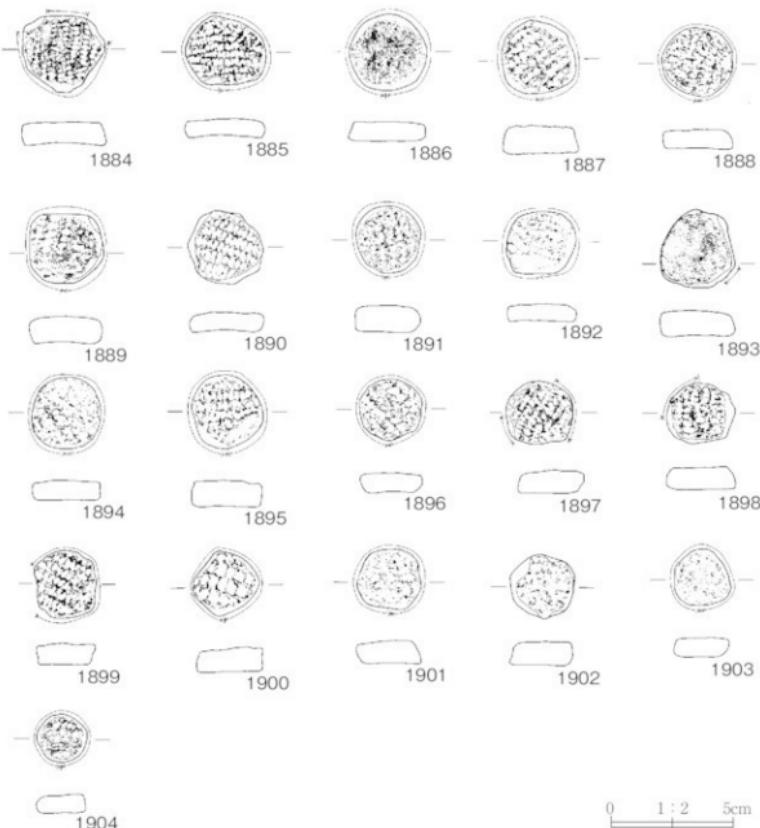
#### 【その他の遺物】

自然遺物としてアスファルト塊が出土している。IIA3uグリッドの3層（包含層）中から出土しており、縄文中期に比定されると判断している。

これらのはかに少量であるが、近世の砥石、近世～近代の陶磁器類、近世の錢貨が出土している。7点図示した。



第243図 遺構外出土遺物 (20)

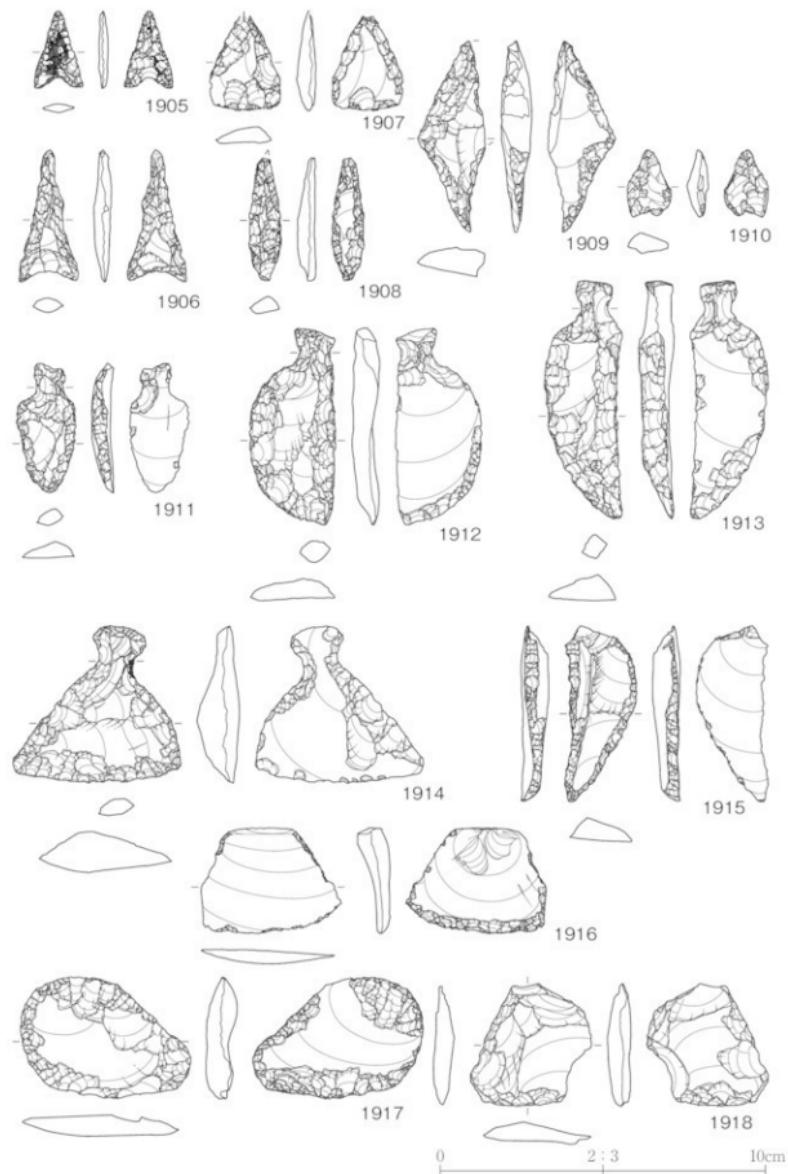


第244図 遺構外出土遺物 (21)

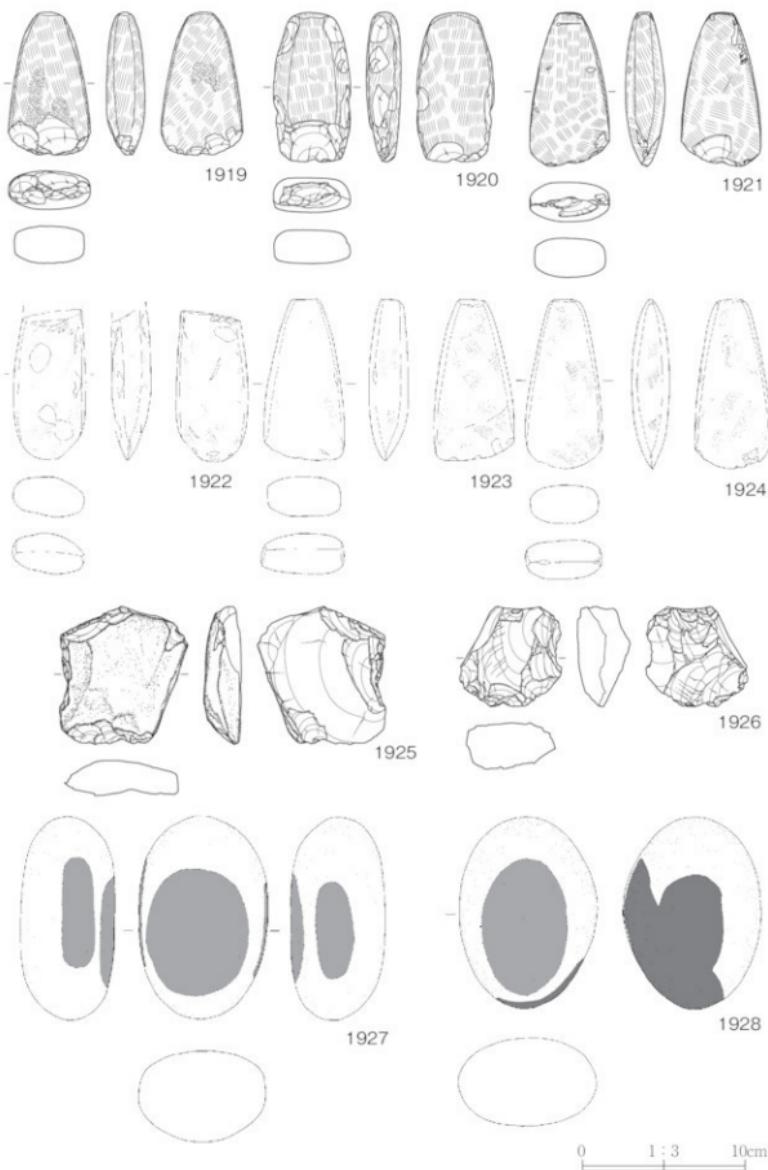
1962～1968は陶磁器である。どれも小片で、詳細の分からぬものである。18～19世紀代に收まり、東北在地系か、肥前産である。

1969・1970は砥石である。1969は2面の広い面を研面としており、片面の偏減りが激しく、傾斜している。1970は欠損品か。やはり2面、研面としている。

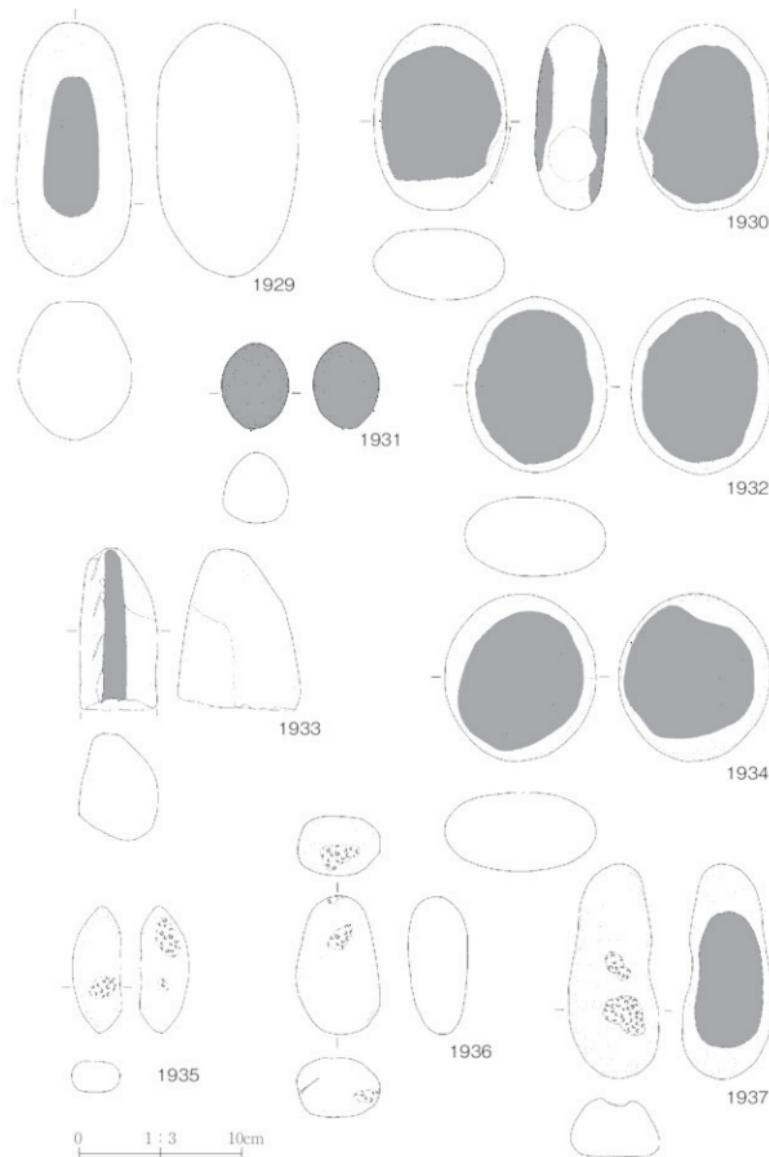
1971は寛永通宝で、古寛永と判断した。



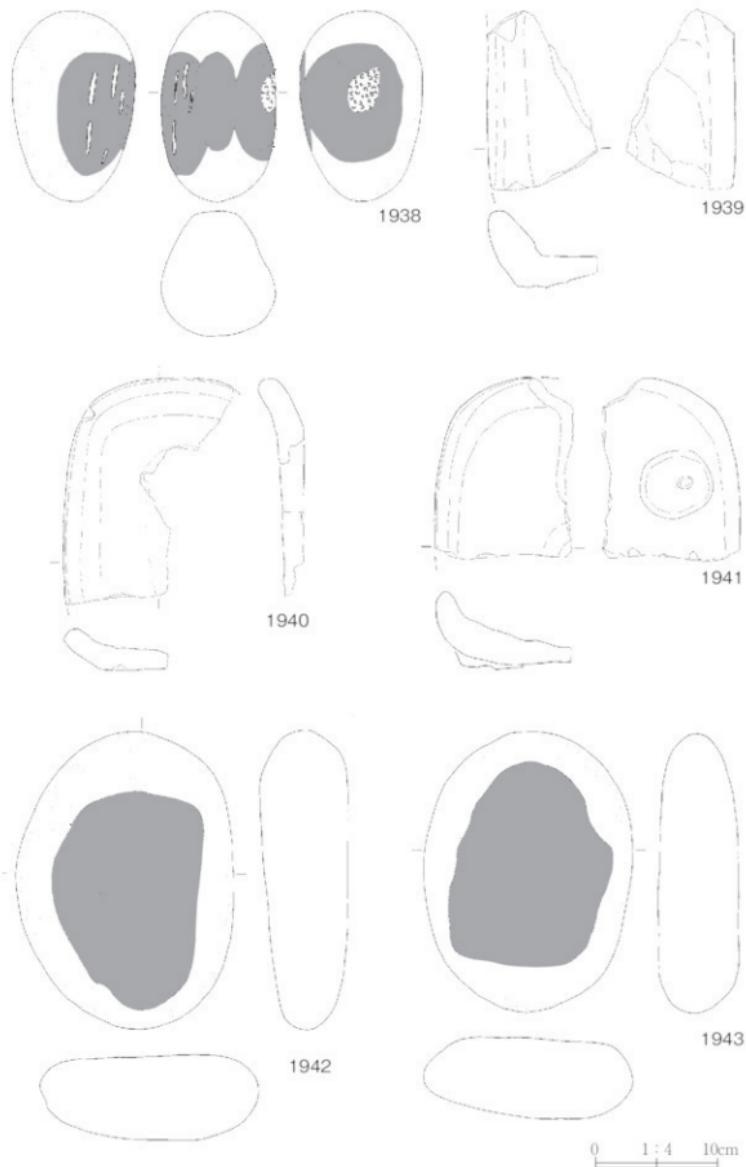
第245図 遺構外出土遺物 (22)



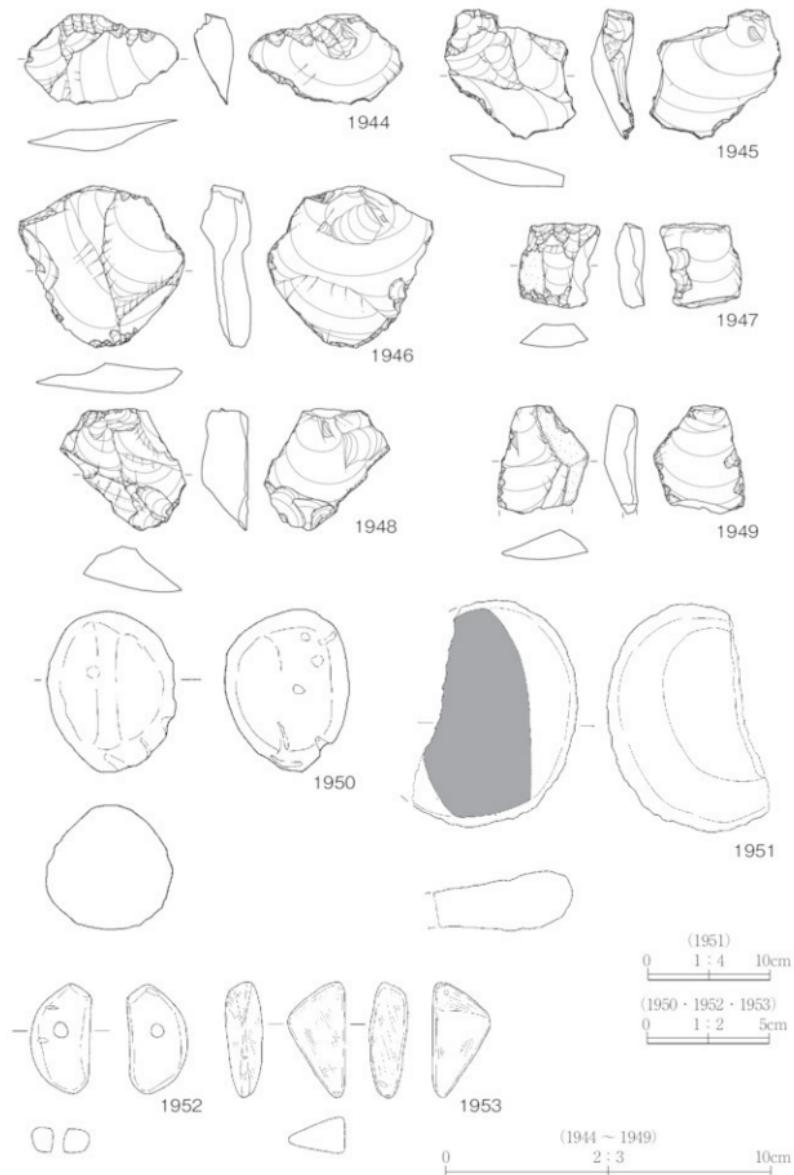
第246図 道構外出土遺物 (23)



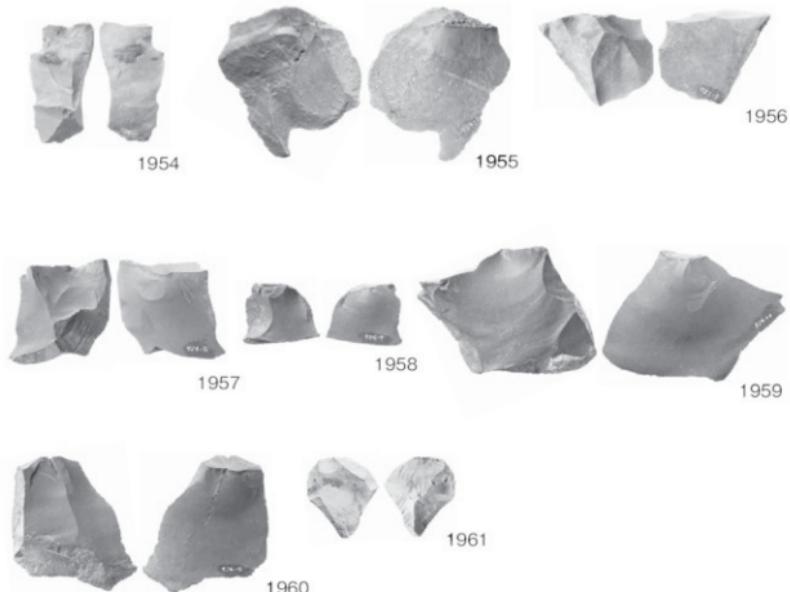
第247図 遺構外出土遺物 (24)



第248図 道構外出土遺物 (25)



第249図 遺構外出土遺物 (26)



0 2 : 3 10cm

第250図 道構外出土遺物 (27)